

(国立国会図書館デジタルコレクション・同サーチ登録)

増 改 版

遠友夜学校の遺産はどう伝承されたか

— 新渡戸稲造の夢を未来へつなく年譜 —

編集著作者 白 佐 俊 憲 (遠友夜学校研究者)

監修発行者 正 倉 一 文 (随筆春秋事務局長)



初版発行 2023年(令和5年)5月23日

増改版発行 2023年(令和5年)10月15日

(今後も増改訂による蓄積を予定)

印刷委託先 製本直送ドットコム

(簡易印刷希望者へ別途有料サービス提供)

【資料・情報提供協力の主要機関・団体】（五十音順、敬称略）

- アジア招提（杉岡昭子）
- NTT東日本情報通信史料センター（菅直子）
- 遠友再興塾・札幌遠友会再興塾（佐藤邦明）
- 札幌遠友塾自主夜間中学（工藤慶一）
- 札幌市教育委員会・札幌市広報部広報課ほか
- 札幌市中央図書館（レファレンスサービス）
- 新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会（三上節子）
- 新渡戸基金（藤井茂、岩手県盛岡市）
- 新渡戸記念館（Kyosokyodo、青森県十和田市）
- 平成遠友夜学校（藤田正一）
- 北海道新聞社（読者センター）
- 北海道大学大学文書館（山本美穂子）
- 北海道に夜間中学をつくる会（工藤慶一）
- 北海道立教育研究所（教育課題研究部）
- 北海道立図書館（レファレンスサービス）

【本書の特色】

- 札幌市に誕生し、明治・大正・昭和の50年間存在した私塾遠友夜学校の推移と、閉校後のその伝承過程を追い続けた年譜である。新渡戸稲造夫妻が残り、学生教師と苦学生徒が生産した「美しい高貴な遺産」の行方を追った情報資料集である。
- 新渡戸稲造個人関連の資料・記録については、膨大で把握不可能であるので、範囲を広げず、北海道内と全国での功績の一部を収録している。
- 埋もれた史実の発掘、別角度からの考察、史料・資料の実証性・客観性を意識した。文献資料の出典をできるだけ詳細に明示し、ガイドブックの役割を果たすものにした。

- 遠友夜学校の閉校後の資料の取載に重点を置いたので、従来の文献とは違った内容の事柄、違った視点からの回顧情報も載せている。
- 小事項の並列を基本に、柔軟に資料・情報を収集したので、従来の書籍類では取り上げられなかった特殊な関連事項も加えている。
- 関連事項を大・中・小に分けて書き進めた従来書とは大きく異なる。原則として、小さな事項を年月日順に並べ、補足説明や前後の関係の事柄を付け加えて、小さなまとまりにして並べた時系列年表となっている。
- 諸事項が時系列に並んでいるので、事柄の関連や変化の過程を知ることができる。意外な事柄の関連性が見えてくる。
- 電子書籍の作成を主としており、加筆修正が容易にできるので、増補改訂の累積を迅速に行え、新事項を早期に盛り込める。

【凡例】

- 本書は「札幌遠友夜学校」の前史～後史の関連情報事項を収録している。
- 事柄の生じた年月日を最重視し、主要事項を、西暦を主に時系列（年月日順）に並べている。説明文にも原則とし西暦と和暦を丁寧に併記した。（引用文にも、原文になかった西暦または和暦を加え、原則、西暦を先に記すように統一した）
- 必要に応じて、事項ごとに簡明な補足説明・資料を加え、ある程度の独自性をもたせたことから、同じ説明が他でも出てくる。（主要な参照先を⇒で示した）
- 固有名詞・肩書・年齢等やその字体等は、その時点でのものとした。太平洋戦争終結後2、3年後を境とする以前は、旧漢字の固有名詞が使われていたので、その時の記載に合わせている。新旧の混在が随所に出てくる。年齢は満年齢とした。
- 住所の表記に漢数字を使った場合があるのは、明治時代の前半、地図の横書き表記でも漢数字が使われていたことに合わせたものである。
- 引用文は「」括弧でくくり、旧漢字・旧仮名遣いも、誤記誤字等も敢えてそのままとした。文中の「/」は、改行や1文字空白の部分であることを示す。

○元資料を参照できるように、図書名・資料名や発行先、発行年月日、ページ数等も、可能な限り書き加えた。記載のない「月・日」や「日付」は、もともと記載がないか不明かのものである。

○人名等の「氏、さん」等の一般的敬称やルビ（振り仮名）は、ごく一部を除いて省略した。

【編集著者紹介】白佐俊憲（しらす・としのり）

1937年10月生まれ。北海道北竜町出身。1856年4月、北海道大学文類に入学、1960年3月、同教育学部教育学科を卒業。1957年10月～1964年3月、BBS（大兄姉）運動に参加。1960年4月～1967年3月、北海道立児童相談所（1960年4月～1962年4月、旧札幌遠友夜学校跡地に所在の北海道中央児童相談所）勤務。本書の中で記述する長野襄と知り合う。1967年4月～2006年3月、大学教師として勤務。この間、本書の中で記述する半澤洵・小塩進作と知り合う。現在、無職。

【監修発行者紹介】正倉一文（まさくら・いちぶん）

1958年7月生まれ。東京都品川区出身。北海道大学文2系入学、同経済学部経済学科を卒業。製造業に就職。製鉄、機械、化学とわたり歩く。西暦2000年、男の厄年で、サラリーマン生活を断念。かねてより憧れであった文筆の道を目指す。同人誌『随筆春秋』（一般社団法人随筆春秋）が主催する文学賞（エッセイ）で賞を取ったことをきっかけに、同人の事務局員としてかかわる。2023年5月から、同事務局長に就任した。編集著者・白佐俊憲とは奇しくも先輩後輩の関係である。

【印刷販売委託先情報】

製本販売業者 製本直送ドットコム : <http://www.seichoku.com/>

目 次

「はじめに」に代えて—新渡戸稲造校長の講話—	5
「要約」に代えて—高井竹一の作文—	10
「あとがき」に代えて—蝦名賢造の言葉—	11
1. 夜学校創設以前（～1894）	13
2. 遠友夜学校時代（1894～1944）	28
3. 閉校後模索時代（1944～1964）	83
4. 勤労青少年ホーム内記念室時代（1964～2014）	114
（札幌遠友塾自主夜間中学時代（1990～））	{147}
5. 新渡戸稲造記念公園・北海道大学内展示時代（2014～）	232
付録 社会事業活動を主にした半澤洵概略年譜	333
付記 編集著作者からの追記—本書誕生の契機と経緯—	345

【主要関係者の生没年・死亡年齢早見表】（五十音順）

有 島 武 郎	1878年03月04日～1923年06月09日、45歳
小 塩 進 作	1915年06月08日～1998年03月28日、82歳
高 倉 新一郎	1902年11月23日～1990年06月07日、87歳
新渡戸 稲 造	1862年09月01日～1933年10月15日、71歳
新渡戸 萬里子	1857年08月14日～1938年09月23日、81歳
半 澤 洵	1879年01月09日～1972年09月25日、93歳
宮 部 金 吾	1860年04月27日～1951年03月16日、90歳

「はじめに」に代えて—新渡戸稲造校長の講話—

○創設者・新渡戸稲造初代校長は、1931年（昭和6年）5月18日、前回の1909年（明治42年）6月以来22年ぶりに遠友夜学校に来て、生徒らを前に遠友夜学校開設の経緯などについての講話をした。講話の速記録が残された。それが同年11月25日発行の広報紙『遠友』（札幌遠友夜学校学期報）第9号、1ページ目に載せられた。（北海道大学大学文書館所蔵）

○新渡戸校長自らが語った貴重な言葉として、のちの人が「遠友夜学校について」著述や講話の中でふれるとき、この日の揮毫『學門より實行』とともに極めて多く引用・紹介されてきた。（これは、実は、札幌に残された奇跡の「遺言」だった）

○一般的には、新字体・新仮名遣いにし、理解しやすい間接引用の形にして断片的に紹介されるが、史料性を重視する本書は、学期報『遠友』9号掲載全文をそのまま転載した。

○「私は此の學校の校長と云ふ名があるにも拘らず平生御無沙汰して濟みません。然し御無沙汰して居ても學校の事を忘れた事はありません。然も此の學校に就て良い評判を聞く毎に甚だ嬉しく思ふ。それは自分が校長と云ふ名を持つて居るので自慢の様に聞えるがそうではない。私が校長でなくとも此の札幌にこんな學校があつて晝は働き夕方になると此處へ學問しに来る若い人が大勢ある。子供の頃は一時間でも暇があれば遊びたい、殊に仕事をする人は夕方になると疲れる。雪の深い中も雪を踏んで来る、こんな心掛けの人が大勢居られると云ふ事は私にとり何とも云はれぬ教訓であります。自分の心の弛む時でもこんな人も大勢あると思へば安閑として居られず貴下方の話聞く毎に自分の心を鞭打たれる様な気分がする事がある。

斯く只今述べた如く無沙汰しても學校を忘れた事はない。いろんな人が視察して東京に來られて遠友夜學校は實に感心であると云ふ話、卒業生の働き先で良く働く

事を聞きこんな學校を始めた事の無意義でない事を嬉しく思ひます。

學校の始めは今より四十年前私が外國から北海道に歸り米國で貰つた家内を連れて來た。私の家内の父が世話好きでいろんな人を世話し、或は家に泊め居き或は都合して困って居る人を助けるのが道樂であつた。或る時みなし兒で孤兒院に居たのを引受けて養つて居た。年は十四五で女中よりも良く取扱ひ教育された。父も母も家も無いそれで父の養女の様に居た。年は取つても嫁かず家に残り家事を手傳ひ六十餘歳迄長らへて居たが遂になくなつた。遺言に小使ひを蓄めた幾何を（二千圓と記憶するが）、家内にやつて呉れと書いてあつた。その金が札幌に來た。家内は其の有難い涙の籠つた金、頼りない孤兒の蓄めた金をむざむざとは使はれぬ。何か世の不幸な氣の毒な人の爲に使ふ道は無いかと云ふのであつた。そこで私は「それはよい、丁度考へて居る事があつて金が無くて出来なかつたが豊平の橋の近所に小さな家が在り地面が在つて其處には日曜學校を開いている星と云ふ人がある。あの土地とあの家を買ひ、日曜のみならず毎日夜學校を開けば五十人にてても好い學校を開いては如何」と云ふと家内は「それはよからう。そう云ふ様に此の金を使へば今のみなし兒も定めし嬉ぶでせう」と云つて地面と前の古い校舎を買つた。故に私が校長と云ふものの校主とも云ふべきは私の家内である。此の家内も自分の金でなく父の世話をした人の蓄めた金である。

始めは何の名も付けずに學校を開いて居た。先生達には農學校の學生さんに頼んだ。二千圓で土地と家を買つて全部費したので先生達には何んにもお禮をしなかつた。冬にはストーブもいり夜は電燈が要る、三島、宮部氏其他の親しくして居た人々にお願ひして今日迄夜學校を維持して來た。何の名も無く前に松が生えて居た。之は今切つて無いが蠣崎さんとか思ふが來られて「先生名がないから何かつけませう、唯夜學校では他に夜學校が出来たら困るから松の木があるから松の學校としては如何」と云はれた。併しそれも變なので元を質せば米國の様な遠くから送つて來た金且家内の發意にもより、又「有朋自遠方來不亦樂乎」とあるから兩方とつて遠友夜學校とした。此の句の意味は國も名も言葉もわからぬ人、何處の人とも云はれぬ人がやつて來て會つて話して見ると何となくわかる、其の様な人は名を知らず國

を知らずとも心と心が合へば之即ち友達である。友達とは名を知るのが条件ではなく心が合へばいいのである。年齢が違つても位置が違つても、一人は高い役人でも一人は偉い學者でも金持でもそれは大した事はない。相會つて金持だとして威張らぬ、學者だとして役人だとして人を見下げぬ、何となく氣持が好い。かう云ふ人と會ふと嬉しい人間の楽しみは何と云つても氣の合ふ人に會ふことである。此の意味を孔子が「有友來於遠方……」と云つたのだ。此の言葉に擬へて遠友と云ふ。

此の學校を始めるに當り先生を頼んだ。學問の出来る人のみを頼んだのではない友達になれる一遠友になれる人、子供を可愛がる人、畢竟人と會つて明るい氣持で親切にして呉れる人を頼んだ。だから遠友夜學校に来て居た人は立身する。

萬事私に代つて代表をして下さつた人は何んと偉い人ではありませんか、近頃は専ら半澤先生が色々の事をして下さる。教育は物を覺えることよりも立派な人だとされる方が後々の成功も確かだ。現に私の家で澤山人を使つて居るが御飯炊きのばあやが居る。此の人は四十幾つで廣島の田舎に育ち百姓の家に早く嫁ぎ朝となく夕となく働き、本を讀む餘暇が無かつたので字も書けず家に來て始めて字を覺えた。新聞に手習ひして三年で手紙が書ける様になつた。然し此のばあさんは臺所に居ても暗闇の太陽の様でニコニコして何をしてても有難い有難いと云ふ、どんな物を食べても有難い有難いと云つて居る。

之は自分が作るからではなくて若し書生が文句でも云ふと「こんなものでも食べられぬ人がある有難い」と云ふから書生達も癪に障る事があつても此のばあさんの前ではだまつて居る。で若い女も「あのばあやの爲に家がどれ程よく行つてゐるかわからない」と云ふ。之は眞の人間になつて居るのである。學問とはつまり此の様な人になる事を目的とする。

四十年前に學校を開いた時は毎週三日宛來た、楽しみにして來た。其の時は人間になりきれない「アーン」と口を開いて居た「アンコ」が居た。私は第一に云つた「口を閉めろ」「先生口を閉めたら息が出來ません」「鼻でしろ」「鼻はつまつて居ます」「鼻がつまつてゐるならかめ」それで私の顔さへ見れば十人が十人鼻を動かした。どれ程學問しても口があいて居ると皆口から出て了ふ。

併しさつき教室を見て廻り大分いいなと思つた。先生の御丹精の結果之でこそよいなあと思つた。女子の生徒の手を見て歩いた。よく働き冬の中働いたひびの痕があるのを見ても、もうもつとも癒つて居る時であらうが案外思つたよりよく之は手入がよいのだなあと思つた。女は殊にそうである、手なり顔なり仕末をつけて置くものである。兎角油断すると顔だけ仕末するが手の方が大切である。今夜見て先生の丹精もあらうが銘々の丹精であらうと思つた。晝の間働き夜学ぶのであるからスタートが先づ第一に好い。長官も此の學校を調べ良成績であつたのを褒めた。

此の部屋へ來たら此處（リンカーンの寫眞）を見なさい、リンカーンは貧乏な子供の時には藁を寝臺として藁をかぶり靴もはかずに過した。學問したくも學校なくペンもインクもなかつた、或は薪を裂き白い所に小枝を取って來て焼き黒くしてはペンの代りとし手本を置いてABCを習つた。今日之行届いた教育から見れば如何してこんな事で字が覺えられるかと思ふが行届かない所に教育がある、餘りに行き届いた所には却つて教育が行届かぬ。私の米國の知人に行届いた學校の物理の先生がある「此の線と線とを合はすとピカッと光るよ」と先生が云ふと生徒は皆んなアツと口をあけて見て居る。まるで手品かなんかみたいだ。もう一人の知人は行届かぬ學校の先生で「お前硫酸を買つて來い」「硫酸は何處で賣つているでせうか」「鍛冶屋にも八百屋にもない、お前考へて買つておいで」「針金を買つておいで」「買ったことありません」「それはいいあんばいだ、太さ長さを見はからつて買つておいで」此の様に生徒に皆んなやらせる、一寸見ると前の方がいい様だが設備のよい所では口をあく、不設備の所では今云つた如く銘々でやる。「あの針金は俺が買つて來たのだ」と銘々が其の成行を見守る、遠友は殊の外設備が悪いと云ふのではない、成るべくは良くしたいがそれよりも大事なものは皆の心だ。物理なり動物の實驗をする時見るものはよく見、する事はよくする、此處に教育の本當の事がある。

長く話をして時間を取るのも如何かと思ふから本校の始めて出來た時の心持を一口に云へば犠牲と云ふべきである。孤兒が金をためたのも敢て本校の爲でなかつたかも知れないが、食べ度いものも犠牲にしてためたのだ、又家内も二千圓で三越で着物を買へば立派なものが買へ、又餘る程着物があるのではないが之は學校の爲だ

と思ひ我慢して出した。又此處においで先生も外の事で時を過せば過せるのに皆様の爲に何かお務が出来ると来て下さる。又寄附をせられる方々も額の如何を問はず使ひ道がある可金を出す世の中は美しい。自分一個の爲のみでは世の中は存在しない、人の爲と思へばこそ嬉しい、故に此の學校の關係者の心も考へ親達の意を考へ、即ち遠友の意を考へ、若い中にも學校の内でも自分の出来る事なら人の爲にする、學校を出てからも尚如何にせば世の爲人の爲になるかを考へ、何事によらず人は心の表れだから、學校の歴史、先生のなさる事又學校を助けてくれる人や學校の名に背かぬ様互に心掛け、唯に本を讀み算術をするのが學校の仕事と思はず、人格を養成し明るい氣分の人を養ふ事が目的である。

今日は始めて皆さんに會つた、何かお土産をと思つたが待て學校へ行つて見て何か必要なものがあればそれと土産に代へようと手ぶらで來ました。先生のお話では本がいいと云はれたので若し諸君が讀むなら五十冊や百冊は餘つて居るから餘り六ヶ敷くないものを記念に送ります。充分に利用して下さい。但し讀書には注意して眼を大切にして下さい。

私も相當の年輩になつて居るが二十年たてば又來ませう。丁度其時は此處においでの方も立派になつて居るだらう。再會を楽しみにして今日は御禮を云ひます。」

○この記事は、「學問より實行—新渡戸校長のお話、5月18日御來校—」の見出しのもとに掲載された。この全文は、1981年（昭和56年）9月1日発行の単行本『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.274~278に、若干の修正を加えて転載されている。

○新渡戸は生涯、多数の著書・論文・随筆等を書き、講演・講話をしているが、まとまった形で自身が「遠友夜学校」について詳しく書いたり、話した内容が記録されたりして残っている（とくに子ども向けの）ものは他に見当たらず、大変貴重なものである。（揮毫『學問より實行』とこれがあつたからこそ、遠友夜学校を語る歴史は盛り上がり、説得力を増したといえよう）

○この記事の一節を、高倉新一郎（北海道大学教授）は、1953年（昭和28年）12月発行の機関誌寄稿「札幌遠友夜学校」の中で、「世の中は美しい。自分一個のためだけ考えたのでは世の中は存在しない。人のためを思えばこそ楽しい。だから……」

と少し手直しして紹介した。これがのちに新渡戸の至言としてしばしば引用されることになる。

○他の事柄は、次の作文の例を除いて、1931年（昭和6年）5月18日の年譜で改めて取り上げる。

「要約」に代えて—高井竹一の作文—

○創設者・新渡戸稲造初代校長が、1931年（昭和6年）5月18日、前回の1909年（明治42年）6月以来22年ぶりに遠友夜学校に来た。その時に語られた半澤洵代表の挨拶と、その時に書かれた谷口慎吾交友生ほか3人の在籍生徒が書いた感想文が、「始めて我等の父に見えて」の見出しで、同年11月25日発行の広報紙『遠友』（札幌遠友夜学校学期報）第9号、5ページ目に載せられた。（1ページ目に載ったのが、前掲の見出し「學問より實行」の新渡戸の講話である。北海道大学大学文書館所蔵）

○3人の生徒の作文は感動的なものばかりであるが、ここでは分量的に少ない中等部1年・高井竹一によるものを例示する。これまでに発行された単行本などに転載されたことがない初見文である。原文のままに近い全文をあげる。

○「今迄孤兒であつた私達は、今初めて、悲（慈？）父に接することが出来た。何物をも包容する、寛大な御胸の中は私達に埋まることが出来た。何といふ幸福、絶對他に許さぬ幸福。

先生が、「一番小さい人は」と言はれた時、私は自分のことの様に、嬉しさ、有難さが強く胸をうつつた。

先生の御講演の中にこの学校の遠き昔を知つて、愛の強さ、そして見えざるものへの感謝で一ぱいになつた。博愛の強さ、これは何物にても、壊すことの出来ない、神祕な、力強いものであることを知つた。如何に自分が貧しくとも、何處かに恵まれてゐる所のあることを知つて、今の境遇に善處しなければならぬと思つた。

一日、否一晚先生のお話を聞いて、先生は如何なる人にも一步も譲らない、愛の所有者であり、力の所有者であると知つた時、どこからともなく、この様な先生をいただいたこの夜学校の生徒であるとの誇がなほ一層強くなつた。

御講演を拝聴し得た人々の顔は、皆朗らかに輝いてみた。嬉し相であつた。

上級生が答辭を述べた時、急に胸が迫つて、涙がこみあげて來るのをどうすることも出来なかつた。今少し答辭がのびたら……今少し……。あゝけれども……。

たつた一晚でお別れしなければならぬ私達には、堪へられない愛着の念が満ちてみた。「出來得るならば、長くこの學校に止まつていただきたい」誰かさう思はなかつたものがあつたらう。けれ共それは出來得ない望であつた。先生は用事繁多の御身の上であると知つた時、泡の如くこの願も消え去らなければならなかつた。

先生は又來るとおつしやつた……。あと廿年、長い年月だ。たとへ又。お逢ひ出來るにしても、今の様な氣持で御迎へ出來るだらうか、「先生はきつと來て下さる」と、胸にさう叫びながらも、その後、自分の身の上は、齡は……。

このままで、この齡で、この氣持で、この學校に學びながら、再びお逢ひ出來る日の來るのを待ちたい。」

○初等部6年の小瀧勝三は「此の一夜で私は身にしみじみと或るものを味はふ事が出來た」と言い、中等部3年の山崎カツ工は「其の尊く偉大な御人格を涙で迎へ涙で送りました」と言っている。

「あとがき」に代えて—蝦名賢造の言葉—

○元北海道大学予科教師・蝦名賢造は1980年（昭和55年）8月発行の自著『札幌農學校—クラークとその弟子達—』p.181で、遠友夜学校の存在意義を次のように評価した。

○「新渡戸稻造夫妻の札幌に残したもっとも美しい、高貴な遺産の一粒は、このさ

さやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸を含む札幌農学校全体の教育精神そのものの体現ともいべきものであり、また逆に農学校全体にヒューマンイズムの精神を注入することにもなった。もし札幌にこの遠友夜学校の一施設がなかったならば、当時無学のままに一生を終わってしまったであろう数千人の人材を育成する機会は無量にあたえられなかったであろう。またこの夜学校があることによって、この学校の教師として学生時代の重要な時間を数百人の札幌農学校生徒、そして北海道帝国大学生が取り組み、人生と社会にたいする知識・経験をあたえられ、有用な人材として世に送り出されていった。これらの教師と子供たちを包容して、実に半世紀にわたって一貫して脈々と流れるヒューマンイズムの精神は、いかにこの地域の教育の深層に注入されたことであろうか。」

○北海道大学名誉教授・藤田正一は、2015年（平成27年）9月発行の冊子『札幌遠友夜学校』などで、遠友夜学校を「新渡戸稲造夫妻が残した美しい高貴な遺産」と形容した。蝦名の名句は藤田によって発掘され、伝えられた。

○もちろん、いまあげた蝦名の評価にしても、藤田の形容にしても、表現の多少の違いがあるが、すでに高倉新一郎らによって語り継がれてきた言葉であり、さかのぼり続けられれば、新渡戸の「遠友」にこめた精神に行きつく。突き詰めて考えれば、もっとさかのぼるともいえるであろう。（⇒1964年（昭和39年）5月10日）

○2013年（平成25年）11月3日発行の『宮部金吾と舎生たち—青年寄宿舍107年の日誌に見る北大生—』（青年寄宿舍舎友会編、北海道大学出版会発行）の日誌記事の中に次のような1文が載っている。①p.114「1911年（明治44年）3月15日、定期試験が迫るも「遠友夜学校」のために：佐藤君本日も遠友夜学校に教鞭をとりに行く。試験は近くなるに遠路通うことのいかに^{かんなん}艱難なるか、大いに同情に堪えぬ」、②p.116「1940年（昭和15年）11月16日、遠友夜学校の授業のために：雨。登校途中の道路は甚だしいぬかるみ。……、夜は夕食が終わるや否や、皆自室に引きこもり舎内は水を打った様な？静けさである。福本君は講義のため遠友夜学校へ」。

1. 夜学校創設以前（～1894）

◎1877年（明治10年）4月16日、札幌農学校の初代教頭・クラークは帰国の際、見送りの学生たちへ別れの言葉「青年（少年）よ大志を懐け（抱け）」を残した。

○1876年（明治9年）7月、クラーク博士として知られるウィリアム・スミス・クラークは、日本政府の熱心な懇願を受けて、日本で最初に開校する農学校のために、札幌農学校教頭（実質的には校長）として赴任した。アメリカのマサチューセッツ農科大学学長に就任中であった。1年間の休暇を利用して訪日するという形をとっていたので、札幌での滞在はわずか8か月とも9か月ともいわれる短期間であった。

○帰国の際、北海道札幌郡月寒村島松（旧島松駅通所、現・北広島市島松）で見送りの学生たちに馬上から述べた最後の言葉「青年よ大志を懐け」の名言（訳文は何通りもある）だった。しかし、信頼できる記録として最初に示されたのは、帰国17年後の1894年（明治27年）だった。このことがなければ、名言は遺されなかったかもしれない、とされる。

○その記録とは、札幌農学校予科生徒・安東幾三郎（のちの日伯拓植取締役）が、札幌農学校予科内学藝會雑誌『蕙林』の「雑録」欄に、記事「ウ井リアム、クラーク」を載せたものである。それは、第1期生からの聞き取り調査などに基づき、『蕙林』11号（1893年（明治26年）5月25日発行、p.32～36）、13号（1894年（明治27年）11月20日発行、p.27～36）に載ったクラークの伝記的文章であった。クラークが残した別れの言葉“Boys, be ambitious! like this old man.”を、安東は13号p.36に「小供等よ、此老人の如く大望にあれ」と訳して載せた。（『蕙林』は1892年（明治25年）5月1日、新渡戸稲造が学藝會の会頭になり創刊した雑誌で、自ら生徒を指導し、自身も多く寄稿した）

○この言葉は、その後、1898年（明治31年）に裳華房から出版された、有島武郎ら

当時の学生による学校紹介書『札幌農学校』（札幌農学校學藝會編）の巻頭で掲げられ、これが美文調の風格ある言葉であったため好評を博し、広まったとされる。

○この言葉の真意は何であったか。サンフランシスコ万国博覧会（1915年（大正4年）2月20日～12月4日、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコで開催）で東北帝國大學農科大學（北海道大学の前身）が作成して配付した英文冊子『東北帝國大學農科大學略史—アメリカが日本の大學に遺したもの—』には、クラークの言葉「Boys, be ambitious!」の真意として、次のように解釈され掲載されている。（2015年（平成27年）12月1日発行季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティアの会発行）No.39、p.4、藤田正一著「新渡戸稲造と遠友夜学校（3）」から転載した。「青年よ大志を抱け。金銭や私利私欲や、人が名声と呼ぶようなはかないものに対してではなく、知識や正義、人々の向上のために大志を抱け。そして、人としてのあるべき究極の姿に到達できるように、青年よ大志を抱け。これがクラーク博士のメッセージである」。

○クラークの遺した、人間をつくる教育の重視という札幌農学校精神が、新渡戸稲造の人格形成に影響を及ぼし、さらにそれが札幌農学校の学生たちへ、そして遠友夜学校の生徒たちへと継承されていくのである。（記念碑文例：①ウィリアム・S・クラーク胸像「少年よ、大志を抱け」1926年（大正15年）、田嶋碩朗制作、北海道大学構内＝札幌市北区、②クラーク記念碑「青年よ、大志を懐け」1951年（昭和26年）、山内壯夫設計、旧島松駅通所付近＝北広島市島松）

○2017年（平成29年）12月発行の雑誌『しにあらいふ』20巻229号の「山陰から（59）」で、杉岡昭子（元札幌国際プラザ専務理事）は、「遠友夜学校は新渡戸稲造発と思ってきたが、やはり新渡戸もクラーク博士の精神に基づく実践者だった」と述べている。

○伝説にはつきものであるが、クラークが別離の時に見送りの生徒に述べた“Boys, ……”の言葉自体をはじめ、経緯に疑問や矛盾のある話に疑いが投げかけられて当然である。これらの疑いに対する解説は、1972年（昭和47年）6月30日発行の北海道大学附属図書館報『楡蔭』No.29が対処している。

◎1881年（明治14年）10月2日、既存の教派から独立した、日本で最初の日本の教会「札幌基督教会」が札幌区（現・札幌市）に創設された。

○札幌基督教会は、創設日とは別に、教会堂建築のために借りた借金を返済し、完全に独立した日、1882年（明治15年）12月28日を「独立記念日」と定め、この日を重視した。

○「札幌基督教会」とは、1876年（明治9年）8月14日に開校した札幌農学校の初代教頭ウィリアム・スミス・クラーク、二代目教頭ウィリアム・ホイラーの影響を受け、彼らの教えを直接・間接に受けて感化された卒業生や学生たちによって創立されたプロテスタント系キリスト教の教会をいう。

○このころ、まだ太田姓を名乗っていた新渡戸稲造は、19歳の誕生日目前の1881年（明治14年）7月9日に札幌農学校を卒業し、同29日から札幌で開拓使御用掛勸業課に勤務した。ところが、1882年（明治15年）2月8日、開拓使が廃止された。その後は、農商務省御用掛農務局札幌勸業育種場に勤めていた。このころは札幌基督教会の創設に参加し、会員の1人として活動していた。（この年の11月からは、札幌農学校予備科の教師も兼務していた。なお、「予備科」を「予科」とする誤記は多い）

○教頭の任にあったクラークは、1877年（明治10年）4月に札幌を離れる際、「イエスを信ずる者の契約（誓約）」を起草し、署名を求めて去った。これに応え入信の決意を表明した札幌農学校の学生は、第1期生16人と、クラークが去った後に入学した第2期生15人との、合計31人だった。（人数は諸説あるが、「札幌独立キリスト教会」所蔵の実物の同契約には31人が署名している。1877年（明治10年）9月入学の第2期生である太田稲造も署名した。書名は筆記体で「I. Ota.」とある。同契約は札幌市の有形文化財に指定されている）

○クラークの帰国後は、3人の宣教師（メリマン、コルバート、ハリス）の指導を受け、メリマン・C・ハリスから、1877年（明治10年）には佐藤昌介、大島正健らが、1878年（明治11年）年には内村鑑三、太田稲造（15歳時）らが洗礼を受けた。

○クラークが残したキリスト教の遺産と科学的精神を自覚的に受け取り、自由・独

立の精神を共有した札幌農學校第1期・第2期生が学生時代に結成したグループは、「札幌バンド」とよばれた。北海道開拓に限らず、日本の宗教界・教育界に活躍した人たちは、彼らの中から現れた。佐藤昌介、内田瀨、大島正健、太田稻造、宮部金吾、内村鑑三、広井勇、伊藤一隆らである。

○卒業生らはキリスト教の学びを熱心に深める中で、多くの宗派が存在し、同じキリスト教徒でありながら分派があることに疑問を抱き、そうした既存の教会とは一線を画して独立した教会を持ちたいとの思いから、さまざまな苦難を乗り越えて自前の会堂を入手したことから「独立」という名を冠したとされている。

○無教会主義の独自の礼拝は購入した自前の教会会堂（「しろかんてい白官邸」札幌區南二條西六丁目）で1881年（明治14年）10月2日から開始されたが、創立記念日は借金を完済した1882年（明治15年）12月28日と定められた。会堂の建物が木造で外壁が白ペンキ塗りの旧開拓使吏員の官舎跡だったことから白官邸（ホワイト・ハウス）の教会とよばれた。

○1881年（明治14年）10月2日に公にした「独立宣言」を創立の精神とし、外国の経済的支援、外国人宣教師に依存せずに、日本人信徒による独自の伝道を行うことになり、1882年（明治15年）12月28日から伝道を開始していた。会堂はその後数年も経たぬうちに手狭になり、1885年（明治18年）には、2代目の新会堂（札幌區南三條西六丁目）が建築され、「アカシヤの教會」とよばれた。

○新渡戸は、会堂建設のための献金をずっと納め、宮部金吾や内村鑑三らとともに教会の会合には熱心に参加していたが、宮部や内村とは違って、この「札幌基督教會」の正式な教会員にはならず、結局、東京に行くまで会員名簿に記名をしなかった。信仰上の重要な点「キリストの神格」に確信を持ってないまま会員になる決心がつかなかったのだとされる。

○ちなみに、第3代目会堂は1922年（大正11年）に大通西7丁目に建設された「クラーク記念會堂」（「つた鶯の教會」ともよばれた）で、第4代目の会堂は1963年（昭和38年）に札幌市中央区大通西22丁目1番地の6に建設された「クラーク・宮部記念

会堂」である。

○「札幌基督教會」は、1900年（明治33年）2月の臨時総会の議決によって、名称を従来も非公式に使用していた「札幌独立基督教會」と改称した。2023年（令和5年）4月1日現在は「札幌独立キリスト教会」を正式名称としている。（通称として「独立教会」と呼ばれることが多いが、これは略称であり、俗称である。文献での遠友夜学校関連の記述では、これらの区別はほとんどなされずに使用されている）

◎1883年（明治16年）8月8日、太田（新渡戸）稲造は21歳になる直前、農商務省御用掛を退職し、東京に向かった。東京大学の選科生になるためであった。

○1881年（明治14年）の政変による開拓使の廃止に伴い、札幌農學校生の卒業後5年間の奉職義務がなくなり、1・2期生も自ら進路を決めることが自由になった。

○太田は、さらに学問を充実させようと志し、当時唯一の大学であった東京大學（東京帝國大學の前身）の選科生を志願した。この時の口頭試問の際、試験官・外山正一教授の質問に、有名な「願わくは我太平洋の橋とならん」と答えた。同年9月10日、入学を許可された。

○1884年（明治17年）8月末、東大の授業にあきたらず、1年間で退学した。同年9月1日、22歳の誕生日、憧れのアメリカ留学のため、横浜港から小さな商船に乗り、サンフランシスコ港へ向けて出発した。

◎1885年（明治18年）11月13日、太田（新渡戸）稲造は、留学先のアメリカから宮部金吾に送った書簡の中で、札幌で夜学校を開設する夢を語った。

○通説によると、新渡戸稲造がいわゆる「貧しい子どもたちや勤労青少年のための夜学校」構想を述べたのは、1885年（明治18年）11月13日付け「親愛なるカボ君」宛の書簡が最初である、とされる。

○ニックネーム「カボ君（Kabo）」とは、札幌農學校同期の親友・宮部金吾のことである。宮部によると、「カボ君」の呼称は、新渡戸（当時はまだ太田姓を名乗っていたが、以下、新渡戸で統一）が学生時代から言い出し、新渡戸だけが使っていた、

何のことだかわからない愛称だったという。

○北米のメリーランド州の大都市・ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学に留学中、新渡戸は宮部に送った書簡の中で書いた。(1986年8月20日発行、新渡戸稲造著、新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集・第22巻』教文館。p.225～304収載「宮部金吾宛書簡」の「第9信」p.254～259)

○のちに結実する「遠友夜学校」は、3種類の生徒を收容する新渡戸構想“札幌市民学園”の第3番目に示されたものであった。当時の表現(鳥居清治訳)のまま引用すると、その3種類とは、(1)「老人あるいは成人を対象とし、講義は日本語をもって、歴史、経済学、農学および自然科学とする」、(2)「“専門学校”や“大学”の入学準備を希望するが、予備校に正規に出席できない青少年に対するもの」、(3)「貧しい両親をもった、粗野な子供たちや、労働者の少年など、出面の子弟に対する夜学校で、これらには“日本語”の初歩と、なんとかして“英語”を少々、そして“算数”(“求積法”、“測量術”等)を教える。もしこれらの学級に“女子部”を併設するならば、刺繍、裁縫、編物、“英語”及び“国文学”の勉強ができるようにする」(前同p.255)というものであった。

○この記述の直前の文に「ぼくが何事によらず、常に札幌を連想していることが、君にはよくわかっていただけるでしょう。……2か年ほど前、まだ、そこで教鞭を執っていたころ、世の人々のため是非とも学校を創設したい、と考えました」とあることから、この構想は、東京へ行く前の時期、札幌農学校の予備科の教師を兼務し、英語を教えていた1882年(明治15年)11月～1883年(明治16年)8月に既に考えていたものと判断される。(この「予備科」とは、後の「予科」の前身で、札幌農学校の開校と同時に併設され、本科へ入る前段階として設けられていたもので、普通教科を授ける4年制の予備課程のことである。1889年(明治22年)9月から「予科」と改称され、5年制となる)

○この構想を新渡戸が最初に思い付いた時期についての推定は、半澤洵とも一致する。1936年(昭和11年)11月発行『新渡戸博士追憶集』に収録の半澤の論稿「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」p.87には「博士が札幌の不幸な人々のための夜学校を

設立しようと考えられたのは既に明治十五六年頃の事であった」とある。(明治15年は1882年、同16年は1883年である)

○こうした新渡戸の夜学校創設に関する考えは、ドイツ国ボン市からの書簡(1887年(明治20年)8月7日付け「宮部金吾宛書簡」第15信、前同p.274)にも、同様なことが述べられている。

○構想を思い付いた時期は特定されたとして、その着想の契機は何だったのだろうか。得心のいく見解として、「新渡戸は、開拓使として農家の指導に出かけた時、生活が安定せず、すさんだ生活をしている農民の実態に接し、彼らを貧窮から救うことが最大の課題であると感じた」(⇒2019年(平成31年)4月13日谷口稔著『新渡戸稲造』)などがあげられるであろう。

○一方、他の見解には、外国での留学中の体験的見聞が前述の理想的構想を新渡戸に抱かせた、あるいは、留学して進歩した民主的なアメリカ社会を見て、開拓使時代に漠然と感じていた思いがいつそう強められ、留学先で3構想を練るようになった。との論述もある。

○札幌農学校の学生時代にまでさかのぼるとも見ることができる。加藤武子・寺田正義著『マイグランパ新渡戸稲造』の第9章には、まず「良きサマリア人」の例があげられている(新約聖書「ルカによる福音書」第10章)。そして「札幌遠友夜学校」の見出しのもと、次の文章が続く。「人の難儀を見て、放っておけない性質の稲造は、札幌農学校に通いながら、札幌の町を鋭く観察し、1つの大きな問題を発見して、その解決方法を考えていた。それは教育の問題だった。貧しくて当時の義務教育(4年まで)に通えなかった人たち、小さい頃から働きに出なければならなかった少女たち、このような人たちが通える学校がぜひとも必要だと考えていた」(⇒2014年(平成26年)10月発行『マイグランパ新渡戸稲造』p.94~95)

◎1890年(明治23年)5月、「札幌基督教会」の有志によって、同教会附設の「豊平日曜学校」が創設された。(同教会敷地内ではなく、あえてこの地が選ばれた?)

○札幌基督教会の有志によって始められた「豊平日曜学校」は、豊平川沿いの土部さむらい

落とよばれていた貧民街の一角、札幌区南三條東四丁目一番地（同年9月には南四條東三丁目一番地に移転）にあった民家の空き家を借用して設けられていた。（1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』の年表p.240には、「札幌基督教会（現・札幌独立キリスト教会）有志により豊平日曜学校開設【札幌・南四條東四丁目】」とあるが、所在地が違っている。同類は、1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』の沿革p.306などもそうである）

○豊平日曜学校は、毎日曜日に1時間程度、近隣の子どもを対象に開かれる基督教の伝導活動であり、慈善活動の場であった。

○「豊平日曜学校」の教師役を務め運営にあたったのは、伝道師の馬場（後に竹内と改姓）種太郎や、教會員の中江汪、星ハナノ、星彌平（ハナノの弟）、那須次郎、菅原カツエらで、札幌農学校の学生会員なども奉仕活動に加わっていたと思われる。（馬場は日曜学校の主管とも主任ともいわれ、馬場が転出後、後任に中江がなっている）

○豊平日曜学校は人気があって、貧しい身なりの子どもらが100人以上も集まっていたらしい。家が南二條東四丁目にあった半澤洵（遠友夜学校第3代校長、第7代代表）も、年少期、この日曜学校に出席していたと、自ら語っている。しかし、子どもが多く集まれば集まるほど運営に費用がかさみ、すぐに資金難に陥ってしまう有様であった。

○関係の文献・資料では、この「豊平日曜学校」を「遠友夜学校」の“前身”または“原点”と位置づけるものがほとんどである。例えば、1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.306の「遠友夜学校沿革」で、1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』の「遠友夜学校のあゆみ」で、いずれも先頭に札幌基督教会有志による「豊平日曜学校」の創立（開設）をあげている。

◎1891年（明治24年）2月10日、新渡戸稲造は帰国し横浜港に着いた。3月31日、札幌農学校教授として赴任した。北海道庁技師も兼任することになっていた。

○1884年（明治17年）9月1日、に日本を離れて留学してから6年半ぶりの帰国で

あった。この間、1887年（明治20年）春には、同郷の先輩である札幌農学校教授・佐藤昌介の推薦で札幌農学校助教になったので、ジョーンズ・ホプキンス大を中途退学した。そのまま、農政学研究のために官費で3年間、ドイツのボン、ベルリン、ハレ各大学で農業政策学・農業経営学・農業経済学を研究し、博士と修士の学位を取得した。（「助教」を「助教授」とする誤記は、他の場面・人物を含めて結構多い）

○ドイツ留学中の1889年（明治22年）4月6日に長兄・七郎が死亡した。次兄・道郎はすでに亡くなっていたので、稲造は新渡戸家を継ぐため、同年4月30日（稲造26歳時）に太田姓から新渡戸姓へ復帰し、新渡戸稲造を名乗るようになった。

○1891年（明治24年）1月1日（稲造28歳時）、帰国の途中、アメリカに立ち寄り、フィラデルフィアで相愛の「メリー・P・エルキントン（Mary Patterson Elkinton、33歳時）」と結婚した。夫人は「メリー・P・E・ニトベ（Mary Patterson Elkinton Nitobe）」となった。クエーカー派の会堂で行われた結婚式には、メリーの両親は、結婚に反対していたため欠席した。（メリーは、5人きょうだいの長女で、下に4人の弟がいた）

○入籍届けは、帰国後すぐではなく、1892年（明治25年）6月9日に札幌で出された。しかも、日本戸籍名は「万里^{まり}」であるのに、通常の漢字名は「萬里子^{まりこ}」が多用されている。稲造の命名で、結婚も船旅も萬里の波濤を乗り越えて、異国日本へやっとたどり着いたという感慨が名前に込められたとされる。

○夫人の名前について補足すると、文献によって表記はまちまちである。遠友夜学校関係の文献・資料では、漢字等の「萬里子」が最も多く、ほかに「万里子、満里子、まり子、マリ子、万里」なども使われ、片仮名では「メリー」が多く、ほかに「メアリー、メアリ、マリー、メリィ、マリヤ」などとも書かれる。一方、新渡戸稲造関係の文献・資料では、「メリー」または「メアリー」がほとんどである。2013年（平成25年）10月発行の『新渡戸稲造事典』では、漢字名はまったく使われず、以前と同じ「メリー」で統一されている。（本書では、遠友夜学校の公文書類が「萬里子」を採用しているのので、これに合わせて、原則として「萬里子」を使っている。2014年（平成26年）7月、遠友夜学校関係資料が北海道大学大学文書館で保存され

るようになって以降、同文書館の資料では「メアリー」と統一されるようになったようである)

○札幌農学校教授・新渡戸稲造の新家庭にあてがわれた住宅は、アメリカ人の夫人と生活するということから、農学校の近く北四條西二丁目の外人用官舎であった。しゃれた洋館で、広い部屋がいくつもあり、庭付きだった。この家の裏門に接するように、隣の北四條西一丁目には「スミス女学校」(北星学園女子中学高等学校の前身)の校舎があり、稲造が教えに行っていたのに加え、気さくな人柄の夫妻の働きかけで、すぐにこの女学校の生徒を自宅に迎えての交流も始まった。

○1891年(明治24年)5月27日、札幌農学校に着任してまもない新渡戸稲造夫妻が、資金難で廃止されそうだという豊平日曜学校の様子を見に訪れている。(萬里子、すなわちメアリー夫人が、翌日、アメリカの母宛に出した書簡の中で書いている)その後、萬里子夫人は、他の札幌農学校教授らにも依頼して寄付を集め、運営の支援にあたったが、資金難は解決に至らず、「豊平日曜学校」は1893年(明治26年)に閉鎖せざるを得なくなる。(1894年(明治27年)には、新渡戸夫妻は、この日曜学校の建物を引き継ぎ、今まで来ていた子どもたちのうち普通教科を教える夜学校になっても来続けたいという子を引き受けることになる)

○札幌農学校での新渡戸の教育指導面に目を向けてみると、授業で接する以外に、課外でも、家庭に招いてまでも、学生によく接し、世話をやき面倒をみていた。特に、日曜日に受け持つバイブル・クラス(聖書研究会)には、新渡戸を慕う学生がいつも官舎の広間に多く集まっていた。集会後の菓子類の出る歓談のひとつは、多くが親元を遠く離れてきていた学生にとって、それはいろいろな意味で楽しい集いだったという。

○また、よく苦学生の世話をし、自宅の官舎に置いてやり、書生として、また北鳴学校や夜学校を手伝わせて、ポケットマネーから学資を出してやった学生が何人かいた。のちにあげる中江汪(新渡戸渡米時の遠友夜学校運営の実務責任者)や小谷武治(新渡戸が『農業本論』を執筆した時の口述筆記者)などがこれである。(⇒1985年(昭和60年)9月発行『新渡戸稲造(さっぽろ文庫34)』p.89~90)

◎1891年（明治24年）9月7日から、新渡戸稲造は、当初から予定されていた北海道庁技師としての兼任での仕事を始めた。

○北海道内各地に出張して開拓農民を指導したが、特に泥炭地の試験と北海道小作法の草案作成指導にあたった。

○1893年（明治26年）4月19日～1895年（明治28年）5月20日は、一時的にこれが本務とされ、新渡戸の仕事は多様かつ多忙を極めた。目の前の仕事に全力投球する毎日だったとされる。

◎1891年（明治24年）9月10日、札幌市初の中学校・私立「北鳴學校」が開設され、新渡戸稲造は、札幌農學校教授等と兼任でこの学校の「教頭」にも就任した。

○このころ、札幌農學校の求める教育水準の学力を備えた生徒を送り込む学校が北海道にはなかった。新渡戸らがそうであったように、最初は東京で教育を受けた者を高額の奨学金を与えて招かなければならない状態であった。札幌農學校が一般に開放されるようになると、小学校とのギャップを埋める中学レベルの学校の設置が地元にも必要となった。予備校では不十分であった。ぜひ必要な、そうした学校の地元での創設に参加し、実力のある生徒育成に一役買ってくれるよう白羽の矢を立てられたのが新渡戸だった。

○元開拓使役人だった堀基校長（北海道炭礦鉄道会社社長）に懇願されての教頭の就任だったが、新渡戸の期待された役割は実質的に「校長」であった（北鳴學校での新渡戸の役職が「校長」あるいは「教授」であったとする文献はけっこう多い）。当初は各種学校として出発したが、同年12月「中學校令」の改正があったので、これに則るよう校則を改正し、1892年（明治25年）9月には尋常中学校の学科課程とした。

○公立の尋常中学校設置がようやく実現し、1895年（明治28年）4月1日に公立「札幌尋常中學校」が開校されることになった。同校は、北鳴學校校舎を仮校舎とし、生徒も移行させる措置をとったので、北鳴學校は1894年（明治27年）4月入学

生の募集を停止し、1895年（明治28年）3月末日で閉校とした。

○新渡戸がかかわった北鳴學校の閉校と夜學校の開設との時期的タイミングがうまく合う関係か、北鳴學校を遠友夜學校の前身と位置づけている解説もある。

◎1891年（明治24年）12月19日、新渡戸稲造は、出獄者のための免囚保護の事業を具体化し、札幌に「北海道出獄人保護會」を創設し会長に就任した。

○明治初期の北海道には、受刑中に開拓などに従事させる集治監（囚人の収容施設）が、樺戸・空知・網走など何か所も設置されていたが、このころ、その刑余者の出獄後の対処がしばしば社会問題となっていた。彼らに帰郷旅費を与えたり、定着させ生業に就かせたりするなど、生活の支援・保護・教育指導を行う機関・団体の設置が求められていた。

○9月下旬以降、留岡幸助らが新渡戸宅を訪れ、この問題について何度も話し合いをおこなった結果、「北海道出獄人保護會」が創設され、新渡戸が会長に就任した。

○新渡戸が帰国早々に北海道の社会事業における先駆的役割を果たしていたことは、あまり知られていない。また、その後の具体的記録も残っていない。

◎1892年（明治25年）1月19日、新渡戸夫妻の間に待望の第1子（男児）が誕生した。この子の存在が、夜學校の創設と命名にかかわってくることになる。

○この時、稲造は29歳、萬里子夫人は34歳で、お産は高齢出産のうえ難産であった。

○男児には、新約聖書に登場するイエスの使徒・トーマスあるいは、アメリカの友人、発明王でクリスチャンのトーマス・エジソンにちなんで、名前を「遠益（とおます）」とした。しかし、愛児は8日後の1月27日に死亡した。（ちなみに、メリーには、生後間もなく亡くなった末弟がいるが、その名はトーマスだった）

○もともと子供好きの夫妻の落胆・心痛は計り知れないものであった。萬里子は産後の肥立ちがよくなく、体調を崩し、病床に臥す身となった。実家で静養するために、稲造に付き添われて6月30日に横浜からアメリカへ向かった。出港後間もなく船火事に遭い、函館に一時戻り、実家に着いたのは7月末だった。この時、稲造は同年

10月20日ごろに札幌に戻ったが、萬里子が稲造に伴われて帰札したのは、1年半後の1894年（明治27年）4月10日だった。（⇒2013年（平成25年）10月発行『新渡戸稲造事典』p.50、p.416）

○関連の話として、のちに孫の加藤武子は次のように語っている。「メリーは、遠益の死に加えて産後の肥立ちが悪く、心身ともに衰弱していたのですが、皮肉なことに、お乳がたくさん出ていました。遠益より少し遅れて（同年5月17日）、稲造の姉喜佐のところに次男孝夫が生まれました。姉喜佐のところは子たくさんで、経済的にも苦しい状態にありました。そこで、メリーのほうから申し出て、孝夫を引き取り、乳を与えることになりました」（⇒2014年（平成26年）10月発行『マイグランパ新渡戸稲造』p.5）。「祖母メリーは遠益の産後病身となり、アメリカの実家から看護婦兼カイロプラクタのレイチュル・リードが送られて同居していた」（⇒前同、p.182～183）

○遠益の死によって、稲造が受けた打撃は大きかった。その悲しみについて、1911年（明治44年）9月3日に実業之日本社から出版した著書『修養』の中で「子を失った悲しみは暫く口に出すことも苦痛だったが、最近やっとそれほどでもなくなった」と語っている。

○その後も、子宝に恵まれなかったので、子供を欲しかった夫妻は縁故者から1男・1女の養子を迎えている。まず、遠益と同年の1892年（明治25年）5月17日生まれの河野孝夫（よしお、稲造の五姉・喜佐の次男）を赤子のときに引き取り、孝夫6歳時の1898年（明治31年）7月11日、新渡戸夫妻が療養のためアメリカに行く直前に正式に養子縁組をしている。孝夫は、養親に同行し、そのままアメリカのエルキントン家に預けられ、小学校から大学までアメリカで教育を受けた。もう1人の養子は、1890年（明治23年）11月23日生まれの孫の稲田琴子（戸籍名は「こと」。稲造の次姉・峯の二女・磯の長女）で、1905年（明治38年）月日不明・15歳時から新渡戸家に来て、一緒に暮らし始めている。いろいろあって、孝夫と琴子は1917年（大正6年）9月27日に結婚するに至る。（ちなみに、翻訳家の加藤武子は新渡戸孝夫・琴子の第2子・長女である）

◎1893年(明治26年)の夏、萬里子夫人は実家に滞在中、遺産分けを受けとった。

萬里子は稲造と相談して、これを基金として、夜学校を設立することにした。

○遺言で贈った女性は、萬里子の実家・エルキントン家に孤児院から引き取られ、家族の一員として育てられ、ずっと独身のまま同居して暮らしていた。ちょうど萬里子が滞在時に60余歳で亡くなったのだが、赤ん坊の時から抱いて育てられたメリー(萬里子)にも1千ドル(当時の換算で2千円。のちの文献・資料には2千ドル説もある)が贈られたのだった。(亡くなった女性の遺言でメリーに贈られたとの説明が多いが、遺産を受け取ったメリーの父=ジョセフ・S・エルキントンの親心で、静養のため滞在中のメリーにも分け与えられたとするニュアンスの説明もある)

○萬里子は実家でそれを受けとり、この尊いお金を私用に充てるに忍びず、稲造と手紙で相談した結果、留学中から稲造が札幌学院アカデミーの1つとして計画していた、貧しい子女のための夜学校を設立しようということに話が決まり、萬里子のアメリカ滞在中の1894年(明治27年)1月、札幌の東部豊平橋の近くにあって、信者や農学校生徒によって経営されていた札幌独立教会附属日曜学校の敷地と校舎を買い取り、開校したのだった(2013年(平成25年)10月発行『新渡戸稲造事典』p.51)。ただし、同じ事典のp.416には、稲造が「1894年(明治27年)7月4日、萬里子夫人の弟ジョセフ・エルキントンに書簡をしたため、遠友夜学校を造るための家付きの土地を購入することに決めたことを伝える」ともあり、土地購入の時期にずれがある。

○2013年(平成25年)10月発行の『新渡戸稲造事典』は、それまでの説明を大きく修正するものであった。それまでは、高倉新一郎の解説(1953年(昭和28年)12月発行の『北海道社会福祉』第1巻第2号p.24~49掲載の論文)を拠典とし、転載・引用を繰り返していた。多くの文献は、「1893年(明治26年)、万里子夫人の手にアメリカの実家から2千弗(次報で1千弗に訂正)の金が届いた」つまり「金が送られてきた」としたため、萬里子夫人が1892年(明治25年)6月30日に横浜を出港してアメリカに行き、1894年(明治27年)4月10日に札幌に戻った、とされる

約2年間は札幌に居たことにされていた。贈与金も萬里子夫人はアメリカの実家で受け取っていたのである。

○一方、2014年（平成26年）10月発行の『マイグランプ新渡戸稲造』の記述にしたがえば、死亡した実子・遠益と同年の1892年（明治25年）5月17日生まれの孝夫を引き取って、萬里子夫人は6月30日には、わずか生後1か月余の乳飲み児を病身の身で連れて、横浜から船の長旅でアメリカへ向かったことになる。稲造や介添え者が同行したとはいえ、無謀にも思え、新渡戸夫妻がそんな行動をあえてとったとは考えにくい。しかし、同書には、生後間もない孝夫を連れて出発したとは書かれていないのだが、引用・参考文献に『新渡戸稲造事典』をあげているので、そうした行動をとったと判断すべきであろう。

2. 遠友夜学校時代（1894～1944）

◎1894年（明治27年）1月18日、新渡戸夫妻は、閉鎖した「豊平日曜学校」を引き継ぎ、札幌区南四條東三丁目一番地で私塾「夜学校」を創設した。

○呼び名は「夜学校」でも、正しい位置づけは「社会事業施設」の1つであり、明治期に創設された北海道の施設では3番目、札幌圏地域では最初であった、とされる。（⇒1966年（昭和41年）7月15日）

○のちのほとんどの文献・資料が「1894年（明治27年）1月」を夜学校の創設時期とし、「開設日」は「不詳」として示していない（ごく一部に「1月18日」と特定しているものがあるので、ここでは仮にこの日を採用してみた）。この年月が経年計算の基点とされることが多いが、公式な開校（創設）日は同年6月18日である。

○設立母体が個人（新渡戸稲造夫妻）か団体（札幌基督教会・豊平日曜学校関係者有志や新渡戸夫妻の呼びかけに協力した後援者有志）かについては、文献・資料によって記述がまちまちである。新渡戸稲造個人を強調した記述が多いが、多数の熱心な有志協力者がいてはじめて実現したのであろう。1957年（昭和32年）3月31日、北海道教育研究所編纂・北海道教育委員会発行の『北海道教育史／地方編2』p.39には、「……新渡戸稲造は日曜学校有志とはかり、遠友会と称し、貧児及び晩学のものに対して夜学校を開いた。……」とある。“遠友会”の名称の真偽のほどはさておいて、順当な記述例であろう。

○夜学校は、創設時から約2年間は名称がなかった。（最初から「遠友夜学校」「札幌遠友夜学校」の名称が付いていたかのような記述が多くみられるが、厳密には、誤解を招く扱いである。生徒の中には、夜学校のことを「日曜学校」や「救貧学校」とよんでいた者もいたとされる。生徒にとっては「豊平日曜学校」の延長だと思わせるものだったのであろう。ちなみに、当時、新渡戸は、義弟のジョセフ・エルキ

ントン宛書簡の中で、“the Ragged School”と書いていた。「ぼろ学校」との愛称を付けていたと想像される)

○夜学校は、「豊平日曜学校」が使っていた民家の古屋を引き続き借り上げ、ほとんどそのままの状態の家を校舎として使用した(いろいろと表現され、「豊平川岸に1軒の家を建て、……」などとしている文献もある)。なお、1936年(昭和11年)11月発行『新渡戸博士追憶集』に収録の半澤洵の論稿「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」p.88~89に「……27年1月……札幌独立教会付属日曜学校の敷地及び校舎を買取り、……」とあるのは、後述のことが事実であれば、間違いということになる。(2013年(平成25年)10月発行の『新渡戸稲造事典』p.51など、今日でも、校舎は「札幌基督(独立、独立基督)教会が伝道のために使っていた施設の敷地と古家屋を買い取って始めた」趣旨の説明のほうが多い)

○創設者・新渡戸稲造自身が初代校長に就任した。新渡戸は、当時31歳、札幌農学校の教授であった。新渡戸は「実は、学校の持ち主は自分ではない」ことを説明する言葉として「校主」を用い、「私が校長と云ふものの校主とも云ふべきは家内である」とした。(⇒本書の最初に紹介した1931年(昭和6年)5月18日の講話)

○夜学校開設の初日、新渡戸が何をどのように語ったのか、当初の学校の様子はどうであったのかについて、記録として残されているものはない。(⇒同前。「四十年前に学校を開いた時は毎週三日宛來た、楽しみにして來た。……」と語っている)

○独自性にかかわることであるが、明治時代から何度も『遠友夜学校一覧』『事業一覧』『〇〇記念誌』などの形で校内外の冊子等に「遠友夜学校沿革」が記載される機会があった。多くの場合、これらには「前史」とあり、「本校ノ前身ハ明治23年(1890年)札幌独立教會ノ有志者ガ南四條東四丁目一番地ニ創立シタル同教會所属ノ日曜學校ナリ。當時是ヲ豊平日曜學校ト称シ、毎日曜1時間ツツ宗教教育ヲ施シ、……」などとある。新渡戸をはじめ歴代の代表・校長は、この位置づけを容認していたものと判断される。

◎1894年(明治27年)1月開設の、のちに「遠友夜学校」となる私塾「夜学校」

は、創設者・新渡戸稲造夫妻の考えで、慈愛の精神を根底に置いて運営された。

○新渡戸夫妻は、ヒューマニズムの精神から経済的に貧困で義務教育の機会が与えられていない子供や大人たちに無月謝で教育の場を提供したいとの思いを実行に移した。自らの信仰の成立過程で学んだ、貧しい人たちに愛を施す教育を実践したかったからである。しかし、夜学校ではキリスト教の教育は前面に出さずに、日本人に理解しやすい「慈愛」に精神基盤を置いた。キリスト教に対する警戒心から入学をためらう人が出ないように配慮したのであった。それに代わるものとして、キリスト教と同様の精神を伝えることのできるリンカーンの話を前面に出した。(後年、第二次世界大戦が激化すると、リンカーン精神は、敵国の大統領だった人の思想だと非難の対象とされ、槍玉にあげられることにもなり、閉校の遠因の1つとなった)

○社会事業施設としての夜学校は、無月謝(授業料無料、その他の納金もなし)で、教材・筆記具等は無料支給で開設された。年齢・性別・職業等の制限・区別が一切なく、男女が一緒に学び、入・退学も、出・欠席も、遅刻・早退も任意であり、完全に開かれた自由平等な寺子屋式の私塾であった。

○開設時の生徒は60人ほどだったとされる。最初のころの授業は、決まった曜日の週2回、午後6時半から約60分間とし、学年・課目の区別はなく、個々の生徒が希望する教科を教える形で行うというものであった。つまり、生徒が希望の教科名を伝えると、その教科を担当する教師は、生徒が何人でもひとまとめにして教える。希望の教科数だけグループができた。複数を同時に指導するのは、学力差等があり、容易ではなかったと想像される。(当初の指導態勢については、「最初は、新渡戸が1人で週2回教えるだけのものだった」などと記されているものもあり、資料によってまちまちである)

○実際の運営や維持は、札幌基督教会(後に札幌独立基督教会)会員(婦人・青年の有志)の奉仕活動に支えられた。教育指導は、奉仕の精神に富む、札幌農学校の有志学生・教員に支援を求めたが、なかでも人脈としてつながりの強い札幌農学校同期生や新渡戸を慕う北鳴学校時代の元教員・生徒の教会会員には、特に協力を求めたとみられる。

○ほかに、札幌基督教會の会員の応援を得て、貧困家庭を巡回訪問するセツルメント隣保事業も夜学校の事業としていた。(2013年(平成25年)10月発行の『新渡戸稲造事典』p.51には、「(夜学校の)周りの町々に看護婦を巡回させたり、消毒液を配付したりするなど、……」とある。活動範囲の実際は、同地域の「周りの家々に」という程度の規模であった)

◎1894年(明治27年)1月18日開設の私塾「夜学校」は、創設者・新渡戸稲造夫妻の考えで、最初から男女平等・男女共学で運営された。

○男女別学が普通だった当時、共学にしたことは画期的で特色ある有効な実践であった。もっとも、男女別学にするのは教室の数の関係でできなかったこともある。また、行おうとしても、当初は女子を教える女性の先生の確保が困難で、男女別学は人材的に実施が難しかった。ただ、夜学校が拡大して教室の数も増えた大正時代には、男女別学を実施しようとするればできる環境になった。しかし、男女共学の持続は一貫した新渡戸夫妻の教育的意図であった。年齢も職業も違う多様性に富む男女生徒が交流すれば、学びの場が広がるはずだと考えられた。実際、教室には、共学による何となく柔らかな雰囲気がたぐい、各組で今日のホームルームのような自治的活動が行われ、和やかな空気に包まれていたという。(後年、教室が多くなった時代には、男女別の組も設けられたとの記述もあるが、おそらく高学年の教科目よっての措置であろうと考えれば、むしろ自然な対応の範囲といえよう)

○男女間で学力差をつけないで平等に教えるという点も重要であった。例えば当時は、男子中学校と高等女学校とでは、使用する教科書が違うことがよくあった。女子には男子ほどの教育水準を求めず、1ランク下の教育でよいという時代であった。しかし、遠友夜学校での英語の教科書は、当時の男子中学校で用いていたものを男女共通で使った。男女差を設けないところに、新渡戸夫妻の男女平等の理念があった。そして重視されたのは、性別を超えて、個々の生徒の学び水準や進度に合った個別指導に近いもので行い、実際に身に着いているかということであった。

○ついでに学校生活にもふれておく。夜学校であるから、夜の限られた時間、制約

の多いなか、勉強だけでも不十分にしか行えないと思われがちである。だが、遠友夜学校は、勉強を教えるだけではなく、土曜・日曜の昼間も使って特別活動にも力を入れていたのである。のちになってからの例であるが、春は運動会、夏は海水浴、秋は登山、学芸会、お正月はカルタ会などがあり、また、毎月、合唱の練習が行われ、弁論部などのクラブ活動もなされていた。こういう行事は、人間性の陶冶には欠かすことのできないものであり、また、社会に溶け込む訓練にもなった。「遠友夜学校」は「遠遊野学校」とも呼ばれるほど、慈愛と奉仕の精神に富んだボランティア学生教師たちは、男女を区別することなく、自然の中に生徒を連れ出していった。定山溪への遠足、夏の海水浴、そして満月の夜の月見など、自然との触れ合いも大切にされた。こうしたことが人格の陶冶や遠友夜学校魂とされる独特の精神形成に作用したと思われる。年中無休に近い教育活動であったことは、諸文献で紹介されている。(2014年(平成26年)3月20日発行『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第2号p.4～5掲載、札幌遠友夜学校研究者・中川厚雄の寄稿「この世の中で一番忙しい教師は?」が詳しい)

○なお、1954年(昭和29年)1月1日発行の『学制八十年史』(文部省編大蔵省印刷局発行)によると、1894年(明治27年)の学齢児童の就学率は、北海道は男子が56%、女子が34%で、全国平均の男子76%、女子44%をかなり下回っている状況であった。

◎1894年(明治27年)1月18日開設の私塾「夜学校」は、創設の理念(校是、精神的支柱)を「リンコルン(リンカーン)の精神」とした。

○夜学校の教育精神は、生徒を1人の人間として日々向上させることにあった。

○特色としては、創設当初から日曜日に、国民として恥ずかしくない常識と品性を身に付けさせる目的で、全員を対象に修身講話が行われた。新渡戸稲造は自ら講話をおこなったが、それは常に「リンコルンに学べ」という内容であった。現代ふう一言でいえば、「リンカーンに学べ! / リンカーン精神に学べ!」となろう。「誰に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって」は、1865年(慶応元年)

3月4日、リンカーン大統領が2期目の就任時におこなった大統領就任演説の一部である。

○このほか、「学問より実行」「知識より常識」などについても、新渡戸はかみくだいて話をした。

○リンカーンの言葉「誰に対しても……」は、一説に新渡戸がアメリカ留学時代に感銘を受けた言葉だとされているが、新渡戸自身の言葉によると、「16歳のとき、日本の田舎の学校（注：札幌農学校のこと）にいたころ、はじめてリンカーンの伝記を読んで『非常に感激』し、それ以来、リンカーンを神棚の偶像のように崇めるようになった」という。新渡戸はリンカーンを神格化し終生尊敬し続けた。

○この集会は「倫古龍（リンコルン）會」と命名されていた。まもなく生徒たちも、高学年・高年齢の者が中心となり、自ら開く生徒会活動の修身会として「倫古龍會」を発足させた。

○「リンコルン」は、明治時代に「Lincoln」をローマ字読みしたもので、「倫古龍」の漢字があてられた。英語の発音を片仮名で表記すると、「リンカーン」となる。これは、アメリカ合衆国16代大統領「エイブラハム・リンカーン（「エイブラハム」は「アブラハム」、「リンカーン」は「リンカン」とも表記される）」を指している。民主主義政治の原則「人民の、人民による、人民のための政治（政府）」を唱えた、史上最も偉大な大統領の1人とされている。

○後年、1923年（大正12年）8月20日に明文化された「財團法人札幌遠友夜学校學則」には、第7章に「修養諸會」の規定があり、第15條は「徳操ノ馴致並ニ親睦ヲ計ル為」として、中等部男生徒では「リンカーン會」、中等部女生徒では「董（すみれ）會」、初等部男女生徒では「修身會」を組織するとした。

○1917年（大正6年）月日不明の「學事報告」には、次のような説明が載せられている。（2015年（平成27年）6月27日発行『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第3号、遠友夜学校研究家・中川厚雄による）

①リンコルン會…尋常5年以上男生徒並びにかつて5年以上の在学者及び本校教師で組織し月2回第2、4日曜日に例会を開き、主として会員の弁論、講演及び名士

の講演を聞き会員の精神的方面の発展に勉める。本会は偉人アブラハムリンコルンを理想模範として崇拜しこれに私淑す。会員自治制をしき春秋2回大会を行い役員改選を行う。機関誌を発行し会員の感想を発表の機関として或いは知的方面発達に資す。1897（明治30）年開始。

②董会…尋常5年以上の女生徒並びに4年生在学者にして会員たるに足る者及びかつて5年以上の在学者並びに本校教師を以て組織せることリンコルン会の如し。本会は会員の精神的智的において婦人としての智識を修養することに勉める。毎月1回第1日曜日に例会を開き目的に沿わんがため全員の感話等をなし、且婦人として勤儉貯蓄の精神を養わんがために麻草履の鼻緒及び紙袋を作ってその収入高今や驚くべき程に達せり。年2回大会を開き神武天皇祭に於いて総会を開き幹事の改選をなす。本年に於いては第166回より第180回に至るまで例会を完了せり。

○董会関係の残存記録として、もっとも古い遠友夜学校董会『董会雑録／第壹巻』（1904年（明治37年）3月～1906年（明治39年）12月）には、最初に「董会規則」が記されている。「本會ハ労働ヲ重ンジ自助ノ精神ヲ養ウヲ目的トス」「本會ハ董会ト称シ遠友夜学校内ニ置ク」「會員ハ左ノ範囲内ニ於ケル有志者ヨリ成ルノ一、本校職員及高等科女生ニシテ一十五歳以上ノ者ノ二、校外ニ於テ本會ト密切ノ関係ヲ有スルモノ」「毎月一回（第一日曜日）例会を開キ一定時間内各労働ニ従事ス但シ之ヨリ得タル収入ハ本校基本財産ノ中ニ加ウルモノトス」、その他、毎年12月に総会を開き、任期1年の役員（幹事3名、会計1名）を選挙で選ぶなどと規定されていた。

（1904年（明治37年）3月～1906年（明治39年）12月のこの史料は、明治期の董会活動日誌で唯一現存しているもので、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『札幌遠友夜学校資料集／1995年2月』に、復刻版が収録されている）

○山本美穂子によると、「董会は、1900年（明治33年）、女子の労働従事を卑しむ風潮を改めるため、労働を重んじ自助の精神を養うことを目的として創設された女子生徒の修養会である」。（⇒2010年（平成22年）3月19日。p.15）

◎1894年（明治27年）6月18日を公式な開校（創設）日と定め、以降、6月18日

を「開校（創立）記念日」としてきた。

○当然、新渡戸稲造が決めたと思われるが、裏づけ史料が見つからないので、いつ誰がこの日を開校（創設）日と定めたかははっきりしない。

○何を根拠（理由）に開校日としたかについては、長く「家屋付きの土地を購入した日」とみなされてきた。

○のちに催された創立35周年・50周年などの記念式典は6月18日に行われた。

○ずっと後になるが、1964年（昭和39年）6月10日ごろ、札幌市勤労青少年ホーム入口付近に石杭状の銘板が建立された。この銘板の側面に「創立年月日 明治二十七年六月十八日 創立者 新渡戸稲造」と記した小型の横長銅板がはめ込まれた。

○2017年（平成29年）7月発表の三上節子論文で、実際の土地購入日が明確化され、それが1895年（明治28年）の3月22日～7月4日とみなされることから、土地購入をもって根拠とすることはできなくなった。

○文献の中には、実際に開校した日が1894年（明治27年）6月18日であった、とする解説もある。

◎1895年（明治28年）6月18日（推定）、新渡戸稲造夫妻は、私費で建物付き土地を購入して移転し、これを夜学校の独自の校地・校舎とした。

○独自の校地・校舎は、創設時のものとは道路を1本はさんだ東側隣に位置した。

（なぜこの場所を校地に選んだのかと、由縁を問われることがある。この夜学校については、講釈をする人もいるようであるが、「豊平日曜学校から引き継いで借用中の古民家（校舎）の隣接地にたまたま適当な売地があったから」というのが、明快で当を得た説明であろう）

○所在地は北海道札幌区南四條東四丁目一番地（現・札幌市中央区南4条東4丁目1番地）で、敷地面積は $1,721.61\text{m}^2 = 521.7$ 坪であった。購入価格は、古い民家（半平屋建ての1階部分2部屋）を含めて525円だったとされる。以降、1962年（昭和37年）に札幌市へ寄付するまで、校地の増減の変更はなく、遠友夜学校の資産であり続けた。

○教室は2室になったが、間仕切りがふすま戸1枚だけだったので、隣の部屋の声が丸聞こえだった。粗末な畳の上に坐り机を並べ、生徒は座った姿勢で勉強をした。日曜日の校長の講話のときは、ふすま戸を外して1室にして行われた。

○生徒が増えて、週2回の授業では対処できなくなったため、毎夜6時半から約60分間実施に改め、普通教科を教え、実用教科（看護法や、裁縫、編物などの実技）も加えた。

○2017年（平成29年）7月発表の三上節子論文によると、「創立以来、遠友夜学校創立記念日」は「半澤洵理事長の筆跡で刻まれた石杭の創立日付」と同じ「明治二十八年六月十八日である」とされる。（三上がいう石杭とは、いくつも写真が残っているが、半澤洵による筆跡の創立年は「明治二十八年」ではなく、「明治二十七年」と書かれている。2018年（平成30年）6月1日印刷の時系列資料「札幌遠友夜学校のあゆみ」をまとめた原田昭子も、「この石杭に創立記念日はM28年6月18日とある」としているが、他の人も紹介で書いているように「明治二十七年」としか読めない）

○土地購入を根拠（誤認）にして、あるいは根拠を示さないで、「1894年（明治27年）6月18日を夜学校の創設日」とする文献や資料は多い。

○のちに、1964年（昭和39年）6月以前に、「札幌遠友会」の新渡戸稲造博士顕彰会によって、札幌市勤労青少年ホーム入口に石杭状の銘板「札幌遠友夜学校跡地 半澤洵書」（正面）「創立年月日 明治二十七年六月十八日 創立者 新渡戸稲造」（側面）と記された小型の横長銅板はめ込みの銘板が建立された。

○所在地を「南5条東4丁目」とする誤解も少なくない。根拠の引用記述を確認すると、高倉新一郎の概説の1文に行き着く。「南五条東四丁目。今でこそ札幌を東西に横断する千歳街道（国道）に近く、……」とある。（1953年（昭和28年）12月発行『北海道社会福祉』1巻2号ではp.27、1964年（昭和39年）6月発行『札幌遠友夜学校』ではp.6、1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』ではp.15にある記述である。なお、「千歳街道」を「国道」に改稿したのは1964年（昭和39年）6月発行のものから）

◎1896年（明治29年）1月10日以降の間もない日、無名称だった「夜学校」に名前を付け、新渡戸稲造校長は「遠友夜学校」と命名した。

○開校以来2年間、正式な名称がなかったが、周囲の要望に応じて命名した。

○1896年（明治29年）1月10日の稲造日記に、次のようにあることが根拠とされる。「夜、萬里子夫人と夜学校について話し合い、ちょうど4年前に1週間余りで亡くなった遠益の1字をとって遠友夜学校と命名するのが一番ふさわしいという結論に達する」（2013年（平成25年）10月発行『新渡戸稲造事典』p.420。p.51には「遠益の1字を取って『遠友夜学校』と命名することにした」とある）

○新渡戸は、校名（名称）の由来（意味づけ）を自ら明快に説明しなかった（提示およびしなかった）とされる。そのことがいくつもの推察・解釈を可能にした。（このことについて、新渡戸にはクエーカー派への思い入れがあり、彼はクエーカーの生き方—実践するだけで、布教や宣伝は行わない—をしていたので、校名の由来を周囲に自ら説くことはなかった、と解釈する人もいる）

○既に本書でも紹介したように、新渡戸からまったく説明がなされなかったのではなく、新渡戸が1931年（昭和6年）5月18日に来校した際の講話の中で校名の由来についてふれたことは、記録として残っている。（⇒「はじめに」に代えて）

○「遠友夜学校」という名称の「遠友」については、設立の趣旨にそう、孔子の論語である「有朋自遠方來、不亦樂乎（友あり遠方より來る、また樂しからずや）」に由来し、「外国の遠い友」、すなわち「遠いアメリカから夫人に贈られてきたお金（1千ドルとも2千ドルとも言われている。あまりにも有名な逸話なので、ここでは説明を省略する）を資金とし、遠いアメリカから嫁いできた夫人の発意によって設立できたという感謝」、「遠いフィラデルフィアのフレンド（基督友会徒＝敬虔なクエーカー派＝フレンド派）の援助で実現した学校」の意味や、生後8日間で召天した夫妻の愛児の名前「遠益（とおます、トーマス）」にちなむ意味（遠益の友）も込めた、などと説明・解釈されている。（前述の『新渡戸稲造事典』にしたがえば、順序として、論語の言葉などとする意味づけはあとで加えられたことになる）

○心情的な解釈には、「わが子・遠益をうしなつた新渡戸夫妻が、遠益への愛のすべてを夜学校の子どもたちにそそごうと、想いを校名に重ねたのである」というものもある。

○北大生が宮部金吾（83歳時）から直接聞いた話も記録されている。「遠友夜学校についても又興味あるお話が出た、……。所が新渡戸先生の奥さん即ちマリーさんの實家エルキント氏の所に忠實な女中さんが長らく仕へて居たが、マリーさんが日本に来てからいくらかの金を残して亡くなつた、その女中さんが亡くなる時の遺言にその金をマリーさんに上げてくれとの事だつたので日本に送つて來た、これが基となつて此の學校はたてられたのである、即ち遠友とは外國の遠い友の意ださうだ。」

（1943年（昭和18年）1月20日、北海道帝國大學惠迪寮第2回寮史編纂委員會編・同教養幹事発行、惠迪増刊『惠迪寮小史（全177ページ）』p.169～175掲載の記事「宮部先生訪問記」のp.174から引用した。「後記のことども」によると、この本は宮部に校閲を依頼し、種々訂正してもらつたとある）

○2019年（令和元年）11月6日発行のメールマガジン『CHRISTIAN TODAY』のコラム伝記小説「太平洋の橋—新渡戸稻造の生涯（5）遠友夜学校」に次の1文がある。「『見も知らない者たちが、ここで出会って友達になり、共に手を携えて勉強する——それがこの学校だ』。新渡戸はこう言ってこの学校に「遠友夜学校」という名をつけた。天国に行ったわが子遠益にもあやかつたつもりだった」（コラムニスト：栗栖ひろみ）。以後、ここで使われた「見も知らない……この学校だ」のフレーズが、しばしば引用されるようになったと思われる。（原典未確認）

○校名の命名についての論稿は多数あるが、三島徳三（北海道大学名誉教授）の論稿や著書が適例である。（⇒2020年（令和2年）4月24日発行の『新渡戸稻造のまなざし』）

○新渡戸が「遠友」の命名になぞらえた「有朋自遠方來、不亦樂乎」の句だが、加藤秀俊は論文「新渡戸稻造と大学開放」のp.7で、次のように指摘をしている。「ここにあるのもまた新渡戸の平民主義、あるいは徹底した平等主義というものであろう。彼にとって、教師も生徒も『友』であり、知識人と素朴な学習者も『友』であ

った。『気の合う人に会うこと』これが『遠友』という人間の絆の本質なのである」
(⇒1990年(平成2年)3月31日)

○このころ夜学校の状態について、1896年(明治29年)1月12日、新渡戸は夫人の弟ジョセフ・エルキントンへ書簡をしたため、夜学校は恵のある仕事で、出席者70人ほど、3つの教室は歩く隙間もないほどだと記している。(⇒2013年(平成25年)10月発行『新渡戸稲造事典』p.420)

○学校名「遠友夜学校」は、1923年(大正12年)8月に「財団法人札幌遠友夜学校」と改称された。以降は1944年(昭和19年)に閉校するまで同一名であった。

◎1896年(明治29年)7月5日、新渡戸稲造・新渡戸まり子(共著)は、雑誌『太陽』(博文館)の第2巻14号p.225~228に「家庭／小児預所」を寄稿した。

○広く社会事業に関心をもつ新渡戸稲造夫妻は、海外の保育施設の例を紹介し、日本にも多数の「小児預所」(現在の「保育所」)が作られることを願って、設立の方法や資金繰りまで具体的な提言をした。(札幌時代の夫婦共著の貴重な文献で、大宅文庫の索引「保育施設」の中では一番古い記事として記されている)

◎1897年(明治30年)4月、篤志家・喜多島慶次郎の寄付で増築し、文部省小学校令に準じた校舎となった。ただし、正規には社会事業施設の1つであった。

○遠友夜学校の校舎が手狭になったのを見て、支援者の1人・喜多島が校舎に隣接していた家屋を買い上げ、24坪を校舎真横につなげて寄付してくれた。学校としての形が整ってきた。

○このころ(結成時期も発起人も異説があるのであるが)、新渡戸夫妻は、学校の運営基盤をより確かなものにするために、有志と相談して、篤志家を会員とする「遠友夜學會(遠友夜学校の資金的後援会)」(後に通称「遠友會」とされた)をつくり、夜学校の維持運営費を会員の拠出金や一般からの寄付金によってまかなえるようにした。

○本格的夜学校化に伴い、貧困家庭を巡回訪問して行うセツルメント隣保事業は廃

止された。(札幌基督教會が独自に行う慈善事業になった)

○任意組織の各種学校であり、指導する教師が正規の有資格者ではない(校長の新渡戸をはじめ教師役が訓導等の教員免許を持っていなかった。独自の教師像を描いていたので、あえて公的資格を得ようとはしなかった)などのため、正式な公的私立学校とは認められず、卒業しても(修業証書を得ても)公的学校の卒業生と同一とはみなされなかった。つまり、無資格者扱いにされた。これはむしろ承知のうえで、次に示すように、他に見られない独特な特色を持つ学校であった。後に、1923年(大正12年)6月25日に財團法人化し、「財團法人札幌遠友夜學校」となるが、その精神は開校時から一貫していた。

○その財團の規定では、「目的」を「本財團ハ貧兒並ニ晩學者ニ無月謝ニテ普通教育ヲ授クルヲ以テ目的トス」とされた。慈愛と友情の精神で、貧困や仕事、家庭の事情などのため、学校に通うことのできない子供たちに、学ぶ意欲を持ちながら、昼間は学校に通えない若者たちに、子供の時、学校教育を受ける機会を逸した大人たちに、無料で普通教育を提供する夜學校を開くとした。

○その財團の規定では、「教師」は「本校ノ教師ハ重ニ北海道帝國大學學生、生徒中ノ有志及ビ月次會ニテ適當ト認メタル篤志家ヲ以テ之ニ充ツ」とされた。「月次會」とは校内の校務執行の最高総合組織で月1回開かれる会議のことである。まず、教師は「主に大学生、生徒の中の有志、篤志家」と規定したのである。その意味するところは、新渡戸は一言で「遠友になれる人」と言ったが、開校時から一貫して、人間愛に富み、情熱を持ち、無給(無報酬)奉仕で教育にあたる者が教師役を務める学校だ、ということである。(ただし、開校時から完全な無報酬奉仕のボランティア活動であったか、というとそうではなかった。⇒1898年～1899年(明治31年～32年)の「新渡戸稻造校長宛て中江汪報告書」、1964年(昭和39年)6月10日、1966年(昭和41年)7月15日、2010年(平成22年)3月19日)

○教育目標は、社会の中で自律的に生きていくうえで必要な実学を身に着けることに置かれた。つまり、①読み・書き・話す・数えるという基礎的能力の習熟、②看護法・裁縫などの日常生活を送るうえでの生活術の習得、③自立・協調・礼儀・忍

耐などの強い精神力の育成とした。(のちに、一言で「学問より実行」と表現されるようになった)

○教師役の「遠友になれる人」の意味について、約100年後に書かれた工藤慶一(札幌遠友塾自主夜間中学スタッフ)の文章に、受講生Kさんの体験発表を引用しながら、次のような言葉が出てくる。『『覚えられない自分が情けなくて、自宅の窓から見える藻岩山に向かって、何度も涙を流しました。スタッフのYさんに辞めようかと相談もしました。「もう少し頑張る」と励まされて、気を取り直しました。』とある。めげようとする受講生がやめないよう、必死になって支えることが、スタッフの第1の役割であることが続いたため、いつしか私たちは『教える』のではなく『ともに生き、ともに学ぶ』のだという思いを持つようになってきた。『遠友になれる人』とは、こういうことなのかと得心できたのである」(⇨2022年(令和4年)8月、工藤慶一の論文のp.196から)

◎1897年(明治30年)4月、文部省小學校令第14号小學校令施行規則に準じて、4年制の「尋常科」と4年制の「高等科」を置き、純然とした夜学校になった。

○尋常科・高等科の2科では、月曜日から金曜日まで毎夜6時半～9時15分(授業は約2時間)、それぞれ規則に基づく教科の授業が設けられた。女子生徒には、土曜日の午後1時から編物指導も行われた。日曜日の昼間にも学校は開かれ、修身講話と唱歌があった。この2教科の実施はかなり後年まで続けられたが、これが平日授業に組み込まれてからは、生徒の自主的な修養会(倫古龍會、董會など)や遠足等の学校行事の実施日になった。このように、年中無休に近い教育活動の豊富さが遠友夜学校の特色の1つになっていく。

○最初は、昼間は普通小学校に通い、夜には夜学校に来る者も受け入れていたが、教授上、管理上の理由で、普通小学校在籍者は一切入学を認めないことにした。

○以下に、変革の経過を一括して述べておく。

○1899年(明治32年)6月、第1回卒業生(尋常科不詳、高等科男子1人)を送り出した。

○1900年(明治33年)4月、小學校令の改正に伴って、教科数を尋常科は5教科に、高等科は8教科に増やした。

○1908年(明治41年)4月、新小學校施行規則に準じ、高等科1・2年を尋常科5・6年に改称した。

○1910年(明治43年)4月、校舎の増改築に伴い、学級編成を改組し、①尋常科1・2年、②尋常科3・4年、③尋常科5・6年、④高等科1・2年の4学級編成とした。1学級に担任教師2人を置くことにした。

○1916年(大正5年)4月、私立学校の認可に伴い、尋常科を「予科」、高等科を「本科」と改称した。

○1921年(大正10年)4月、校舎増築に伴い、予科・本科を廃止し、「初等部」(尋常科6年)と「中等部」(普通科3年、補習科1年)を設けた。

○1923年(大正12年)4月、「初等部高等科」(2年)を設置し、「中等部補習科」を廃止した。

○1926年4月、「初等部高等科」を廃止し、中等部3年を4年に延長した。以降、1944年(昭和19年)3月閉校まで、「初等部」6年、「中等部」4年の学年編成が続いた。

◎1897年(明治30年)10月2日、35歳の初代校長・新渡戸稲造は、多忙・過労から体調を崩し、校長職在任のまま、神経症療養のため夫人と共に札幌を離れた。

○夜学校創設から3年9か月後、新渡戸35歳1か月の時であった。

○本業など日常的な多忙に加えて、1897年(明治30年)5月31日、札幌農学校の校長不在のため新渡戸は校長代理になった。この在任中に、6月13日、農学校裏で発生した火災で寄宿舎生と警官とが乱闘を起こしたり、寄宿舎内で飲酒をした事件が発生したりして、病気がちの上に心労が重なった。

○新渡戸の静養先は、最初は神奈川県鎌倉の所有別荘、次は翌1898年(明治31年)1月13日から5月末まで静岡県沼津の旅館、その後はアメリカへ向かうまで群馬県群馬郡の伊香保温泉(現・渋川市伊香保町)の旅館であった。この滞在時に新渡戸

は、札幌農学校卒業生の小谷武治に筆記させて、口述で『農業発達史』と『農業本論』を著した。（『農業発達史』は1898年（明治31年）8月大日本實業學會から発行し、『農業本論』は同年9月2日裳華房から出版した）

○新渡戸は、北海道庁技師も札幌農学校教授職も、はじめ休職としていたが、療養が長引いたため、北海道庁は1898年（明治31年）3月7日で、札幌農学校は同年3月8日で教授職を退いた（完全な依願退職は同年8月23日）。まだ35歳であった。1891年（明治24年）3月末からの札幌農学校教授時代は7年間で終わった。

○1898年（明治31年）7月27日に横浜を発ち、新渡戸夫妻はカナダ経由でアメリカに行き、10月下旬からカリフォルニア州南部のモンレーのリゾートホテルで気分が安らかになるよう療養生活に入った。ここに滞在中、稲造は、友人のアナ・C・ハーツホーンの口述筆記の協力を得て、著名な英文著書“Bushido, The Soul of Japan”（武士道：日本の魂）を書き、アメリカのフィラデルフィアで最初のものを出版した（2004年（平成16年）7月1日刊行の日外アソシエーツ『20世紀日本人名事典』項目「新渡戸まり子」によると、夫人との対話から生まれたものであるとされる。常日ごろ、萬里子夫人からも日本の風習や思想についてしばしば質問されていたので、これらの疑問に対して、稲造は自分の知識や経験で答えてみようを試みたのであった）。発行年月日については混乱があるようなので、改めてとりあげる。（⇒1900年（明治33年）1月）

○1899年（明治32年）3月27日、新渡戸は、モンレーで療養生活を送っていた時、東京帝國大學評議會の推薦で、佐藤昌介とともに日本初の農學博士となった。

○1933年（昭和8年）10月15日、71歳時、旅先のカナダで死亡するまで、新渡戸は遠友夜学校の校長職に約39年間（不在期間約36年間）就いていたが、この間に実際に来校したのは、1909年（明治42年）6月15日（46歳時、離札約12年後）と1931年（昭和6年）5月18日（68歳時、離札約33年後）の2回だけだった。

◎1897年（明治30年）10月、新渡戸稲造校長は、離札後の実質的な経営・運営責任を札幌農学校の親友・同僚の宮部金吾（札幌農学校教授）に託した。

○新渡戸の依頼を受けて、宮部らは、新渡戸に代わって遠友夜学校の校務を取り仕切る校長代理または経営・運営責任者代行として「代表」職を設け、初代代表に宮部が就いた。(文献資料の中には、静養らよる新渡戸の長期離札が契機となったのではなく、新渡戸校長が札幌にいないことが多かったので、ボランティア教師の中から「代表」を決め、実際の夜学校運営を託していた、とみる見解もある)

○1985年(昭和60年)9月発行『新渡戸稲造(さっぽろ文庫34)』p.158などは、「代表者」の表現を使い、歴代代表者を整理している。これでは新渡戸が初代表とされている。そして宮部には、別に「監督」の肩書が括弧付きで加えられている。つまり、宮部はお目付け役であった。(少なくとも宮部代表時代の留守居=新渡戸の指示を受けていた実務責任者は、若手の札幌基督教会会員の中江汪らであったことがわかっている)

○宮部の正式な代表職就任は1898年(明治31年)1月からとする説が多い。(1923年(大正12年)8月、法人化した時の代表理事は新渡戸稲造であったと判断されるので、実質的に代表が代表理事、すなわち理事長となるのは新渡戸夫妻が死亡した後である)

○宮部は、以降、1951年(昭和26年)3月16日(90歳)に召天するまで、ずっと理事として遠友夜学校に関わり続けるのであるが、遠友夜学校関連の著作物や史料・資料類の中にも、宮部の自伝・伝記や史料・記録の中にも、具体的に関わった話が出てこない。1905年に代表を退いた月日・理由も明らかでないなど、未解明な部分が少ない。形式的に置かれた、精神的支柱としての重鎮的存在だったのではないと思われる。(新渡戸は、当初から実践・実務の役割を中江汪など、札幌基督教会関係者に託していたと判断される)

○代表職は次の7名に順次引き継がれた。代表の期間と札幌基督(独立基督)教会の入会年をあげた。遠友夜学校が創設時から閉校時まで札幌農学校と札幌基督教会に関係した有志によって支えられたことがわかる。

①宮部金吾……1898～1905年(明治31～38年)代表、1882年(明治15年)入会

②大島金太郎…1905～1908年(明治38～41年)代表、1887年(明治20年)入会

③有島武郎……1909～1915年（明治42～大正04年）代表、1901年（明治34年）入会

④^{かきざき}蠣崎知二郎…1915～1919年（大正04～08年）代表、1901年（明治34年）入会

⑤野中時雄……1919～1920年（大正08～09年）代表、1911年（明治44年）入会

⑥小谷武治……1920～1921年（大正09～10年）代表、1897年（明治30年）入会

⑦半澤洵……1921～1944年（大正10～昭和19年）代表、教会未入会（準会員）

○代表職7人の中には、新渡戸が札幌農學校教授時代に教頭として兼任した私立北鳴學校（尋常中学校）の関係者も3人（大島は教師、蠣崎と小谷は生徒であった）いる。

○別格の宮部を除いて、他の「代表」は農學校・北鳴學校・基督教會の関係者であり、新渡戸から薫陶・感化を受けたつながりの濃い後輩などである。彼らもまた、新渡戸夫妻の心を源流とする人間教育を実践し、教師として奉仕する後輩を指導し、生徒によりよい感化を及ぼす流れを維持し続けたのである。

○「代表」の選出については、「学校運営はボランティア（当時の北海道帝國大學の学生と北大OBで、全員が無給で教育活動に携わっていた）であり、教師をしている中から代表を選出する組織となって運営されていた」とする説明もある。（⇒2013年（平成25年）3月31日。ほかに、2005年（平成17年）5月16日、詳細なブログ「遠友夜学校の歴史をひもとく」を書いた建築家・丸山博男もその1人）

◎1898年（明治31年）1月、宮部金吾（札幌農學校教授）が遠友夜学校の初代代表に就任した。

○1歳半年上で札幌農學校同期の親友であり、勤務先の同僚でもあった宮部は、新渡戸に頼まれて、実質的に1897年（明治30年）10月から代表の任に就いていた。宮部は1905年（明治38年）月日不明（または1904年（明治37年）末）までの7年間務めて、代表を大島金太郎に引き継いだ。

○宮部は、札幌農學校第2期生で1881年（明治14年）卒業、札幌基督教會の1882年（明治15年）入会者であった。

◎1898年（明治31年）2月2日、遠友夜学校の学生教師をしていた札幌農学校生の有島武郎（20歳になる直前）が校歌を作詞した。

○有島は、当時行動を共にしていた農学校同期生の親友・森本厚吉に奨められて校歌を作詞したと言われている。

○作曲者は不明とされている。（アメリカ人作曲家、ジョージ・F・ルートによる「Tramp! Tramp! Tramp!」の原曲または編曲が採用された、とも言われている）

○1900年（明治33年）6月28日挙行の開校5周年記念祝賀会で披露され、1910年（明治43年）に校歌として正式に採用された、とされる。（祝賀会で校歌として披露された、とも言われている）

○校歌の歌詞は9番までであるが、通例は1・5・9番が歌われていた。

- 1 沢なすこの世の楽しみの 楽しき極みは何なるぞ
北斗を支ふる富を得て 黄金を数へん其時か
オー 否 否 否 楽しき極みはなほあらん。
- 2 剣はきらめき弾はとび かばねは山なし血は流る
戦のちまたのいさほしを 我身にあつめし其時か
オー 否 否 否 楽しき極みはなほあらん。
- 3 黄金をちりばめ玉をしく 高どのうてなはまばゆきに
のぼりて貴き位やま 世にうらやまれん其時か
オー 否 否 否 楽しき極みはなほあらん。
- 4 楽しき極みはくれはどり あやめもたへなる衣手か
やしほ味よきうま酒か 柱ふとしき家くらか
オー 否 否 否 楽しき極みはなほあらん。
- 5 正義と善とに身をささげ 欲をば捨てて一すぢに
行くべき路を勇ましく 真心のままに進みなば
アー 是れ 是れ 是れ 是こそ楽しき極みなれ。
- 6 日毎の業にいそしみて 心にさそふる雲もなく

昔の聖 今の大人うし 友とぞなしていそしまば

アー 是れ 是れ 是れ 是れこそ楽しき極みなれ。

7 楽しからずや天の原 そら照る星のさやけさに

月の光の貴さに 心をさらすその時の

アー 是れ 是れ 是れ 是れこそ楽しき極みなれ。

8 そしらばそしれつづれせし 衣をきるともゆがみせし

家にすむとも心根の 天にも地にも恥ぢざれば

アー 是れ 是れ 是れ 是こそ楽しき 極みなれ。

9 衣もやがて破るべし 忍ひぬる程もつかの間よ

朽ちせでやまじ家倉も 唯我心かはらめや

アー 是れ 是れ 是れ 是れこそ楽しき極みなれ。

○遠友夜学校には、「校歌」のほかには有島武郎作詞とされる「奨励歌」（歌曲は讚美歌の285番と同じ？）と「卒業式の歌」（作詞・作曲は不明。「蛍の光」と同類。酷似歌詞は他校にもある）などもあった。

○夜学校と有島武郎の関係は深く、遠友夜学校に及ぼした有島の影響は実に大きい。新渡戸稲造の養父・太田時敏が有島武郎の親・武と幸子の媒酌人をしたことなどもあって、以前から新渡戸と有島は親しい間柄にあった。有島は1896年（明治29年）9月、学習院中等科卒業後、新渡戸を慕い札幌農学校予科5年に編入学し、新渡戸家に寄寓しながら学校に通った。1897年（明治30年）9月本科に進学してすぐ、新渡戸が病気で転地療養をしたため、夫妻は不在となる。しかし、新渡戸の家に置いてもらって書生として働き、学費の面倒をみてもらっていた中江汪、木村徳蔵、三吉朋十らが引き続き留守宅を護って住み続けたので、有島も彼らと一緒に、そのまま新渡戸教授の官舎に居候させてもらった。（有り得ないような話だが、新渡戸が退職し引っ越した後も、引き続き官舎に住み続けることが許されたので、有島もそこから農学校に通い、遠友夜学校の世話役や教師も務め、結局、卒業までそこにいたとされる。考えようによっては、新渡戸本人もそう希望していたとされるが、新渡戸の病気回復を待って、札幌農学校の前職に復帰することが熱望されていたので、

その時のために官舎を保持する措置がとられていたとも推測される)

○遠友夜学校の校歌をつくった時、有島はまだ農学校本科の1年生であった。校歌歌詞5番にあるように、有島は、当時の風潮であった立身出世や私利私欲の充足ではなく、知識、正義、社会への奉仕、人格の完成を人生の目標とすることの尊さを夜学校の生徒たちに教えた。これは、日ごろ新渡戸が「人生の目的は地位や名声を得ることではなく、心豊かな人間として完成することにある」と語っていた精神を継承し、積極的に伝えるものであった。

○有島は、札幌農学校を1901年(明治34年)8月に卒業し、アメリカの大学へ留学もするが、帰国後は東北帝國大學農科大學(札幌農学校の後身)の教師となり、再び遠友夜学校にかかわりを持ち、生徒たちに感銘を与え、代表も務め、大きな功績を残すことになる。(⇒1909年(明治42年)1月)

○校歌については、1900年(明治33年)12月に高等科を卒業生した倉田藤吉は次のような思い出を文集に寄せている。「……私は常日頃満足に思つておることは、遠友夜学校に学んだことを名譽と心得ておることである。……その外に、あの遠友夜学校々歌の精神であります。『沢なすこの世の楽しみ、楽しき極みは何なるぞ、北斗を支ふる富を得て、黄金を数へん其時か』と歌いながら、オー否否と否定して二節三節と移って行く。それにしたがって私は何か胸にこみあげてきて、涙声になつて咽喉がかすれてゆくのですが、更に進んで『正義と善とに身をさゝさげ、慾をば捨てゝ一すぢに、行くべき路を勇ましく、真心のままに進みなば』と歌ふにおよんで、気も晴ればれと元気付けられるのです。あの校歌の精神が私どもの心の内にすっかり刻み付けられ、強く正しく生き抜く信念を堅持し得たことと思います。私が遠友夜学校に学び得たことは私の人生の最も大きな誇であると信じます」(長文の一部抜粋。1964年(昭和39年)6月発行『札幌遠友夜学校』p.67から。転載再収録は、1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.189)

◎1898年(明治31年)～1899年(明治32年)に書いたと思われる文書資料「新渡戸稲造校長宛て中江汪報告書」2通が北海道大学大学文書館に所蔵されている。

○新渡戸が静養のため札幌を離れたあとの、遠友夜學校の留守居役を託された中江が、同校の状況を滞米中の新渡戸に書き送った報告と意見と思われる。

○1964年（昭和39年）6月刊行『札幌遠友夜学校』の附録「札幌遠友夜学校沿革」の「創草時代」の記述に、一部として史実の扱いでこれが差し込まれている（p.46～50）。

○遠友夜學校の草創期の実態を物語る記録として興味深い。以下にいくつかをあげてみる。

「本校の現状は是を去る28年（1895年、拙者一時教授せし当時）に比すれば著しき進歩を致し居り候」（札幌基督教會の教務主任をしていた中江が、豊平日曜學校時代と同様に、週2回の夜學校になってからも、引き続き実務の中心的役割を果たしていたと判断される）。

「第一、小学校生徒たるものは一切入学を拒絶せし以来、生徒の種類稍一定し、随て教授上管理上便宜少からず候」（最初、昼間尋常小学校に通う児童も受け入れていて、学力差のある者の同時扱いに苦慮し、小学校在籍児を受け入れない措置に踏み切ったと思われる）

「第二、教授課程は小学校の課程に準ぜし以来、教授頗る整頓して参り候。教師も教授に熟練し来り候」（1897年（明治30年）4月以降、教育方法・内容の充実が図られてきた）

「第三、生徒は一般に、その行状と云ひ学芸と云ひ、頗る進歩いたし候。／第四、生徒と学校との関係は親密に相成候」（順調に夜學校の管理・運営が進んでいる様子が語られている）

「併ながら今一段の進歩を計らんには一二改革いたすべき処有之候。／第一、今日の処にては教員多くして教授に於ても管理に於ても統一を欠けるが如く存ぜられ候。俗に云ふ船頭多くして船山に登るが如きものか。／第二、授業時間少なくして必要な学科を授け難く授くる所のものも不十分なる憾み有之候。而して之を救はんには経験ある教師を聘し、之に一切を委託し候が良策と存じ候。／尋常1、2年の生徒は未だ家事の手伝をすべき年齢に之なく候ゆへ、多分昼間も通学し得ることと存

じ候。／さすれば1、2の2学年の生徒は午前若くは午後に通学せしめ、唱歌、遊戯、体操杯をも教授したし候時は、教授上の一進歩と存じ候。／第3学年第4学年の生徒は孰れも昼間通学し難き者と見なし、男女の高等科生徒と共に夜間に教授いたす事とし、正教員1名、助手男1名、女1名を用ひ候はば充分に受持る事と存じ候。／而して正教員には只今拙者がいたし居る事務をも取扱はしむる事とし、学校内に住はしめ、一方には番人の俸給を省き、一方には教育をして家賃を免れ候はば、一挙兩得とも云ふべきのみならず、生徒と教員の関係は漸く親密になり申べくと存じ候。／今正教員の俸給を（貳拾円なれば充分なれと儉約して）18円とし、2名の助手に各4円の手当を給するとして、今日俸給に支出する金額を以て不足之なく候と存じ候。／今日農學校生徒を用ひ居り候も、中には教授に拙なき者も之あり候ため其成績思はしからず、されば貧窮なる学生を補助すると云ふ事は別問題とし、遠友夜學校をして真に其目的をなさしめんには、愚案の如く改革致し候方良策かと存じ候儘申上候。／……」

この思い切った大胆な中江の合理化改革案に、新渡戸がどう答えたか、宮部代表がどう対応したかの記録は公表されていない。しかし、その後の夜學校の経営・運営にほとんど変化がなかったと判断されることから、この提案は、新渡戸の考えとは合わないものとして実施されなかったと思われる。（もしかすると、中江は、これを機会に夜學校の運営から身を引いたか、経営陣の意向で外されたのではないかと推測される）

○この「中江汪報告書」の一部には、遠友夜學校の「明治31年経費支出」の記録も添えられており、総支出609円強に対して、「教師報酬236円」「留守居報酬12円」だったとある。苦学生の学費補助の名目でもあった両経費の合算は総支出の40.7%を占めていた。創設以来、しばらくの間は、ボランティア（無給の奉仕）精神で、農學校や帝國大學の学生が夜學校の教師役を務めるという考え方は建前で、1904年（明治37年）にはまだ報酬が支払われていたとされる記録が残っている。

◎1899年（明治32年）6月、遠友夜學校は、第1回の卒業生（尋常科不詳、高等

科男子1人)を送り出した。

○在校生数に比べて卒業生の少なさは、修業年数が各4年制とはなっていない、長期間在籍する者が少なく、学力差が大きく、中途入学・退学が多く、学級編成や学年認定が困難だったことを物語る。(なお、この年の北海道の学齢児童の就学率は、男子が63%、女子が40%で、5年前より数ポイント上がっている)

◎1900年(明治33年)1月初旬、新渡戸稲造は“Bushido, The Soul of Japan” (英文著作『武士道：日本の魂』)を著し、アメリカで初版を出版した。

○1898年(明治31年)7月、稲造の病氣療養のため、新渡戸夫妻はアメリカ合衆国に渡り、カリフォルニア州南部のモンレーで療養生活を送っていた。同書の初版は、この滞在先で1899年(明治32年)に書かれて、1900年(明治33年)1月初旬に出版された。小出版社ビドル社から発行の全133ページの小型本だった。(月日は不詳だが、1900年(明治33年)のうちに、東京・裳華房がアメリカで出版されたものを複製し、日本でも出版した)

○この小書が新渡戸の生涯を決定づけるものとなる。「太平洋の橋」の具体的実現の1つであったからである。

○この英文『武士道』について、新渡戸の著作権登録は1899年(明治32年)であり、初版の著者「序」の末尾記載の年月も「1899年(明治32年)12月」とあるが、フィラデルフィアの出版社(The Leeds and Biddle Company)は出版(刊行、発行)の年月日も、販売(出荷、販売所配本)の年月日も明記しなかった。そのために、のちに日本で出版年月を記して紹介される際に1899年(明治32年)や1900年(明治33年)などの説が併存することになり、長い間混乱を招いた。

○このことについて、学術的調査研究の結果が2008年(平成20年)に報告された。中島正道・佐藤奨平・中島めぐみによる研究発表である(論文題名「新渡戸稲造『武士道』の書誌事項をめぐる混乱について」、掲載誌『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集/2008年度』p.73~76、2008年(平成20年)9月27日発表)。

○混乱の原因と経緯については、次のようである。①1905(明治38年)4月、新渡

戸自身が英文『武士道』を明治天皇に献上する際に書いた「上英文武士道論書」内で、著作したのは明治32年としながらも「之を彼國にて印行し、翌年又た我邦にて上梓せり」と出版年が1899年（明治32年）と思わせるくだりがあること、②1938年（昭和13年）10月、矢内原忠雄が『岩波文庫』にこれを訳して納めたとき、1899年（明治32年）とし、タイトルページ裏にも1899年（明治32年）と書いたことから、以後、多くの他社発行の本でもこれにならい出版年が誤って紹介される元となった（⇒2013年（平成25年）10月発行『新渡戸稲造事典』p.57～58）。

○混乱の解決法として、中島正道らは「とりあえず、矢内原忠雄没後50年（2011年）までに、岩波文庫（青118-1）『武士道』の関係部分の訂正がなされることを希望したい。そのような希望が満たされるならば、他の出版社等の対応は容易に実現できるであろう」とした。（しかし、1974年（昭和49年）9月改版以降、岩波文庫『武士道』の改版はなされていない）

○1905年（明治38年）1月、これに新渡戸稲造自身がほとんど全面的に手を入れ、約20%の増ページ行い、内容を一新した全203ページハードカバーの増訂第10版を出した。以後の翻訳はすべてこれを原書にしている。

○日本語訳『武士道』の初版は1908年（明治41年）3月25日、丁未出版社から出版された。（⇒1908年（明治41年）3月25日）

◎**1900年（明治33年）4月、文部省小學校令の改正に伴って、教科数を増やし、遠友夜学校の「尋常科」には5教科、「高等科」には8教科を設けた。**

○「尋常科」には読書・作文・習字・算術・唱歌の5教科を、「高等科」には、読書・作文・習字・算術・地理・歴史・理科・唱歌の8教科を設けた。

◎**1905年（明治38年）月日不明、大島金太郎（札幌農学校助教授）が遠友夜学校の第2代代表に就任した。**

○宮部金吾に次いで、大島は1908年（明治41年）12月末日までの4年間代表を務めた。

○大島は、札幌農学校第11期生で、新渡戸の家に世話になりながら通学し、1893年（明治26年）に卒業した。札幌基督教會の1887年（明治20年）入会者であった。札幌農学校を卒業後、北鳴學校の教諭として閉校まで勤め、遠友夜學校も手伝い、1898年（明治31年）には欧米に留学した。1903年（明治36年）に帰国後、札幌農学校の助教授となり、翌年から北海道庁技師も兼ねながら、1905年（明治38年）に宮部から遠友夜學校代表を託されて、学校運営にも尽力した。1907年（明治40年）、論文提出で農学博士の学位を得て、同年、札幌農学校が東北帝國大學農科大學に改称され、東北帝國大學教授となる。

◎1906年（明治39年）1月、遠友夜學校の高学年女生徒の修身会の文芸部「羊會」が中心となり、回覧雑誌『文の園』の発行を始めた。（推測）

○このころ既に、修身会の高学年男生徒の会は「倫古龍會」と名づけられ、高学年女生徒の会は「董會」（すみれかい）と名づけられていた。（董會は1900年（明治33年）に発足の説もある）

○董會の文芸部「羊會（ひつじ會）」が中心になって、手書き文集・回覧雑誌『文の園』（ふみのその）の発行を始めた。月1、2回程度のペースで続け、厚表紙を付け、続号を後ろに加えて綴り、回し読みをする形式で、名称を『文ノ園』『文之園』『ふみのその』ともされながら1910年（明治43年）5月までの発行は49号に達した。

○1910年（明治43年）6月25日発行の第50号から董會発行となり、名称も『文の園』と統一された。1934年（昭和9年）3月まで続いた。（閉校時まで続き、130号にまで達したとの記述もある）

○遠友夜學校の生徒に対して、教師として、また代表として、有島武郎は大きな影響を及ぼしたものと判断される。

○これに刺激されて、時期は後になるが、「倫古龍會」は冊子文集『遠友魂』などを、低学年の修身會「小羊會」は文集『小羊』『ポプラ』などを発行し始めた。これらの実物はほとんど残っていない。

◎1908年（明治41年）3月25日、新渡戸稲造の代表作・英文著作“Bushido, The Soul of Japan”が日本語に翻訳され、『武士道』の書名で出版された。

○最初の日本語訳『武士道』は、櫻井鷗村（本名：櫻井彦一郎。翻訳家、児童文学者、教育者、実業家）によって翻訳され、東京・丁未出版社から発行された。17章構成、本文全254ページ。（翻訳者名は、表紙では櫻井鷗村、奥付では櫻井彦一郎となっている）

○当初、新渡戸が武士道を欧米で紹介しようと意図したため、原作は英文で著され、1900年（明治33年）1月にアメリカのフィラデルフィアで出版されていた。（英文原作の初版発行日については、櫻井の訳書には記載がなく、一般的に1899年（明治32年）12月と1900年（明治33年）1月の2説が併存しているが、後者が正しい。
⇒1900年（明治33年）1月）

○日本人が暮らしの中で、何を尊厳の根拠とし、何を恥じるべきものとしてきたかを世界に示した最初の書物であった。日本人の道德観の核心となっている「武士道」について、西欧の哲学（騎士道）と対比しながら、日本人の心の拠り所を世界に向けて解説した。

○武士道は「死を人の道の最高のもの」と考えられてきた感があるが、新渡戸はこの書の中で、そうではないとした。昔の武士たちは「死」を常に意識することによって、今を精一杯、力の限り生きた。その生き方こそが素晴らしいものであり、武士道とは決して死に急ぐ考えではないことを強調した。

○新渡戸は同時に、世界の道德と日本の武士道とを照らし合わせ、東西文化の違いを超えて共通する美しい心があることを、世界に知らせようとしたのである。

○新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳『武士道』岩波書店（岩波文庫版）の初版刊行は1938年（昭和13年）10月15日、矢内原伊作捕訳の改版刊行は1974年（昭和49年）11月18日である。

◎1908年（明治41年）4月、新小學校施行規則に準じ、遠友夜學校は高等科1・2年を尋常科5・6年に改称した。（⇒1897年（明治30年）4月）

◎1909年（明治42年）1月、有島武郎（東北帝國大學農科大學予科教授）が遠友夜学校の第3代代表に就任した（就任は同年12月だったという説もある）。

○大島金太郎に次いで就任した有島は、東北帝國大學農科大學を辞め、札幌から去る1915年（大正4年）3月まで6年2か月間（実質的に、妻・安子の肺結核療養のため、一家が鎌倉に転居した1914年（大正3年）11月まで5年10か月とみなす説も多い）代表を務めた。新渡戸稲造宅に寄留していた札幌農學校在学時から学生教師を務め、校歌・奨励歌の作詞者でもあり、カリスマ的指導者として常に遠友夜學校生徒たちの憧れの人であった。（既に小説家・評論家として活躍していた）

○有島武郎は代表として多大な貢献をしている。特筆すべき功績は、彼の人格からにじみ出すところの生徒への精神的感化であり、旧校舎増改築による高等科の設置であり、公的助成金・奨励金の恒常的獲得の確立であった。

○札幌農學校第19期生1901年（明治34年）卒業、札幌独立基督教會の1901年（明治34年）入会者であった。

○「東北帝國大學農科大學」は、「札幌農學校」の後身、「北海道帝國大學」の前身にあたり、1907年（明治40年）～1918年（大正7年）に存在した。

○有島が遠友夜学校の充実・発展に尽くした功績は並々ならぬものがあり、その過程は山田昭夫（藤女子大学助教授）の論考「有島武郎と札幌遠友夜学校—新資料による雑考—」に詳しい。（⇒1960年（昭和35年）2月）

○神谷忠孝（北海道大学教授）は、次のように述べている。「1909年（明治42年）1月足助素一あすけそいちに懇望されて代表になった有島は、多額の自費を投ずるかたちで1910年（明治43年）に旧校舎を改修増築して高等科を設置した。1911年（明治44年）以降には北海道庁と内務省から毎年のように助成金、奨励金をもらえるようにして夜学校の運営を軌道にのせた。……東京に去ってから財政的援助を続けた」。（⇒1992年（平成4年）6月24日『農学校物語（さつぽろ文庫61）』p.113）

◎1909年（明治42年）6月8日、新渡戸稲造校長が萬里子夫人同伴で来札し、遠

友夜學校にも6月15日来校した（離札後來校1回目）。

○この時は、稲造は46歳で、旧制第一高等学校長兼東京帝國大學教授の時代であった。稲造は6月23日に、夫人は7月7日に帰京した。

○遠友夜学校には、6月15日（1897年（明治30年）10月2日に離札して約12年後）に来校し、有島武郎代表の案内で校舎・校庭を視察した校長夫妻は感慨も深く、校舎の建物が限界にきていて、改築の急務なことを共感した。この年の秋の校舎増改築は、これを機に急展開で進行した。

○この日、稲造の講演会と夫妻の歓迎会（夜）が開催されたが、その状況の詳しい記録は残っていない。（1985年（昭和60年）9月28日発行の『新渡戸稲造（さっぽろ文庫34）』p.165には、「……6月8日にそろって夜学校を訪れ、時の有島代表の案内で校内外をみて回り、往時を感慨深く回想した。……翌年末に増改築を完成した。15日夜には盛大な歓迎会、昔の教え子たちも多数集まって、博士の講演に魅了された。……」とある）

◎1909年（明治42年）12月28日、新渡戸校長夫妻の来札を機に、校長の高額寄付を基に同年秋に着工した遠友夜学校の校舎の増改築は、翌年春に完成した。

○校舎の増改築に伴い、教室4室、収容人数120人となった。

○1910年（明治43年）4月、校舎の増改築に伴い、学級編成を改組し、①尋常科1・2年、②尋常科3・4年、③尋常科5・6年、④高等科1・2年の4学級編成とした。1学級に担任教師2人を置くことにした。

◎1914年（大正3年）1月1日、有島武郎（作家、遠友夜学校代表）は同人誌『白樺』に、教え子を主人公のモデルにした中編小説「お末の死」を掲載した。

○『白樺』は1910年（明治43年）創刊の月刊誌で、当作品の初出は第5巻第1号（第五年正月号）p.308～344である。

○有島が35歳時、東北帝國大學農科大學（札幌農學校の後身、北海道大学の前身）教授時代に執筆した作品で、当時、札幌の貧民街となっていた豊平川河畔に設立さ

れた遠友夜学校の代表もしていた（ボランティア教師を続けていた）際の教え子の1人をモデルとし、明治中期以降の札幌の貧困層を描いた作品として資料価値があるとされる。

○モデルとされたという瀬川末は、家庭の事情から若くして働くことを余儀なくされ、運命に翻弄されたあげく、1913年（大正2年）に自殺した遠友夜学校の女子生徒であった。

○最初的全集収録は、1917年（大正6年）10月18日新潮社発行『有島武郎著作集／第1輯／死』p.1～40であった。

◎1915年（大正4年）4月、^{かみざき}蠣崎知二郎（北海道庁技師）が遠友夜学校の第4代代表に就任した。（実際は1914年（大正3年）11月からとする説が多い）

○有島武郎に次いで、蠣崎は1919年（大正8年）7月まで4年3か月（または4年8か月）間代表を務めた。同年5月に北海道庁立空知農業学校（3年制、現・北海道岩見沢農業高校）の校長に就任したため辞任した。（名前については、同校の名簿や他の本人署名記事の中にも「蠣崎知次郎」としたものもある）

○蠣崎は、北鳴学校の卒業生で、札幌農学校第19期生・1901年（明治34年）卒業でもあった。新渡戸稲造に感化を受け、遠友夜学校の教師を務めた。札幌独立基督教會の1901年（明治34年）入会者であった。

○中学校教諭、北海道庁技師、台湾総督府技師などを経て、1907年（明治40年）に札幌に戻り、北海道庁技師となった。この間に第4代代表を務めた。

◎1915年（大正4年）12月1日、加茂正次（大阪府師範学校々友會員）は、月刊教育雑誌『教材研究』に論文「教育界の畸形兒遠友夜学校」を載せた。

○同題の論文は、3回に分けて、同誌の①1915年（大正4年）12月1日発行13巻12号p.64～66、②1916年（大正5年）1月1日発行14巻1号p.61～63、③1916年（大正5年）2月1日発行14巻2号p.66～67に掲載された。

○大阪府師範学校は現・大阪教育大学の前身に位置づけられる。

○雑誌『教材研究』は、当時の「大阪府師範学校々友會」が編集・発行していたものである。これは、1903年（明治36年）1月1日創刊の教育雑誌『初等教育教材研究』（大阪府師範学校教材研究会編纂、大阪・寶文館発行）を指していると思われる。

○大阪教育大学附属図書館所蔵資料。（国立国会図書館情報、内容未確認文献）

◎1916年（大正5年）3月、遠友夜学校は北海道庁から私立学校の認可を受け、4月から尋常科を「予科」、高等科を「本科」と改称した。

◎1919年（大正8年）7月、野中時雄（北海道農事試験場技師）が遠友夜学校の第5代代表に就任した。

○^{かきざき}蠣崎知二郎に次いで、野中は1920年（大正9年）11月まで1年4か月間代表を務めた。野中は、当時の大日本帝國關東州大連市（現・中国遼寧省大連市）に所在した「満鐵＝南滿洲鐵道株式會社」に転職したため辞任した。

○野中は、東北帝國大學農科大學校（札幌農學校の後身）1917年（大正6年）卒業生で、札幌獨立基督教會の1911年（明治44年）入会者であった。

○太平洋戦争終了後、野中は、1951年（昭和26年）12月～1959年（昭和34年）3月には、兵庫県立兵庫農科大學教授に就任している。

◎1920年（大正9年）11月、小谷武治（北海道帝國大學予科教授）が遠友夜学校の第6代代表に就任した。

○野中時雄の後任者・小谷は1921年（大正10年）6月まで8か月間代表を務めた。

○小谷は、北鳴學校卒業生であり、札幌農學校の第15期生・1897年（明治30年）卒業でもある。札幌獨立基督教會の1897年（明治30年）入会者であった。新渡戸稻造の『農業本論』と『農業發達史』の口述筆記者としても知られる。大阪府師範学校などで教師を勤めた後、1920年（大正9年）には北海道帝國大學予科教授になり、遠友夜学校の代表も務めた。

○短期間で交代した理由は明らかにされていないが、1921年（大正10年）6月に顕

在化した内紛の責任をとって辞任したと推測される。

○1936年（昭和11年）11月発行の『新渡戸博士追憶集』には、「新渡戸先生の札幌時代」を寄稿している。

◎1921年（大正10年）3月、前年秋着工の校舎増築工事は無事に竣工となり、教室10、収容可能数250人となった。4月から初等部・中等部を設置した。

○1921年（大正10年）2月の月次会では論議を重ね、収容人数増に伴う対応策として中等部の新設を直ちに決定した。4月からは、予科・本科を廃止し、「初等部」（尋常科6年）と「中等部」（普通科3年、補習科1年）を設けた。学習到達目標を、初等部は「尋常小学校程度トシ」、中等部は「中学校及女学校ノ初年程度ヲ学習セシメントス」とした。

○中等部は広く募集し、選抜試験を実施した。内部進学者30人に加え、外部から40人を募集したところ、学費無料であったこともあり、志願者115人に入学試験を行う盛況ぶりであった（結果として、学力水準の高い者を新たに多数入学させたために、持ち上がり組との学力差が大きく、また、学力の高い入学者に、4年間で学ぶ学習の内容もレベルも低すぎるとの不満を持たせることにつながった）。

○おそらく遠友夜学校が選抜試験を実施したのは、この年だけだったと思われる。遠友夜学校50年の歴史の中で、入学希望者がピークを迎えた時期であった。

◎1921年（大正10年）6月、遠友夜学校の運営をめぐり、内紛騒動が起こり、離反した学生教師8人と生徒20人が「中等夜学有隣館」を新設した。

○考え方の対立は、小谷武治代表時代、同年4月ころから表面化していたと思われるが、このことについての記録はあまり残されていない。（新渡戸稲造校長をはじめ、長老の宮部金吾、代表の小谷、熱心な指導陣の1人半澤洵らが、内紛をどう考え、どう対応にあたったのか、まったく明らかにされていない）

○5例をあげる。①「この膨張期は又夜学校にとって1つの危機であった。夜学校の経営方針に飽き足らぬものが分裂して、1921年（大正10年）6月有隣夜学校を建

設した」(1953年12月発行『北海道社会福祉』1巻2号p.29。高倉新一郎「遠友夜学校」、②「1921年(大正10年)6月、有隣夜学校ヲ分離ス」(1964年(昭和39年)6月刊行『札幌遠友夜学校』p.53。執筆不詳「札幌遠友夜学校沿革」、③「その春、当時の教師佐藤一雄が、木下三四彦(札幌の弁護士)らの後援をえて、有隣夜学校を新設し、遠友夜学校から離れた。その間の事情等詳らかにしえないが、同調者は少なく影響されるところはほとんど無かった」(1981年(昭和56年)9月発行『札幌遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.60。須田政美「遠友夜学校の歩み」、④「……遠友夜学校が分裂した。これは中等部開設直後の5月、運営を巡って『忌むべき内紛』が生じたため、佐藤一雄(北大農学部学生)ら教師8名と生徒20名が同校を去り、別に中等夜学有隣館を開設した」(2003年(平成15年)2月発表の三上敦史論文による)、⑤遠友夜学校関係資料を2014年(平成26年)7月から保存している北海道大学大学文書館作成の「遠友夜学校沿革略年表」には、「1921年(大正10年)6月、有隣夜学校が独立し学校組織が分裂」とある。

○対立・離反(内紛・分裂)の起因については不詳とされている。以後、何度も転載・引用されている前掲の文献①で、高倉は遠友夜学校の経営方針に飽き足らない者が分裂したと述べているが、③には、続きの記述で「佐藤は遠友のキリスト教的ふんい気にあきたらず有隣夜学校を創設した」旨の書翰(当時、遠友の教師・元山春雄からのもの)が紹介されている。1984年(昭和59年)7月発行の『明日への架け橋』も、p.34で「キリスト教的雰囲気のない夜学校にあきたらず」としている。一方、『近代日本の夜間中学』(2005年(平成17年)2月発行)など、夜間中学に関する著書・論文をいくつも発表している④の三上は、新設した中等部の教育レベルの在り方(到達目標水準の設定)をめぐる教師間の意見の対立が主因であった可能性を示唆している。

○新設の「中等夜学有隣館」の歴史や教育実践などは三上の著書・論文に詳しい。

○編著者・白佐からの質問を契機に作成された調査結果が、国立国会図書館「レファレンス協同データベース」の「レファレンス事例詳細」に北海道立図書館提供で掲載されている(2023年(令和5年)1月29日更新、検索語「遠友夜学校」で読む

ことができる)

◎1921年（大正10年）6月、半澤洵（北海道帝國大學農学部教授）が、宮部金吾から数えて第7代・最後の遠友夜学校の代表に就任した。

○小谷武治に次いで就任した、札幌農學校第19期生で1901年（明治34年）卒業の半澤は、札幌遠友夜学校の閉校に伴い、1944年（昭和19年）8月の理事会解散でいったん23年間の任務を終わったが、土地の処分ができなかったため、結局、1967年（昭和42年）8月30日に「財団法人札幌遠友夜学校」が正式に解散するまで46年間にわたって代表を務めた。

◎1923年（大正12年）8月20日、遠友夜学校は、財団法人を設立し、名称を「財団法人札幌遠友夜学校」と改めた。

○1923年（大正12年）4月には、中等部補習科を廃止し、「初等部」（尋常科6年、高等科2年）と「中等部」（普通科3年）とした。

○同年5月から財団法人化の申請手続きを進め、6月25日「財団法人設立認可申請書／同許可指令」を提出し、8月1日には文部省北普812号をもって北海道庁から認可された。

○同年8月20日、財団法人設立の登記をし、財団名を「財団法人札幌遠友夜学校」とした。これによって、学校名も「遠友夜学校」から「財団法人札幌遠友夜学校」と改称された。

○『財団法人札幌遠友夜学校寄附行為』をはじめ、『同施行細則』『事務規定』『月次會會則』、及び『財団法人札幌遠友夜学校學則』などが定められた。

○学校の広報年報『遠友夜学校報』の発行を始めた。（1929年（昭和4年）1月、札幌遠友夜学校學期報『遠友』に改められた）

○『財団法人札幌遠友夜学校寄附行為』第1章「目的」の第1條には「本財団八貧兒並ニ晩學者ニ無月謝ニテ普通教育ヲ授クルヲ以テ目的トス」と、また『財団法人札幌遠友夜学校學則』第1章「教師」の第1條には「本校ノ教師八重ニ北海道帝國

大學學生、生徒中ノ有志及ビ月次會ニテ適當ト認メタル篤志家ヲ以テ之ニ充ツ」と明記された。

○財團の資産は「基本金：金500圓、土地：521坪7合、建物：116坪5合、財産總額：金26,028圓」であった。

○第5章「役員」の第10條には「本校ニ左ノ役員ヲ置ク」とし、理事4名、評議員10名と規定した。（第11條には、理事中1名を校長とし、設立者新渡戸稻造をこれに充てる、校長が死亡し欠員となった時は役員會において選任することも既定された）

○初代「理事」には、新渡戸稻造・宮部金吾・半澤洵・三島常盤の4名が就任した。（特に明記されていないが、筆頭理事の新渡戸が初代表理事＝理事長に就いたことになる）

○初代「評議員」には、平塚直治・戸津高知・新島善直・小谷武治・藤田昌・松尾修一・藪惣七・高田栄五郎・小林寿勝・本間庄吉の10名（いずれも札幌農學校卒業生）が就任した。

○役員顔ぶれを見ると、後任者を含めて、札幌農學校（後身の北大を含む）の卒業生でかつ夜學校の教師経験者（特例的に夜學校の卒業生および民間篤志家）で構成された。

（ついでに、補足事項と以後の理事会の動向についてもいくつかふれておく）

○札幌農學校関係者以外で、新渡戸に懇願されて就任した異色の理事・三島は、写真界の先駆者であったが、非常に熱心なクリスチャン慈善事業家（札幌育児園創設など）で、遠友夜學校の創設時から強力な金銭面の支援者であった。1917年からは学校の会計を直接担当し、遠友夜學校の維持・発展、特に後の1929年（昭和4年）には新校舎建築のために財務面で多大な貢献をした人であった。生涯の大半を夜學校に捧げた三島は、1941年（昭和16年）1月10日、86歳で死亡したが、最後まで（約16年間）札幌遠友夜學校の理事を務めた。（三島常盤の孫にあたる北海道大学名誉教授・三島徳三の遠友夜學校関連記述には、たいてい三島常盤のことが詳述されている）

○新渡戸の死亡後の理事は、1人を欠員とし、3人体制であったが、三島の後任には（評議員であった）高倉新一郎を充てた。高倉は1941年（昭和16年）2月に就任した。宮部・半澤・高倉の3人体制のまま閉校に至った。

○1944年（昭和19年）8月には、閉校に伴い、「財団法人札幌遠友夜学校」も解散を議決し、手続きも済ませたが、予定の土地売却が成立しなかったため、やむを得ず存続となった。

○閉校・校舎売却後は、土地等の財産処分を一任された理事、実質的に半澤（代表理事）と高倉（代表補佐理事）の2人が財産の保全にあたった。

○なお、紆余曲折を経て、札幌市に土地等を寄付し、「財団法人札幌遠友夜学校」が正式に解散できたのは、1967年（昭和42年）8月30日であった。実に、財団法人の結成44年後、解散議決23年後であり、半澤は88歳、高倉は64歳であった。

◎1924年（大正13年）2月、北海道内の民間社会事業団体が結束して、最初の「北海道社会事業団体聯合會」を結成した。財団法人札幌遠友夜学校も参加した。

○諸団体が事業の拡充を目指して、一丸となって共同募金を行った際に、この名称を用いたのであったが、翌年2月には、目的を達成したとして解散した。

◎1924年（大正13年）3月、中等部第1回卒業生（男子2人、女子5人、計7人）を送り出した。

◎1926年（大正15年）4月1日、札幌遠友夜学校は、初等部高等科を廃止し、「初等部」（6年）と「中等部」（4年）とした。

○1926年（大正15年）2月3日に学則変更の申請「私立学校設立認可申請書／同証明書」をして、3月19日に認可指令を受けた。

○啓蒙運動として札幌の市街地ですれ違う人に配って歩いたという「文盲への宣言」ともよばれた次に示す生徒募集のビラは、このころから使われたと判断される。前半が「文盲への宣言」で、「日本国民の3大義務の1つに教育があります。……（以

下、省略)」とあり、後半は「本校の特色」が「一、〇〇。一、〇〇。……」の形で12項目を示した。(※印の4項目は、後年の紹介では省かれて示されている)

- ①世界で1つの学校。これほどどんな人でも入れる学校はありません。
- ②社会事業団体として諸君の勉強に最大の誠意と関心を持っています。(※)
- ③勉強は6時半から9時15分までです。(※)
- ④働きながら勉強出来ます。
- ⑤いくら年を取っていても差し支えありません。
- ⑥6年を終えていない人でも、13以上では小学校へ行けませんし、小学校を卒業しても分からなかったところをもっと勉強したい人は初等部に来てください。(※)
- ⑦男でも女でもかまいません。
- ⑧いつでも入れます。(初等部)
- ⑨月謝は要りません。
- ⑩学用品はあげます。
- ⑪先生は諸君の友達です。
- ⑫中等部の方は中等学校の勉強をします。中学校等へ行けない人のために設けてあります。(※)

(宣言の文章も、12項目も旧仮名遣いは新仮名遣いに直し、漢字の振り仮名もすべて省略した)

○1926年(大正15年)からは、校内の生徒会活動も活発化した。倫古龍會に文芸部ができ、『倫古龍會々誌』と文芸誌『遠友魂』が創刊され、以降、「○巻○号」という形で年に複数回発行することになった。

◎1927年(昭和2年)月日不詳、札幌遠友夜学校の校舎内で小火事が発生した。

○下記の文は、1953年(昭和28年)12月発行『北海道社会福祉』1巻2号掲載の「遠友夜学校」のp.31~32に記載されている。「旧校舎独白」の1文としてあげられたものであり、以降の文献にもしばしば転載・引用されてきた(加筆や句読点・漢字・仮名遣いの変更は少しある)。当時、教師の1人であった高倉が会報に載せた

ものだそうだ。

「昭和2年（1927年）のことなりと憶ゆ。夜学校に小火騒ありき。北側の2階よりしきりに煙の吹き出るを見て近所の人々駆付け、消火に努められたる以て幸ひ事なきを得たるが、火夫は窓を破壊して水を注ぎたるを北方の屋根裏教室にはあらで、正反対の南側階下小使部屋なりき。壁にかけたる二重マントのポケットに入れたる（留守居の）煙管より引火し、唐紙を焦したるものにして、煙は御丁寧にも十数間の屋根裏を伝ひて北窓に吹出したるなり。小使部屋も畳、唐紙等損害ありたれども、火害よりは寧ろ水害と云うべく、損害を評価したるに如何に見積るも50円を出でざりき。「夜学校だなあ」全員は恐縮しつゝも苦笑を禁ずる能はざりき」。

◎1928年（昭和3年）2月、中等部第3回卒業生の尽力により図書部を設立した。

◎1928年（昭和3年）6月18日、開校35周年記念式典を挙行し、はじめて制定した校章を披露した。

○校章（校旗・徽章）のデザイン制作者は、札幌遠友夜学校の学生教師・佐々木西二（北海道帝國大學農學部学生、後に北海道大学教授）であった。

○デザインは雪を表す銀白色の六角晶でかたどり、その輝きの中に瞬く六つの星と、中央の金色に浮かび出す「遠友」の2文字とを収めたものである。白々とした気品を持ち、また、どこか線の太さを思わせる徽章は、男子生徒の帽子で、女子生徒の胸で、「遠友」を誇らかに示す。

○「六角晶」には清浄、無垢、高潔など人間として持つべき心を、「六つの星」には久遠、真理、理想、希望など人生に臨む心を、「遠友」の文字には友愛、喜び、勇気など共に学び培う人生の宝を託している。黄金色の「遠友」は、清麗な白銀の中に凜として輝く。

○1930年（昭和5年）1月1日発行の札幌遠友夜学校學期報『遠友』第4号は「校章決定」の記事を載せている。校章は1929年（昭和4年）月日不詳に制定、校旗は1930年（昭和5年）3月に制作とする資料も多い。

○2020年（令和2年）9月1日発行の年刊誌『新渡戸稲造の世界』は第29号p.51～63で、堀田国元の論文「札幌遠友夜学校の校章・校旗と佐々木西二先生」を掲載した。

◎**1928年（昭和3年）11月10日、持続的社會事業団体として、再び「北海道社會事業団体連合會」を復活させた。これに財團法人札幌遠友夜學校も加盟した。**

○北海道内26の私立社會事業団体が、親睦と提携と健全發展を図るために結成したもので、創立總會は1929年（昭和4年）2月12日に開催された。

○1940年（昭和15年）には、北海道社會事業団体連合會参加団体は63に達した。

○1941年（昭和16年）7月10日開催の總會で、同会を發展的に解消し、「北海道社會事業協會」と合併することを決議し、1942年（昭和17年）、正式に解散した。（戦後の1946年（昭和21年）2月11日、「北海道社會事業聯盟」として再び結成される）

◎**1929年（昭和4年）1月1日、札幌遠友夜學校學期報『遠友』第1号を発行した。**

○それ以前は学校の様子を学内外に向けて発表する新聞（機関紙）で、既に1923年（大正12年）から『遠友夜學校報』を年1回発行していたが、これを札幌遠友夜學校學期報『遠友』に改め、発行も学期ごとに年3回発行を原則とした。

○以降、発行されなかった年や2回の発行の年もあるが、1943年（昭和18年）9月の第32号まで発行が確認されている。

◎**1929年（昭和4年）月日不詳、札幌市にも並行して活動する「札幌市社會事業団体懇談會」が誕生した。これに財團法人札幌遠友夜學校も参加した。**

○激しい經濟不況の下、救護法制定動きに呼応して、相互の連絡・提携を図る目的で必然的に生まれた。

○最初は、札幌市内の公立・私立社會事業に携わる19の施設・団体が参加し、隔月1回、会場を輪番制で受け持つ形で始まった。

○1940年（昭和15年）6月16日、發展的に「札幌市社會事業協會」が創立された。

事務所は札幌市役所内に置かれた。目的は、札幌市内社会事業団体の親睦・協調を図り、相互の連絡・提携を密にし、有機的発展を期する、とされた。

◎1929年（昭和4年）10月、新校舎が完成し、近代的校舎になった。

○財団は、札幌東小學校旧校舎の廃材の払い下げを受けて増築工事を同年7月から着手していた。

○前述のように、この工事では、募金などの財務面で会計担当理事・三島常盤が多大な貢献をした。

○新校舎は、延べ258坪、木造2階建てで、室内運動場・図書室・医務室・作法室・当直室なども備えたものとなった。

○同年11月には、旧校舎の古材を利用して建築された職員（学生）の寄宿舍「遠友寮」が開設された。（遠友寮は、その後、1935年（昭和10年）に新築されたが、閉校に伴い1944年（昭和19年）3月23日に閉鎖となった）

○1930年（昭和5年）1月1日発行の札幌遠友夜學校學期報『遠友』第4号は「新春！新校舎！」の記事を載せている。

○1930年（昭和5年）6月18日、校舎改築報告・祝賀会を開催した。

○1931年（昭和6年）8月5日、恩賜財團慶福會（内務省社會局構内）発行の報告書『恩賜財團慶福會事業概要（昭和5年度）』は、財團法人札幌遠友夜學校について「……昭和4年（1929年）10月、本會助成金・道廳補助金・其他金6千9百80餘圓を以て、木造2階建延2百61坪の校舎を完成し、現在3百2名を教育しつつあり」（p.25）と記している。

○後年、「新校舎」とよばれていたこの校舎は、1944年（昭和19年）12月12日に売却されて逓信協會の倉庫となり、終戦後も使用されていたが、1948年（昭和23年）10月14日の火災で全焼した。

◎1930年（昭和5年）4月15日、財團法人札幌遠友夜學校は小冊子『財團法人札幌遠友夜學校一覽』を発行した。

○札幌遠友夜学校編刊によるもので、B6判、全54ページに1894年（明治27年）1月創設の遠友夜学校の概況（沿革等の各種資料）を1929年（昭和4年）12月末現在でまとめた。

○1936年（昭和11）年10月1日にも『事業一覧』の名称で同様の小冊子（全71ページ）が発行されている。（いずれも北海道大学大学文書館に所蔵されている）

◎1930年（昭和5年）月日不詳、新渡戸稲造を会長とする「バチエラー学園後援会」が設立され、資金不足を応援する募金運動が始まった。

○1924年（大正13年）10月にイギリス人のジョン・バチエラーによって創設された「アイヌ保護学園」は、1929年（昭和4年）には「バチエラー学園」と改称され、1940年（昭和15年）末まで存在した。

○同学園は、アイヌの子どもたちを札幌に集め、生活費や学費などの経済援助をして中学校以上の教育を受けさせるために建てた寄宿舎であった。

○1931年（昭和6年）には、認可され財団法人となった。

○1933年（昭和8年）10月に新渡戸が死亡してからの後援会長には宮部金吾が就いた。

○「バチエラー学園」は札幌市北3条西7丁目に所在していたが、1962年（昭和37年）4月には、1949年（昭和24年）4月から旧札幌遠友夜学校跡地に置かれていた「北海道中央児童相談所」の移転先となった。

◎1931年（昭和6年）5月18日、新渡戸稲造校長は、札幌遠友夜学校を訪問し、講話「學問より實行」などをおこなった。

○今回の訪問は、校長職のまま札幌を離れてから2回目で最後の来校となった。

○当時、新渡戸（68歳）は、すでに国際連盟事務次長の職責を全うして帰国し、勅選貴族院議員となり、東京女子経済専門学校（新渡戸文化短期大学の前身）初代校長などの要職に就任中であつた。北海道各地で講演し、歓迎を受けた。その日は、1回目来校約22年後、離札約33年後、学校創設約37年後であつた。

○この日の新渡戸校長の講話内容（お話）は、生徒たち大勢を前に遠友夜学校開設の経緯などについて詳しく語った最初で最後のものではあった。遺された資料や記録の中に、新渡戸自身によって遠友夜学校について詳しく書かれたり語ったことが速記録されたりしたものが他にないため、この時に語られた言葉がのちにもっとも多く引用・紹介されることとなる。速記録が残された。

○1931年（昭和6年）5月15日発行の札幌遠友夜学校學期報『遠友』第8号、1ページ目に「新渡戸校長を迎ふ」という校長の来校を喜ぶ一文「……私達職員生徒一同はどんなに此の日を待ちに待った事だらう。一昨年も、昨年も、私達はその日の期待に胸を轟かせ乍ら……」が掲載された。

○1931年（昭和6年）5月20日付けの日刊新聞『北海タイムス』は、このときの様子を、見出し「日本一、世界一の校長、われ等の誇るべき校長……新渡戸博士と遠友夜学校」のもと、大きく報じた。（⇒1931年（昭和6年）5月20日）

○1931年（昭和6年）5月、学校記録「保記1」として小安貞文記の文書「新渡戸稲造校長本校視察記録」が残されている。

○1931年（昭和6年）5月25日発行の『札幌育児園月報』123号に有田正雄執筆の「新渡戸稲造校長と札幌遠友夜学校に出席しての所感」が載せられた。

○1931年（昭和6年）6月、生徒会・董會はガリ版冊子文集『文乃園／札幌遠友夜学校董會誌』（昭和6年6月号、新渡戸校長来校記念号）を発行した。

○1931年（昭和6年）7月、生徒会・倫古龍會は冊子文集『遠友魂』（第6巻第2号、新渡戸校長来校記念号）を発行した。（この号についての記事は、1995年（平成7年）2月発行の『札幌遠友夜学校資料集』に転載された）

○1931年（昭和6年）11月25日発行の札幌遠友夜学校學期報『遠友』第9号は、「學問より實行—新渡戸校長のお話、5月18日御来校—」の見出しで、p.1に校長講話の全文を載せた（講話の全文は1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.274～278に転載された）。（⇒本書冒頭に収載）また、p.5に「始めての我等の父に見えて」を載せた。（⇒本書冒頭に収載）

○ただし、その基になった1931年（昭和6年）5月18日作成の原稿用紙束「新渡戸

稲造校長来校記念講演速記原稿」は残っている。(2001年(平成13年)9月、北海道大学総合博物館へ貸し出された資料の1点であり、引き続き同博物館で展示されている)

○札幌遠友夜学校学期報『遠友』第9号掲載の講話の全文とみなされるものは、本書の冒頭に「前文に代えて一新渡戸校長の講話一」で載せた。

○この日(1931年(昭和6年)5月18日)の講話後、校長は直筆の揮毫^{きごう}6点(扁額用4点、掛け軸用2点)を学校に残した。多数の生徒たちが見詰める中、筆でしたためたとされる。

○扁額用の次の4点は、①～③は右から左へ大きく横書きしたもので、④は英文である。(この時から1944年(昭和19年)の閉校時まで、①と④は、常に生徒や教師が目にする「校是」として、玄関付近や体育館の演壇上に新渡戸やリンカーンの肖像写真とともに掲げられた)

①「学問余里実行」(学んで知ったことは実際に生かす。余里=より。新渡戸稲造自身の言葉で、遠友夜学校精神の1つとされた。当時の字体では「學問余里實行と記したものであるが、実際は略字体の「学問余里実行」で書かれたと読み、後にはさらに「学問より実行」とされるようになり、これが定着した。遠友夜学校だけに残る)

②「去華就實」(華やかなものから去り、実質の伴ったものに就け。中国の清時代の沈徳潜『唐宋八大家文読本』の序、または『老子』を原典とする言葉。1908年(明治41年)10月13日発布の「戊申詔書」の中の1句)

③「心清者福也」(心の清い者はさいわいである。『新約聖書』の「マタイによる福音書第5章8節」の言葉)

④“With malice toward none, With charity for all.”(誰に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって。1865年(慶応元年)3月4日、アメリカ大統領2期目の就任演説の中でリンカーンが述べた言葉で、遠友夜学校精神の1つとされた)

(2023年(令和5年)9月時点で札幌市内に限定すると、①～④の実物は「北海道大学大学文書館」が所蔵し、別書きの④の実物は「札幌独立キリスト教会」も所蔵

している。かつて1964年（昭和39年）6月から、札幌市勤労青少年ホームなどに併設されていた「遠友夜学校記念室」に展示されていたことがある）

①と④については、三島徳三（北海道大学名誉教授）の論稿や著書に詳しい。（⇒2020年（令和2年）4月24日発行『新渡戸稲造のまなざし』）

○揮毫の「掛け軸用2点」とは、次の短歌（和歌）2首であるとされている。

①「僅かなる庭の小草の白露を もとめて宿る秋の夜の月」（西行『山家集』の言葉。東京都中野区の新渡戸文化学園でも所蔵されている）

②「山川の底のさざれの数ふべく みゆるは水のすめばなりけり」（出典等不詳。酷似句は十和田市の新渡戸記念館などでも所蔵されている）

（2首とも、2023年（令和5年）9月現在、青森県十和田市所在『新渡戸記念館』の「新渡戸稲造関連和歌データベース727首（重複引用を含め893件）」には未収録である）

◎1931年（昭和6年）5月20日付けの日刊新聞『北海タイムス』は、22年ぶりに新渡戸稲造校長が札幌遠友夜学校を訪れたときの様子を報じた。

○記事には、見出し「日本一、世界一の校長、われ等の誇るべき校長……新渡戸博士と遠友夜学校」のもと、次のように掲載された。

○「日頃寫眞に見、噂に聞き日本一いな世界一の校長さんと有難く誇りとし長い間憧れてみた我等の校長さんが札幌に着く、校旗を押し立て驛頭にお迎えした時“御苦勞さん”と云ったそして溢れる様な慈愛の眼、それで充分感激の心で一杯だったのに、連日連夜の講演にお疲れの身でわざわざ学校を訪れそれも1つ1つ教室の隅から隅までめぐって我等の勉強振りを見て下さった。電灯の光を手影にしてある生徒のそばに行ってはやさしい御注意であらう。家が貧乏で晝間は八時間も十時間も一人前に稼がねばならず勉強したくても学校に上れない自分達がこうして一通り讀書きを覺えたのも元々はみんな此の校長さんのお陰ではないか、中には三十六といふ阿母さんみたいな年で尋常二年生のお勉強をしてゐる人さえあるそれも一日や二日の事ではない明治二十七年から今日まで三十九年といふ長い長い間の兄さんも姉さんも

あそこの叔父さんも叔母さんもその卒業生の数がもう七百名以上にもなっているのだといふ。校長先生をお迎への言葉を述べた總代の生徒は到頭涙に咽んでしまひ二百名からの下は十才から上は四十近くまでの全部の生徒は鼻をすすり来賓の人ももらひ泣きをしてしまった。

十八日豊平橋畔札幌遠友夜學校に新渡戸博士が校長さんとして二十二年ぶりに歸って来たその夜の光景であるが今の世にもこんな美しい世界があるものかと感動の外はなかった」

◎1933年（昭和8年）10月15日（日本時間は16日午後1時35分）、初代校長・新渡戸稲造はカナダのビクトリア市の病院で、持病の再発・悪化のため死亡した。

○1933年（昭和8年）8月2日、新渡戸は日本を出発し、カナダのバンフで開催の第5回太平洋調査会議に日本代表団団長として出席し、会議終了後に病に倒れ入院した。サンフランシスコから駆けつけた萬里子夫人ら3人に見守られて午後8時35分永眠した。

○新渡戸の死亡時年齢は71歳1か月、遠友夜學校校長在任期間は39年間であった。

○1933年（昭和8年）10月17日付け『東京朝日新聞』は、「新渡戸博士客死／わが代表的國際人／カナダのヴィクトリアにて／世界的に有名」などの見出しで報じた。

○1933年（昭和8年）10月、『北海タイムス』は朝刊で「新渡戸博士の訃／惜い偉大な黒星／残る級友僅か3人／エルムの杜秋風淋し」の見出しで報じた。

○1933年（昭和8年）11月18日、本葬は東京で執り行われ、遥拝式が札幌の學校で挙行された。

○1933年（昭和8年）12月、札幌遠友夜學校文芸部による『遠友／新渡戸校長先生追悼号』が発行された。（本号の全記事は、1995年（平成7年）2月発行の『札幌遠友夜學校資料集』に転載された）

○1934年（昭和9年）2月、札幌遠友夜學校學期報『遠友』第13号は、新渡戸稲造校長遥拝式の記事を掲載した。

○宮部金吾は「故新渡戸稲造君小傳」を1934年（昭和9年）3月発行『札幌同窓會

第55回報告』p.3～17に寄稿した。(別刷もつくられた)

○翌1934年(昭和9年)から閉校前年1943年(昭和18年)までの間、故新渡戸校長を追悼する会「新渡戸會」が毎年秋に夜学校を会場に催され、新渡戸とゆかりの深かった人々が集い、故人を偲んで講話をし、一夜を過ごすならわしであった。

◎1934年(昭和9年)6月19日、第2代校長に新渡戸萬里子(戸籍名・万里、遠友夜学校創立者の1人、初代校長・新渡戸稲造の妻)が就任した。

○初代校長・新渡戸稲造が1933年(昭和8年)10月15日に死亡したための措置で、「財団法人札幌遠友夜学校は1934年(昭和9年)4月13日開催の役員会の議決に基づき、同4月18日付けで「校長就任認可申請書」「校長異動報告書」を北海道廳長官に提出し、同6月19日付けで認可指令が下りた。新渡戸萬里子校長は、1938年(昭和13年)9月23日に死亡するまで理事を兼ねて在任した。(「萬里子」の名前は通称で、財團の公式文書では戸籍名「万里」が使われている)

○1934年(昭和9年)6月発行の札幌遠友夜学校學期報『遠友』第14号は、半澤洵代表名による新渡戸萬里子校長就任の記事「新校長ヲ御迎ヘシテ」を第1面に掲載した(記事には当初、役員会は全会一致で宮部金吾理事を校長に推選したが、本人の承諾が得られなかったので萬里子夫人に承諾を願うことになった、とも記されている)。

○1934年(昭和9年)11月発行の札幌遠友夜学校學期報『遠友』第15号は、茂木中男執筆の記事「新渡戸萬里子夫人のことども」を掲載し、新しく就任した萬里子校長を紹介した。(同記事は、1981年(昭和56年)9月発行の『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.278～281に転載されている)

○新渡戸萬里子は、新渡戸稲造の妻として来日後の1905年(明治38年)、動物愛護運動の先駆的な役割を果たした「日本人道會」を設立し、会長として活躍していた。

○第2代校長は在任中、札幌遠友夜学校を訪れることはなかった。

○1938年(昭和13年)9月23日、第2代校長は静養先の軽井沢にて心臓病で死亡した。

○死亡時年齢は81歳で、校長在任期間は4年間であった。

○同年9月26日、本葬は東京で執り行われ、遥拝式が札幌の学校で挙行された。翌年の1939年（昭和14年）2月20日発行の札幌遠友夜学校学期報『遠友』第24号は、遥拝式の様子を詳しく掲載した。

○2021年（令和3年）4月29日発行の『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第9号p.19～24には、三上節子の寄稿「新渡戸メリー夫人の人物像―誕生前時代から生涯をつらぬくもの―」が掲載された。詳細に述べられた貴重な論考である。

◎1934年（昭和9年）10月15日、石井満（鉄道院勤務）は、新渡戸稲造の伝記類の中で最初とされる単行本『新渡戸稲造傳』を關谷書店から発行した。

○発行日は、新渡戸死亡の翌年で、新渡戸の1周忌当日であった。

○石井は、旧制一高（東京大学の前身）での新渡戸の弟子の1人で、97人と19団体からの聞き書き等は総計687ページに及び、逸話・写真を多く含む新渡戸稲造伝の貴重な古典的基本書とされている。

○1992年（平成4年）12月10日、大空社から『新渡戸稲造伝』（伝記叢書104）として、佐藤全弘の解説・略年表付きで復刻版が発行された。

○石井は、この書のp.153～159で「遠友夜学校と北鳴中學」を書き、p.157に遠友夜学校を、「これこそ新渡戸先生夫妻が札幌の地に遺された最も美しい記念碑の1つであらう」と記した。加えて、1931年（昭和6年）5月18日、久しぶりに遠友夜学校を訪問した時のことを、新渡戸は後日、森本厚吉（北海道帝國大學教授）に「『僕の生涯中最も強い感激をうけた―は遠友夜学校を見舞つた時のことである。』と云はれた」とも述べている。（編著者注：いずれの引用文も漢字の振り仮名を省略した）

○1936年（昭和11年）11月発行の『新渡戸博士追憶集』には、石井は「新渡戸先生と私」を寄稿している。

◎1936年（昭和11年）11月25日、新渡戸稲造を追悼記念する『新渡戸博士文集』と『新渡戸博士追憶集』が故新渡戸博士記念事業実行委員によって発行された。

○非売品の『新渡戸博士文集』は、矢内原忠雄編、A 5判、邦文522p+英文241p=763p(全ページ)である。これの邦文だけが、1937年(昭和12年)6月、実業之日本社から矢内原忠雄編・新渡戸稻造著『新渡戸博士読本』として市販された。

○非売品の『新渡戸博士追憶集』は、前田多門・高木八尺編、A 5判、577p+図版9である。これには、宮部金吾寄稿の概説「小傳」(新渡戸稻造小傳)と半澤洵寄稿の概説「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」が初めて収録された。

○のちの紹介・引用で、刊行先の「故新渡戸博士記念事業実行委員」が「新渡戸博士記念事業実行委員会」と、『新渡戸博士追憶集』が『新渡戸博士追悼集』と誤記されたものがある。

○これを充実させた形で、のちに『新渡戸稻造全集』が発行される。(⇒1969年(昭和44年)1月1日)

◎1936年(昭和11年)11月25日発行の『新渡戸博士追憶集』に、宮部金吾は、新渡戸稻造についての最初の概説論稿「小傳」を寄稿した。

○同追憶集は、1933年(昭和8年)10月16日に死亡した新渡戸稻造の追悼記念事業の一環として、同時刊行の『新渡戸博士文集』とともに故新渡戸博士記念事業実行委員から非売品の形で発行された。

○宮部の寄稿は、札幌農学校の同期生・親友として書かれたもので、別格扱いで冒頭のp. i~xxに収載され、末尾に括弧書きで肩書なしで載せられている。

○宮部の同稿は、1969年(昭和44年)3月25日、教文館発行、新渡戸稻造全集編集委員会編『新渡戸稻造全集・第1巻』p.427~445に転載された。(これ以降、タイトルは「小伝」となっている)

○また、同追憶集は、再版の形で1987年(昭和62年)4月10日、教文館発行、新渡戸稻造全集編集委員会編『新渡戸稻造全集・別巻』(全563ページ)として刊行され、宮部の同稿はp.9~26に転載された。

○いくつか誤記が含まれていたため、その都度、校訂が加えられている。

◎1936年（昭和11年）11月25日発行の『新渡戸博士追憶集』に、半澤洵は、遠友夜学校の最初の概説論稿「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」を寄稿した。

○第2代校長・新渡戸萬里子在任中であり、半澤は、農学博士・北海道帝國大學教授・遠友夜學校代表の肩書で寄稿している。

○半澤の同稿は、1958年（昭和33年）9月15日発行、林善茂編『内村鑑三と新渡戸稲造』（北海道大学北大季刊刊行会、非売品）p.72～78に転載された。

○また、半澤の同稿は、1981年（昭和56年）9月1日発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.178～183に転載された。

○同追憶集は、再版の形で1987年（昭和62年）4月10日、教文館発行、新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集・別巻』（全563ページ）として刊行された。半澤の同稿はp.87～93に転載された。

◎1938年（昭和13年）1月、遠友夜學校學期報『遠友』第20号は、「半澤先生代表職15年紀念」の記事を掲載した。

◎1938年（昭和13年）12月17日、第3代校長に半澤洵（北海道帝國大學教授、農学部長在任中）が、遠友夜學會代表も兼任で選任され、翌年1月に就任した。

○最初、宮部金吾（北海道帝國大學名誉教授、遠友夜學會初代代表）が推挙されたが、78歳と高齢のため強く辞退した。結局、若い59歳の半澤が引き受けることになった。

○第2代校長・新渡戸萬里子が1938年（昭和13年）9月23日に死亡したための措置で、半澤は、遠友夜學校が1944年（昭和19年）3月6日閉校となるまでの間、約5年半校長職を務めた。

○半澤は、1892年（明治25年）年4月に札幌農學校予科第19期生として入学し、新渡戸稲造教授（当時31歳）に出会い、新渡戸が1894年（明治27年）1月に夜學校を開設以来、同校の学生教師として奉仕した。以降もずっと、教師や役員として遠友夜學校に関係していた。

◎1938年（昭和13年）12月17日の選任を受けて、第3代校長・半澤洵は、のちの挨拶で「校長就任に當りて」と題した詳しい所信表明をした。

○文章化して載せたのは、1939年（昭和14年）2月20日発行の札幌遠友夜學校學期報『遠友』第24号であった。半澤が所信を文章にして示したのは、時代の状況が遠友夜學校の運営にとって厳しさ・困難さをいっそう増してきたからであり、関係者の結束をさらに高める必要があると考えたからであろう。

○半澤が遠友夜學校の経営と教育の方針について詳しく述べたものは他にない。貴重な所信表明として、転載・引用されている。教育方針には、「新渡戸夫妻の人格を模範とすること」「学者よりも実行家をつくること」「知育よりも徳育に重点を置くこと」「教師、生徒共に犠牲的精神を發揚し、責任ある社会人たるべく努力すること」などをあげた。

○同記事の全文転載がなされているものには、1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜學校（さっぽろ文庫18）』（p.282～286）などがある。

◎1939年（昭和14年）1月、札幌遠友夜學校に（非公式ではあったが）副校長が置かれ、高倉新一郎（北海道帝國大學農学部助教授）がその任にあたった。

○多忙の半澤洵が代表兼校長となったため、時局柄、補佐役として臨時措置で副校長が置かれた。

○1944年（昭和19年）3月6日に閉校するまでの約5年半、高倉は副校長を務めた。

○1920年（大正9年）4月、高倉は北海道帝國大學に入学し、在学中の1924年（大正13年）ごろから同夜學校の教師として奉仕していた。

○高倉は、副校長就任時、財團法人の評議員に就いていたが、死亡した三島常盤理事の後任として1941年（昭和16年）2月には、理事に選任された。

○「副校長」の役職の存在は、同校の諸規則の規定や札幌遠友夜學校學期報『遠友』などでの記録には見当たらない。女子生徒の回想文に遺されたものがあり、不確実ではあるが、念のため整理してみた。その回想文には、「私は北大で給仕として働き、

公立実業夜学を卒業し、S13年に英語を習いたいと思い（17歳）遠友中等部に入った。校長は半澤先生、副校長は高倉新一郎先生で、……」とあった。

○約80年後の2023年（令和5年）1月26日、『北海道新聞』デジタル記事「<奇跡の小売り王国・特別編> @大見英明・コープさっぽろ理事長／北海道で描く協同組合経営のこれから」の中で、大見理事長が次のように述べた。「……その遠友夜学校の教壇に北大の学生時代から立ち、夜学校が閉校された1944年（昭和19年）まで副校長を務めていたのが高倉先生なんです。高倉先生は戦後の食糧難の時代に、札幌で桑園生協を立ち上げました。……高倉先生もまた新渡戸の教えを<実行>したのです。……」

◎1942年（昭和17年）1月、財団法人北海道社会事業団体聯合會（名誉會長・若木作蔵）は『紀元二千六百年記念北海道社会事業団体誌』を発行した。

○奥付は、編輯兼發行者は財団法人北海道社会事業協會（野村琢民）となっている。

○同誌には、同連聯合會に加盟する63団体の、昭和15年（1940年）10月現在の現況資料が収録されたが、p.50～55には「財団法人札幌遠友夜學校」の資料が掲載された。いくつかを抽出し略記すると、次のようになる。

○所在地「札幌市南4條東4丁目2番地」、創立年月日「明治27年（1894年）6月18日」、創立者「故新渡邊稻造」、現代表者「理事兼校長／半澤 洵」、事業「貧兒教育」、組織「財団法人」

○役員「理事5、評議員10」、職員「校長1（理事兼）、会計主任1、校醫1、教師若干名（主として北海道帝國大學學生有志が無報酬を以て當る）」（氏名は不記載）

○沿革「本校は教育未終了兒童及晩學者に初等教科を授け、更に小學校終了者にして尚向學心あるも上級學校へ進み能ざる男女青年に對し、無月謝にて中等普通教育を授くる目的を以て、明治27年（1894年）時の札幌農學校（現北大）教授新渡邊稻造氏が同學の有志と諮り創設したものである。當時の校舍は現在地に位置せるも校舍は纔かに2部屋の家屋に過ぎず、明治28年（1895年）7月、該家屋並に敷地521坪7合を買入れ本校の基礎を定めた。是に要した費用525圓は新渡邊稻造夫人萬里

子氏の寄附に據つた。當時本校の事業は、一方に貧困家庭を巡回訪問し病人、不具者の看護、幼児の保育等に當ると共に、他方教育事業としては、普通學科を始め看護法、禮式、茶道、裁縫、編物等の教授に迄及んだが、間もなく巡回訪問を廃止し、純然たる夜學校として事業を進めた。／明治30年（1897年）4月、前記校舎に喜多島慶次郎氏の寄附せる24坪の校舎を増築して始めて多數生徒を収容し、文部省令第14號小學校令施行規則に準じ、尋常高等の2科を定め毎夜2時間宛授業をなし、女生徒には編物を教授する事とした。／明治32年（1899年）3月始めて卒業生出す。これ第1回生である。當時新渡邊校長外遊の爲、宮部金吾氏が代つて代表となり其後外遊より歸れる大島金太郎氏宮部氏に代つて代表となつた。／……」

○1940年（昭和15年）3月末現在、在校生は初等部66人（男子63人、女子3人）、中等部97人（男子86人、女子11人）で、卒業生の累計は初等部890人、中等部151人だった。

◎1943年（昭和18年）6月18日、財團法人札幌遠友夜學校（校長・半澤洵）は開校50周年記念式典を挙行政した。

○この式典が「財團法人札幌遠友夜學校」としての最後の記念行事となった。交友（卒業）生は多く集まったが、生徒席はもはやさびしかったとされる。

○1943年（昭和18年）6月18日発行の札幌遠友夜學校學期報『遠友』第31号は「札幌遠友夜學校50周年記念号」とし、半澤校長の「札幌遠友夜學校の回顧」などを掲載した。

○この式典で、初期に教師だった人が思い出を語ったとき、出席していた交友生が突如立ち上がって語ったという言葉が、高倉新一郎によって紹介され、それが語り種として、のちのちの諸文献で少し書き換えられながら繰り返し引用されている。ここでは、高倉が最初に書いたものを引用する。（⇨1953年（昭和28年）12月1日発行の概説「札幌遠友夜學校」のp.46～47）

「私は波乱の多い一生を持ちました。然しこの間、私をして墮落させなかったものは実に2年間遠友に学んだ事によつたのであります。8年間の学校生活中で一番私

に大なる印象と感化を与えたものは遠友2ヶ年の生活であります。20才前後の若い先生達の清らかな純情と激しい熱情こそは強く強く私達を動かしました。此処で私は生まれて初めて一個の人格として認められ、非常に有難く思いました。／日曜毎に先生は生徒を連れて郊外へ遠足に出かけました。その時、先生は自分の包の中から饅頭やお菓子を取り出して手ずから私達に分けて下さった。貧しい家に育ち、こんな深い愛情に触れた事のない私達はどんなにか感激したか判りません。／豊平川の月見の時、美しい月の光に照らされながら、先生から一々指して貰って、星の話をして戴いた事は今でも忘れません。／授業中に一生徒がそば屋へ入って居た事を知った足助素一先生は、1時間ぶっ続け涙を流して説諭されました。生徒一同も共に涙を流して泣いてしまいました。／当時教えを受けた先生方が、いずれも後には人格を以て世に知られて居ります事は、我々の大なる誇であります。この間或る人が『某（遠友夜学校卒業生）は馬鹿だ。一寸闇をやれば10万 20万は儲かつたのに、彼は偏屈者だから闇をやらずそのために機会を逸してしまつた』と話しました。／彼なら絶対闇等する男ではありません。夜学校で若い先生の純情に育てられた彼なのですから……」。高倉は「この言葉は出席者の魂を深くゆすぶつた。50年のさゝやかな仕事が仇ではなかつたのである」と書き添えている。（のちに述べた藤田正一の見解の要旨も紹介しておきたい。⇒2019年（令和元年）9月1日）

○後年の解説には、「1944年（昭和19年）3月、最後の卒業式の以前に、ささやかな創立50周年祝賀式典をおこなった」などという類の記述も少なくない。

◎1944年（昭和19年）3月6日、最後の卒業式・終業式（初等部第46回、中等部第21回）を挙行し、財団法人札幌遠友夜学校は閉校（廃校）となった。

○半澤洵校長・高倉新一郎副校長の在任期間はともに5年であった。

○深く関わりのあった人々の概算によると、開設以来の50年間、卒業生は初等部で約1,000人、中等部で約170人。一時在籍した者はその数倍と推定される。

○この間、教師等として奉仕した札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学の有志教員・学生・職員・卒業生・その他の総数は500人以上に及ぶという。

○夜学校の閉校の決断には、高倉が反対していたとも伝えられている。

○2013年（平成25年）10月発行の『新渡戸稲造事典』p.52には、「働く青年男女も夜勤・残業で通学が思うにまかせず、また文部省は全国のすべての中等学校の男子生徒に軍事教練を課すことを要求し、遠友夜学校は理事会の決定によって閉校を決め、栄光ある50年の歴史を閉じた」とある。札幌遠友夜学校の廃校に関する見解をめぐっては、後年、2015年（平成27年）3月以降になって、学術的論議が展開される。（⇒2015年（平成27年）3月以降）

◎1944年（昭和19年）3月13日、北海道庁内政部長から「去日各種学校転用協議會の結果、夜学校々舎は通信院に割当てた」旨の通知があった。

○同15日には通信院総務部長から同旨の文書を受けた。

○太平洋戦争の状況悪化に伴い、かねてから国家総動員の名のもとに各種学校転用措置の命令をもって運輸通信省への転用が決定していた。

◎1944年（昭和19年）3月23日、「遠友寮」は閉鎖となり、同31日には最後の在寮者・北海道帝國大學学生の松井愈が立ち退いた。

○「遠友寮」は職員（学生教師）寄宿舎として1929年（昭和4年）11月に開設されたのであった。

◎1944年（昭和19年）4月30日、財團法人札幌遠友夜学校は、總會（理事＋評議員）を開催し、法人解散（廃校と土地・建物の売却、圖書寄贈）を決議した。

○総会には、半澤洵理事長と宮部金吾、高倉新一郎の理事3人、山田幸太郎など評議員7人（委任状1人を含む）、合計10人が出席した。

○議事録によると、議決された内容は、要するに「学校は廃校とし、土地・建物は当局に売却し、その売却金と、半澤文庫を含む現学校所有図書とを北海道庁立図書館に寄贈して『新渡戸文庫』を設立し、年々の売却金利子で図書を購入し、文庫の内容を豊富にしていく。その他の財産処分、整理事務は理事に一任する」というも

のであった。

○1944年（昭和19年）5月6日、財団法人札幌遠友夜学校理事長・半澤洵は文部大臣・岡部長景宛で「法人解散許可申請書」を提出した。

○1944年（昭和19年）8月7日付け（甲学第835号）北海道廳内政部長から文書「財団法人札幌遠友夜学校解散ノ件」が理事長宛に届き、法人解散の許可が下りた。

○以上の関係書類は、北海道大学大学文書館に所蔵されている。

○ところが、その後（後述するように）、土地の売却は逓信局側から拒否され成立せず、条件の整わない『新渡戸文庫』の設立は庁立図書館側から受け入れられるに至らなかった。結局、財産処分が完了しないので、やむなく財団法人札幌遠友夜学校はいまいな形でそのまま存続せざるを得なくなってしまう。

○2015年（平成27年）3月以降、札幌遠友夜学校の廃校（閉校）に関する見解をめぐって論議が起こるので、補足を加えておきたい。①北海道大学大学文書館所蔵の1944年（昭和19年）4月30日の正式な「總會議事録」には「一、財団法人札幌遠友夜学校八之ヲ廃校トス其ノ土地建物共ニ當局ニ賣却スルコト」とある。②1964年（昭和39年）6月、札幌遠友夜学校発行『札幌遠友夜学校』のp.58には「昭和19年（1944年）4月22日／財団法人札幌遠友夜学校解散を決議す」とあり、同p.59には「一、財団法人札幌遠友夜学校八……創立者新渡戸稲造先生ガ企画セラレタル札幌市内ノ貧兒並ニ晩学者ノ教育事業ハ殆ンド達成セラレタルニヨリ、此機会ニ於テ廃校トスルコト」とある。③1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』p.242には「1944（昭和19）／義務教育の浸透と戦争の激化による勤労奉仕・学徒動員などのため、学校運営が難しくなり、「使命を果たした」との役員会判断により閉校さる」とある。④ほかに、戦争末期、夜間の電灯使用を制限する「灯火管制」のため、夜間の授業実施が困難になったとする理由もしばしばあげられる。

3. 閉校後模索時代（1944～1964）

◎1944年（昭和19年）10月5日までに、札幌遠友夜学校の所蔵図書を活用するために、北海道廳立図書館内に特別文庫『新渡戸文庫』の設置が計画されていた。

○鳥居清治は、1976年（昭和51年）10月発行の『新渡戸稲造の手紙』p.75で、1944年（昭和19年）10月19日付け『北海道新聞』に次の記事が載ったと書いている。

○「学校関係者は、当校は貧しい青少年教育の理想に燃えた創設者新渡戸稲造博士の北海道に残された、唯一の社会教育事業であるのにかんがみ、なんらかの形式で、この精神を存続させたい、と案をねった結果、夜学校の財産を基金として、北海道庁立図書館内に特別文庫を設置し、読書を通じて青少年教育の目的を達成することとなった。この文庫は、組織を財団法人とし、その名を『新渡戸文庫』として修養、科学、技術等、青少年の教養に必要な良書を提供している」。この記事を紹介した鳥居は、北海道立図書館で『新渡戸文庫』が設置され、存在していたものとしてあげたと思われる。

○2023年（令和5年）7月、編著者・白佐が北海道立図書館に照会し、当時の新聞記事を確認してもらったところ、同年10月19日および前後日には同一または同様の記事は掲載されていなかったが、同年10月5日付け同紙2面には、「『新渡戸文庫』創設／全道の青少年に提供」の見出しで、同様趣旨の記事が掲載されていることが判明した。その記事の結末部分を抜粋して示すと、「……庁立図書館内に青少年修養錬成のための特別文庫を設置し読書を通して青少年教育の目的を達成することになり組織も財団法人としその名も『新渡戸文庫』として庁立図書館の手により修養、科学、技術など時局下青少年の錬成に必要なあらゆる有益書を充実する一方、これも近く全道に亙って大いに拡充されるはずの国民読書会を通して全道青少年の思想錬成に広く利用させることになった」とあった。

○この件に関して道立図書館では、『北海道新聞』の記事は計画案であり、実現しなかった」という見解に立ち、その裏づけとして次文献の解説をあげた。「……半澤は石原惣六（北海道庁立図書館長）らと謀り、新たに財団法人新渡戸文庫の設立を画策した。これは新渡戸の青少年教育の理想を残すため、社会教育施設として庁立図書館内で特別文庫を運営しようという計画であり、来館する青少年に対応するだけでなく、全道各地に設立されることになっていた国民読書会を通じて利用を募ることになっていた。必要経費は財団法人札幌遠友夜学校の所有する土地・校舎を通信院に売却して現金化することで充当する算段であった。／ところが通信院は土地・校舎の買収を拒否した。加えて庁立図書館でも新渡戸文庫の併設が困難となったため、計画は宙に浮いた形となった。……」（2003年（平成15年）2月発表の三上敦史論文p.234による）。

○さらに、終戦前後の混乱、記録資料の欠落はあるが、北海道立図書館の活動についても史料の検討結果が、同図書館から照会者・白佐に示された。

○要するに、戦後の1949年（昭和24年）10月から「道立巡回文庫」が、1952年（昭和27年）から「道立移動図書館」が、1955年（昭和30年）から「青少年巡回文庫」が始められているが、いずれも北海道庁予算や国庫補助事業によって行われた。また、事業の趣旨や目録に掲載されている図書の出版年からみると、戦前の図書を補充した（編著者注：旧札幌遠友夜学校の図書を活用した）とは考えにくい、との見解が示された。

◎1944年（昭和19年）12月上旬までに、旧財団法人札幌遠友夜学校の図書（貴重本）は北海道立図書館にあずけられた（？）。

○1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』に収載の高倉新一郎の記述p.27によると、「……図書は古い貴重本が多かったので道立図書館に預かってもらうことにし、……」とある。（1966年（昭和41年）7月発行の『ひらけゆく大地の蔭に』p.124掲載の半澤洵の座談会時発言でも、「新渡戸文庫、半沢文庫は道立図書館にあずけてあります」と語っていた）

○高倉は次のようにも書いている。「……開校以来、関係した多くの人々によって寄贈された（図書、ことに）新渡戸文庫、半沢文庫は道立図書館に寄託した（あずけた）」（1953年（昭和28年）12月発行『北海道社会福祉』1巻2号の「遠友夜学校」p.25。括弧内は、1964年（昭和39年）6月、札幌遠友夜学校発行『札幌遠友夜学校』p.2へ転載する時に変えられた部分である。そして、後者が1995年（平成7年）9月発行の『思い出の遠友夜学校』p.10へ転載された）

○『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』のp.29には、「道立図書館に寄託した文庫は、図書館の人手不足と、戦後設けられたが図書に不足していた巡回文庫に利用され、甚だしい係の更迭によってその意味が忘れられ、^{わづ}僅かに夜学校関係者による雑誌類が引き継がれたに止まった」とある。

○このことについて、編著者・白佐が北海道立図書館のレファレンスサービスを利用して照会したところ、2023年（令和5年）2月に回答された結果は意外なものであった。

○「遠友夜学校の旧蔵図書は現在も道立図書館で保管している」とはあったものの、預かった経緯と時期については不詳で、取り交わされた関係書類は存在しない。『図書館報』では、1944年（昭和19年）前後は館報自体の発行の有無が確認できず、1967年（昭和42年）前後は発行されているが、遠友夜学校関係の記事はない。1967年（昭和42年）1月発行の『北海道立図書館40年史』にも、1977年（昭和52年）3月発行の『同50年史』にも掲載されていない、とのことであった。

○現在、同図書館が保管しているという図書の内訳を確かめたところ、これまた意外な回答であった。（⇒2010年（平成22年）6月発行『貸本屋独立社とその系譜』）

○遠友夜学校の「遺産」の中には、貴重な文献（図書など）も含まれると判断されるが、これらについては、その後の行方の確認調査すら行われず、当事者の話を鵜呑みにしたまま長年経過してきたと言えるのではなかろうか。

◎1944年（昭和19年）12月上旬、貴重な扁額等は他に預けられることなく、理事長・半澤洵が自ら保管した。

○1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.29には、「新渡戸校長が昭和6年（1931年）来校の際残した教訓は、表装して半澤理事長が保管していたために無事引き継がれた」とある。（のちに「引き継がれた」先は札幌市教育委員会である）

○これは、次の扁額の4点が1964年（昭和39年）6月11日、札幌市勤労青少年ホーム内に開設された「記念室」に引き継がれたことを意味する。

①「学問余里実行」（学んで知ったことは実際に生かす）。

②「去華就實」（華やかなものから去り、実質の伴ったものに就け）。

③「心清者福也」（心の清い者はさいわいである）。

④ “With malice toward none, With charity for all.”（誰に対しても悪意をいдаかず、すべての人に慈愛をもって）。

○簡明に示した記録に、2016年（平成28年）11月発信の杉岡昭子による「山陰から（50）」がある。それには、「夜学校が閉校し、札幌市に土地と史料を譲与するまでには20年の歳月があった。その間遠友夜学校財団は、史料を道立図書館や母子施設に預け、新渡戸博士の扁額は半澤代表が表装して守った。……」とある。

◎1944年（昭和19年）12月上旬までに、旧札幌遠友夜学校の重要書類や教具等は、「愛國厚生館」の館長・栗原寛之に預けられ、その保管場所は母子寮であった。

○この時の状況は次のように記述されている。「何しろ急なことである。財産の重要なものは札幌市社会事業に功労のあった栗原氏の好意で、氏が経営に当たっていた母子寮に預け、……」（1981年（昭和56年）9月発行の『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.27）

○遠友夜学校関係資料の中に、これを証拠づけると思われる1953年（昭和28年）1月21日付、差出人・安田裕（財団法人鉄道弘済会札幌支部長）から半澤洵・高倉新一郎へ宛てた書簡（北海道大学大学文書館所蔵）が残っている。文面は教具・その他の寄贈への礼状である。

○当時の歴史を探ると、1942年（昭和17年）4月、北海道庁は、それまで経営して

いた愛國婦人会が解散したため、その事業の後を引き継ぎ、北海道社会事業協會附属「愛國厚生館」と称し運営した。1944年（昭和19年）8月には、道庁は、札幌市の社会課社会係長を長年勤めていた市職員の栗原寛之を口説き落とし、館長になってもらった。「愛國厚生館」は母子寮、保育所、授産事業などを経営したが、終戦前後は大変な困難・混乱を極めた。半澤とじっこんの間柄であった栗原の好意で預かってもらっていた重要書類も、ほとんどが生活用雑紙として使われるなどして、散逸・消失してしまった。（編著者・白佐の推測）

○1952年（昭和27年）6月、鉄道弘済会札幌支部がこれを買収し、「弘愛館」と改称して、母子寮等を経営した。（これも、編著者・白佐の推測にすぎないが）、この経営者変更の時、財団法人札幌遠友夜学校側は、閉校後から「愛國厚生館」に預け、消失を免れまだ残っていた一部の重要書類を引き取った。ただし、実際に使用されていた備品・教具類については、引き取っても保管場所がないこともあって、そのまま「弘愛館」に寄贈した。このことに対する半澤と高倉宛ての礼状だったのではなかろうか。

○財産に関する他の記述には、次のようなものもある。

①「学校財産も何時しかふえ、殊に歴代の教師が生徒の勉強のためと残して行った図書、1931年（昭和6年）新渡戸校長の来札を記念して毎年送られて来た本を中心に、稲造の死後校費の一部を割いて買い増して行った新渡戸文庫、当時の校長半澤洵博士の殆んど開学当初より尽粹された功勞を記念して、年々醸金によって増加して行った半澤文庫等があった」（1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.26、高倉新一郎記述）。

②「理事会は解散を決議し、折あれば同種の運動を始める基礎だけを残して、財産を同じ社会事業の仲間に寄附（付）若（も）しくは寄託し、……」（1953年（昭和28年）12月発行『北海道社会福祉』1巻2号の「遠友夜学校」p.25。1964年（昭和39年）6月、札幌遠友夜学校発行『札幌遠友夜学校』p.2へ転載。そして、括弧内は、1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』p.10へ転載する時に変えられた部分である）

◎1944年（昭和19年）12月12日、旧財團法人札幌遠友夜學校校舎の「建物賣買契約書」が成立し、財團法人逋信協會と防衛逋信施設局北部施設部へ譲渡された。

○売却された校舎とは「所在地・札幌市南四條東四丁目壱番地の木造建物・附属建物・工作物等」を指し、売却額は6萬8千7百圓であった。

○賣渡人は「札幌市南四條東四丁目壱番地／財團法人札幌遠友夜學會／理事／半澤洵」、買受人は「東京都麴町區大手町二丁目九番地／財團法人逋信協會理事／富安謙次／札幌市南大通西四丁目／防衛逋信施設局北部施設部／右代理人／吉川日露時」であった。

○財團法人札幌遠友夜學校側は、建物と一緒に敷地の土地も売り渡すつもりであったが、思惑は外れ、土地の買い取りは拒否され、「建物賣買契約書」を受け入れざるを得ない事態に追い込まれた。

○土地売却の拒否を一方的に押し切られたため、「財團法人札幌遠友夜學校」は事実上解散していたので、急きよ、事後対応を一任されていた理事の半澤洵と高倉新一郎は、半澤を長とする2人だけの「財團法人札幌遠友夜學會」を結成し、当面の対応をした（タイプ打ちの契約書の「校」の文字が抹消されて、手書きの「会」に改められていた。その場しのぎの対応が伺い知れる）。関係書類は北海道大学大学文書館に所蔵されている。

○「不幸中の幸い」とはこのことか。このときに建物と一緒に土地も買い取られていたら、遠友夜學校跡地の戦後復興はなかったのである。

○売却後の旧校舎は逋信局所有の物品倉庫として使用されていたが、1948年（昭和23年）10月14日、火災の発生により全焼し消滅した。（別記参照）

○旧校舎の最後について記された記述は、次に例示するようにまちまちである。

①「昭和18年（1943年）、遠友夜學校に授業停止命令が下り、校舎は逋信局倉庫として引渡すべき命令が出た。……土地は逋信局に買上げをたのんだが、入用なものは建物で、土地は必要がないと拒絶され、法人の解散もできず、そのままに終戦を迎えた。……折も折、終戦後間もなく、逋信局の倉庫になっていた2階建の夜學校

校屋舎は新しく入った積荷の荷重によって2階の床が抜け、下に燃えていたストーブをつぶし、荷は主に用紙だったので火がついて全焼した」(1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』に収録の高倉新一郎の記述p.26~27による)

②「財団法人札幌遠友夜学校は土地と倉庫になり果てた旧校舎を管理する法人として存続せざるを得なかった。不幸はさらに続き、1946年(昭和21年)には不慮の火災によって旧校舎を全焼してしまった」(2003年(平成15年)2月発表の三上敦史論文p.234による)

③「そして敗戦後間もなく、逡信局の復興資材が入荷した日、その校舎も烏有に帰してしまった。腐朽した2階が荷の重さに耐えきれず、くずれ落ちたのである」(1980年(昭和55年)8月25日図書出版者発行、蝦名賢造著『札幌農学校—クラークとその弟子達—』の記述p.178による。1991年(平成3年)7月31日新評論発行の同著『札幌農学校—日本近代精神の源流—』p.284にも同一記述がある)

④「建物は、1962年(昭和37年)に敷地とともに札幌市に寄附され、2013年(平成25年)に撤去された」(2015年(平成27年)6月発行『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第3号収録の佐藤全弘の記述p.5による)

⑤事実と思いたくなる後日談もある。「……敗戦の2年後、小樽の病院にいたが、先生は、頼まれて豊平まで診察に行く。帰路、車で送られて豊平橋を渡り、ふと思つて、夜学校跡地で車をおりた。失火で校舎はないと知っていたが、学生たちが住んだ寮に灯が漏れている。酔っていた先生は、玄関をたたき、現われた家人に、『この寮だけは火を出さないでください。新渡戸先生の学校の寮です。私たちが住んだ大切な寮です』と叫ぶ。……」。これは、2022年(令和4年)8月発行の山崎健作著『遠友夜学校の学びで……』p.202に孫引きで引用された1文章である。さかのぼって初出文献を探すと、北大季刊刊行会発行の雑誌『北大季刊』第11号(1956年(昭和31年)12月1日発行)、p.83~84に掲載の平松勤「遠友夜学校の想ひ出(随想)」に行き着く。p.84にそっくりな文章が載っている。平松勤という人物は、医学部の学生時代、1933年(昭和8年)10月から1936年(昭和11年)4月まで、一時は遠

友寮に泊まり込み、札幌遠友夜学校の教師を務めた。平松は、1981年（昭和56年）9月発行の『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』にも、p.234～236に思い出「廃校に立ち会った1人として」を寄せている。後年、札幌市電の終点・豊平地区で「平松精神科病院」を開院し、病院長になった。なお、遠友寮（学生教師寮）を含めて遠友夜学校の校舎が実際に焼失したのは、敗戦の3年後1948年（昭和23年）10月であった。

◎1944年（昭和19年）12月15日、財団法人札幌遠友夜学会と通信院防衛通信施設局北部施設との間で、土地の「借入契約書」が成立した。

○校舎建物の建つ敷地は倉庫敷地として貸し出すことになった。

○旧遠友夜学校敷地（所在地・札幌市南四條東四丁目壱番地の土地 4百8拾8坪）の土地は1年契約の更新で、借料1ヶ月百圓で借り入れられた。

○貸主は「札幌市南四條東四丁目壱番地 財団法人札幌遠友夜学会理事・半澤洵」、借主は「通信院防衛通信施設局北部施設部長・村田直明」であった。

○財団法人札幌遠友夜学会側は建物と一緒に敷地の土地も当然購入してもらえとの判断であったが、思惑は外れ、土地の売買は拒否されたので、「借入契約書」（北海道大学大学文書館所蔵）に切り替えざるを得ない事態に追い込まれた。

○既に述べた対応のため、書類の「財団法人札幌遠友夜学校」の「校」の文字は抹消されて、手書きの「会」に改められていた。（書類によっては「會」の文字もあり、混乱ぶりがわかる。このころの記述は「……夜学会」に統一して示した）

○貸与した土地は、思わぬ展開で1949年（昭和24年）3月ごろに返却されることになる。

◎1947年（昭和22年）8月、「光遠会」（幹事長・鈴木良雄）の戦後初の復活総会が札幌市内で開催された。

○「光遠会」は、札幌遠友夜学校中等部の1933年（昭和8年）3月卒業生の同期会である。

○その後、毎月のように開かれ、親睦を深め、同窓会の再興の機運を高めた。

○1949年（昭和24年）4月の総会で、遠友の輪を広げ、「札幌遠友会」の組織化を図ることを決議し、準備活動を具体化させ行動に移した。（ちなみに、最初に「遠友会」の名称を使い始めたのは、1897年（明治30年）10月に結成した遠友夜学校の後援会組織である）

○鈴木良雄は「札幌遠友会」の中心的役割を1995年（平成7年）すぎまで果たした。

◎1948年（昭和23）年7月ごろから、元札幌遠友夜学校生徒の山崎健作（1927年（昭和2年）10月9日生まれ、20歳時）は、ボランティア活動を始めた。

○自宅から100メートルほどの所に遠友夜学校があり、山崎は尋常小学校卒業後の1939年（昭和14年）4月（11歳時）半年間ほど同校の中等部に通った。虚弱で友達のいなかった山崎にとって、同校の生活は大変充実しており、この時に人生の基礎が培われたという。その後は、札幌市立第二高等小学校1年に編入した。

○山崎は、1943年（昭和18年）10月、工業学校を休学し、15歳で陸軍少年飛行兵となり、特攻要員として台湾で終戦を迎えた。1946年（昭和21年）3月復員し、工業学校電気科で学び直した後、職人などとして働く傍ら、敗戦の混乱期の青少年の善導のため、子供たちのよい環境づくりを目指して貢献したいと活動した。

○1949年（昭和24年）4月の子供会「札幌青空子供会」をはじめ、青年会「札幌青空会」などを設立し、子供会活動の普及を推進し、青少年育成と指導者育成にも尽力した。（潜在的に宿った新渡戸稲造の精神が山崎の中で働いていたのであろう。2022年（令和4年）8月出版の自伝書p25にも述べられているように、山崎が「私のボランティア活動のルーツは遠友夜学校であった」とはつきり自覚するようになったのは、1994年（平成6年）6月21日開催の「札幌遠友夜学校創立百年記念講演会」に出席してからだった。高齢になるまで夜学校の体験に思いが及ばなかったことは、自叙伝に、1948年（昭和23年）10月14日発生の札幌遠友夜学校旧校舎の火災のことについても、1949年（昭和24年）9月、旧校舎跡に建設された「北海道中央児童相談所」の一時保護所の子どもたちへの関心についても、書かれていないこ

とからも見当が付く。(火災のことについては、「山崎はしっかり記憶しており、たびたび話題にし、大勢の市民が見に来た、と話をしていた」と語る人もいる)

○長年、多岐にわたって地域活動を率先して続け、老人福祉事業や海外留学生支援事業にも携わり、後には特別養護老人ホーム大友恵愛園の施設長を務めた。

○2012年(平成24年)12月1日、「新渡戸稲造生誕150周年記念講演会」を開催し、遠友夜学校精神の継承・普及活動の主導的役割を果たした。(⇒2012年(平成24年)12月1日)

○2015年(平成27年)4月1日、遠友夜学校の再興を目指す「遠友再興塾」を結成した。(⇒2015年(平成27年)4月1日)

◎1948年(昭和23年)10月14日、旧「財団法人札幌遠友夜学校」の旧校舎は火災によって全部焼失した。

○1944年(昭和19年)12月12日、旧校舎は財団法人逓信協會に売却されていた。

○1948年(昭和23年)10月15日、『北海道新聞』は日刊(札幌版)p.2の下部に小さな記事を書いた。「逓信倉庫焼く／防火週間の騒ぎ」の見出しのもと、「14日午後7時43分札幌市南4条東3の1札幌逓信局資材課第1倉庫から出火、同倉庫1棟全焼、同3棟と隣接の浄土真宗高田派別院本堂80坪と石田三助さんほか15戸を半焼して8時半ごろ鎮火した。原因はガソリンの引火か、漏電のいずれかとみられ、死傷者はない模様」とあった。

○1971年(昭和46年)3月20日、札幌市消防局発行『札幌消防百年の歩み』(札幌市消防沿革誌編纂委員会編)の「札幌市主要火災一覧表」p.419には、「年月日は1948年(昭和23年)10月14日、出火場所は南4条東4丁目、火元は札幌逓信局用品倉庫、罹災は5棟13世帯、焼損面積は1,316㎡、損害額は751万円、死傷者はゼロ、原因は火鉢」であった旨の記録がある。

○2008年(平成20年)3月刊行の『新札幌市史／第8巻2／年表・索引編』p.322には、『札幌消防百年の歩み』の記録が転載されている。

○文献名の詳述は省略するが、前述の三上論文の「昭和21年(1946年)」や著書等

に記載の「終戦後間もなく」といった記述は、伝聞等による推定と判断される。1946年（昭和21年）の新聞記事等の調査では、該当する火災は見当たらなかった。

○正確に伝えている文献もある。例えば、別記の山田昭夫の論考では、「戦後、倉庫となっていたが1948年（昭和23年）の失火で姿を消し、現在は中央児童相談所が建っていて昔日の面影を見るよしもない」（⇒1960年（昭和35年）2月）

○1944年（昭和19年）12月時に買い上げられたのは全焼した旧校舎だけだったので、建物の焼失は、土地の貸主側の財団法人札幌遠友夜学会が強要されて貸した土地を返してもらう（使用継続を打ち切る）好機となった。

○借主側の札幌逓信局の、この時の状況把握と事後の対処状況について、後身の団体には記録が残されていないことが判明した。編著者・白佐の照会に対して、現存する後身の1つ「公益財団法人通信文化協会」の「同・博物館部」も、もう1つの「NTT東日本」の「同・情報通信史料センター」も、「調査の結果、該当する資料の所蔵がない」と回答してきた。

○編著者・白佐からの質問を契機に作成された調査結果が、国立国会図書館「レファレンス協同データベース」の「レファレンス事例詳細」に札幌市中央図書館提供で掲載されている（2023年（令和5年）1月2日更新、検索語「遠友夜学校」で読める）

◎1948年（昭和23年）10月下旬から11月にかけて、「財団法人札幌遠友夜学会」は貸与土地の返却を実現するべく北海道庁へ働きかけた。

○社会事業の先駆者であった遠友夜学校は、社会事業団体の連盟や協会において早くから指導的役割を担い、代表・校長の半澤洵は、戦前の1940年（昭和15年）9月10日から「札幌市社会事業協会」の理事長に就任し、閉校後も引き続きこの要職に就いていた（半澤は1972年（昭和47年）9月死亡時まで理事長を務めた）。終戦前後の混乱期を含めて社会福祉事業の情勢を熟知し先頭に立って行動していた半澤は、新設置の児童相談所が庁舎建設用の土地を探していることを当然知っていた。

○旧校舎の全焼を知った半澤は、ただちに、貸している土地を取り戻す絶好の理由

にこれが使えると判断し、高倉新一郎に実務を託し、道庁に借りてほしい旨の話を持ち込み、内諾を得たうえで貸与地返却要請の書簡を札幌逓信局へ送付する手筈を整えた。(ただし、高倉は、理解の不十分からか知り過ぎていたからか、不本意であったかのような経過記録を、のちの論述の中で書いている)

○後述のように、実情は、「財団法人札幌遠友夜学会」(学校の財産の後処理を託されていた旧理事の半澤と高倉が急きよつくった会)が「せめてもの思い出にと、新渡戸先生が子供が大好きだったことから道立児童相談所に使ってもらった」のであった。

○『児童相談所』は、新憲法のもと、児童の健全な育成の支援と福祉の積極的増進を基本精神とし、1947年(昭和22年)12月12日に公布された『児童福祉法』によって都道府県は設置を義務づけられた。無料の各種児童相談と児童福祉の行政措置とを行う総合的児童福祉専門機関が誕生した。北海道の場合、第1番目の『札幌児童相談所』は、北海道条例第32号に基づき、1948年(昭和23年)7月10日に設置された。

○旧札幌遠友夜学校旧校舎の焼失当時、設置されたばかりの札幌児童相談所は、札幌市南14条西16丁目所在の私立少年教護施設(旧感化教護施設)「財団法人札幌報恩学園」内に仮庁舎を置き、暫定的に開設したばかりであった。

○貸主の財団法人札幌遠友夜学会側が、坪1圓という無料同然の借料にして貸与条件は何もなしとしたので、電光石火、あうんの呼吸で北海道庁も借りることを決め、返却実現の仲介役を引き受けた。(急いでいて思いが及ばなかったのか、そのほうが良策と判断したのか、貸与条件は借料以外はいっさいなかった)

○このとき、北海道庁側では、児童福祉施設において札幌遠友夜学校の精神や実践を再現する、学生のボランティア活動を期待する思惑もあったようである。1949年(昭和24年)4月2日付けの『北海道新聞』の社説は、別記のように、この動きを伝えている。

◎1948年(昭和23年)12月(日付不明)、財団法人札幌遠友夜学会理事・半澤洵

は札幌逓信局長宛に、賃貸契約打ち切り意向と貸与地返却要請を書簡で伝えた。

○同会理事・高倉新一郎起案の書簡では、「……手元に残った唯一の土地は設立者（編著者・白佐補注：新渡戸稲造夫妻を指す）の志を永遠に記念する事業に使用致し度く……まことにご不幸につけ込んでの申入にて心苦しく存じますが……」と「借入契約書」の継続を打ち切る理由を述べた書簡を札幌逓信局長宛に送った。（北海道大学大学文書館所蔵資料の中に、下書きと控えの写しが残っている）

○次の貸与先・北海道庁の仲介関与は効果的で、土地の取り戻しは迅速に実現した。貸与していた土地は1949年（昭和24年）3月末日までに同会へ返却された。戦争末期、不本意に強制された土地の貸与はわずか4年で終結した。

○この時の状況を、半澤は「……戦後間もなく、逓信局の復興資材がどっと入荷した日に、校舎は焼けてしまった。原因は腐ちた2階が、荷の重さにたえず落下して、下の部屋のストーブをつぶしたためだということです。そのあとは道立児童相談所に使ってもらっていた。……」（1966年（昭和41年）7月発行の『ひらけゆく大地の蔭に』p.124、座談会時発言）と語った。

○また、高倉も、それ以前の記述で、次のように書いていた。「……終戦後間もなく、逓信局の復興資材が（どっと）入荷した日、その校舎も亦（また）烏有に帰してしまった。原因は腐ちた2階が荷の重さに耐えずに落ちて（たえず落下して）、下の部屋のストーブをつぶしたためだという。その跡には、せめてもの思い出にと、（新渡戸先生が子供が大好きだったことから）道立児童相談所が建てられた（に使ってもらった）」（1953年（昭和28年）12月発行『北海道社会福祉』1巻2号p.25。括弧内は、1964年（昭和39年）6月、札幌遠友夜学校発行『札幌遠友夜学校』p.2へ転載する時に変えられた文言である。そして、後者が1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』p.11へ転載された）

○ところが、後年になって高倉は、次に示すように、我田引水的な強気の説明をしている。

○「……建物は買上げられたが、土地は依然夜学校のものであった。その建物が無くなった以上、土地は明け渡して貰う筈である。丁度その時、道では新しく出来た

少年指導所の敷地を探していて、この土地に目をつけ、使用を希望して来た。元々夜学校の事業は少年の指導にあった。土地の利用ならこの方がいい。理事会は道に交渉を任せ、逓信局と話をつけて借りて貰うことになった。しかし、その指導所の性格が変わって、要監視少年収容所となったので近所から抗議が出るようになった。道庁は児童相談所にしてくれたが、……」(1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.27)。

○これとそっくりでありながら、重要な点で違う記述が、1984年(昭和59年)7月発行の『明日への架け橋』p.60～61に載った。「法人財産であった建物は逓信省の倉庫となっていたが、敗戦後間もなく、校舎2階に新しく入った積み荷の加重で2階の床が抜け、下で燃えていたストーブをつぶし炎上。荷は主に紙であったので火のまわりも早く全焼してしまった。そしてもうひとつの財産である土地だけが残った。そのころ道は少年指導所の敷地を探しており、この土地に目をつけ、使用を申し入れしてきた。元々夜学校の事業が少年の指導にあったことから理事会は貸与を承諾することにした。しかし、その指導所の性格が変わり、要監視少年収容所となったので近所から抗議が出るようになり、道は児童相談所に転用することにした」

(この説明では、旧校舎も逓信省に貸与していたかのように述べている。このことが、旧札幌遠友夜学校の重要書類類が火事で失った説を支える根拠になった。例えば、2014年(平成26年)7月26日付け『朝日新聞』掲載の寄稿で、中川厚雄は生徒名簿等の紛失を校舎の焼失によるとしている)

○前記の説明を追認する関連論文も著された。「……教育機関の充実はもはや遠友夜学校の復活を不要なものとした。このため跡地は新渡戸の意志を汲み、社会教育・社会福祉の関係で使われるようになる。まずは北海道が少年指導所(注57)、次いで中央児童相談所として使用した。……」(注57)……この「少年指導所」なるものの根拠法令・事業内容については不明。北海道立文書館・道庁保健福祉部にも問い合わせたが判明しなかった」(2003年(平成15年)2月発表の三上敦史論文p.235およびp.239～240)

○これら高倉・札幌市・三上の記述にある「少年指導所」や「要監視少年収容所」

という機関は存在した事実はない。存在しなかった所について問い合わせても答えが得られるはずがなかったのである。当事者と公機関と学者が書いたものだけに、実に不可解な記録である。

○実際は、1948年（昭和23年）10月14日の火災発生後、児童相談所に貸与するまで半年にも満たない短期間だったのであるが、高倉らは、火災発生を1946年（昭和21年）と誤解していて、1949年（昭和24年）4月までの空白を埋めるために、仮想施設を説明に挿入したと推測される。（「少年指導所」等の根拠をあえて探せば、当時、札幌児童相談所が仮庁舎を置いていた札幌市南14条西16丁目所在の「札幌報恩学園」は、現在の「児童自立支援施設」の前称「教護院」のまた前称「少年教護院」（非行児童の教護施設。旧感化院）であったからであろう）

◎1949年（昭和24年）4月1日、財団法人札幌遠友夜学校と北海道立の札幌児童相談所との間で「土地貸借契約書」（北海道大学大学文書館所蔵）を締結した。

○「財団法人札幌遠友夜学校」は、返却後の所有地を改めて「札幌児童相談所」に貸与した。

○貸人は「財団法人遠友夜学校 半澤洵」、借人は「札幌児童相談所長 中河原道之」であった。（この契約から「財団法人遠友夜学校」の名称を復活させた）

○所在地は「札幌市南4条東4丁目1番地丙と同2番地乙」、貸借物件は「財団法人札幌遠友夜学校敷地521.7坪」とされた。貸借料は当面1箇月坪1圓とした。

○目的は「札幌児童相談所（一時保護所を含む）敷地として使用する」とされた。

○貸借期間は、1949年（昭和24年）4月1日から1年間とし、いずれかの意思表示が事前になければ、1年更新で延長できるものとされた。

○1949年（昭和24年）9月4日、北海道条例第59号に基づき、札幌児童相談所は、名称を「北海道中央児童相談所」と改称し、庁舎を札幌市南4条東4丁目1番地に新築・移転した。（これに伴う「土地貸借契約書」の借人名変更は大幅に放置され、北海道中央児童相談所の主事・渡辺恒義から高倉新一郎宛の書簡〈1950年（昭和25年）12月20日付〉で通知されて、1951年（昭和26年）4月1日から正式に適用さ

れた)

◎1949年（昭和24年）4月2日、『北海道新聞』朝刊は社説「遠友夜学校の精神」を掲載した。

○北海道新聞社の著作権消滅を照会・確認し、全文を次に転載した。

○「道民生部では児童保護の普及徹底を期するために、ひろく民間篤志家の協力を得るよう計画を立てている。この計画のシンは児童相談所などの児童施設に対して学生の関心を吸い寄せようということにある。つまりその方面における学生のヴォランティア運動を起こそうというのである。ことに札幌では、故新渡戸稲造博士の遠友夜学校の敷地が児童相談所建設用地として提供されたのを機会に、遠友夜学校の精神や実践を再現したいと企図しているようだ。／児童の心身を健康に育て、その生活を保障し愛護するのは国民一般に課せられた義務である。明るい社会を建設するためにはこのことが進んで守られなければならない。だれでも知っているはずのことだが、実際にはまだまだ理解されておらない。率直に言って、児童福祉法が施行されてからまる1年になる今日やっと子供を保護する機関の設置に糸口がついたという程度である。／まだまだ不十分な施設、機関で児童保護の目的を達しようというのはもちろん容易な業ではない。ことに貧乏のどん底から立ちあがろうとする日本経済の場合、児童施設だけを整備するというわけにもゆくまい。またたとえ整備が十分にそろったにしても、往々半身不随に陥る官製のやり方では、これに血を通わせて活発な脈動を与えることはできない。だから、民間篤志家、ことに学生の発意による協力が求められるならば、児童保護の前途に光明が点り得るといえよう。／遠友夜学校はかつてサムライ部落と称された札幌市豊平のスラムのまん中にあった。戦時中逋信局倉庫として使用されていたが、昨年火災のために建物は跡形もない。／遠友夜学校は明治27年（1894年）に故新渡戸博士によって開設された。当時、アメリカに遊学中の博士にとって、社会施設の発達とその施設を支えている人たちの『人類愛の精神』とを学んだことは、最大の収穫であった。日本の貧しい人たちが惨めな生活のうちに、顧る人も少く、放置されているのと比較して、あた

たかい愛の手を差し伸べようとの働きがいいききと行われているアメリカの社会は、博士にとって大きな感激であった。博士は博士自らの手でこれを実践した。／札幌独立キリスト教会付属の豊平日曜学校が経営困難で閉鎖したとき、博士はこれを貧困家庭の慰問ならびにその児童、晩学者に普通教育を与えるために復活し、遠友夜学校が開かれた。日曜学校の教師と札幌農学校生徒の有志が博士の協力者であった。／家庭訪問による病者の看護、不具者の保護、幼児の保育などが慰問の仕事であり、教育事業としては毎夜、普通教育のほか看護法、茶道、裁縫、編物、唱歌などがとりあげられたが、数年の後、夜学校だけの事業を進めることになった。この学校は新渡戸博士の精神をうけ継いだ若い札幌農学校の学生たちによって、バトンをうけとるようにつぎからつぎへと継承され『正義を愛する心』が大きく成長していった。

『薄暗い燈火にじゅんじゅんと道を説かれ、愛を説かれた』博士の姿が、そのまま学生心のなかに生きていたのである。／店員、職工、行商、職人、日雇その他生徒は昼間いろいろの労働に従事している。その疲れのために夜間授業は少なからぬ困難をともなった。だが、若いヴォランティアの情熱は着々それを克服していったし、学生たちが昼間働く生徒たちにふしだらな姿を街頭でみられないように身をつつしむ習慣をつくりあげるよう努めることがよい刺激になったと、当時教師の一人であった人が語っている。／学生の自発意による行為には常に内面的な楽しみをともなっているものである。ただ、功利的な見方や皮相の見解だけでは容易にその楽しさを理解されるものではない。ことにいままでの官製方式はとかく若い人の熱情の芽をさえも摘みとりがちである。だから、自由な素地に伸び伸びと育てあげ得るだけの度量がなければならない。が、反面、このような運動はとかく一部政党の勢力拡張に利用されがちである。この間の調節はよほど難しい。すでに計画を立てた以上またその趣旨に筋が通っているかぎり、その達成を期待する。しかし、単なる机上計画ではとうてい成し得るものでないことを銘記すべきであろう」

○『北海道新聞』（前身紙を含む）が「社説」に「遠友夜学校の精神」を取り上げたのは、編著者・白佐が知る限りでは、これが唯一である。

○旧札幌遠友夜学校跡地に新築された児童相談所などを拠点とする学生のボランテ

ィア活動の再興が期待されたが、再び芽吹く機運は高まらなかった。

◎1951年（昭和26年）3月16日、財団法人遠友夜学校理事の宮部金吾（北海道帝國大學名誉教授）が召天した。満90歳であった。

○宮部は、1897年（明治30年）10月2日、新渡戸稲造が病氣療養のため札幌を離れて以来、友人として遠友夜学校の代表（校長代理）を引き受け、1905年（明治38年）月日不明まで務めた。その後も、通称「遠友會（遠友夜學會＝遠友夜学校の資金的後援会）」の責任者を務めていた。また、1923年（大正12年）8月20日に「財団法人札幌遠友夜学校」が設立されてからは、4人（実質3人）の理事の1人として、責任ある任務を死亡時まで引き受けてきた。実に53年にわたる貢献者であった。

◎1951年（昭和26年）4月1日、「土地貸借契約書」が書き改められた。変更の理由は、貸人・借人名が改称されたため、契約の内容は以前と同一とされた。

○貸人は「札幌市北6条西12丁目 財団法人遠友夜学校理事長・半澤洵」、借人は「札幌市南4条東4丁目／北海道中央児童相談所長・長野襄」であった。

○この契約書による貸与はそのまま更新され、事実上明け渡し日、1962年（昭和37年）4月7日まで続いた。（児童相談所への貸与は通算13年間に及んだ）

○なお、理事の1人・宮部金吾が、この年・1951年（昭和26年）の3月16日に90歳で死亡していたので、「財団法人遠友夜学校」の理事は、半澤洵と高倉新一郎の2人となっていた。

◎1952年（昭和27年）10月15日（新渡戸稲造の召天日）、新渡戸稲造の肖像画（葬儀の折の遺影写真）が切手に採用され、シリーズの11番目に登場した。

○1949年（昭和24年）～1952年（昭和27年）に発行された「切手文化人シリーズ（18種）」の1枚で、18人の画家、作家、教育者など、文化活動において功績を残した人物の肖像が描かれている。「新渡戸稲造」（切手番号189）は、発行枚数は1,000万枚で、シートは20枚構成、青みがかった灰色の切手で、新渡戸稲造の肖像と額面

の「10円」などがデザインされた。新渡戸は教育者であり、国際連盟事務次長等を務め、著書『武士道』が世界各国で発行されベストセラーとなったことなどが評価された。

○2003年（平成15年）12月、十和田市立新渡戸記念館発行『新渡戸記念館だより』第35号p. 1に「新渡戸稲造の『文化人切手』」の記事で紹介された。

◎1953年（昭和28年）12月1日発行の機関誌『北海道社会福祉』第1巻第2号に、高倉新一郎は概説「札幌遠友夜学校」を寄稿した。

○掲載した機関誌は「北海道社会福祉協議会社会福祉研究所」発行によるもので、同誌のp.24～49に収載された。肩書は「北海道大学農学部教授農学博士」であった。

○執筆者の高倉は当時51歳、北海道大学経済学部教授・農学部教授併任時に書いたもので、旧財団法人札幌遠友夜学校閉校時の副校長・理事であり、閉校後の敷地処分を託された残務処理理事の1人で、同校のことを熟知する関係者として寄稿を依頼された。

○他に適切な概説書がなく、要望が多かったのであろう。高倉は、この掲載誌の「札幌遠友夜学校」の部分を抜き刷りし、表紙を付けて冊子（単行本）にして、個人的に遠友夜学校卒業生などの関係者に無料で配付した。閉校後、初めて著され、しかも内容の濃い概説書であったので、広く読まれた。

○以降、この論述は、同校を概説した貴重な原典的文献として、後年になってもしばしば引用されてきた。ただし、のちの引用文は、1964年（昭和39年）6月に改稿されたものを使用していることが多い。1995年（平成7年）9月発行、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』など、その後に全文を収録した記述は「『北海道社会福祉』1巻2号からの転載」と注記されていても、実際は随所に加筆・修正がなされた改稿後のものである。（のちの文献引用において、この区別がほとんどなされていない。相違点は、1964年（昭和39年）6月に開設された札幌市勤労青少年ホームのことがふれられているか否かで、判別は容易にできる）

◎1954年（昭和29年）4月27日、札幌遠友夜学校の元生徒・元教師等を会員とする「札幌遠友会」が組織され、札幌市で第1回総会が開催された。

○1954年（昭和29年）3月8日、「札幌遠友会」準備世話人懇談会（幹事長・鈴木良雄）が既に開催されていた。準備は、札幌遠友夜学校卒業生の会「光遠会」が中心になって進められていた。

○総会に出席し挨拶した最後の校長・半澤洵は「……戦争のためやむなく閉校となり、夜学校がなくなったことは残念だが、財団の土地は残っているので、こんご皆さんと札幌遠友会で親睦をはかりながら話し合いを持ち最もよい計画を立てて実行していきたい」という主旨の説明と決意を語った。（⇒1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.89～90。「札幌遠友会」結成の熱気を察知し、このころ既に、半澤と高倉は、中央児童相談所への貸与を打ち切り、校地跡地の別な利用法を探るよう課題意識を持たざるを得なくなっていた）

○会則を定め、会長に半澤洵（前校長。当時、北海学園大学教授在任中）、副会長に高倉新一郎（前副校長。当時、北海道大学教授在任中）と安藤勇逸（元遠友夜学校生徒）、幹事長に鈴木良雄（元遠友夜学校生徒）を選出した。

○第1回総会での決定事項は、①会員名簿を印刷・配付する、②会員の親睦を図る、③学校50年の記録を編纂する、④校地の活用問題を検討する、⑤記念碑を建てる、などであり、今後、役員会で検討し、総会にはかって実行することとした。

○その後、会員名簿の充実を図り、鈴木幹事長を中心として精力的に各種事業を展開し、毎年、親睦の総会が開催された。以降の総会でいろいろと検討され、1960年（昭和35年）ごろまでに方向づけや実施が議決された事項の主なものは次のような内容（順不同）であった。これらは、1962年（昭和37年）以降、順次実行に移され、最終的にはすべて実現した。

①札幌遠友夜学校の校史を編纂発刊する。（高倉を委員長とする「校史編纂委員会」は、1957年（昭和32年）8月、全会員および関係者を対象に、資料・写真等の提供と思い出等の原稿依頼の文書を発信した。この結果のまとめは、1964年（昭和39年）6月10日に冊子『札幌遠友夜学校』として刊行された）

②財団所有の旧遠友夜学校跡地を札幌市へ寄付して、次の件を実現する。

- ・跡地の一部に児童遊園地をつくり、地元住民の福祉に寄与する。（「新渡戸児童遊園」として、1962年（昭和37年）10月6日に開園した）

- ・札幌市勤労青少年ホームの建設を実現させ、建物内に「記念室」を設け、新渡戸博士と遠友夜学校の資料を保存・展示・公開する。（新渡戸稲造と遠友夜学校の「記念室」として、1964年（昭和39年）6月11日に設置された）

- ・新渡戸稲造博士顕彰碑を札幌市勤労青少年ホームの敷地内に建立する。（建立は1979年（昭和54年）11月23日に実現した）

③有島武郎文学碑を札幌市大通西9丁目公園内に建立する。（有島は、半澤洵と札幌農学校の同期生であり、遠友夜学校の教師を長く務め、同校の第3代目代表にもなった有名な作家である。建立は1962年（昭和37年）9月22日に実現した）

○財産の土地の寄付先を札幌市とし、勤労青少年ホームの敷地用と指定したのは、創業者・新渡戸稲造夫妻の遺志を永久に遺す場として最もふさわしいと判断されたからである。

○1957年（昭和32年）、国は勤労青少年ホーム建設費補助を制度化しており、1959年（昭和34年）2月に名古屋市に開設された日本最初のホーム「愛知県勤労青少年ホーム」が青少年にもたらす福祉的効果の大きさが立証され、やがて札幌市でも必置と予想されたこともあった。

○このことを裏づけるような記述の記録もある。「……土地を処分することができずにおりましたところ、30年、市が勤労青少年センターの用地を探していると聞き、これならば夜学校の目的を嗣いでくれる恰好の事業だと考え、……」（ここで30年とあるのは昭和のことで、1955年（昭和30年）である）。（この文は、発行年月日不記載の『新渡戸稲造博士顕彰碑建立記念誌』に収載の記事、顕彰会会長・高倉新一郎著「新渡戸先生と札幌」p.12～17のp.12に書かれている。これは1995年（平成7年）9月発行の『思い出の遠友夜学校』p.218に転載されている）

○「札幌遠友会」の解散年月日は不明である。「札幌遠友夜学校創立百年記念事業会」が1995年（平成7年）にいくつかの事業を実施したのを最後に、中心的・主導的役

割を果たした関係者や会員の高齢化・死亡に伴い、自然解散になったと思われる。

○後に結成される関連の諸団体の中で、この「札幌遠友会」の流れを最も濃厚に継承するのは、2018年（平成30年）4月1日設立の「札幌遠友会再興塾」である。

◎1957年（昭和32年）3月31日、北海道教育委員会は北海道教育研究所編纂による『北海道教育史／地方編2』を発行し、その中で「私立遠友夜学校」にふれた。

○この書は、北海道教育委員会が北海道教育研究所に同研究所長を委員長とする「北海道教育史編纂委員会」を設置し、1955年（昭和30年）から発行している『北海道教育史』シリーズの1冊である。

○北海道における学校教育の開始から1945年（昭和20年）までの内容をまとめた第1期北海道教育史編纂事業全7巻（全道編全4巻、地方編全2巻、総括編1巻。1955年～1970年（昭和30年～同45年）に刊行された）中の地方編第2巻目に位置づけられる。

○遠友夜学校は、「私立遠友夜学校」の名称で、札幌地方の諸学校の実業補習学校の1校と位置づけられ、p.209～210で次のように解説された。

○「明治23年（1890年）、クラークの系をひく札幌独立（札幌基督）教会の有志によって、日曜学校が開かれ、豊平日曜学校と称した。同地域は区（札幌区）の中でも貧児の多い所であった。同27年（1894年）新渡戸稲造は日曜学校有志とはかり、遠友会と称し、貧児及び晩学のものに対して夜学校を開いた。この費用は新渡戸マリヤ（メリー）夫人の喜捨したものである。夫人の郷里（米国）において、多年夫人の家に働いた一老婦人があったが、死に臨んで、その遺産を同夫人に託したのであった。同33年（1900年）文部省規定の尋常科及び高等科の課程を設け、34年（1901年）には校舎を再築した。同40年（1907年）より宮部金吾、大島金太郎らが代表者になって運営し、教師は熱心な学生らが進んでこれにあたり、信仰の喜びにひたりつつ授業を行った。同42年（1909年）から有島武郎が大島にかわった。彼の人道主義の一端を実践に移したのである。次いで蛸崎知三郎（蛸崎知二郎）、半沢洵らにかわり、大正10年（1921年）中等科を併設した。かくて全く人間愛によって奉仕され

た同校は、昭和19年（1944年）開校50周年をむかえた。時まさに戦争末期の混乱の中にあっただので、これを機会に輝く閉校式を挙行することとした。この灯のもとに集まった生徒は、卒業生1,600名、中途退学者を含めれば実に5,000名を突破し、本道教育史に永遠に伝うべき美績である。（注：文中のほとんどの括弧内は、本書の編著者・白佐による補足である）

○昭和19年（1944年）3月末で閉校（廃校）した札幌遠友夜学校は、以降も発行し続けるシリーズにおいて、この巻においてだけ取り上げられた。

◎1960年（昭和35年）2月、山田昭夫（藤女子大学助教授）は学術誌に論考「有島武郎と札幌遠友夜学校—新資料による雑考—」を発表した。

○本稿は学術誌『国語国文研究』（北海道大学国文学会発行）15号p.35～51に掲載されたものである。

○山田は、北海道立図書館所蔵の「札幌遠友夜学校記録」その他の、明治42年（1909年）～大正4年（1915年）の書類から、従来、事実在即した第1資料が非常にとぼしかった有島の行動の様相を発見した、という。山田は「とくに手薄であった伝記の白紙の部分、具体的に事実そのもので彩色することのできる貴重な資料である」と述べている。

○山田がいう北海道立図書館所蔵「新資料」とは、1921年（大正10年）、札幌遠友夜学校が収集・整理した『遠友夜学校記録集1-1、遠友夜学校一覧1号他』、『遠友夜学校記録集1-2、遠友夜学校一覧1号他』および『遠友夜学校記録集2、遠友夜学校一覧第2号』（いずれも手書きの事務書類で角印「財団法人札幌遠友夜学校印」が押されている）であることが特定できる。道立図書館が記録集を入手した経緯・時期については不明である。資料の一部は1964年（昭和39年）6月10日発行の冊子『札幌遠友夜学校』に収録された。

○1967年（昭和42年）3月1日、同稿は、北海教育評論社発行『北海教育評論』20巻3号に転載された。

○1973年（昭和48年）9月25日、同稿は、さらに詳しい後記・補注を加えて、右

文書院発行の山田昭夫著『有島武郎・姿勢と軌跡』のp.175～214に収載された。

○そして、(他との重複を避ける配慮か) 初出稿の前半にかかれた、全体の約4分の1に相当する「札幌遠友夜学校沿革小史」が除かれて、一部改稿のうえ、1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.153～176に転載された。

○本稿は『北海道大学附属図書館北方資料データベース』高倉パンフ 184-01-01(北海道大学附属図書館北方資料室)に収録されている。

◎1961年(昭和36年)年6月15日、北海道中央児童相談所で火災が発生し、建物の一部を焼失した。これを機に、北海道庁は借地返却と新築移転の実施を早めた。

○1961年(昭和36年)6月20日付け『北海道新聞』夕刊p.3に「少年、放火容疑で検挙 中央児童相談所の火災」との小さな記事が載った。

○この火災で、借人の中央児童相談所側は、焼失部分の修復は最小限にとどめ、戦後の古木材で建築した老朽庁舎を解体し、土地を財団法人札幌遠友夜学校に返却し、北海道庁の隣接地に移転・新築するという以前からの計画を早めることにした。

○以前からの道庁の計画とは、北海道中央児童相談所を含めた道立の出先機関を道庁所有地の北3条西7丁目に集約して効率化を図るというものであった。既に同住所には、1950年(昭和25年)7月末から北海道立教育研究所が、1954年(昭和29年)10月から「北海道立社会福祉館」が新築・設置されていた。この福祉館が1959年(昭和34年)3月14日の火災で焼失し、その再建築も急がれていた。バチエラー会館の移転とからめ、一気に実現することになった。

○以前から描かれていた計画は、中央児童相談所長・長野襄も、札幌遠友会会長・半澤洵も、札幌市助役・小塩進作も承知していた。このころの半澤は、札幌市社会事業協会理事長のほか、いくつもの社会福祉団体の要職を引き受け、さらに私立大学の教授にも就任していた。

○貸人の財団法人遠友夜学校にとって、またしても火災が契機で、土地貸借契約打ち切りを早め、予定されていた札幌市へ寄付の機会が早まった。また、内々寄付受け入れの意向を示していた札幌市の関与によって、土地返還手続きは迅速に進んだ。

○高倉新一郎の著述にさりげなく挿入された説明に「……北大で新渡戸教授の流れを汲む農業経済学科を卒業し、夜学校敷地寄付の際中心となって尽力した小塩進作元札幌市助役……」(1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.30)がある。兎相の火災を知って最も精力的に仲介役を務めた陰の立役者は、当時の札幌市助役・小塩だった。(⇒1993年(平成5年)12月)

○財団法人札幌遠友夜学校と北海道中央児童相談所との間では、口頭だけで期間切れの契約消滅の形をとったらしく、1961年(昭和36年)後半になされたはずの解約手続きの証拠書類は双方に残されていない(事実関係がはっきりしない)とされる。

○兎相の火災発生で借地返還が具体化したので、内々に進められていた札幌市への条件付き寄付の話はいよいよ表面化し、遠友夜学校側の半澤洵理事長・高倉新一郎理事と札幌市側の青少年問題担当部署、厚生局長・山田大秋とが、1962年(昭和37年)1月、詰めの懇談会を開いた。この席上、遠友夜学校側から寄付条件の提示がなされ、札幌市側から最初に寄付依頼書(条件受入計画書)を提出する旨の確約がなされた。

○形式を整えるために、まず、財団法人札幌遠友夜学校は、1962年(昭和37年)1月に理事会を開催し、札幌市への寄付を正式に決定した。このことが札幌市側に伝えられた。

◎1962年(昭和37年)2月14日、財団法人札幌遠友夜学校へ札幌市から無償提供の寄付依頼書が提出され、同年4月7日に札幌市への敷地の寄付がなされた。

○依頼書の件名は「旧道立中央児童相談所敷地の利用計画について」(札社第193号)で、依頼者は「札幌市長・原田輿作」、宛先は「財団法人遠友夜学校理事長・半澤洵」であった。文書には、青少年の健全育成を目的とした施設設置計画内容が示された。

①青少年の情操教育及び生活指導または青少年のグループ活動の育成を目的とした施設を設置する(例:青少年の会館、勤労青少年会館等)。

②保護に欠ける児童の保育所を設置する。(この件は、この文書の中だけに示され、検討すらされなかった謎の1項目である。のちに札幌市へ寄付時の約束を守るよう

求める市民運動も、なぜかこのことを問題視していない)

③前2項の施設後の空き地に児童の遊び場を設置する。

④新渡戸先生並びに遠友夜学校関係の業績を記念顕彰する施設、設備を、市と財団とで協同して設置する。

○これを受けて、1962年（昭和37年）3月31日、財団法人遠友夜学校は札幌市へ「寄付申立書」を提出した。申立者は「財団法人遠友夜学校理事長・半澤洵」、宛先は「札幌市長・原田興作」であった。申立書の内容は「本法人の所有する土地（札幌市南4条東4丁目1番地丙521坪）については法人解散の認可を得た後次の条件を附して寄付いたします」とあり、「寄付条件：昭和37年（1962年）2月14日札社第193号をもって貴殿より御協議のあった、施設設置計画による。添付図：旧遠友夜学校跡地・施設計画案（図面は編著者・白佐が省略した）」とあった。

○1962年（昭和37年）4月7日に北海道中央児童相談所の移転に伴い、北海道から明け渡された所有地を、財団法人遠友夜学校は、ただちに札幌市へ引き渡した。同財団は、約束の実現を注視するだけの団体となった。（1967年（昭和42年）8月30日には財団自体も解散してしまう）

○札幌市助役の小塩進作は、寄付作業の過程でも、1964年（昭和39年）6月、札幌市勤労青少年ホーム内に「遠友夜学校記念室」を開設し、運営していく過程でも、調整役として深く関わった。

○札幌市は、この時点から2014年（平成26年）3月まで、本件関係の諸史料・資料の出納簿作成を実施しておらず、市会計規則の違反を犯し続けた。このことは、2014年（平成26年）3月13日開催の予算特別委員会で指摘され、はじめて明らかにされた。土地の譲渡に重点が置かれたためか、寄付された遠友夜学校の諸資料に関して、授受の目録もなく、調査・点検も大雑把な実施にとどまり、正式な文書の交換もなかった。寄付した側・受けた側の双方で、貴重な文化遺産（文化財）の保存・維持という認識はうすかったと想像される。

○1962年（昭和37年）7月25日、札幌市は、労働省への調査回答の中で、遠友夜学校跡地に勤労青少年ホームの建設計画があると回答した。（労働省の調査は、同年

7月9日付けで札幌市に送付された「勤労青少年ホーム設置計画の調査」であった)

○5年後の1967年(昭和42年)8月30日、「財団法人札幌遠友夜学校」は、札幌市との間で以前に取り交わした同意書の再確認書を交換し、完全に解散した。

○後に新渡戸精神継承団体によって蒸し返される「新渡戸先生並びに遠友夜学校関係の業績を記念顕彰する施設、設備を、市と財団とで協同して設置する」は、“最初”の設置時の約束ではあったが、“永続(永久)的”な約束条件ではなかった。むしろ、1967年(昭和42年)8月30日に交換した「同意書の再確認書」の遵守が強調されるべきであった。財団の解散は、「協同」する立場さえも放棄したことになってしまった。

◎1962年(昭和37年)4月7日、北海道中央児童相談所は札幌市北3条西7丁目に新築した庁舎に移転し、財団法人札幌遠友夜学校へ借地を返還した。

○財団法人札幌遠友夜学校の所有地は、1949年(昭和24年)4月から13年間、北海道に貸与され、この地に「北海道中央児童相談所」の建物が存在した。

○同相談所の移転先は、記念館になっていたジョン・バチエラーの自宅跡で、1953年(昭和28年)から北海道の所有となっていた。以前から予定されていた、記念館の建物を北海道大学に寄付し移築する計画は、急ぎ1961年(昭和36年)中に進められ、「北海道中央児童相談所」の建物はその跡地に新築された。隣接の「北海道立社会福祉館」も1962年(昭和37年)1月末に竣工していた。

○「札幌市勤労青少年ホームの建設」と関連させたのちの説明では、不思議なことに、いかにも児童相談所の「移転の時期がもっと早かった」あるいは「移転して、その後になって新しくホーム建設の話題がでてきた」かのような解説が多くみられる。まず、一般に知られている高倉新一郎による説明は次の①②である。①「そしてそれ(編著者注:北海道中央児童相談所)が道庁裏に新築されて移った今日、敷地の新しい利用が問題になり、折から札幌市が勤労青少年ホーム建設のあるのを聞き、それに提供して事業と精神を引きついでもらうことにした」(1964年(昭和39年)6月の『札幌遠友夜学校』p.2、1995年(平成7年)9月発行の『思い出の遠

友夜学校』p.11)、②「その相談所が新しく北3西7の地に建てられたので、土地は全く夜学校の自由になることになった。市の生長はこの土地の利用価値を全く変えていた。……結局新渡戸校長の事業を永遠に記念する意味で、……この地帯の児童公園として市に寄附し保存して貰ったらどうだろうという半澤洵理事長の考えに基づき、この旨を市に相談した。市では丁度その時設立をせまられていた勤労青少年ホームの建設地を探している最中だった。理事会は、……（3条件）……を条件にして、昭和37年（1962年）市に引き継ぎ、財団法人札幌遠友夜学校を解散したのである」（1981年（昭和56年）9月発行の『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.27～28）。

○勤労青少年ホーム自体の説明も次のようになっている。「やがて北3西7に新しい相談所が建てられ移転したことから、再び法人の管理するところとなった。理事会は土地の利用方法について検討を重ねた結果、新渡戸校長の意志を継承するため青少年のために活用することを条件に、札幌市に寄付することを決めた。……当時の札幌市の山田厚生局長と遠友夜学校理事長半澤洵、理事高倉新一郎両氏が懇談することになった。この席上、夜学校側の意向として、……条件が示された。これに答えて山田局長は、勤労青少年ホームの設置と、空き地を児童遊園とする計画を提示した。その後、1962年（昭和37年）1月の夜学校理事会において札幌市への寄付を正式に決定し、同年3月31日付けで寄付申出がなされたのである」（1984年（昭和59年）7月『明日への架け橋』p.61）

○いずれにせよ、旧札幌遠友夜学校跡地の、明日への架け橋としての児童相談所の役割は無事果たされたのである。

◎1962年（昭和37年）9月22日、「有島武郎記念会」（会長・半澤洵）によって、札幌市大通公園西9丁目公園内に有島武郎文学碑が建立された。

○碑文は有島の小説「小さき者へ」（雑誌『新潮』1918年（大正7年）1月号に発表）の一節で、1917年（大正6年）、妻・安子が亡くなり、遺された3人の子どもに向けて書かれたものである。

きごう
○揮毫は武者小路実篤による。

○この「有島武郎記念会」は、没後40年忌を記念して1961年（昭和36年）12月18日に札幌遠友会などによって結成されたもので、札幌観光協会内に事務局を置き、1962年（昭和37年）には各種の記念行事が開催された。

◎1962年（昭和37年）10月6日、札幌市は、寄付された旧札幌遠友夜学校校地跡の一部を造成し、「新渡戸児童遊園」を開園した。

○この日、半澤洵をはじめ札幌遠友会の関係者や札幌市の関係者、地域の児童・父母等が集まり、開園式が行われた。1962年（昭和37年）は、1862年（文久2年）9月1日に生まれた新渡戸稲造の生誕100年記念に当たることも披露され、喜びを共にした。

◎1964年（昭和39年）5月10日、蝦名賢造（北海道立総合経済研究所副所長）は単行本『北方のパイオニア』（北海道放送発行）の中で「新渡戸稲造」を取り上げた。

○この書は、北海道放送（HBC）の月刊誌『ネットワーク』に「北方のパイオニア」として1963年（昭和38年）1月号～12月号に蝦名が連載した先駆者の伝記をもとに加筆し、1冊にまとめたものである。また、1993年（平成5年）2月15日には、その後「続・北方のパイオニア」として連載した分などを含めて、蝦名は『新版北方のパイオニア』（蝦名賢造北海道著作集、第6巻）を西田書店から発行した。

○北海道の先駆者の1人に選ばれた新渡戸稲造の伝記は、前書のp.57～70に、後書のp.65～78に収録された。後書の記述内容は前書のものと同ーである。

○遠友夜学校については、前書ではp.64～67、見出し「農学校教授一札幌への精神上的遺産」の中で、次のように述べている。「稲造が札幌農学校教授として、1891年（明治24年）より1898年（明治31年）にいたる9年の間、北海道教育文化の向上と発展とのために尽くした、その9年の間の唯一の有形的な遺産は、遠友夜学校という社会事業の創立であった」、「……その事業は、宮部金吾博士等を中心に、その北大出身の教え子たちによって、忠実に守られていった、北海道最古の社会事業

の1つとなった。／高倉新一郎は、もしこの遠友夜学校の施設がなかったならば、無学のうちに終わったであろう数千人の人材を育成しえなかったばかりでない、この学校の教師としてその学生時代の一部を有意義に過した数百人の北大生に、人生にたいする知識や経験を与え、ともに有用な人材として世に送り出したという功績だけではない、それらを包括して、一貫して脈々と流れるヒューマニズムの精神に打たれるのであると指摘した。／新渡戸稲造が札幌に残した、最も美しい遺産の1つは、この遠友であった」。(1953年(昭和28年)12月発行の『北海道社会福祉』1巻2号p25の記載とは、まったくではないがほとんど同一といえる)

◎1964年(昭和39年)6月1日、半澤洵は、札幌市長から札幌市勤労青少年ホーム運営審議会委員に任命された。

○札幌市勤労青少年ホーム運営審議会は、「札幌市勤労青少年ホーム条例」(1964年(昭和39年)3月30日制定)第10条に基づき「ホームの運営を円滑に行うため」に置かれ、「同施行規則」(1964年(昭和39年)5月25日制定)第7条で定められたものであり、委員30人以内で構成された。半澤は初年度の昭和39年(1964年)度の委員から学識経験者枠の1人として、遠友会会長の肩書で任命された。

○1971年(昭和46年)3月末日まで、4期8年にわたり旧札幌遠友夜学校跡地運用の推移を見守った。(しかし、退任の際、寄付者としての委員枠を確保し続ける意識にまでに至らず、後任を指名しなかった。このことで、のちに「遠友夜学校記念室」の移設や廃止の動きが出た際、寄付時の約束を^{じゅんしゆ}遵守するよう主張する者がいないことになった)

◎1964年(昭和39年)6月10日以前に、「札幌遠友会」の新渡戸稲造博士顕彰会(会長・高倉新一郎)は、石杭状の銘板「札幌遠友夜学校跡地」を建立した。

○石杭状銘板は、記念室の創設に合わせたと判断され、創設の「札幌市勤労青少年ホーム」入口付近に建てられた。正面に「札幌遠友夜学校跡地 半澤洵書」、側面に「創立年月日 明治二十七年六月十八日 創立者 新渡戸稲造」と記した小型の横長

銅板がはめ込まれた。

○この存在についてはなぜか明確な記録が見当たらない。『新渡戸稲造博士顕彰碑建立記念誌』にも記載されていないし、札幌市の関係部署に建立年月日の記録も残っていないらしく、編著者・白佐の照会に対して、札幌市からの回答は不明というものであった。のちの文献からも記録を見つけられていない。資料・論文の引用では、銘板文字の「二十七年」を「二十八年」とした誤記もある。

○2011年（平成23年）10月4日に「札幌市中央若者活動センター」が閉館・廃止されたことに伴い、石杭状の銘板は「新渡戸稲造博士顕彰碑」の前側地に向き合うように仮移設された。

○2015年（平成27年）1月には、石杭から外された2枚の小型の横長銅銘板は、造成された「新渡戸稲造記念公園」内の「新渡戸稲造萬里子両先生顕彰碑」横に設置された説明板の下部分に改めて組み込まれた。

4. 勤労青少年ホーム内記念室時代（1964～2014）

◎1964年（昭和39年）6月10日、「札幌市勤労青少年ホーム」の完成記念式が執り行われた。その建物内の遠友夜学校資料を展示する記念室の創設式典はなかった。

○開館日に先立って、前日の10日、札幌市長・原田與作は、同ホーム完成記念式典を半澤洵など関係者約100人を招き執り行われた。

○原田市長は挨拶で「故新渡戸稲造博士が、世の荒波に負けず、働きながら学ぶ人たちのために創立し、1894年（明治27年）から50年間にわたって多くの人材を送り出した札幌遠友夜学校の跡に、この勤労青少年ホームが建てられたことは、まことに意義深いことです。今後とも関係者のみな様の御協力をいただき、この施設が遠友夜学校の理想と伝統を引き継ぎ、有為な社会人を送り出す場となるよう努力いたしたい」と述べた。半澤からは「札幌遠友夜学校の理想を受け継ぎ、働く青少年のいこいと修養の場になるよう願っています」との言葉があった。

○式典において、市長は感謝状「財団法人遠友夜学校殿」の感謝状を半澤に手渡した。文面は「貴校はかねてより勤労青少年の育成に深い関心をもたれこのたび札幌市勤労青少年ホーム建設地として特段の御芳志を寄せられましたことは市政に大きく寄与するものでありまことに感謝に耐えませんここに深甚なる謝意を表します昭和39年6月10日 札幌市長 原田与作」とあった。（感謝状は土地に対してであった）

○この時の様子を書き残した、1984年（昭和59年）7月札幌市発行の『明日への架け橋』には、遠友夜学校関係資料の記念室の創設については何も記述されていない。同ホームの中の1室としか位置づけられていなかったと思われる。また、半澤の肩書を「遠友夜学校の半沢会長」と2度も書いている。（「半澤」を「半沢」とした点はさておいて、当時の役職は「札幌遠友会会長」であり、財団法人札幌遠友夜学校では理事長・校長であった）

◎1964年（昭和39年）6月10日、「札幌遠友会」は、校史冊子『札幌遠友夜学校』を発行した。

○この冊子は、同日に行われた「札幌市勤労青少年ホーム」の完成記念式と記念室の創設に合わせて発行され、式典の出席者や以降の来訪者に配付された。

○財団法人札幌遠友夜学校編集（編集委員長・高倉新一郎）、発行者・財団法人札幌遠友夜学校代表者半澤洵、A5判、全116ページの冊子、非売品であった。この刊行には、高倉と共に同会の副会長を務めていた安藤勇逸（札幌印刷株式会社社長）の特段の貢献があった。

○第3代校長と最後の財団の代表を務め、多年にわたりこの事業に責任を持ってきた半澤洵は「序」で、由緒深いこの土地を寄付することによって、①遠友夜学校の精神を引き継ぐ勤労青少年ホームができ、②同校の精神を記念する記念室が設けられ、③屋外に児童遊園ができ、同校が目的とした事業が永久に残されることになったと、この上ない喜びを語った。（しかし、このうちの①と②は2011年（平成23年）10月4日をもって、この敷地から消えることになる）

○冊子の構成は大別すると、本文と付録とからなり、p.1～42に掲載の本文「札幌遠友夜学校」は、高倉新一郎執筆によるもので、1953年（昭和28年）発行の『北海道社会福祉』1巻2号に高倉が寄稿したものを下敷きにして、随所に加筆・修正を加え、新漢字を使った改稿であった。これこそが、しばしば引用された高倉論文の原文となる記述であった。

○これが若干の修正の後、1965年（昭和40年）6月、民主教育協会発行、著書『札幌遠友夜学校』（IDE教育選書90、全50ページ、高倉新一郎著）、および、1995年（平成7年）9月発行の『思い出の遠友夜学校』のp.9～56（記事「札幌遠友夜学校」高倉新一郎著）に収録された。

○付録の「札幌遠友夜学校沿革」（p.45～61）と「思い出集」（p.62～106）もまた、1981年（昭和56年）9月発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』や1995年（平成7年）9月発行『思い出の遠友夜学校』の記事等に再録されたり、資料の基にされ

たりして、後年の記録書づくりに生かされた。

○「札幌遠友夜学校沿革」は、かつての古い記録「遠友夜学校一覧」などを史料によって増補し、「前史」「創草時代」「大島代表時代」「有島代表時代」「蠣崎代表時代」「野中代表時代」「小谷代表時代」「半澤代表時代」に分けてまとめられた。「創草時代」と「半澤代表時代」が詳しい。(⇒1898年～1899年(明治31年～32年)に書いたと思われる文書資料「新渡戸稲造校長宛て中江汪報告書」)

○14編の「思い出集」の中から当時を物語る1編をあげてみる(遠友夜学校開設の初期の1899年～1902年(明治32年～35年)に教師を務めた岩波六郎による「遠友夜学校の回顧」の関係分を抜粋して転載。1957年(昭和32年)12月31日に記された)。「私が旧校に参りましたのは1899年(明治32年)から1901年(明治34年)迄足かけ3年間で、当時一処の先生に、故人では木村徳蔵(一橋大学教授)、蠣崎知二郎(空知農学校長)、井口為二郎(朝鮮銀行支店長)、森本厚吉博士、有島武郎等で、現存者では遠藤万三(福岡牛乳会社々長)、半澤博士等であった。抑(そもそ)も此校は新渡戸夫人の慈善事業の一端として始められたもので、貧民の子供の教育と、又一面札幌農学校の苦学生に「アルバイト」を授けるのが目的であったので、1、2の先生を除いて何れも苦学生で、1日1時間受持ち、1カ月の報酬は3円であった。尤も当時札幌農学校の授業料は1カ年15円、此れを2期に分納するものであったが、怠納者として事務所前に掲示さるゝのは吾々常連であった。当時新渡戸先生が生徒監であったので、夜学校の報酬と引当てに立替払をして貰った。夜学校は豊平河畔の河原にある普通の2階住宅で、階下の畳の2室が教室で、長い机に坐って勉強する寺子屋式のものであった。生徒は男女合せて30名位で、職工や子もり子などが多く居ったが、元々キリスト教主義の学校であったので、先生も生徒も真面目に勉強した。恐らく当時の生徒中には成功者が多くあると思ふ。……」。(この寄稿は一部を修正して、1981年(昭和56年)9月発行『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.199～200に再録されたものである)

○転載紹介の順序が前後するが、高倉新一郎による、この冊子の本文は次のように述べられて結ばれている。「社会事業としての夜学校は、単なる貧児教育であり、今

日の所謂社会福祉事業ではない。然（しか）し、その底に流れる必要なもの、最も必要なものが脈々と波打ち、拡大して行ったのであった。／遠友夜学校は最早昔の形では再現しないかも知れない。（また）再現していゝ（い）かどうかも知らない。唯（ただ）、この（その）精神が（時代を問わず、場所を問わず、人間社会のある限り必要なもので、再び）何等かの形で再現されることを祈りかつ信じて（信じかつ祈って）いるのである」。〔括弧内は、1953年（昭和28年）発行『北海道社会福祉』1巻2号p.49の記述から、1964年（昭和39年）にこの書のp.42へ転載する際に変更または追加された部分の語句である。1995年（平成7年）9月、『思い出の遠友夜学校』p.56へ転載の際に、さらに漢字を平仮名へ、読点を追加、の変更が加えられている〕

○この冊子は、1964年（昭和39年）6月10日以降、札幌遠友会会員・関係者、札幌市勤労青少年ホーム内に創設された遠友夜学校関係資料の記念室の来訪者に無料で配付された。

○1993年（平成5年）12月には、小塩進作がこの冊子『札幌遠友夜学校』の複製を再製作し、関係者に無料配付した。

○2003年（平成15年）2月発表の三上敦史論文p.204では、この冊子を「最も著名なのは、同校の経営母体であった財団法人札幌遠友夜学校が解散を記念して編纂した『札幌遠友夜学校』（1964年）である」と評価している。

◎1964年（昭和39年）6月11日、札幌市は、寄付された旧札幌遠友夜学校校地跡の一部を使用し新築した「札幌市勤労青少年ホーム」を開館した。

○経緯をさかのぼって確認してみると、勤労青少年ホームの設置に必要な手続きは順調に進められていた。主なものは次のとおりである。①1963年（昭和38年）3月30日に「札幌市勤労青少年ホーム条例」（条例第13号、同年6月11日施行）および同5月25日に「同施行規則」（規則第32号、同年6月11日施行）の制定、②同年4月10日に国庫補助の内示（申請書の提出年月日は不詳）、③同年7月12日に札幌市議会において建設のための補正予算の可決。そして、同ホームは1963年（昭和38年）

度の国庫補助対象施設であった関係もあり、設計等の事前手続きを終え、1963年（昭和38年）10月30日に建設工事を着工し、翌1964年（昭和39年）6月初旬に竣工した。建物は鉄筋コンクリート造2階建一部地階造りで、「遊覧船思わせる美しい会館」と絶賛された。（1974年（昭和49年）11月24日には、建物に3階を増築し体育館を造った）

○「勤労青少年ホーム」は、「青少年の健全な育成及び福祉の増進を図ること」を目的とする施設で、「札幌市勤労青少年ホーム」（初代館長・佐藤博長、青少年課長兼務）は北海道内では創設第1号（全国では7番目）であり、その活動が注目された。

「札幌市勤労青少年ホーム条例」に基づく設置であった。

○同条例の第10条により同ホームの運営を円滑に行うために「同運営審議会」が置かれ、同会委員の構成枠・学識経験者の1人として遠友会会長・半澤洵が任命された（⇒1964年（昭和39年）6月1日）。

○1964年（昭和39年）6月1日発行の広報誌『広報さっぽろ』5巻3号（第51号）p.4～5には、同ホームの「内部の主な施設」が丁寧に紹介され、「市内で働いている15歳から24歳までの青少年男女で、中小企業で働く者」が利用でき、「ホームの利用はいっさい無料。休館日は毎週水曜日、国民の祝日、年末年始」とあった。（主な施設の紹介の中には「遠友夜学校記念室」は含まれていなかった）

○同ホームには、青少年課長兼務の館長のほか、専任職員2人、嘱託指導員1人が配置された。

○このあとの理解を深めるために、このホームの以後の名称等の変遷を簡単に述べると、「札幌市勤労青少年ホーム」→1969年（昭和44年）1月15日「札幌市第一勤労青少年ホーム」→1979年（昭和54年）1月21日「札幌市中央勤労青少年ホーム」→1987年（昭和62年）4月1日「Let's（レッツ）中央（札幌市中央勤労青少年ホーム）」→2010年（平成22年）4月1日「札幌市中央若者活動センター」→2011年（平成23年）3月31日閉館・廃止となる。

○以上の経緯のように、記念室が存在する同じ建物が「札幌市勤労青少年ホーム」→「札幌市第一勤労青少年ホーム」→「札幌市中央勤労青少年ホーム」→「札幌市

中央若者活動センター」と名称変更されるために、旧札幌遠友夜学校校地跡に設置された機関（建物）を示す記述がなされるとき、混乱を招き続ける。札幌市自体も「遠友夜学校の精神と深い人類愛に満ちた新渡戸稲造の理想を後世に伝える遠友夜学校記念室は、1964年（昭和39年）6月に遠友夜学校の跡地に開設された札幌市中央若者活動センターの施設内に設置されました」などと書く有様であった。

◎1964年（昭和39年）6月11日、札幌市は、札幌市勤労青少年ホームの一部に、札幌遠友夜学校の遺産（史料・書類・資料・扁額等）を展示する記念室を設けた。

○新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を顕彰する記念室（展示室）は建物の1階、玄関を入れて右側奥の1室で、25㎡＝約16畳間が充てられた（30年後の1994年（平成6年）5月には、改修拡張が行われる）。展示物の見学は、勤労青少年ホームに合わせて開放され、無料・自由であった。

○この記念室がのちに、いわゆる「遠友夜学校記念室」とよばれるものであるが、最初からこの名称であったかどうかは明確でない。何らかの名称の表示板は部屋の入口に掲げられたものと推察されるが、建物案内の外看板や建物入口の表札板には、建物が取り壊される最後まで何も表示されなかった。

○開設時の状況について記載された資料を探し出すのは容易ではなかった。やっと探し得た資料・記録は次のようなものであった。

①1964年（昭和39年）6月1日発行の広報誌『広報さっぽろ』5巻3号（第51号）p.4～5には、札幌市勤労青少年ホームの開館・利用についての記事が載せられたが、記念室の開設には特にふれられなかった。同年6月11日に同ホームの開館を報じた『北海道新聞』朝刊p.12の記事「あと継ぎ」ができた／勤労青少年ホーム完成」も同様であった。

②当時、札幌市助役であった小塩進作は、札幌市勤労青少年ホーム完成記念式典前日の同年6月9日、準備状況が順調に進んでいるかどうか気がになって、退庁後に立ち寄った時のことをのちの新聞に2つ寄稿している。その中で、2人の老先生（半澤洵と高倉新一郎）が、ほこりをかぶりながら夜遅くまで、遠友夜学校の数々の遺

産の整理に黙々と汗を流しておられる姿を見て、深い感動に打たれた（本当に頭のさがる思いで一杯であった）旨を述べている。（1977年（昭和52年）6月13日・同年11月9日付け『北海タイムス』夕刊の連載寄稿「えぞまつ」）

③1964年（昭和39年）6月10日発行（前掲）校史冊子『札幌遠友夜学校』の「序」で半澤洵が述べた言葉の中に「記念室が設けられ」とはあるが、その前には何も記されておらず、無名の「記念室」だったとも受け止められる。

④1964年（昭和39年）10月4日、『北海道新聞』夕刊p.6に掲載の『私は知りたい』というコーナーで、読者からの質問「札幌の勤労青少年ホームがどんなものであるか」に対し、市民が取材して答える形式の記事がある。この中に「興味ある新渡戸記念室」の見出しで紹介される文があるところから、最初は「新渡戸記念室」だったともいえる。

⑤1981年（昭和56年）9月発行の単行本『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』の巻頭写真p.3や、本文p.29・98・100、および沿革年表p.307には、「新渡戸記念室」や「新渡戸稲造先生記念室」と記述され、「新しい建物には、『新渡戸記念室』なる1室が設けられた。夜学校関係を中心に史料を集めて展示した」といった説明もある。一方、その3年後の1984年（昭和59年）7月発行の単行本『明日への架け橋』p.67には、札幌市勤労青少年ホームの開設時に「遠友夜学校記念室」も設けられたとある。2つの図書は、いずれも札幌市教育委員会が編集したものである。年表類では例えば、2015年（平成27年）9月16日発行の藤田正一の『札幌遠友夜学校』では「1964年（昭和39年）6月、夜学校跡に札幌市勤労青少年ホーム建設、同ホーム内に遠友夜学校記念室開室完成」とあるが、2018年（平成30年）6月1日作成の原田昭子の『札幌遠友夜学校のあゆみ』では「1964年（昭和39年）6月11日、跡地に建てた札幌市勤労青少年ホーム内に『遠友夜学校』新渡戸記念室開室」とある。

⑥2014年（平成26年）7月、遠友夜学校関係資料が北海道大学大学文書館へ寄付される段階で明らかになるように、土地以外のものは、札幌市教育委員会所管の財産目録も、記念室所蔵の遠友夜学校関係資料目録も未作成のまま放置されていたのである。

⑦こうした不明確について、編著者・白佐による札幌市教育委員会への問い合わせに対して、2023年（令和5年）3月、同生涯学習推進課からは、次のような回答があった。「当該記念室は、設置されていた札幌市勤労青少年ホームの『札幌市勤労青少年ホーム条例』（廃止された条例）に記載がなかったことから推察すると、条例等の規定に基づき設置した施設ではなかったようです。したがって正式な室名も規定されているものではなかったと考えられます。また、当時の勤労青少年ホーム及び遠友夜学校記念室の設置に係る資料は当課には残されておらず、正確な開設年月日や『新渡戸記念室』の記述が間違いだったかどうかなどはお調べすることができませんでした」。

⑧関係者の間で記念室のあり方が問題視されるようになるのは、2011年（平成23年）3月31日に札幌市が、建物の老朽化と耐震性能不足を理由に「札幌市中央若者活動センター」を閉館・廃止し、その建物を解体すると決めてからである。この以降に作成された年表・年譜類はいくつもあるが、これらには1964年（昭和39年）6月に「遠友夜学校記念室」が開設されたとある。この種の記述は、その時点での名称で前身も総括して述べる場合が多いから、これをもって最初から名称が「遠友夜学校記念室」であったとの決め手にはできない。

○①～⑧から推察すると、記念室の最初の名称は無名あるいは『新渡戸記念室』であったことが有力ある。また、札幌市の認識は、同校財団から土地と一緒に資料遺産も寄付を受け、それを自ら保存・公開していかねばならないというよりも、展示用の部屋を提供する便宜を図らねばならないという程度のものでしかなかったと判断される。一方、寄付した側（全面委任された半澤洵・高倉新一郎理事）も、早く委譲し安心したい気持ちが強かったのか、遠友夜学校遺産の扱いについて、市への要請は弱腰であり、記念室開設の準備もひたすら自らが汗をかかなくてはならない有様で、将来の見通しは甘かった（約束条件の曖昧さがすぐに露呈した）と想像される。

○こうした状況のもと、札幌市において、この記念室が、規定の法規や組織上、具体的にどのように位置づけられて勤労青少年ホーム内に開設され、どのような考え

のもとに企画され展示されてきたのか、管理・運営・維持の経費などを含めてはつきりしない。

○記念室長や室員構成、設置根拠となる条例・規則、記念室の管理・運営に関する細則、史料・資料の保存・管理の要項、訪問者の把握・接遇の細則などは、定められないまま開設され、その後の運営もそのまま実施され続けた。

○この記念室については、名称をはじめ曖昧なまま、そして市民への周知・広報が不十分なまま出発し、そのまま50年が経過していった。例えば、名称については、先にあげた『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』や『明日への架け橋』のほかに、次のような例もある。1985年（昭和60年）5月発行、小塩進作著の『茨戸湖畔』のp.7には「遠友夜学校記念室」とあり、p.104には「新渡戸先生記念室」とある。テーマは異なるが、同じ日の同じ場面にふれた部分がある。ともに『北海タイムス』夕刊に寄稿した連載記事の中にある。前者は1977年（昭和52年）6月13日、後者は1979年（昭和54年）11月9日に掲載された。

○この記念室を紹介するにあたって、のちに書かれた多くの公私の記述は、後年に作られた札幌市発行の配付資料または札幌市のホームページの記事・年表を参照したためか、その記述の時点の名称がそうであったためか、「昭和39年（1964年）6月に遠友夜学校の跡地に開設された札幌市中央勤労青少年ホーム（あるいは札幌市中央若者活動センター）の施設内に設置されました」などとしている。直前にあげた回答も同様である。創設時の名称は「札幌市勤労青少年ホーム」であり、既述のように、同じ建物が後日、何度も改称されていた。

○当初、展示された諸史料が誰によってどのようにして集められ、それが何点あり、誰が展示内容・方法を決め、展示がどのような管理・運営のもとに進められてきたのか、不明確で曖昧のまま経過してきた感がある。とはいえ、まったく記録が残されていないわけではない。2016年（平成28年）11月発行の雑誌『しにあらいふ』の「山陰から（50）」には、次のような記述がある。「夜学校が閉校し、札幌市に土地と史料を譲与するまでには20年の歳月があった。その間遠友夜学校財団は、史料を道立図書館や母子施設に預け、新渡戸博士の扁額は半澤代表が表装して守った。

大学には預けていない。夜学校は、ここで教えていた人たちには、それほど市民に近かったに違いない。／戦後の大変な時期に守り抜いた跡地と五百点余の史料は、勤労青少年ホーム建設企画していた札幌市に贈与された。半澤先生は、学んだ子どもたちの汗と熱い心がこもる史料は、市民に返すことが一番と考えたのだろう」。

○この記念室が開設されてから、17年後の1981年（昭和56年）9月には『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』が、20年後の1984年（昭和59年）7月には『明日への架け橋』が、31年後の1995年（平成7年）9月には『思い出の遠友夜学校』が発行された。不思議なことにいずれにも、本文前の写真には記念室の展示の様子が載っているのに、これを説明する、まとまった具体的な記述は本文にない。もちろん、運営状況や来訪者数の推移などについての記録も説明もまったくない。

○1994年（平成6年）5月18日、札幌市中央勤労青少年ホーム（Let's中央）に併設時、遠友夜学校記念室では「遠友夜学校開設100周年」を記念して大改装が行われたとされる。その状況について記録が担当部署にも残されていない。

○遠友夜学校記念室所蔵の資料等については、どうやら北海道大学へ譲渡する前の2014年（平成26年）6月23日になってはじめて、札幌市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課が札幌市のホームページで詳しい内訳を発表した。内実は、寄贈を受ける側の北海道大学が直前に実施したものである。（⇒2014年（平成26年）6月23日）

○2011年（平成23年）10月4日、「札幌市中央若者活動センター」の閉館・廃止に伴い、「遠友夜学校記念室」は「札幌市資料館」（2階）に移設され、展示は再開された。（47年間に及んだ、札幌市南4条東4丁目の旧札幌遠友夜学校校地跡での記念室「遠友夜学校記念室」は廃止となった）

○移設し展示を続けた札幌市資料館での「遠友夜学校記念室」の展示も、約3年後の2014年（平成26年）7月6日、資料の経年劣化や散逸等が懸念されるとの理由で、すべての資料が札幌市から「北海道大学大学文書館」へ寄贈されるため、終了となった。

◎1964年（昭和39年）11月10日、歴史童話集『むかし話』に比良信治（童話作家）

作の作品「札幌遠友夜学校の創立者—新渡戸稲造の話—」が収録された。

○歴史童話集『むかし話／北海道／第二編』は、日本児童文学者協会北海道支部編の1冊で、『第一編』（1962年（昭和37年）9月）～『第五編』（1980年（昭和55年）4月）が北書房から発行された。

○『第二集』p.83～94に載せられたこの童話は、新渡戸が農学校を卒業し、開拓使の仕事をしてながら農学校の教師を兼任していた1882年（明治15年）、21歳の時のことから始まる。札幌独立教会での会合のあと、豊平川の岸辺まで散歩に出かけ、そこで1人の少年に出逢ったことがきっかけで、将来、夜学校をつくる着想を得る。その後の歴史を綴り、遠友夜学校をつくって、閉校までの50年間を物語るのであるが、11ページのうちの4ページ半を夜学校の着想に至るエピソードに費やしている。（着想を得た時の描写は『ほっかいどう百年物語』でも採り入れられた。⇨2019年（令和元年）11月30日）

○また、長く不在であった新渡戸校長が、実際には遠友夜学校に最後に訪れた時の講話で語られた校名「遠友」の意味などが、開校の最初の入学式で集まった人々に語られているなど、大胆な入れ換えもあって、面白い話の構成になっている。

○遠友夜学校創立の精神は、長く多くの人々の胸に、あたかも北極星のように光り、ひらめき続けていった。現在、遠友夜学校の跡には、働く青少年のための、憩いの場として、勉強の場として、新しく札幌市勤労青少年ホームが生まれているが、新渡戸稲造と遠友夜学校を記念した部屋が設けられ、伸びゆく青少年たちを、慈愛深い目で見守っている、と結んだ。

○札幌市で（北海道でも）最初の勤労青少年ホームが誕生して半年後、まさに時宜を得た出版となった。

◎1966年（昭和41年）7月15日発行の単行本『ひらけゆく大地の蔭に』に収録の座談会記事の中で、半澤洵は新渡戸稲造と遠友夜学校について語った。

○この書は、三吉明著『ひらけゆく大地の蔭に／北海道社会事業の歴史・北海道100年記念出版』図譜新社発行の図書で、北海道全体を地域別に大別し、社会事業の進

展の解説と主要事業者による座談会の発言を収録している。

○この書のp.22で、明治期の北海道の社会事業施設の一覧が示され、18か所中、遠友夜学校は3番目、札幌圏地域では最初であることが示された。

○札幌圏地域については、社会事業者11人が集まり、北星学園大学教授の三吉の司会の下で進められた。この座談会の中で、出席者の1人半澤洵（北海道大学名誉教授）は、新渡戸稲造と遠友夜学校についていろいろと説明している。半澤の主要発言内容はこの書のp.115～128に収録されている。

○座談会の発言を1つ紹介する（p.119～120）。「夜学校の維持経営費はどうしてこられたのですか」の問いに半澤は「最初は新渡戸先生のポケットマネーからでていたのですが、札幌農学校の学生、のちの北大予科、本科の学生が先生ですから、はじめは月2円位い払ったがのちには、月給など1文も払ってはいない。電車の切符をくれた」と答え、「電車は、その頃6銭でしょう」に対して「その回数券1冊、それもしまいには出なくなった。むしろ学生達が自分の小遣金を儉約して、遠足の時の菓子代、クリスマスの費用などを出していたほどです。……」と付け加えた。

◎1967年（昭和42年）8月30日、「財団法人札幌遠友夜学校」は正式に解散し消滅した。解散にあたり、同法人と札幌市との間で同意書の再確認書を交換した。

○同意書の再確認が大幅に遅れたことについて、2014年（平成26年）10月30日開催の札幌市議会第2部決算特別委員会記録（第8号）によると、当時の教育委員会生涯学習部長は「最終的には、北海道庁による財団の解散承認がずれ込んだため」と答弁している。

○同意書の内容は「財団法人札幌遠友夜学校（清算人代表・高倉新一郎）の解散に伴い、財団法人札幌遠友夜学校は、所有する土地（札幌市南4条東4丁目1番地丙、1,721.61平方メートル=521.7坪）を札幌市（札幌市長・原田興作）に寄付し、札幌市がこれを受理するにあたり、その使用目的について次のとおり札幌市に申し入れ、札幌市はこれに同意した。〈申し入れ：札幌遠友夜学校は、故新渡戸稲造氏が札幌市における勤労青少年の健全育成を目的として創立し、経営を行った歴史的経緯

を尊重し、その施設は札幌市勤労青少年の健全育成を目的とした施設の用地に限り使用すること」であった。

○同意書の〈申し入れ：……その施設は札幌市勤労青少年の健全育成を目的とした施設の用地に限り使用すること〉についての質疑は、前掲の記録（第8号）によると、「同意した寄附条件は、今現在もこれからも有効なものでしょうか」の委員の質問に対して、同部長の答弁は「当時のお話を伺いますと、寄附条件をもとにして寄附していただいた、条件を前提とした寄附という形で議決を経ていないようでございますので、そういう意味では精神を継続しているというふうに理解をしてございます」、……、「いわゆる法的な意味で有効かどうかという、そこまでにはならないのかなというふうに考えております」であった。これに対して、同委員は「……余りこの件を追及すると脱線してしまいましたが、これは確かに公文書として残っているものでございまして、私の解釈は非常に重たいものである、そして、文字で残っているということで、私は、これは息づいているものだと思っております」と矛を収めている。

◎1967年（昭和42年）9月25日、北海道が発行した伝記『文化の黎明・下（開拓につくした人びと8）』の中に「新渡戸稲造／札幌の遠友夜学校」が掲載された。

○この書が8集目に相当するシリーズは、北海道が北海道百年記念事業の1つとして青少年向けの開拓功労者の伝記を刊行（非売品）することになり、開拓功労者に選ばれた108人の伝記を「開拓につくした人びと」全10集に分冊し、北海道総務部文書課が編集にあたり1965年（昭和40年）1月から刊行を始めた。

○「新渡戸稲造／札幌の遠友夜学校」の記事は、半澤洵（北海道大学名誉教授）が中心になって簡明に執筆され、p.99～114に収録された。新渡戸の経歴と人柄、遠友夜学校の創始から閉校し勤労青少年ホームの中に資料展示の記念室が設けられるまでを平易に綴ったものである。

○注目された記述としては、①新渡戸の人格からにじみでるような教訓に基づき、「知育よりも徳育」「頭よりも人格」「学問より実行」という夜学校の伝統的精神が

築かれたこと、②生徒自身が互いに磨き合うため、リンコルン会、すみれ会、修身会の3つの会合が作られ、それらの月例会は創立の1897年（明治30年）から1930年（昭和5年）9月までの間に、リンコルン会は618回、すみれ会は295回、修身会は293回開かれたこと、などである。

◎1969年（昭和44年）1月1日、新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』（教文館発行）の刊行が開始した。

○『新渡戸稲造全集』全25巻（本巻23+別巻2、四六判・各巻400～800ページ）は、1969年（昭和44年）～2001年（平成13年）の間、2期+aの形で出版された。第1期は第1～16巻の全16冊（1969年～1970年）で、公刊された新渡戸稲造の著書（邦文・欧文）を網羅し、第2期は第17～23巻+別巻1（新渡戸博士追憶集）の全8冊（1983年～1987年）で、新渡戸稲造著の著書の邦訳や英文の論文およびその翻訳、書簡を収めている。別巻2（月報、新資料）は2001年（平成13年）に発行された。編集委員は教え子の高木八尺等6名で、第2期から佐藤全弘が加わった。監修者は南原繁等4名である。

○1936年（昭和11年）11月25日、新渡戸稲造を追悼記念する『新渡戸博士文集』と『新渡戸博士追憶集』が故新渡戸博士記念事業実行委員によって発行されたが、これを充実させる形で編集が進められ完成した。

○1990年（平成2年）1月には、セット販売の『新渡戸稲造全集（増補復刻版）』全25巻がイーショップ教文館から出版された。

◎1969年（昭和44年）1月15日、「札幌市勤労青少年ホーム」は「札幌市第一勤労青少年ホーム」と改称された。記念室の設置は続けられた。

○札幌市に2番目の勤労青少年ホームができ、第一、第二、……と命名する措置に対応した改称であった。

○当然、「記念室（遠友夜学校記念室）」は引き続き設置され、2011年（平成23年）3月31日に閉館・廃止されるまで継続される。

◎1969年（昭和44年）8月20日、松隈俊子（東京女子大学比較文化研究所嘱託）は評伝『新渡戸稲造』をみすず書房から出版した。

○札幌時代の新渡戸について、第1次資料に当たって書かれた唯一の評伝であり、新渡戸の生涯の前半について詳しいのが特徴である。ただし、遠友夜学校のことは2ページ強しかふれていない。1981年（昭和56年）8月25日、新装版を発行した。

○松隈は、1984年（昭和59年）11月1日には、新渡戸の信仰について書き加えた増補版をみすず書房から出版し、さらに2000年（平成12年）4月1日には新版を、2010年（平成22年）12月20日にはオンデマンド版を発行した。

◎1970年（昭和45年）3月25日、札幌市社会事業協会（会長・半澤洵）は記録書『札幌市社会事業のおいたち』を刊行した。

遠友夜学校関係者（新渡戸稲造、三島常盤、半澤洵）が社会事業において活躍・貢献した実績を詳しく伝えた。

○この書は、札幌市創建百年記念の一環として札幌市社会事業協会が編集・発行した詳細な各種記録書（A5判、全339ページ）である。

○関係分の一般的記述や年表の中でふれられたほか、特別記事「札幌市社会事業と先駆者」として、新渡戸稲造は「ボランティアの手で50年／札幌遠友夜学校と新渡戸稲造」（p.243～246）、三島常盤は「社会事業に参画した実業界のボランティア（資金、資材を提供し生涯社会奉仕に徹した）三島常盤」（p.289～291）、半澤洵は「社会事業60年（23万枚の古印紙で施設職員研修費）の半澤洵」（p.299～302）の見出しで顕彰された。

○「札幌遠友夜学校」についての独立した項目はなく、「ボランティアの手で50年／札幌遠友夜学校と新渡戸稲造」の中で、創設から閉校まで、そして戦後の跡地利用に至るまで歴史が詳しく語られ、4ページ大半は遠友夜学校についての記述で費やされている。

◎1972年（昭和47年）9月25日、遠友夜学校の永年の功労者・半澤洵（旧財団法人札幌遠友夜学校理事長、前校長、札幌遠友会会長）が死亡した（93歳）。

○半澤は、納豆博士の愛称で著名なように、学界では日本における応用菌学の先駆者であって、業績は広く微生物・食品・水産・畜産・土壌の多方面に及んだ。

○既述のように、半澤の人生の多くは、遠友夜学校の歩みとともにした。新渡戸稲造夫妻による夜学校の開設時（1894年（明治27年）1月）から学生教師を務め、廃校時（1944年（昭和19年）4月）まで、ずっと遠友夜学校の教師、代表、校長、財団の理事、代表理事（理事長）を歴任し、その後も跡地の残務処理理事や同窓会・遠友会会長等の役を続けていた。

○遠友夜学校が最先端をいく社会事業施設の1つであったこともあり、北海道大学教授の現役時代から社会福祉関連事業にも深く関わりを持ち、多数の関連団体等の指導役・役員等を務めた。特に退官後は、長年にわたっていくつもの社会事業団体等の要職に就き、晩年まで多大な貢献をした。（多方面にわたる半澤の活躍は別記で示した）

○半澤の高齢に伴い、遠友夜学校関連役割は既に高倉新一郎が代行を務めており、死亡後は高倉が半澤の後任役職に就いた。

○本書では、付録に「社会事業活動を主にした半澤洵概略年譜」を加えている。

◎1973年（昭和48年）4月、「札幌遠友会」の事業の一環として、札幌市に市民講座「遠友市民大学」が発足した。

○遠友市民大学の学長は、札幌遠友会副会長でもある高倉新一郎（北海学園大学学長、北海道大学名誉教授）が務めた。

○新渡戸稲造が若い時、留学中に夢として描いた「札幌市民学園」構想の1つ「生涯教育」の場の実現であり、市民に喜ばれ、多大な実績をあげたとされる。

○1974年（昭和49年）9月28日には『北海道新聞』朝刊18面に「遠友市民大学に維持会」、1974年（昭和49年）10月12日には『北海道新聞』朝刊21面に「遠友市民大学 世界に誇れる内容に」、1976年（昭和51年）10月9日には『北海道新聞』

朝刊18面に「ピンチの『遠友市民大学』来春から財団法人に」の記事が掲載された。

○1982年（昭和57年）4月19日には『北海道新聞』朝刊に「奉仕こそ夜学校の原点／遠友市民大学」の記事が掲載された。10年目を迎えたこの年度から、受講料無料で再スタートした。「北大関係者らの奉仕によって支えられていた夜学校の原点に戻ろう」と、無料化を決めた。遠友市民大学は、遠友夜学校の理想と伝統を受け継ぐ市民教養講座として、これまで18期にわたって開校され、思想、芸術、文学などの講座を開いてきた。大学の運営費は、これまで生徒の受講料で賄われてきた（例えば、前年度は1コース4,800円を徴収）。関係者の間から「これでは現在市内でたくさん開かれている文化・教養講座と変わらない」という声があがり、すべて奉仕活動に支えられていた遠友夜学校の原点に戻り、第19期は1コース（定員20人、同年4月20日から9月まで月1回、夜6時から）だけだが、遠友夜学校の精神的遺産を受け継ぎ、無料で講座を開くことになったものである。

○1983年（昭和58年）6月7日には『北海道新聞』夕刊9面に「『遠友市民大学』財団化直前で足踏み」の記事、そして、1985年（昭和60年）1月19日には『北海道新聞』朝刊18面に「21日から後期講座 遠友市民大学」の記事が掲載された。同年1月21日から開催の、この「1984年（昭和59年）度遠友市民大学後期講座、定員20人」の案内記事が確認できた以降は、新聞紙上では掌握できていない。おそらく財政基盤を図るための財団設立実行委員会（委員長・伊藤俊夫＝北海道大学名誉教授）の多数の委員による熱心な努力が重ねられたが、財団の設立は実現しなかったのではないかと判断される。

◎1975年（昭和50年）3月1日、札幌市の市民講座「遠友市民大学」の文化局新聞部が新聞『遠友』1巻1号を発行した。

○1号のp.1には、高倉新一郎学長の挨拶記事「『遠友』の発刊」が掲載された。

○北海道立図書館の所蔵で1978年（昭和53年）4月1日発行の4号が確認されている以降の発行は不明である。

◎1976年（昭和51年）10月16日、鳥居清治（新渡戸稲造研究家）は単行本『新渡戸稲造の手紙』の中で、新渡戸の夜学校構想についてふれた。

○北海道大学図書刊行会発行のこの書は、新渡戸が宮部金吾に宛てた英文の手紙、第1～11信（1884年（明治17年）1月22日～1889年（明治22年）4月23日）を収録し、鳥居が翻訳と詳しい注釈を加えたものである。ほかに手紙原文（英文）、新渡戸稲造小伝、宮部金吾先生略伝などを加え、全244ページからなる。

○この書に第6信としてp.65～70に収録したのが、1885年（明治18年）11月13日付け書簡（既掲）であり、『新渡戸稲造全集・第22巻』収載の「宮部金吾宛書簡」の第9信に相当する。新渡戸による「札幌市民学園」構想の(3)が夜学校であった。

○鳥居は、訳者注として遠友夜学校の事例をいくつかあげ、「ほんとうの教育とはこういうものではあるまいか」と言い、「新渡戸が処世のモットーとし、愛吟してやまなかった古歌“うつるとは月も思わず うつすとは水も思わぬ 広沢の池”のように、新渡戸と生徒の魂は肝胆相照らした」と述べた。（編著者注：古歌は室町時代後期の剣客・塚原卜伝の歌とされている名句。月は水に映ろうとも思わないし、水もまた月を映そうとは思わないが、お互いの無心無欲の中には自然な美の調和が生じる）

○また鳥居は「あとがき」のp.188で、新渡戸は「勉学の機会にめぐまれぬ貧しい青少年のため、札幌・豊平の地に夜学校を創設されたが、それは、物のはずみや偶然の思いつきからではなく、博士が長いあいだ心の底に育てていた夢をそのたしかな事業に移したものであることをこの手紙は証拠だてている」とも述べている。

◎1979年（昭和54年）1月21日、「札幌市第一勤労青少年ホーム」は「札幌市中央勤労青少年ホーム」と改称された。記念室の設置は続けられた。

○札幌市に5番目の勤労青少年ホームができ、この時に開設順番による名称を廃止し、公募による新名称を使うことになった。

○当然、「記念室（遠友夜学校記念室）」は引き続き設置され、2011年（平成23年）3月31日に閉館・廃止されるまで継続される。

◎1979年（昭和54年）4月21日、札幌市がスポンサーのラジオ放送番組『さっぽろ散歩』で、題名「遠友夜学校—理想の燈赤々と、明治の寺子屋—」が放送された。

○この番組は、STV（札幌テレビ放送、本社札幌市所在）ラジオ局が制作したもので、「札幌市中央勤労青少年ホーム」に併設されていた記念室をとりあげた。

○札幌市では、「なにげないところにひそんでいる札幌の良さを掘り起こす目的」で市民局広報部が企画し、1979年（昭和54年）4月7日から『さっぽろ散歩』（毎週土曜日午前15分間）の放送を開始した。放送はずっと続いた長寿番組である。

○1981年（昭和56年）3月1日、札幌市は、札幌テレビ放送の協力のもと、札幌市市民局広報部の企画・編集で文庫本判小冊子『さっぽろ散歩①』（1979年（昭和54年）放送分、全92ページ）を発行した。以降、半年分または1年分の放送を1冊にまとめ、1997年（平成9年）3月31日発行の『さっぽろ散歩②』までシリーズで全27冊が発行された。これらはすべて非売品で、札幌市市民局（総務局）広報部が各2千部を作製し、市・区役所の案内窓口などで一般市民に無料で配布された（途中から企画・編集は総務局広報部に名称変更された）

○「遠友夜学校—理想の燈赤々と、明治の寺子屋—」は、小冊子①のp.21～24に掲載された。「エンユーヤ？聞いたこともないな」と札幌市中央勤労青少年ホームでスポーツに汗を流している青年がげげんそうに首をかしげたという。ホームの1階に併設されている「遠友夜学校記念室」が知られていない笑い話で始まる。要領よく、同校の沿革が紹介されているのだが、気にとめたのは、1) 孤児だった、遺言で遺産をくれた女性と新渡戸萬里子夫人とは、姉妹同様の仲であった、2) 高倉新一郎の談話「むしろ子供を放任してはいけないから夜学校に通わせる、いわば非行からのお守り役といった意味を持っていたのではないか」、3) 山崎健作の談話「私は戦後、子ども会とか青年会などにたずさわってきたけれど、そのルーツは夜学校にあったのだなあ、と最近思うようになってきた」、4) 閉校の理由「当時の急激な社会変化に耐えきれず、関係者の努力のいかにもなく遠友夜学校は、その歴史の幕を閉じた」といった記述である。

○同番組の1984年（昭和59年）5月5日には、題名「遠友夜学校と中央勤労青少年

ホーム—時代を映す青春のエネルギー—」で放送された。これは、1985年（昭和60年）10月1日発行『さっぽろ散歩⑩』（昭和59年前半放送分、全92ページ）のp.69～72に掲載された。20周年を迎えた勤労青少年ホームの、様変わりした20年の変化の過程を関係者が語った。そして、記念誌をつくるにあたって、遠友夜学校を抜きにして、ホームの歴史は語れないという。時の流れはめまぐるしい。遠友夜学校の燃えるような青年の魂は、このあと、どのように次代の若者に引き継がれていくのだろうか、と結んだ。

◎1979年（昭和54年）11月23日、「新渡戸稲造博士顕彰会」は、ブロンズ製青年立像「新渡戸稲造博士顕彰碑」を建立し、盛大に除幕式を挙行了た。

○顕彰碑は札幌市中央勤労青少年ホームの前庭に建立された。

○顕彰碑の制作者は彫刻家・山内壮夫である。若者が夫妻の肖像を捧げ持つレリーフには「新渡戸稲造萬理子両先生」とある。肖像を囲む桜（ソメイヨシノ）は北海道帝國大學予科の徽章から採ったものであり、上部の星は遠友夜学校の校章である。大理石の台座には新渡戸稲造直筆による文字のプレート「學問余里（より）實行」も加えられている。

○除幕式当日の様子については、1984年（昭和59年）発行の『明日への架け橋』p.129で、9代目館長の小池尚由が次のように述べている。「小雪の舞いしきる中で行われ……かつての勤労青少年が多数集い、遠友夜学校校歌を高唱し、若き日の思い出に浸っていた姿が印象的であった」。

○1980年（昭和55年）2月に東京で、同年7月に札幌で、除幕式に出席できなかった遺族や関係者のために報告会が持たれた。

○顕彰碑建立に至る経緯を付記する。遠友夜学校同窓会「札幌遠友会」などからも切望され、かなり以前から「新渡戸稲造博士顕彰会」（会長・高倉新一郎＝北海学園大学学長）が結成されてはいたが、顕彰碑の建立活動はなかなか具体化しなかった。ようやく1970年（昭和45年）ごろから具体的活動を始め、札幌市出身の彫刻家・山内壮夫に制作を依頼することに決め、『新渡戸稲造博士顕彰会趣意書』（全10ページ

の年月日不記載のもの) も作り、「札幌遠友夜学校の校史」の編集印刷費を含めて総事業予算費を600万円とし、寄付金集めに着手した。(副会長には、当時の北海道知事、前・現札幌市長、北大学長、北大同窓会長、札幌医科大学長など11名が名を連ね、事務局長には、副会長兼任で元札幌市助役・小塩進作が就いた) 募金活動を本格化させた矢先、1975年(昭和50年)4月に山内が急逝し、関係者を暗然とさせたが、山内によって既に1974年(昭和49年)に作品の完成をみており、遺族が展覧会に出品したことが判明した。遺族からその作品の寄贈を受けることができ、無事実現に至ったと伝えられている。

○関連事項も付記する。1979年(昭和54年)11月23日発行(？、発行年月日が不記載)、新渡戸稲造博士顕彰会編刊の非売品冊子『新渡戸稲造博士顕彰碑建立記念誌』(全43ページ)も発行された。p.12~37に収録された署名入り記事は、次の7編であった。①「新渡戸先生と札幌」(顕彰会会長・高倉新一郎)、②「新渡戸先生の思い出」(家の光顧問・宮部一郎、他からの転載)、③「新渡戸先生の思い出」(北星学園理事長・時任正夫)、④「新渡戸稲造先生を憶う」(高岡周夫)、⑤「新渡戸先生を仰ぎみる」(元札幌市助役・小塩進作)、⑥「新渡戸先生と夜学校」(武笠耕三)、⑦「新渡戸稲造博士と遠友夜学校の思い出」(札幌遠友会幹事長・鈴木良雄)。この中の①⑥⑦は、誤記の一部が修正されて、1995年(平成7年)9月発行の『思い出の遠友夜学校』へ再録された。この冊子を、松下菊人は「小冊子ながら遠友夜学校関係の資料集としても貴重であり、本稿も同誌に負うところが多い」と評価している(1985年(昭和60年)11月1日、日本英学史学会発行『英学史研究』1986巻第18号、p.75~84に収載の論文『『未来の教育者』新渡戸稲造』のp.83)。

○1981年(昭和56年)9月発行の『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』p.112(小塩の記述)によると、後日、『新渡戸稲造博士顕彰碑建立報告書』も発行されたとされるが、前記の記念誌を指しているのか、別の冊子がつくられたのかは明確でない。また、同記念誌が、予算書に含まれた「札幌遠友夜学校の校史」に相当するののかもはっきりしない。いずれの場合にしても、内容の整合性がとれない。

○のちの経緯も付記する。2011年(平成23年)10月4日に「札幌市中央若者活動

センター」が閉館・廃止されたことに伴い、石杭状の銘板「札幌遠友夜学校跡地」は「新渡戸稲造博士顕彰碑」の前側地に向き合うように仮移設された。

○2011年（平成23年）10月にセンター廃止後の跡地は、2015年（平成27年）1月に「新渡戸稲造記念公園」が造成されるまでの間放置され、雑草の更地となった。顕彰碑の清掃を続けていた「札幌彫刻美術館友の会」は、この無造作な取り扱いを「市の管理のずさんさが気になった」と記録に残している。

○2015年（平成27年）1月、「新渡戸稲造記念公園」の造成に伴い、同公園内に移設され、顕彰碑の名称も「新渡戸稲造萬里子両先生顕彰碑」と変更された。

◎1980年（昭和55年）8月25日発行の単行本『札幌農学校』の中で、著者の蝦名賢造（独協大学教授）は「札幌遠友夜学校」についてもふれた。

○元北海道大学予科教師の蝦名は、「クラークとその弟子達」の副題を付けた自著（図書出版社、全334ページ）の第6章（p.163～181）で、「札幌遠友夜学校」についても詳しく述べた。

○細かい文字の2段組みで、遠友夜学校の教育と精神の小史をまとめている。1981年（昭和56年）9月発行の『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』が出る前で、主要引用文献を、高倉新一郎の論考「遠友夜学校」（『北海道社会福祉』1巻2号p.24～49、1953年（昭和28年）発行）と田中潜の論考「有島武郎と札幌」（田中潜編『有島武郎記念誌／第2集』全61ページ、有島武郎記念館、1963年（昭和38年）発行）としている。

○本書の最初に、「あとがきに代えて—蝦名賢造の言葉—」として、この記述の最後の一部を転載した（同一文は、1991年（平成3年）7月31日と2011年（平成23年）3月10日に発行の『札幌農学校』p.285にも書かれている）。

○1991年（平成3年）7月31日新評論発行、蝦名賢造著『札幌農学校—日本近代精神の源流—』p.267～286の「第9章・札幌遠友夜学校」（2011年（平成23年）3月10日「札幌農学校」復刻刊行会発行の同一書名の『復刻版』も）は、この書の第6章を下敷きにして、やや短縮する形で書き改められたものである。

◎1981年(昭和56年)8月20日、北海道新聞社編集・発行の『北海道大百科事典』は、項目「遠友夜学校」のもと、沿革の要点をまとめて概要を掲載した。

○この事典は上巻・下巻の2冊からなるが、項目「遠友夜学校」は上巻のp.260で解説されている。別に下巻のp.304には、「新渡戸稲造」の項目もある。

○「各種学校。明治時代に苦学生のために新渡戸稲造が開設した。信仰深くヒューマニズムに富む新渡戸は札幌農学校の予科で教べんをとっていた1882年～1883年(明治15年～16年)にすでに貧困家庭の子供のため夜学校を設ける構想を持っていた。米国留学から帰国後、萬里子(メリー)夫人に父から1000ドルの金が届いたのを機会に1894年(明治27年)1月、札幌・豊平橋付近にあった札幌独立協会付属の日曜学校に隣接する土地と家屋を買い求め、貧しい家庭の児童や晩学者を集めて夜学校を開いた。普通教育のほかに主に、看護法、礼式、裁縫、編物を教授した。1897年(明治30年)校舎を24坪(79.2㎡)に拡張、尋常科と高等科に分け『小学校令施行規則』にのっとり小学校に類する学校(各種学校)として毎夜2時間授業を続けた。1899年(明治32年)第1期生が卒業した。1897年(明治30年)新渡戸のあとを宮部金吾が継承、札幌遠友夜学会を設立、学校の維持に当たった。宮部のあと大島金太郎、有島武郎、蠣崎知次郎、野中時雄(兵庫大教授)、小谷武治、半沢洵とつづいた。1916年(大正5年)私立学校としての認可を受け、1921年(大正10年)定員を250人に増やした。教師には歴代札幌農学校、のち北海道帝国大学の学生が当たり無報酬で教えた。1929年(昭和4年)新校舎が完成、建物の総面積は延べ258坪(851.4㎡)で、教室4、運動場、作法室、図書室、医務室、職員室、寄宿舍を持ち、高等科を廃止して中等部を設置するなどかなり規模の大きい学校となった。創始者新渡戸稲造の死後は萬里子夫人が校長を務めたが、1944年(昭和19年)閉校した。学校方針として『学問より実行』を本義とし、徳育、体育を重視した。修養会リンコルン会、女子はスミレ会を設け人格形成に努め独特な校風を生んだ。遠友夜学校および会の方針は太平洋戦争後見直され、跡地に札幌市中央勤労青少年ホームが設置され、また遠友大学と称する生涯教育の発展にもつながった。1979年(昭和

54年)新渡戸稲造、高里子夫妻の徳をたたえる像が建立された」。(編著者注:項目は「山崎長吉」の執筆。「野中時雄」だけに「兵庫大教授」の肩書が示されているが、これは戦後に「兵庫農科大教授」になったことを指す。「遠友大学」とあるのは、1973年(昭和48年)4月開設の市民講座「遠友市民大学」を指しているものと思われる。「独立教会」を「独立協会」とするなどの誤記を含む)

◎1981年(昭和56年)9月1日、札幌市・札幌市教育委員会は、単行本『遠友夜学校』(さっぽろ文庫18)を発行した。

○この書は、遠友夜学校に関する解説書の中で、質量ともに充実していることから、専門家から「定本」と評されるほどの信頼を得ている標準書の1冊である。

○この書は、1977年(昭和52年)から2002年(平成14年)にかけて発行された全100巻の「さっぽろ文庫」の18巻目の刊行物である。札幌市教育委員会編、B6判、全310ページで、内容も全く同じだが、表紙と奥付の発行所だけが異なる2種類がある。(このことはほとんど知られていない)

○1つは「札幌市・札幌市教育委員会」の発行で、非売品であった。もう1つは「北海道新聞社」の発行で、広く一般に販売された。

○執筆者も、転載文献や引用資料も多く、内容は多岐多様で、しかも豊富で詳しい。

○主要構成は、序章(「新渡戸稲造と札幌」)、第1章・歴史(遠友夜学校・遠友会の歩みなど)、第2章・人物(新渡戸稲造、新渡戸萬里子、有島武郎)、第3章・回顧(回顧記12編、思い出17編など)、第4章・資料(アルバム、学期報『遠友』4記事、生徒文集『文の園』9作品、校歌、校舎平面図)、その他沿革史・文献、となっている。

○この書で注目されることの1つに、「遠友夜学校記念室」の名称がでてこない。扉写真も、数か所の本文も、末尾の沿革年表も、表記は「遠友夜学校記念室」ではなく「新渡戸記念室」となっている。1964年(昭和39年)6月11日開設の記念室の名称は、17年後にこの書が発行された時点でも、「新渡戸記念室」が正式だったことになる。

○序に代えて「遠友夜学校と私」を書いた札幌市長・板垣武四は「先生よりも年長の生徒もいたということですから、両者の間にあるものは相互信頼以外の何ものでもなかったと思われます。高い理想と努力、それを大きく支えている相互信頼こそ、現代にも通じる貴重な財産です。わが街・札幌がその歴史の中に、こういう『遠友夜学校』を持ち得たということに、私は喜びと誇りを感じるのです」と述べた。

○序章で「新渡戸稲造と札幌—その接点としての札幌遠友夜学校—」を書いた高倉新一郎は、末尾を「これからは、新渡戸博士が札幌の地に残された偉大な精神を永遠に忘れずに育てていくことになるだろう。博士の思想と実行力は不滅であり、遠友夜学校精神は、人類のある限り育てていかなければならず、その経験を具体的に持つ札幌市は非常に幸せな市だと思うからである」と結んでいる。

○「あとがき」を書いた編集長・木原直彦も「新渡戸稲造の偉大な人格に端を発したこの学校の、師弟一体となった“人脈”を強くおもうのだ。実に多くの人材を輩出し、そして他に影響をおよぼし、それがいかに札幌の良質の精神を形づくったことか。この特殊であった学校が、普遍となって札幌市民のなかにいまも脈打っていることを知るのである」と述べている。

○絶版後の2003年（平成15年）、この書は、札幌市の「地域文化資産デジタルアーカイブ化事業（平成15年度緊急地域雇用創出特別対策推進事業）」によって整備され、電子化保存された。一時期、インターネットで読める電子文庫として無料で公開された。

○さっぽろ文庫全100巻のうち、関連の単行本『新渡戸稲造』（34）、『農学校物語』（61）も電子文庫化されている。

◎1981年（昭和56年）12月1日、和田謹吾（北海道大学文学部教授）は、機関誌『札幌の歴史』に講評「さっぽろ文庫を読む／遠友夜学校」を寄せた。

○『札幌の歴史』は新札幌市史編集室・札幌市教育委員会文化資料室編集・発行の雑誌である。創刊号のp.52～53に載せた記事で、和田は次のように述べている。

○「この巻を読んで私が感銘したことは、記録としての綿密さとともに、叙述を貫く愛情、愛惜の強さであった。それは、真実を知らぬ後世の歴史家が資料を自己流に解釈して組み立てた観念的な記述ではなくて、自分の青春をそこにかけて来た人々の証言であり、血の通った歴史である。遠友夜学校に関してこういう記述が残せるのは、いまがもうほとんど最後の時期である。そういう意味でも、まことに時宜を得た、貴重な出版ということができる。／……／……内容は、ある面でより親しみやすく、ある面でより多角的に展望していて、この学校のために献身された多くの先輩、千人を超える卒業生たちの熱い思いに対する、この上ない鎮魂歌になり得ていると思う。／……本書を読んでいて一番感じることは、ここにのみ真実の教育というものがあったのではないかということである。……この夜学校では教師が無償で教育に当たり、生徒は何の資格もとれない学校に熱心に通った。そこにあるものはただ人間同志の信頼であり、真理・真実への純粋な情熱であった。このような学校が半世紀にわたって札幌に存在した。……まさに札幌が日本の教育史上に誇る1つの歴史がここにまとめられた意義は大きい」。

◎1982年（昭和57年）7月25日発行の『北大百年史／通説』で、松沢弘陽は、**大学での、社会事業としての遠友夜学校の役割について言及した。**

○松沢（北海道大学法学部教授）の論文は「札幌農学校と明治社会主義」と題するもので、同書のp.622～641に収載されている。引用・紹介されることが多いので、当該部分を2つ転載しておく。

○p.625～626には、「……彼の学外における社会的事業として最大のものは、何といても1894年（明治27）に創設した遠友夜学校であろう。それは規模こそ小さかったが、日本の都市化が生み落した『下層社会』への、教育の面からの援助として先駆的なものであり、大学セツルメントとしても、1923年（大正12年）創設の東京帝国大学セツルメントに30年近く先んじていた。／教授新渡戸がこのような情熱を傾けた多様な活動は、学生の心をゆすぶり、彼らの視野を広げ、そして、彼らの間に鬱積していたある種の空気を解き放ち、活気づけたようである。」とある。

○さらにp.628には、「彼らを地域社会の具体的な問題に結びつける場として大きな意味をもったのは、何といたっても遠友夜学校の存在であった。本稿に登場する人のほとんどが、またそれ以外の多くの学生が、教師としてこの学校に集まる少年少女のために献身した。それはこの時期から、1944年（昭和19年）の学校の廃校まで、札幌農学校—北海道帝国大学の心ある学生の中に、1つの伝統となっていた。理想主義的なしかし反面観念的な学生たちが、貧しい生徒との交わりを通して都市の『下層社会』の問題に、さらに日本社会全体の問題に目を開かれてゆく様子は、例えばこのような学生の1人だった有島武郎の日記がくわしく語ってくれる」とある。

◎1984年（昭和59年）5月5日、ラジオ放送番組『さっぽろ散歩』で、題名「遠友夜学校と中央勤労青少年ホーム—時代を映す青春のエネルギー—」が放送された。

（⇒1979年（昭和54年）4月21日）

◎1984年（昭和59年）7月25日、札幌市は記念書『明日への架け橋』を発行した。

○副題は「—札幌市中央勤労青少年ホームの20年—」とあり、札幌市中央勤労青少年ホームが編集したB6判、全206ページ、非売品の（冊子というより）立派な図書であり、開館から20年の歩みを詳細に記録したものである。

○8人の編集スタッフにより著されたものであるが、遠友夜学校関係分は赤間均・澤山正が担当した。

○構成は、序章・札幌遠友夜学校（p.9～38）、第1章・札幌市中央勤労青少年ホームの20年、第2章・ホーム20年の思い出、第3章・回顧20年（豊富な年表）、第4章・資料編（各種統計、法規、各種名簿、周辺建物地図）、となっている。

○書名は、新渡戸稲造が志した「世界の架け橋」にちなんだものであり、記述全体も遠友夜学校とその精神の伝承を意識して書かれている。一見、遠友夜学校とは関係の薄い書物のように思われるが、特に序章は遠友夜学校の歴史についてもコンパクトにまとめられた資料性の高いものである。また、由緒ある遠友夜学校跡地に建設された勤労青少年のための施設が「どう利用されたか」を伝える適書である。

○第1章には、「遠友夜学校の遺産」「遠友夜学校精神の継承」「慈愛の精神」などの見出しのもと、ホームの建設に至る学校跡地寄付の経緯から、開設後の実際の運営・活動の中で遠友精神が生かされてきた事例紹介まで、継承の様子が記されている。

○ただ、同じ建物内の1階に当初から開設されていた記念室(1981年(昭和56年)9月発行の『遠友夜学校(さっぽろ文庫18)』とは異なり、名称は「遠友夜学校記念室」)については、なぜか別もの扱いされた感があり、記念室自体の設置前後の具体的な動きも、20年間の管理・運営状況や来訪者数などの諸記録も、まったく載っていない。

○どんな意図があったのか、詳細な周辺地域地図が示されているのに、肝心の建物図面や各階平面図、敷地内の配置等の地面図など基本資料も載せられていない。

◎1984年(昭和59年)11月1日、新渡戸稲造が五千円札(日本銀行券の五千円紙幣)の肖像(養子の孝夫と琴子とが結婚した時の祝いの記念写真)に採用された。

○五千円紙幣の肖像者として、初代の「聖徳太子」(発行:1957年(昭和32年)10月1日~1986年(昭和61年)1月4日)に次ぎ、2代目に新渡戸が採用された。

○新渡戸は、紙幣肖像画の3条件、①世界に対して誇れる人物(世界的に活躍した国際人であること)、②高い知名度(著作である『武士道』を通じて世界中に名前が知られていること)、③精密な写真・肖像画が残されていること、を満たす人物として採用された。

○五千円札の表右下に、楕円形の絵柄の中に太平洋が描かれている。この意味することは、日本と欧米諸国との相互理解が深まることを強く望み、「われ(私は)太平洋の橋とならん(なりたい)」と新渡戸が言い続けた志を表したとされる。

○肖像画・新渡戸の五千円札は2007年(平成19年)4月2日の発行までで、以降は、3代目の「樋口一葉」となっている。

◎1985年(昭和60年)9月1日、札幌市・札幌市教育委員会は、単行本『新渡戸稲造』(さっぽろ文庫34)を発行した。

○この書は、全100巻の「さっぽろ文庫」の34巻目の刊行物である。札幌市教育委員会編、B6判、全318ページで、内容も全く同じだが、表紙と奥付の発行所だけが異なる2種類がある。1つは「札幌市・札幌市教育委員会」の発行で非売品、もう1つは「北海道新聞社」の発行で、広く一般に販売された。

○「新渡戸稲造」は、「遠友夜学校」の創設者であって、世界的な著名人であり、枚挙にいとまがない経歴・業績の持ち主である。英文の名著『武士道』などの著作がある。

○遠友夜学校関連の記述は多くなく、第2章の5「社会教育」p.152～167の中で須田政美（北海道武蔵女子短期大学教授）がふれている。

○須田は、次のように書いている。「博士が遺した1本太い芯の通った人間同士のふれ合いが、活々と楽しく展開した、それ自体がすなわち『修身』になっていたようだ。『生徒と教師共に牽き合う力が、白熱を発し合ったものだ』と高倉博士は述べているが、その通りであろう」。

○この書は、札幌市の「地域文化資産デジタルアーカイブ化事業」によって整備され、電子化保存された。一時期、インターネットで読める電子文庫として無料で公開された。

◎1985年（昭和60年）11月1日、松下菊人は、論文「『未来の教育者』新渡戸稲造」の中で「新渡戸青年の『教育の未来像』」についてふれた。

○この論文は、副題「欧米留学時代に抱いた構想と帰国後の実践―遠友夜学校を中心に―」がそえられており、日本英学史学会発行『英学史研究』1986巻第18号p.75～84に収載された。松下の肩書は「職業能力開発総合大学校名誉教授」である。

○松下は、多くの分量を遠友夜学校の紹介に割り、閉校後の伝承活動を次のように整理している。「1944年（昭和19年）3月、文部省の学校整備要綱により、輝やく50年の歴史の幕を閉じた。しかし、当地の学校関係者は、新渡戸の教育精神を存続させるために、夜学校の財産を基金として、同年、北海道庁立図書館内に特別文庫を設置し、読書を通じて青少年教育の目的を達成することとなった。そして、この

文庫は財団法人として、その名を『新渡戸文庫』とし、修養、科学、技術等、青少年の教養に必要な良書を提供しているという。また、同夜学校の土地は、札幌市に寄附され、同市が新渡戸児童遊園地（1962年（昭和37年））や札幌市勤労青少年ホーム（1964年（昭和39年））を建設し、その1室を新渡戸記念室として、新渡戸と遠友夜学校関係の資料を保存・展示公開している。／また、1954年（昭和29年）4月に半澤洵会長、高倉新一郎副会長らを役員として発足した『札幌遠友会』が、その後推進していた『新渡戸博士顕彰碑』建立の運動は、1979年（昭和54年）11月23日の勤労感謝の日、前述の勤労青少年ホーム前に、夜学校の校章と新渡戸夫妻のレリーフをつけた花輪を抱くたくましい青年像（山内壮夫彫刻）を設立して、その除幕式を行なう事で、その目的を達成した。そして、その記念像の台座には、新渡戸が最後に来校した時（1931年（昭和6年）5月18日）、『学問より実行』と大書して残した真筆をそのまま彫って据えてあることを、ここに附記しておきたい。／なお、『札幌遠友会』が中心になって進めてきた、もうひとつのプロジェクト・札幌遠友市民大学は、1973年（昭和48年）4月の開講以来、市民の生涯教育の場として喜ばれ、多大の実績をあげてきている。これは、まさに、100年前、欧米にあった新渡戸 青年が「札幌市民学園に対する理想」として抱いた夢の1つを、『生涯教育』の現代において実現している確かな証拠と言ってよいであろう」（年号は西暦に統一した）

○松下のあげた伝承活動のうち、2023年（令和5年）9月現在、確かな形で存在しているのは、跡地に造成された「新渡戸稲造記念公園」内に建っている青年像だけである。

◎1987年（昭和62年）4月1日から、札幌市内の全勤労青少年ホームに、市民からの公募によって決まった愛称「Let's」（レッツ）が付けられた。

○以後、一般的には、例えば「札幌市中央勤労青少年ホーム」は愛称「Let's（レッツ）中央」と短縮名でよばれるようになった。「Let's中央」が正式なのであるが、書きやすさから片仮名の「レッツ中央」が多く使われることになる。

○「勤労青少年ホーム」の名称が時代にそぐわないということで、札幌市は1987年（昭和62年）2月3日、新聞広告で一般市民からアイドルネーム（愛称）を公募し、2月20日までに寄せられた1,420点の応募作品の中から選考し、3月上旬に「Let's」と決定した。この愛称は「語調がよく、親しみやすく、若者向きである」との理由で選ばれた。

○愛称制定の経緯等については、1987年（昭和62年）7月札幌市発行の札幌市市民局青少年婦人部編『青少年婦人対策の概要／昭和62年度』p.68に記載されている。また、1987年（昭和62年）3月12・31日の『北海道新聞』朝刊「さっぽろ市内版」でも報道された。所在を示す看板も「Let's〇〇」に取り換えられた。

○当然、「記念室（遠友夜学校記念室）」は、引き続き「Let's中央」内に設置され、2011年（平成23年）3月31日に閉館・廃止されるまで継続された。

◎1988年（昭和63年）4月1日、札幌遠友夜学校の旧校地が「さっぽろ・ふるさと文化百選」に「遠友夜学校跡」として選定された。

○これは、札幌市創建120年を記念し、1988年（昭和63年）に「北国の生活の息吹きと開拓の労苦を伝える身近な文化遺産を再発見し、市民自らの手でこれを守り、後世に伝えていくこと」を目的として、市内の建物、遺跡、街並み、用具、まつり・行事などの100点を選定したものである。

○「遠友夜学校跡」は「遺跡」の1つ「No.51」として選定された。

○1988年（昭和63年）11月に選定結果が公表され、翌年には選定物件の由緒・由来や関係写真などを記した案内板が、札幌市中央勤労青少年ホーム入口付近に設置された。（この場所に設置されたパネル案内鉄板には「札幌市創建120年記念／さっぽろ・ふるさと文化百選／遠友夜学校跡……平成2年／札幌市／51」と標示された。いつ、なぜ撤去されたのか、失われて久しい）

◎1988年（昭和63年）10月22日、牧野金太郎（元中学校教師）が主宰する「札幌遠友塾読書会」が札幌市の北海道教育会館を会場として発足した。

○1988年（昭和63年）10月16日付け『北海道新聞』の札幌地方版は、牧野らによる「札幌遠友塾読書会実行委員会」が読書会を連続して開くとの小記事を載せた。テキストには哲学者・花崎皋平著『生きる場の哲学』（岩波新書、1981年（昭和56年）発行）が使われる、とあった。

○牧野は夜間中学の設立を目指しており、1990年（平成2年）発足の「札幌遠友塾自主夜間中学」の前身と位置づけられている。

○1989年（平成元年）10月結成の「札幌遠友塾準備会」（代表・工藤慶一：会社員、39歳）の活動を経て、1990年（平成2年）4月29日に結成式・開講式をおこなった「札幌遠友塾自主夜間中学」は、後に、その「あゆみ」を一覧にした表の中で「1987年（昭和62年）9月、遠友塾読書会開始（牧野金太郎世話人）、『君たちはどう生きるか』他、場所・北海道教育会館」としている。（ただし、公立図書館に依頼しての調査でも、1987年（昭和62年）9月および前後の月の『北海道新聞』には、この関連記事は見当たらない）

○2018年（平成30年）2月、各種のロング・インタビューに答える中で、工藤は「1987年（昭和62年）から『札幌遠友塾読書会』が開かれ、①吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』、②花崎皋平著『生きる場の哲学』、③高史明著『生きることの意味』を順に3年かけて読んだ。そこに遠友夜学校出身者が何人か来ていた。それでその後夜間中学を作ろうということになった」（要旨）と説明している。（⇒2018年（平成30年）2月26日）

○工藤によると、牧野の書いた文章の中に「遠友夜学校に通っていた人たちにとって、学ぶことが生きることの証と喜びになっていたように思える」とあったので、「学ぶことが生きることの証と喜びになる」の言葉を、設立当初から遠友塾自主夜間中学のスローガンとした。（「牧野の書いた文章」の引用元は、編著者・白佐はまだ確認できていない）

○教育者・牧野金太郎と遠友夜学校との結びつきについての追究は、まだきちんと行っていない（推測にすぎないが、現役時代は札幌市内の公立中学校などで数学の教師をしながら、また、退職後も『北海教育評論』などの教育関係雑誌で自らの教

育論や提言を寄稿していたと思われる)。ちなみに、牧野金太郎（1929年（昭和4年）根室市生まれの数学教師）という人物が、著書『明日に翔く—私の戦後教育史—』（北海道教育新報社、1978年（昭和53年）11月1日発行）を出版している。念のため、「札幌遠友塾読書会」の源流を求めて読んでみたが、新渡戸稲造や遠友夜学校の関連記述はなかった。工藤が出会った牧野とは別人なのかもしれない。

◎1990年（平成2年）3月31日、加藤秀俊（放送教育開発センター所長）は、紀要論文「新渡戸稲造と大学開放」の中で、遠友夜学校の事柄を詳細に考察した。

○一見、遠友夜学校とは関係なさそうな主題の論文であるが、それだけにいっそう興味深い論考になっている。アメリカの大学をはじめ、京都大学や学習院大学での研究・教授を経て、当時、放送大学客員教授でもあった社会学者の加藤秀俊は、『放送教育開発センター研究紀要』第3号p.1～16掲載の同論文において、延々と遠友夜学校の運営例を引き合いに出して考察し、最後に「遠友夜学校は、新渡戸のもっていた自由な学問の公開思想のひとつのあらわれであった」と説いた。

○「新渡戸稲造というひとりの人物を教育者という立場からみると、つねに自由な学校開放、とくに大学開放につとめたことに気づかないわけにはゆかない。遠友夜学校についていえば、それは貧困な子どもたちにたいする一種の社会事業であったが、その教育組織を北海道大学の学生たちの自発性にもとめたことは、あきらかにひとつの大学開放であった」。

○加藤は、1931年（昭和6年）の大学での学生ストライキ決議を例にあげた。夜学校の教師をしていた学生は、学生大会の決定にしたがうべきだが教師としては学校ストに賛同できない、というジレンマに悩み、深夜に至るまで論議を重ねたが、結論は出なかったという。このこと自体が学生たちに、「大学」とは何かを考え反省させた。「遠友夜学校での教師歴をもった学生は六百人におよぶ。かれらは、初等中等教育のなかに自発的に身を投じながら、その反面、大学のありかたをみずから考えないわけにはゆかなかったのである」と説いた。

○「新渡戸の大学開放思想は、その他の場面でも随所に展開された。……大学教授

というものは『象牙の塔』のなかの神聖な存在であるべきであって、世俗を超越していなければならない、というのが一般の常識でありイメージであった(が)、それを新渡戸は淡々と打破した」とする。

○新渡戸稲造が遠友夜学校の運営に学生を自主的にボランティア精神でかかわらせたことによって、象牙の塔にこもりがちな大学人を実社会の現実に目を向けさせた、と説く。今日でいう「大学開放」の先見の見識に基づいて、遠友夜学校の維持への参加をとおして体験・実践させたのだとみる。

◎1990年(平成2年)4月29日、民間人有志による「札幌遠友塾自主夜間中学(通称・遠友塾)」が札幌市内に設立され、結成式・開講式が実施された。

○結成式・開講式(入学式)は、1年生95人出席のもと、札幌青少年センターで執り行われた。

○同塾は、牧野金太郎(元中学校教師)が主宰した「遠友読書会」を前身とし、これを発展する形で設立された学びの場で、工藤慶一(会社員)が1989年(平成元年)10月に「札幌遠友塾準備会」を結成し、準備を進めて実現した夜間の私塾である。

(創設者の1人・工藤慶一は40歳であった。工藤は、1996年(平成8年)8月～2010年(平成22年)7月、札幌遠友塾第2代代表や、のちに「北海道に夜間中学をつくる会・共同代表も兼任した)

○同塾の創設の精神は、新渡戸稲造が1894年(明治27年)に開設し1944年(昭和19年)まで存在した「遠友夜学校」をモデルにして、「助け合いと支え合い」を理念に本当の学校を求めて設立された。

○同塾の目的は「教育を受けることができなかつた人たちが、学びの輪の中で、自己を取りもどし、夢や希望をかなえるためにある」とした。スローガンには「学ぶことが生きることの証と喜びになる」を掲げた。

○戦後、年月を重ねるにつれて、新渡戸の教育精神を伝え継ごうとした実践活動の中では、継続してきた実績からみて、「札幌遠友塾自主夜間中学の実践」が最も旧遠友夜学校の姿を継承していると評価されるようになっている。

○「札幌遠友塾自主夜間中学」の初代代表に後藤鎮義（元高校教師）が、事務局長に馬場克明（小学校事務職員）が就いた。（以降の同塾の代表は次の通りである。1996年（平成8年）8月から第2代目・工藤慶一。2010年（平成22年）8月から第3代目・井上大樹。2012年（平成24年）4月から代表代行・富田忠義。同年8月から第4代目・遠藤千恵子。2022年（令和4年）4月から5代目・黒澤晴一。2023年（令和5年）8月末現在は黒澤が継続）

○1990年（平成2年）3月25日、『北海道新聞』朝刊は「夜間中学／札幌に来月誕生／老若幅広く募集／自主運営退職教師ら協力」の見出しで、受講生募集を兼ねた記事を掲載した。

○1990年（平成2年）5月9日を初日に、毎週水曜日午後6時15分から2教科（各50分授業）、「札幌市民会館」を会場として講座（授業）が開始された。開始時の受講生は86人だった。

○修業年限の目安は3年で1学年3学期制。1学年の定員の目安は40人。生徒募集は毎年春。教科は英語・数学・国語・社会（中学1年程度まで）で、他に歌とホームルームなどがある。行事は、遠足・クリスマス会・卒業記念パーティーなどを年1回開催した。

○ボランティアのスタッフによる運営は、月1回開催の全体会議（すべての連絡・相談・決定を行う）、随時開催の事務局会議・学年部会・教科部会・その他による。経費は、賛助会員の会費・寄付金によるほか、受講料月1,500円（2009年（平成21年）4月から1,000円）で、市民会館使用料等すべてをまかなわなければならなかった。

○1990年（平成2年）12月12日、新聞「遠友だより」第1号を発行した。以後も1～2か月に1回、発行され続けた。（⇒1990年（平成2年）12月12日）

○初年度、32回の講座を修了し、1991年（平成3年）3月27日、第1回修了式を札幌市民会館で実施した。（修了生85人）

○1991年（平成3年）7月27日、STVラジオ放送15分番組『さっぽろ散歩』で「札幌遠友塾自主夜間中学」が紹介された。この要点は、1993年（平成5年）3月31日発行、札幌市総務局広報部編刊の小型冊子『さっぽろ散歩③』（全184ページ）p.57

～60にも同題名で掲載された。

○1993年（平成5年）3月24日、第1回卒業式（第1期卒業生42人）・第3回修了式（2年生29人、1年生12人）を「札幌市民会館」で挙行了。（⇒1993年（平成5年）3月24日）

○1998年（平成10年）6月1日、工藤慶一は、北海道情報宣伝研究会発行の月刊誌『NODE（ノード）』NO.6（通刊7号）「特集・行き詰まる学校・家庭・地域」のp.36～40に「札幌遠友塾自主夜間中学」を寄稿した。

○1999年（平成11年）7月、「開講10周年記念のつどい」を開催した。（講座開始の基点を1989年（平成元年）10月結成の「札幌遠友塾準備会」としている）

○2003年（平成15年）4月からは「じっくりコース」を、2006年（平成18年）4月からは「じっくりクラス」を開設した。（⇒2003年（平成15年）4月）

○2007年（平成19年）2月17日、「北海道に夜間中学をつくる会」のホームページが立ち上げられた。（⇒2007年（平成19年）2月17日）

○2007年（平成19年）4月の第18回入学式から、講座（授業）実施会場は「札幌市民会館」から「札幌市教育文化会館」へと変更になった。（⇒2007年（平成19年）3月21日）

○2007年（平成19年）10月9日、札幌弁護士会から2007年度の「人権賞表彰」を受けた。（⇒2007年（平成19年）10月9日）、

○2007年（平成19年）12月22日、「北海道に夜間中学をつくる会」の会報『きぼう』No.1が発行された。（⇒2007年（平成19年）12月22日）

○2009年（平成21年）4月22日の第20回入学式から、講座（授業）実施会場は「札幌市教育文化会館」から「札幌市立向陵中学校」校舎へと変更になった。

○2009年（平成21年）9月20日、開講20年記念式と「記念のつどい（他遠友塾生との体験発表交流会）」を札幌市教育文化会館で実施した。

○2010年（平成22年）6月9日、広報紙『こんばんは遠友塾です』の第1号を発行した。以後も、ずっと発行され続けた。（⇒2010年（平成22年）6月9日）

○2013年（平成25年）11月25日、公益財団法人社会貢献支援財団から「平成25年

度社会貢献者表彰」を受けた。(⇒2013年(平成25年)11月25日)

○2015年(平成27年)9月12日、開講25年を記念し、「北海道自主夜間中学校交流会・札幌遠友塾25年の集い」を札幌市教育文化会館で開催し、のちに冊子『同記録集』を発行した。(⇒2015年(平成27年)9月12日)

○2015年(平成27年)12月発行の会報で札幌司法書士会は、特集「札幌遠友塾自主夜間中学に行って来ました!!」を報じた。(⇒2015年(平成27年)12月)

○2019年(令和元年)11月6日の授賞式で、「第73回北海道新聞文化賞(社会部門)」を贈呈された。(⇒2019年(令和元年)11月6日)

○2019年(令和元年)11月30日発行のSTVラジオ編『北海道命名150年記念／ほっかいどう百年物語』は、現在の「札幌遠友塾自主夜間中学」をかつての「遠友夜学校」の生まれ変わりだと位置づけた。(⇒2019年(令和元年)11月30日)

○2020年(令和2年)2月～2023年(令和5年)3月、新型コロナ禍の影響のため、一時的に休塾または会場を札幌市文化会館などに変更して授業を維持した。

○2020年(令和2年)3月までの30年間に400人以上が卒業し、在籍した受講生の延べ人数は2,000人余に達した。

○2020年(令和2年)9月12日には、開講「30年の集い記念講演会」を開催し、翌年3月には冊子『30周年記録集』等を発行した。(⇒2021年(令和3年)3月)

○2021年(令和3年)5月5日、『朝日新聞』は、憲法との関係で札幌遠友塾自主夜間中学の果たす役割を採り上げた。(⇒2021年(令和3年)5月5日)

○2022年(令和4年)3月、代表の遠藤千恵子は、学会誌に論文「コロナ禍のもとでの札幌遠友塾自主夜間中学」を掲載した。(⇒2022年(令和4年)3月31日)

○2022年(令和4年)4月19日に開校式・入学式をおこなった公立夜間中学校「札幌市立星友館中学校」の開校に伴い、「札幌遠友塾自主夜間中学」は共存の途を探り続ける時代に入った。

○2023年(令和5年)4月12日、3年ぶりに第34回入学式を向陵中学で行い、19人の新入生を迎えた。

◎1990年（平成2年）6月7日、半澤洵を補佐して尽力した、遠友夜学校の永年の功労者・高倉新一郎が死亡した（87歳）。

○高倉は旧財団法人札幌遠友夜学校理事・副校長、札幌遠友会の副会長などを務めた。1972年（昭和47年）9月25日に半澤洵が死亡した後は、旧札幌遠友夜学校の関連行事・活動で半澤の代行職を務めた。

◎1990年（平成2年）12月12日、「札幌遠友塾自主夜間中学」（代表・後藤鎮義）は、新聞「遠友だより」第1号を発行した。

○受講生の書いた授業の感想や行事の思い出など、さまざまな記事を載せ、賛助会員等に送り、札幌遠友塾の様子や動向を知らせ、理解を深めてもらうために発行している。

○A3判（途中までB4判）2ページで、編集・発行をスタッフの宮田友子（小学校事務職員）が担当した。手書きの温かさを長年にわたって貫いた。

○以後も、1～2か月に1回のペースで不定期にずっと発行され続けている。

○2021年（令和3年）3月、30周年記念を機に2020年（令和2年）2月12日発行第209号までの30年間分を合本し、冊子（縮小A4判全422ページ）を発行した。

◎1991年（平成3年）3月、松井愈（元札幌遠友夜学校教師・元北海道大学教授）は『遠友夜学校に学んで五十年』（稿本）を著した。

○全69ページ。（⇒2004年（平成16年）12月発行『松井愈氏資料目録』）

◎1991年（平成3年）7月31日、蝦名賢造（獨協大学名誉教授）は、単行本『札幌農学校—日本近代精神の源流—』の中で「札幌遠友夜学校」についてもふれた。

○新評論発行のこの書は、2011年（平成23年）3月10日、「札幌農学校」復刻刊行会によって、同一書名の『復刻版』が発行されている。（⇒1980年（昭和55年）8月25日）

◎1991年（平成3年）10月19日、札幌市発行の『新札幌市史／第2巻・通史2』は、解説「私立小学校」で遠友夜学校についても簡明にふれている。

○掲載箇所は「第6編第5章第1節の2」である。

○「……貧困子弟の教育としては、しかしまず札幌農学校教授新渡戸稲造によって創立された遠友夜学校を挙げるべきであろう。新渡戸は欧米留学前から貧窮問題に強い関心を持っており、1891年（明治24年）帰朝後も貧しい両親を持った子弟に対する夜学校開設の意思を持っていたが、たまたま夫人に米国から遺産が送られたのを機に、1894年（明治27年）1月、南4条東4丁目に遠友夜学校を設置した。同校ははじめ週2回、夜2時間の授業であったが、のち毎夜1時間とし、教師は札幌農学校生徒が奉仕して、1897年（明治30年）に新渡戸が去ったのちも長く続けられ、1943年（昭和18年）に、官の戦争遂行に直接必要な以外の各種学校整理の方針により廃止されるまで継続された」。（掲載は飛びページのp.825・830）

○全8巻10冊の『新札幌市史』には、他にも数か所で項目的に遠友夜学校についての史実がふれられている。

○札幌市教育委員会編集の『新札幌市史』は1986年（昭和61年）3月～2008年（平成20年）3月に編纂されたものである。（以前の札幌市史編集委員会編『札幌市史』は1953年～1958年（昭和28年～33年）に発行された）

◎1992年（平成4年）6月24日、札幌市・札幌市教育委員会は、単行本『農学校物語』（さっぽろ文庫61）を発行した。

○この書は、全100巻の「さっぽろ文庫」の61巻目の刊行物である。札幌市教育委員会編、B6判、全314ページで、内容も全く同じだが、表紙と奥付の発行所だけが異なる2種類がある。1つは「札幌市・札幌市教育委員会」の発行で、非売品であった。もう1つは「北海道新聞社」の発行で、広く一般に販売された。

○この書では、随所で遠友夜学校や関係した人々についてふれられている。

○永井秀夫（北海道大学名誉教授）は、「第2章 大志の系譜」の「伝統の継承」（p.126）で、次のように述べている。「札幌農学校の美しい伝統は少なくない。なかでも遠友

夜学校の存在は大きな意味をもつ。本書のあちこちでふれられているが、太平洋戦争下まで、長期にわたって続けられた学生たちのボランティア活動であり、貧しい人々のためのセツルメントであり、社会教育活動であった。クリスチャン学生の社会活動と重なり合う部分も大きい。『遠友』という名が論語からとられていることからわかるように、もっと広い、理想主義的な学生たちの、社会との接触の場所であった。

○この書は、札幌市の「地域文化資産デジタルアーカイブ化事業」によって整備され、電子化保存された。一時期、インターネットで読める電子文庫として無料で公開された。

◎1992年(平成4年)10月20日開催の札幌市議会第1部決算特別委員会において、「Let's (レッツ) 中央」の老朽化等の問題が市議会で初めて取り上げられた。

○新渡戸稲造と札幌遠友夜学校の資料を展示する「記念室(遠友夜学校記念室)」は、当時、愛称「Let's (レッツ) 中央」、すなわち「札幌市中央勤労青少年ホーム」に併設されていた。

○同日の「札幌市議会第1部決算特別委員会会議録(第5号)」によると、新青少年センターの増設構想と勤労青少年ホームの活性化対策に関する検討の質疑の中で、議員から話題にされた。議員の発言要旨は「Let's中央の施設を視察してきた結果、他のLet'sの施設に比べて小規模であり、老朽化している。民間類似施設と比較して、非常に魅力が乏しい。1964年(昭和39年)設立であるからもう30年近くなるうとしていて、非常に時代のニーズにそぐわない施設だという感想を持った。さらには、現青少年センターが勤労青少年ホームと同様な施設内容になっているので、ホームが青少年のニーズに応えていくということは非常に難しいのではなかろうか」、しかし、「Let's中央については、新渡戸稲造博士夫婦が自費で建設し、札幌の創成期から1944年(昭和19年)まで約50年間、青少年の学習の場として提供されてきた遠友夜学校の跡地でもあるわけで、由緒のある土地柄である。札幌の創成期から若い人たちがここに集っていろいろと学習をした所であるから、非常に文化的に、あるい

は歴史的に素晴らしい所でもあり、21世紀を担う若い人たちにこの場所を継承させていくことも、私たちの責任ではなかろうかと思っている」というものであった。

○一方、「この周辺はマンション化、ホテル化していて、住環境が非常にさま変わりしている。その状況の中で、青少年及び一般市民が利用できる魅力的な公共施設を当該地に設置することによって、周辺の住環境がさらに整備されていくこともある」と指摘した。

○これに対して、行政側からは、新青少年センターの建設予定地に関しては、全市的なまちづくりの観点から関係部局と協議し検討していきたいとの答弁があった。

◎1993年（平成5年）2月15日、蝦名賢造（獨協大学名誉教授）は単行本『新版北方のパイオニア』の中で「新渡戸稲造」の伝記を取り上げた。（⇨1964年（昭和39年）5月10日）

◎1993年（平成5年）3月24日、「札幌遠友塾自主夜間中学」（代表・後藤鎮義）は第1回卒業式を「札幌市民会館」で挙行了た。

○3年間通い通した同塾の卒業生は42人（男性4人、女性38人）であった。（ただし、自主夜間中学は「学校」としての認可を受けていないため、中学校の卒業資格にはならない）

○1993年（平成5年）2月27日、同塾卒業生の中村節子の随筆「心に残る遠友塾」、および同年3月5日、かつて札幌遠友夜学校を卒業した梅野きん子の随筆「遠友塾卒業おめでとう」が『北海道新聞』投稿欄「いずみ」に掲載された。

○中村の作品「私にようやく遅い春が訪れようとしています。／樺太で終戦を迎え、昭和23年（1948年）、あの混乱の中を、着のみ着のまま両親、祖父、弟とともに引き揚げ、上川郡に開拓者として入植しました。長女だった私が、父母の片腕となって家計を助けなければ、家族は生きていくことができませんでした。そんな時代だったのです。／3年前のある日、北海道新聞で戦争やいろいろな事情で学校に行くことができなかつた人たちのために自主夜間中学『札幌遠友塾』が設立されること

を知りました。『機会があったらもう一度勉強をしたい』という私の願いに、主人と息子から『お母さん頑張ってみたら』とすすめられて、自分なりに少しでも学ぶことができれば良いのだ、遠友塾に挑戦してみようと、決心しました。／あれから3年間、優しい先生方の思いやりの深い指導で、幸いにして多くのことを学ぶことができました。遠友塾のお友達には心に残るいろいろな思い出を本当にありがとう。この春3月に無事、遠友塾第1期生として卒業することができます。これからも気張らず、焦らずにいろいろなことに挑戦したいと思っています。また、遠友塾に通いはじめて3年間1度も休むことなく『いずみ』欄をノートに書き続けました。私も卒業記念に『いずみ』に挑戦してみよう、と思いたちました」

○梅野きん子の作品「自主夜間中学『遠友塾』を卒業する中村節子さん、3年間ご苦労さまでした。心よりお祝いを申し上げます。／私は昭和17年（1942年）3月、『遠友夜学校』を卒業した者です。今、思うと私の人生で唯一の大きなものを得た学校でした。それは学問ばかりではなく大きな心の支えと、ぬくもりを頂いたと思います。本当に楽しい学校でした。／昨夏、息子の案内で二セコの有島記念館を見学致しました。そこに遠友夜学校を創設した新渡戸稲造先生の写真がほほ笑んでいるのを拝見して懐かしさでいっぱいになりました。／今は時代が変わりみな高学歴となりましたが、戦前戦後、われわれの世代はみな苦労しない人はおりません。ただ口にしないだけと思います。／あなたも良きご主人やご家族に恵まれて、今、何よりものものを得られました。『遠友』の名が残り、あなたのように学ぶ方が現在もいらっしやることを、先人の先生方はどんなにか喜んで拍手されていることでしょう。これからも遠友の精神を継ぎ良き人生でありますようにお祈り致します。／私も今は、詩吟や短歌にささやかな楽しみを得ておりますが、これも夜学で学んだおかげと感謝している次第です。懐かしさのあまりつたないペンを取りました。遠友塾ご卒業、本当におめでとうございませう。

◎1993年（平成5年）4月1日、札幌市は、「勤労青少年ホーム」の管理・運営を「財団法人札幌市青少年婦人活動協会」に委託することになった。

○同協会は、のちに名称を変更し、また、指定管理者となる。(詳細省略)

○当然、「記念室(遠友夜学校記念室)」は引き続き設置され、2011年(平成23年)3月31日に閉館・廃止されるまで継続される。

○北海道大学の穴澤義晴によると、札幌市の全勤労青少年ホームを管理・運営することになった同協会(のちの「財団法人札幌市青少年女性活動協会」)は、遠友夜学校の「遠友の精神」とされる「人が人を作り上げる、ともに生きがいを感じられる」生きた施設づくりを運営理念として掲げたとされる(論文「若年者の職業的自立支援という取り組みにおける札幌市勤労青少年ホームの可能性」『社会教育研究』24号、p.69~82、2006年(平成18年)3月発行)。

◎1993年(平成5年)8月9日、山谷正は、著書『さっぽろ歴史なんでも探検』を発行し、そのp.51で「新渡戸稲造の札幌遠友夜学校跡」を紹介した。

○札幌市内と近郊市町の歴史的遺構・遺跡を簡明に紹介した郷土史探訪ガイドブックで、B6判全285ページにカラー写真入りで253か所を紹介している。

○フリーライターの子山谷は、中央区の札幌市勤労青少年ホーム内に遠友夜学校記念室が設けられ、当時の資料が展示されていることを案内し、遠友夜学校の歴史を次のように解説している。

○「この地は旧札幌農学校(現北大)教授新渡戸稲造が明治27年(1894年)に貧しい家庭の子弟のために遠友夜学校を設立した所。／この学校では農学校の教官や学生が先生となり、無料で授業が行われたという。勉学を志す貧家の子弟にとってはまたとない学校であった。／しかし、残念ながら第二次世界大戦の末期、学生の動員強化によって経営が困難となり、昭和19年(1944年)に閉校してしまった」

◎1993年(平成5年)12月、小塩進作(元札幌市助役、文筆家)は冊子『札幌遠友夜学校[複製]』を製作し、関係者に無料配付した。

○札幌市中央図書館の所蔵書籍の中に、1993年(平成5年)12月出版の出版者・小塩進作の『札幌遠友夜学校[複製]』全108ページがある。これは小塩の著作ではな

く、1964年（昭和39年）6月10日に財団法人札幌遠友夜学校が編刊した冊子を、小塩が自費で贈呈用にそっくり複製して、1994年（平成6年）6月実施の札幌遠友夜学校創立百年記念事業の際などに配った分の1冊である。（⇒1964年（昭和39年）6月10日発行の冊子『札幌遠友夜学校』）

○北海道大学農学部卒でクリスチャンの小塩は、新渡戸稲造が1931年（昭和6年）5月に来札した時（旧制中学4年在学）にたまたま講演を聴いて以来、新渡戸に心酔し、札幌遠友夜学校にも多大な好意的関心を持ち続けてきた。

○小塩は、大卒後、7年間東京で国家公務員として勤務し、札幌市吏員になり27年間勤め、退職前の14年間（1959年（昭和34年）6月～1973年（昭和48年）5月）では助役も務めた。1955年（昭和30年）ごろにはすでに内心では「中央児童相談所の後地には札幌市の勤労青少年向けの施設を」と、思い描いていた向きがある。

○立場上からも諸般の市行政や北海道庁の諸計画を承知していたので、1973年（昭和48年）5月の退職後（北海道熱供給公社社長時代など）も含めて、札幌遠友夜学校の同窓会ともいえる「札幌遠友会」の諸活動に側面的に積極的に協力し、また、何かと黒子として自ら動き回り汗をかいて尽力した。

○既に詳述したように、1961年（昭和36年）年6月からの、札幌市への敷地寄付の迅速な実現を図ったのをはじめ、寄付時に交わした約束事項の札幌市側の着実な履行、1964年（昭和39年）6月の札幌市勤労青少年ホーム内「遠友夜学校記念室」の開設、1979年（昭和54年）11月の新渡戸稲造博士顕彰碑の建立、1994年（平成6年）6月の札幌遠友夜学校創立百年記念事業の実施など、多大な貢献を着実に実行した。『札幌遠友夜学校 [複製]』の製作は、小塩がこんなことまでした人であったことを示す象徴的行為であった。

○ついでに、文筆家の小塩が随想記事や著書などとして著したもののの中から「新渡戸稲造、遠友夜学校、同記念室」に関してふれた記述をざっと拾ってみただけでも、以下のようなものがあげられる。次の7編は、1985年（昭和60年）5月25日発行の小塩進作著刊単行本『茨戸湖畔』全312ページに転載収録された寄稿121編（1972年（昭和47年）6月20日～1983年（昭和58年）12月5日に掲載分）寄稿した分の

中に含まれている。

①1977年（昭和52年）6月13日掲載「遠友夜学校の遺産」、②1977年（昭和52年）11月12日掲載「『新渡戸記念庭園』を訪ねて」、③1979年（昭和54年）11月9日掲載「『新渡戸先生記念室』の扁額」（以上、『北海タイムス』夕刊「えぞまつ」欄に収録）、④1972年（昭和47年）6月20日掲載「小樽に近藤先生を訪ねて」（教会誌『教会の声誌』に収録）、⑤1981年（昭和56年）9月1日掲載「私論・遠友夜学校」（単行本『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.104～120に収録）、⑥1981年（昭和56年）10月16日掲載「古くて新しい教え」（『北海タイムス』朝刊「四季の声」欄に収録）、⑦1983年（昭和58年）12月5日掲載「新渡戸稲造先生の没後50周年にあたって」（教会誌『神愛園誌』に収録）。『茨戸湖畔』での掲載ページは、①p.6～7、②p.20～21、③p.104～105、④p.227～232、⑤p.282～297、⑥p.172～173、⑦p.257～261である。

○1995年（平成7年）1月10日発行で小塩進著作刊単行本『続・茨戸湖畔』全230ページが出ているが、これには2冊の続編の意味合いが込められており、『茨戸湖畔』ともう1冊の1992年（平成4年）11月発行の小塩美恵子・小塩進作編刊、小塩哲郎追悼文集『パパがんばってます』全161ページの続編にも相当する。21編の収録内容は、寄稿文の収録というよりも、後者の続編で親族や知人向けに書いた文が多い。寄稿の転載収録も含むと想像されるが、どの稿にも転載元（初出）を示していない。

○『続・茨戸湖畔』に収録の記事の中で、関係分は「新渡戸稲造先生のご人格を偲ぶ—高倉新一郎先生のこと—」（p.138～145）1編だけである。これには1992年（平成4年）3月28日の日付が入っている。末尾のほうのp.144～145には「新渡戸稲造先生の顕彰碑の現在の位置が、道路の拡張で構内に移転しなくてはならない。また勤労青少年ホームの中にある新渡戸稲造先生の記念品展示室は手狭なため、……札幌市資料館の中に移ることがよかろうかといわれている」とある。

○以上の8編の内容については、必要なものは関係の部分でふれたので、ここでは省略した。

◎1994年（平成6年）4月1日から札幌市青少年課は、遠友夜学校開設100周年を記念して「遠友夜学校記念室」の改修を進め、5月18日に改装再展示を開始した。

○同記念室の改修は、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会（会長・石塚義明、事務局長・小塩進作）の主導のもと、百年記念講演会開催に合わせて進められた。

○1994年（平成6年）4月1日発行、広報誌『広報さっぽろ』同年4月号（第409号）の「お知らせ（その他）」欄p.38に、「遠友夜学校関係資料提供のお願い」という次の呼びかけが載った。「新渡戸稲造が『札幌遠友夜学校』を設立して今年で百年を迎えます（1944年（昭和19年）閉校）。これを機会に市では、中央勤労青少年ホーム内の遠友夜学校記念室を改修し、展示物などを充実して、夜学校の精神と歴史をより広く市民に伝えたいと考えています。そこで、記念室に展示する遠友夜学校や新渡戸稲造に関する資料を集めていますので、提供可能な資料をお持ちの方はぜひ、ご協力をお願いします。[詳細は青少年課]」

○1994年（平成6年）4月19日付け『北海道新聞』も、朝刊札幌版に「札幌遠友夜学校開設100年／新渡戸稲造の資料提供して／展示物充実図る／「夜学の精神」伝えたい」の見出しで、札幌市の呼びかけを紹介・応援する記事を載せた。眠ったままの資料を掘り起こそうとしたものである。

○改修は、当時25㎡であった記念室（パネル、図書等を展示）の面積を2倍（50㎡＝約16坪＝16畳間2室）に広げ、教室を模して机や椅子を並べる形に整備し、約150点の展示物を約200点に増やすという計画で、改修工事は5月中旬には完成させるとしていた。所管は札幌市市民局青少年女性部青少年課であった。

○同記念室（遠友夜学校記念室）の開設は1964年（昭和39年）6月11日であったから、記念室の開設30周年にも当たる。関係者に、この意識や配慮があったかどうかは不明である。

○1994年（平成6年）6月1日発行の広報誌『広報さっぽろ』同年6月号（第411号）は、「お知らせ（催し）」欄p.19に「遠友夜学校記念室オープンと創立100年記念講演会」を載せた。「遠友夜学校記念室オープン」は「新渡戸稲造が創立し創立100年を迎えた同校の記念室。所在地：Let's（レッツ）中央（中央区南4東4／地下鉄

バスセンター前駅下車)、会館時間：午前10時～午後5時（日曜・祝日も開館）〔詳細は青少年課〕。「記念講演会」は「日時会場：6月21日、午後1時30分～4時30分、北海道大学学術交流会館（以下、省略）〔詳細は北海道大学農学部農業市場講座か青少年課（以下、省略）〕」と伝えられた。

○1994年（平成6年）6月29日、『北海道新聞』夕刊道央版の「街を歩けば」欄に「遠友夜学校記念室／新渡戸稲造の偉業伝える」の記事が載った。遠友夜学校の歴史と、改装し同年5月18日に展示を再開した様子が紹介された。当時の卒業写真や生徒会の機関紙、新渡戸稲造博士の揮毫の額などがわかりやすく展示されていると伝えた。

○資料提供の呼びかけに対して、集まった資料のことについての報告・公表は、改装後の再展示開始時にも、それ以後にもなかった。

○改修後の記念室は、全体の専用面積が約67㎡となり、改修前の2倍以上になった。構成は、玄関前の目隠し部分と、玄関を模した引き戸の入口と、2つの展示室（第1室、第2室）であった。

○目隠し部分前の廊下の上部壁には大きな「遠友夜学校記念室」の標識が掲げられ、1坪ほどの目隠し空間が設けられ、その奥に入口のガラス張り引き戸があった。その空間の壁には簡単な説明パネルがあり、引き戸脇には表札「遠友夜学校」が掲げられた。

○第1展示室には、新渡戸等の肖像写真、学校の歴史年表、新渡戸の言葉を書いたパネル、各種関係データ記載のパネル、思い出の写真・手紙等が並べられた。1885年（明治18年）、宮部金吾宛に書かれた手紙の中で、貧しい子どもたちのための夜学校を札幌に建てたいという新渡戸稲造の学校設立への熱い思いを綴った書簡や夜学校の歴史などが紹介された。

○第2展示室は、当時の教室を再現する工夫もなされた。各壁面がガラス張りの大きな展示ケースになっており、有島武郎作詞の校歌の歌詞、新渡戸揮毫のリンカーンの言葉もケース内に掲げられていた。床面には、生徒用の小さな机と椅子が4対並べられ、教室の様子（「学問より実行」の扁額の下で、新渡戸校長が教卓から生徒

に語りかけている雰囲気)を想定した展示となっていた。机自体が展示ケースであり、生徒の文集や貴重な書類、図書等が並べられた。

○2つの展示室では、BGMとして遠友夜学校の校歌が流された。

○改修後も、記念室の諸規定が定められたり、専任の管理・説明職員が配置されたりすることはなかった。ただし、形跡として、うかがい知れることには、次の点があげられる。一時的ではあるが、①自主的なボランティアガイドが説明役を引き受けて対応したことがあった。②来室見学者は入口の訪問者名簿に氏名等を記載してもらう形で把握された。③来室者への配付資料として、三つ折りの説明用リーフレット(『遠友夜学校記念室—新渡戸稲造の理想を受け継いで明日へ……』)がつくられた。

○ケーフレットは、以前については不明であるが、1994年(平成6年)5月ごろ(北海道立図書館所蔵)、2005年(平成17年)6月ごろ(札幌市教育委員会所蔵)、2012年(平成24年)1月ごろ(札幌市教育委員会所蔵)の3回、部分的に少し改訂されたものが作成されたことが確認されている。(これらについての実録や実物は、2014年(平成26年)7月に北海道大学大学文書館に譲渡された資料類の中には1つも含まれていない。リーフレットの存在・情報に関しては、札幌市の図書館では把握されていない)

◎1994年(平成6年)6月21日、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会主催の「札幌遠友夜学校創立百年記念講演会」が、北海道大学学術交流会館で開催された。

○同会は、1993年(平成5年)10月15日に盛岡市で開かれた「新渡戸稲造会」(会長・藤井茂)主催の「新渡戸稲造博士没後60年祭」に参加した札幌市在住者が中心となって立ち上げられたもので、創立百年記念の講演会と2つの出版が企画された。会長は石塚義明(北海道大学名誉教授)、副会長は廣重力(北海道大学総長)、事務局局長は小塩進作(元札幌市助役)が務めた。

○記念講演会ポスターのキャッチ・コピーには、学生教師の心情を凝縮した「自分を待っている生徒たちがいる」の言葉が使われた。

○当日の講演会には、各地から駆け付けた元教員・生徒ら約500人（のちの発表では「約300人近い参加者」）が出席し、講演2題（関西外国語大学教授・佐藤全弘による「新渡戸稲造と札幌農学校」、北海道大学講師・山本玉樹による「遠友夜学校とリンカーン精神」と元生徒・中村幹生など3人の感動のスピーチが、スライドによる当時の授業風景や学校行事の記念写真の紹介もまじえて行われた。その後、午後5時から祝賀会が開かれ、関係者約80人が参加し旧交を温め合った。

○1994年（平成6年）6月22日付け『北海道新聞』は、朝刊さっぽろ圏版に「記念写真『懐かしい』／遠友夜学校100年で講演会」の見出しで、前日開催の講演会の様子を報道した。

○1995年（平成7年）2月28日、同会は冊子『札幌遠友夜学校資料集／1995年2月』を刊行した。

○1995年（平成7年）9月28日、同会は単行本『思い出の遠友夜学校』を出版した。

◎1994年（平成6年）10月1日、テレビ北海道（TVH）は、遠友夜学校創立100周年記念のドキュメンタリー番組「魂の燈台／遠友夜学校」を放送した。

○内容概要「1894年（明治27年）、新渡戸稲造が札幌に創った貧しい人たちのための夜学校「遠友夜学校」。関係者の証言を得ながら、いまも生き続けるその魂を描き出す。そこに学んだ人、教鞭をとった北大生たちが思い出を語り、教育の理想郷に青春を送った若人たちのエネルギーを検証する。50年間学舎を支え続けた「学問より実行」、*“With malice toward none, with charity for all”*（なんびとにも悪意を抱かず、全てに愛をもって）の精神を浮彫りにし、稲造、萬里子夫人、そして宮部金吾や有島武郎に流れるピューリタニズムに触れる」

◎1995年（平成7年）2月28日、「札幌遠友夜学校創立百年記念事業会」は、冊子『札幌遠友夜学校資料集』を刊行した。

○B5判で全350ページを超える実践記録の実物見本の複写を印刷したものである。収録は、生徒会雑誌など次の8編であった。

①『董會雜誌』第1巻、自1904年（明治37年）3月至1906年（明治39年）12月、遠友夜學校董會、②『文の園』第10号、1907年（明治40年）3月、ひつじ會、③『文の園』第24号、1908年（明治41年）1月21日、ひつじ會、④『文の園』第25号、1908年（明治41年）2月25日、ひつじ會、⑤『文の園』第37号、1909年（明治42年）3月、羊會、⑥『倫古龍會雜誌』1911年（明治44年）4月、雜誌部、⑦『遠友魂』第6巻第2号、新渡戸校長來校記念号、1931年（昭和6年）7月、倫古龍會発行（中等部3年・田中正明の作文「新渡戸先生をお迎へして」を轉載）、⑧『遠友』新渡戸校長先生追悼号、1913年（大正2年）12月、札幌遠友夜學校文芸部。これらについての山本玉樹（北海道大学講師）による解説もp.3～17に加えられている。

○これは「1994年（平成6年）度生涯学習推進事業・生涯学習振興奨励費補助金」（北海道教育委員会）の交付によって刊行されたものである。

◎1995年（平成7年）9月28日、「札幌遠友夜学校創立百年記念事業会」（会長・石塚喜明＝北海道大学名誉教授）は、単行本『思い出の遠友夜学校』を出版した。

○同事業会編、北海道新聞社発行で、A5判、全279ページであった。出版の目的でもあるこの書の特色は、1994年（平成6年）6月21日開催の「札幌遠友夜学校創立百年記念講演会」の記録を詳細に載せていることである。

○主な構成は、①札幌遠友夜学校（高倉新一郎の通史概説）、②遠友夜学校の思い出（元教師・生徒の声、元教師13名・元生徒11名の寄稿）、③札幌遠友夜学校創立百年記念講演会（佐藤全弘および山本玉樹による講演2題、スピーチ3名、投稿など。p.109～189に収載）、④彙報（貴重轉載稿6編）、⑤資料（年表、書簡等各種豊富）であった。

○p.9～56に収載の高倉著の①「札幌遠友夜学校」は、1953年（昭和28年）12月発行の「北海道社会福祉第1巻第2号より轉載」となっているが、照合すれば明らかのように、1964年（昭和39年）6月札幌遠友夜学校発行の校史『札幌遠友夜学校』から轉載したものである。

○同年10月16日、三島徳三（北海道大学教授）は『北海道新聞』に「教育の原点／遠友夜学校—創立100年記念出版の編集に携わって—」を寄稿した。（⇒1995年（平成7年）10月16日）

○2006年（平成18年）3月24日には、絶版状態の復刊の要望に応じて、末尾に解説を加えた『新装普及版／思い出の遠友夜学校』全287ページが北海道新聞社から出版されている。

◎1995年（平成7年）10月16日、三島徳三は、『北海道新聞』に「教育の原点／遠友夜学校—創立100年記念出版の編集に携わって—」を寄稿した。

○同紙夕刊p.4文化面掲載の、北海道大学教授・三島のこの稿は、記念出版の本の紹介を意図したが、それ以上に込められた思いがあったとされる。三島の、その思いとは、すでに50年以上前にその使命を終えた遠友夜学校に、なぜこだわり「札幌遠友夜学校創立百年記念事業会」を立ち上げ、1994年（平成6年）6月21日には「同講演会」を開催し、1995年（平成7年）9月28日には単行本『思い出の遠友夜学校』を出版したのか、という疑問に答えようとした点にあった。

○この稿は、冒頭部分は省かれているが、ほとんどが原文のまま、2006年（平成18年）3月24日に再出版された『新装普及版／思い出の遠友夜学校』の末尾に（三島の解説の中で）再掲された。本書においても、一部を抜粋して、次に転載した。

○『思い出の遠友夜学校』には、高倉新一郎執筆の通史「札幌遠友夜学校」が最初に載っているが、その中の「夜学校の魅力」を述べた部分に、あるエピソードが引用されている。これを紹介することから、三島は「教育の原点・遠友夜学校」を書き進めている。

○「……その中に『体の中に学校へ学校へと押しやる力』が存在していることを共感する場面が出てくる。豊平橋の停留所で電車を降りるやいなや、教師である北大生の多くは夜学校に向け駆け出した。それが『学校へと押しやる力』である。『自分を待っている生徒たちがいる』という、気持ちの高ぶりが教師の足を自然と進めたのである。

遠友夜学校は1894年（明治27年）、当時、札幌農学校教授であった新渡戸稲造博士とその夫人（米国人）の手によって創設された。経済的に恵まれない家庭の子供を対象にした夜学であり、授業料を取らないボランティアの学校であった。

教師は、当時の農学校生が無報酬であった。この伝統は、博士が農学校教授を辞した後も、農学校とその後身の北大の後輩たちに脈々と受け継がれる。記録によればその数、約6百人。1944年（昭和19年）に閉校になるまでの50年間、市電のなかった時代は徒歩で、市電開通後は1ヵ月10枚の電車切符をもらうだけで（それも辞退者が多かったという）、多くの学生が夜学校の教壇に立った。

何が彼らをしてこのような無償奉仕に駆り立てたのか。学生である以上、勉強しなくてはならない。若さゆえに遊びたい時もある。これらの誘惑を断ち切り、最低、週2回、夜6時から3時間、その前後の往復時間と授業準備、採点、後片付け等の時間を含めれば、週10時間以上のボランティア活動を、在学中の数年間、さらには就職後も継続することは至難のことだ。

通ってくる子どもたちへの教育に対する強烈な使命感と、内からこみ上げてくる熱情がなければ、決してできないことである。

一方、生徒たちはどうであったか。彼らの多くは、生活環境のために義務教育を受ける機会のなかった人たちで、昼間は工員、給仕、お手伝い、職人見習い等の仕事についている。年齢も小学校適齢児から20歳を超すものまでさまざまであった。彼らは、それぞれの職場や家庭から、人によっては何キロもの道を歩いて夜学校に通ってきた。労働の疲れに加え、遊びたい盛りの子供たちである。しかも、夜学校は当局によって正規の学校とは認められず、ふつうは卒業しても上級学校に進学できなかった。50年間の卒業生は初等部・中等部合わせて1,100人ほどである。だが、入学した生徒はその数倍いたといわれている。

『学びたい』『先生や友達に会いたい』という生徒の純真さが、遠友夜学校50年の歴史を支えたもう1つの力であったことは疑いない。

『教えたい』という教師の存在と、『学びたい』という生徒・学生の存在による、白熱した交錯の中で教育が成り立つ。無資格校ではあるが、遠友夜学校はそれを全力

で実践した。だが今日、この「教育の原点」は、初等教育から大学に至るまで見失われていないか。極論すればサラリーマン化し、惰性的に知識を『切り売り』する教員、進学と就職のために仕方なく通い続ける生徒・学生、そこに共通するものは、モノ・カネのみを追い求め、真理や正義に背を向けた世紀末の姿ではないだろうか。

遠友夜学校の50年の実践から気づかせられることはあまりにも多い」

◎1996年（平成8年）10月7日、北海道大学創基120周年を記念して、新渡戸稲造博士顕彰碑建立事業会によって「新渡戸稲造博士顕彰碑」が建立された。

○顕彰碑の建立場所は、北海道大学構内（札幌市北区北11条西10丁目）である。

○顕彰碑建立事業会の発起人代表は堂垣内尚弘（元北海道知事）、碑文揮毫は丹保憲仁（北海道大学総長）、碑像制作は山本正道（彫刻家）である。

○顕彰碑は、白御影石でできた台座の上に、新渡戸稲造博士のブロンズ製の胸像が置かれたものである。台座の正面には、新渡戸稲造博士の直筆の署名と、その下に博士の著作の中の一文である“*I wish to be a bridge across the pacific.*”（太平洋の橋にならん）の言葉が刻まれている。

○台座の背面には、説明が記された銅板がはめ込まれている。説明板には「……アメリカ、ドイツに留学し、米国人の妻・メリー夫人を伴って帰国した博士は、1891年（明治24年）から7年間、母校の札幌農学校教授として、当時閉校の危機にあった農学校の立て直しと学制改革に尽力し、のちの北海道大学の基礎を築いた。勤労青少年のための教育施設である遠友夜学校の創設（1894年（明治27年））も、農学校教授時代の貴重な遺産である。……」とある。

◎1996年（平成8年）12月20日、沖田波平（肩書記載なし）が連続講座「赤レンガ遠友夜学校」の開講を伝えた。

○北海道文化室発行の雑誌『北海道暮らし』15号の巻頭言「遠友夜学校」（p.4～5）で「……木の葉が色づく頃から赤レンガの一室で、さる講座が始まることになった。講師は毎回異なるが、共通のテーマは「新北海道論・次なる百年」。月1回の夜の講

座、名づけて「赤レンガ遠友夜学校」という。……」と述べられたものであるが、北海道庁内部の勉強会なのか、以後の実施内容・実績などは不詳である。

◎2001年（平成13年）9月1日、北海道大学創基125周年記念事業の一環として建設された北海道大学同窓会館「遠友学舎」が開館した。

○北海道大学構内の札幌市北区北18条西7丁目、旧馬術部跡地に建設された。

○会館の名称は新渡戸稲造夫妻が開いた無料私塾「遠友夜学校」に由来する。遠友学舎は、21世紀版の夜学校として新渡戸の目指した理想を北大の中にふたたび蘇えらせるために、ここに建てられたとされる。

○2002年（平成14年）4月1日、山本玉樹（北海道大学講師）と藤田正一（北海道大学名誉教授・元北海道大学副学長）は、同会館を会場とする常設の一般公開講義「クラーク講座」（代表・山本玉樹）を創設した。

○2005年（平成17年）4月1日、藤田正一は「クラーク講座」とは別に、同会館を会場に実施する常設の市民講座「平成遠友夜学校」を創設した。

○2007年（平成19年）5月30日、半澤家から北海道大学に寄贈された「半澤洵」の胸像が学舎内に設置された。（半澤は、「遠友夜学校」の創設時期から閉校後の跡地管理まで、札幌農学校学生時代から北海道帝國大學教授時代以降の時期まで、ボランティアの教師、理事、理事長、代表、校長として長期間にわたり奉仕活動を続けた人である）

○2008年（平成20年）9月10日、藤田正一は自著『クラーク魂—まぐれで北大副学長になった男の半生—』（柏艚舎発行）のp.155～157「クラーク講座と平成遠友夜学校」で、クラーク講座と平成遠友夜学校を開設した経緯と開設時の状況を説明している。

○2014年（平成26年）8月21日、「平成遠友夜学校」の一環として、高校生を対象に無料学習支援を行う大学生ボランティア団体「ゆうがく班」が結成された。

◎2001年（平成13年）9月3日、札幌市教育委員会（教育長・土橋信男）は、依

頼のあった北海道大学総合博物館長に対して、許可の回答文書を送付した。

○回答文書「遠友夜学校記念資料の貸出等について」は、2001年（平成13年）8月27日付けの北海道大学総合博物館（館長・諏訪正明）からの依頼文書「展示資料の借用について」への対応であった。

○同博物館は、同年9月27日から開催する北海道大学創基125周年記念特別展示とその後の常設展示の使用目的で、最低3年程度の間、同大学の125年史を物語る関係資料の複写及び貸出を要望した。

○教育長は、遠友夜学校を広く紹介するものであり、記念室設置の主旨に沿うものであること、また、借用依頼のあった所蔵品は展示されていない保管品であり、記念室の展示に支障もないことから、依頼どおりに複写・貸出を許可した。

○あらかじめ同博物館が選定・指定した写真複写資料（新渡戸稲造揮毫扁額「学問より実行」など）は計4点、貸出資料（「遠友夜学校運営資料」20点など）は計36点であった。貸し出し分の期限は、3年間、2004年（平成16年）9月30日までとした。

○同博物館は、借用期間を明記し、借用資料の目録と写真を添付した覚え書を提出した。

○複写資料・貸出資料は展示会準備に余裕をもって臨めるよう迅速に進められた。

○なお、貸出資料数は、2013年（平成25年）5月20日開催の札幌市議会総務委員会記録による教育委員会生涯学習部長の答弁で「平成13年から北大博物館に額であるとか文献など約30点を貸し出している」とも、また、2014年（平成26年）6月23日、教育委員会生涯学習部が発表した遠友夜学校記念室所蔵の資料等の調査結果「このうち29件は北海道大学総合博物館へ貸与し常設展示中」とも一致しない。

◎2001年（平成13年）9月27日、貸し出された遠友夜学校の関係資料40点が、北海道大学総合博物館1階「北大の歴史展示コーナー」で展示され始めた。

○北海道大学総合博物館は、1999年（平成11年）4月1日に文部省から設置認可され、北海道大学創基125周年事業の一環として2001年（平成13年）9月1日、第1

期工事3,000㎡の改修分が公開展示された。(貴重な学術標本を良好な状態で集約管理し学内外に情報を発信するための総合博物館設置の検討は1966年(昭和41年)から開始され、理学部本館建物を再利用し、延べ約9,000㎡の総合博物館にする構想が30年以上をかけてまとまった)

○遠友夜学校の関係資料(扁額・文献等)は、同博物館の依頼に応じて、2001年(平成13年)9月、札幌市所管の「遠友夜学校記念室」(札幌市中央勤労青少年ホーム「Let's(レッツ)中央」の1階に併設)の資料の中から貸し出されたものである。

○2014年(平成26年)7月4日、札幌市は、北海道大学と正式な同意書を取り交わし、「遠友夜学校記念室」のすべての資料等を北海道大学へ寄贈(無償譲渡)したが、総合博物館へ貸し出し分もこの中に含まれた。

◎2001年(平成13年)11月15日、『新渡戸稻造全集・別巻2』が発行され、半澤洵の寄稿「新渡戸先生に関する思い出」が収録された。

○この別巻2(全772ページ)は、同全集第1期第1～16巻(1969年～1970年(昭和44年～45年))、同第2期第17～23巻+別巻(1983年～1987年(昭和58年～62年))の発行時に付された『月報』に載せられた記事を主題別に編集し、それらと新資料とを収録したものである。

○半澤の寄稿「新渡戸先生に関する思い出」はp.136～140に掲載され、各種の資料が記されている。(『月報』の発行年月日等の情報は不詳)

○「学問より実行」などの名言は扁額として掲げられ広く知られているが、ほかに掛け軸用に短歌等も「稻造」名で揮毫^{きごう}している。この寄稿で半澤が紹介したものを次にあげる。

①「僅かなる庭の小草の白露をもとめて宿る秋の夜の月」

②「山川の底のさざれの数ふべくみゆるは水のすめはなりけり」

(①②は遠友夜学校へ、後に「遠友夜学校記念室」に陳列)

③「賤の男が小田かへすとて待つ雨を大宮人は花にいとはん」

④「いにしへの野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞ汲む」

(③④は北海道帝國大學教授・高岡熊雄氏へ)

⑤「心外無別法」(札幌育兒園園長・有田正雄氏へ)

⑥「さまさまの色をつくして咲く菊もかほりは一つ庭の秋風」

(札幌遠友夜學校校長・半澤洵氏へ)

⑦「国を思ひ世を憂ふれはこそ何事も思ふ心は神ぞ知るらん」

⑧「昔よりかゝるためしのあると聞く何か惜しまん老が身一つを」

⑨「^{うきごと}有喜事のなほ此上につもれかしかきりある身の力ためさん」

⑩「山深く何かいほりを結ぶへきこゝろの中に身はかくれけり」

⑪「何事も思ふまゝにはならさるかかへりて人の身の為にこそ」

(以上の作品の仮名遣いなどは半澤の紹介による)

なお、③～⑥は1931年(昭和6年)5月18日、札幌遠友夜學校での講演直後に揮毫、

⑦～⑪は1969年(昭和44年)4月29日～5月8日、札幌市の丸善書店で開催の「新渡戸稻造全集出版記念・回想の新渡戸稻造展」で展覽用に集められた作品の中から半澤が選んだもの(所持者不記載)である。

○ついでに書けば、半澤以外の方が後に書いた稻造人物伝等には、新渡戸は気軽に要望に応じて揮毫したとあり、次のような作品もあると紹介されている。これも、同一・類似作品を含めて、多数のごく一部とみられる。

⑫「見る毎に皆そのままの姿かな柳八みとり花八紅」(遠友夜学校所蔵色紙)

⑬「うつるとは月も思はず うつすとは水も思はぬ 広沢の池」(所持者不詳)

⑭「年経ても変わらぬものは友垣の昔を偲ぶ情なりけり」(札幌市・宮部金吾記念館の展示掛け軸。1931年(昭和6年)5月19日、佐藤昌介、宮部金吾ら札幌農學校1・2期生の、豊平館での歓迎祝宴時の5人の寄せ書き)

⑮“Haste not, Rest not.”(「急ぐな、休むな」または「焦るな、怠けるな」。遠友夜学校所蔵色紙)

⑯“Boys, be Ambitious!”(少年よ大志を抱け。W.S.クラークの言葉。北海道大学など所持者数名)

◎2002年（平成14年）2月20日中西出版発行、STVラジオ編の単行本『ほっかいどう百年物語』に短編「新渡戸稲造」が掲載された。（⇒2019年（令和元年）11月30日）

◎2002年（平成14年）5月18日、「『新渡戸稲造・萬里子（メアリー）夫妻メモリアルデイ』の集い」実行委員会が結成され、委員長に佐々木晴美が選ばれた。

○この集いは、新渡戸稲造の偉業を顕彰する運動の1つで、新渡戸稲造が最後に札幌に来た1931年（昭和6年）5月18日を記念日として諸行事を行う札幌市での集会で、実行委員会（委員長・佐々木晴美）が実施した。講演会、フォーラム（公開討論会・座談会）、ディスカバリーウォークなどを実施した。2002年（平成14年）5月から2008年（平成20年）5月まで毎年開催された。

◎2003年（平成15年）2月21日発行の単行本に、三上敦史（日本学術振興会特別研究員）は論文「札幌遠友夜学校の終焉」を掲載した。

○単行本『北大百二十五年史／論文・資料編』（北海道大学百二十五年史編集室編刊）のp.202～240に収録された。副題を含めた論文名は「札幌遠友夜学校の終焉—北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制—」である。他の箇所でも何度もふれたように、いくつもの論議をよぶ論文として注目された。

○三上による関連論文には、2001年（平成13年）10月1日発行の機関誌『日本の教育史学—教育史学会紀要—』第44集p.58～76掲載の「1920-30年代における夜間中学の展開—札幌遠友夜学校中等部・札幌中等夜学校を中心に—」もある。

○三上の著書に、2005年（平成17年）2月28日、北海道大学図書刊行会（現出版会）発行『近代日本の夜間中学』（第2章第4節1「札幌遠友夜学校中等部・中等夜学有鄰館の誕生」）もある。この著書の中で、遠友夜学校は、自ら授業継続を放棄した学校の1つとしてあげられている。

◎2003年（平成15年）4月、「札幌遠友塾自主夜間中学」は、新年度からの一斉授

業の中に「じっくりコース」を設けた。

○さらに、2006年（平成18年）4月からは、独立した「じっくりクラス」を設けた。

○「じっくり」とは、受講生一人一人の希望や学力や進度によって、教科ごとに個別指導を採用し、個人のペースに合わせてじっくり学んでもらおうとする形態である。指導に携わるスタッフも「ともに生き、ともに学ぶ」という機会になっている。

○2008年（平成20年）11月14日、NHKテレビ総合30分番組「ドキュメント／につぼんの現場／もういちどまなびたい—札幌遠友塾・じっくりクラス—」が放送された。（この回の現場は自主夜間中学「札幌遠友塾」。戦争や貧しさ、いじめなどで義務教育を受けられなかった人たちが通う。支えあいながら「学ぶ喜び」をかみしめる人々の姿を描いた）

○2021年（令和3年）3月、同塾発行の『30周年記録集』（略記）に、スタッフの横山晴美は「『じっくりクラス』の歩みと生徒さんとの出会いから学んだこと」と題して、これまでの経過報告の形で思い出を詳しく綴った。また、受講生・桑山玉枝の体験発表作文「私と遠友塾」が収録された。

◎2003年（平成15年）6月14日、杉岡昭子（元札幌国際プラザ専務理事）は「アジア招提」を立ち上げ、これを主宰し、遠友夜学校についても勉強を始めた。

○杉岡は、札幌市在職中の1991年（平成3年）から財団法人国際プラザで専務理事に就き、退職後も各種団体のアドバイザー・顧問等を精力的に続けた人である。

○2003年（平成15年）6月には、杉岡は、その時々に関心や課題を拾って、知り合い仲間で一緒に有識者から話を聞く勉強会「アジア招提」を立ち上げ、札幌市と鳥取県大山町（介護を必要とする母親が居住）で月1回、多方面から講師を招く講演会や輪読会などを続けた。「招提」とは「家にとらわれず、国にとらわれず、世界を宿にする僧の学び舎」を意味する。

○2003年（平成15年）6月14日開催の第1回の勉強会は、札幌市の山崎健作宅で開き、北海道大学名誉教授・神谷忠彦を招き「遠友夜学校と有島武郎」を主題にしたほど、新渡戸稲造を尊敬し、遠友夜学校魂をこよなく愛する1人であった。杉岡

は、札幌市での遠友夜学校精神の風化に強い関心をよせ、後々、文化遺産としての同校史料を札幌市が遠友夜学校跡地で保存し展示することについて、山崎らを応援して熱意を注ぐことになる。(⇒2010年(平成22年)2月1日、2012年(平成24年)12月1日)

○北海道教育大学非常勤講師の肩書で、1998年(平成10年)1月15日に第1回目を開始した北海道新聞「朝の食卓」の執筆で、杉岡は「最近活発なボランティアの原点は新渡戸稲造夫妻がつくった遠友夜学校である。つまりルーツは地元の札幌であり、新しい日本をつくるための学問をしていたのだ」という趣旨を寄稿している。

○2018年(平成30年)4月21日開催の第3次アジア招提「根っこ今、そして未来へ」第27回講演会は、北海道科学大学名誉教授・半澤久を招き、テーマ「遠友夜学校の最後の校長、祖父半澤洵を語る」であった。

◎2003年(平成15年)6月27日、合田一道(作家)・番組取材班(NHK札幌放送局)は、「新渡戸稲造」などを収録した単行本『人間登場』第2巻を発行した。

○1991年(平成3年)4月5日～2004年(平成16年)9月24日、平日午前11時30分～同50分に放送された北海道内全域向けNHK総合テレビ番組「ほっからんど212」では、週1回『人間登場—北の歴史を彩る—』が組まれた。その中から選ばれた人物についての番組内容が文章化され単行本全3巻に収録し、北海道出版企画センターから発行された(第1巻は2003年(平成15年)3月、第3巻は2004年(平成16年)6月)。

○この書(第2巻)p.89～100に収録された「新渡戸稲造—遠友夜学校を創る—」は2002年(平成14年)9月24日に放送されたものである。「ボランティアで教育を実践」の見出しのもと、女性司会者・橋本登代子と合田一道との対話形式で、ナレーションやインタビューも加えながら、新渡戸稲造の生涯と遠友夜学校の50年が20分間語られた。インタビューには、新渡戸夫妻メモリアルデイ実行委員長の肩書で佐々木晴美(札幌市、高齢の男性)が登場した。(佐々木晴美の肩書は「『新渡戸稲造・萬里子(メアリー)夫妻メモリアルデイ』の集い」実行委員会委員長というのが

正式らしい。⇒2002年（平成14年）5月18日、2010年（平成22年）3月10日）

○合田によると、新渡戸は、知育よりも徳育、頭よりも人格、学問より実行を重視し、心の合う友達を得るよう奨励し、人間の楽しみは、何といっても気の合う人に出会うことであり、友達は世界にいる、と強調した。

○最後に、恒例の合田作の1句が詠まれた。「稲造の 想いにじませ 夜学の灯」。合田「夕方、青少年ホームのあたりを歩いていくと、若者たちの談笑する声が聞こえてきます。稲造の思いが灯と重なって、こんな句をつくりました」。司会者「物はなくなったらそれまでですが、心は永遠に残る、そんな気がしますね」。合田「ええ、本当にそう思います」。

◎2004年（平成16年）12月、北海道立図書館北方資料部は『北海道立図書館所蔵／松井愈氏資料目録』を発行した。

○発行は北海道立図書館で、A4判21ページ。資料番号全254中8（下記43～50）が「IV 遠友夜学校」となっている。ほかに「14 アルバム（遠友夜学校）」などもある。

○この目録は、松井愈（まつい・まさる、元北海道大学理学部教授、生1923～没1996）の遺族から寄贈された書籍・手稿・所蔵資料を整理したものである。

○43『－あるセツルメントの記録－遠友寮日誌より／（1）1962年（昭和17年）11月26日 1944年（昭和19年）3月6日』／（2）大学ノート A4 変形版

○44-1「札幌遠友夜学校教師名簿 1941年（昭和16年）6月」ほかコピー2枚、44-2「庶務日誌」コピー11枚

○45「遠友夜学校 松井愈宛葉書」12枚（1941（昭和16）～44（昭和19））、「秋葉方松井愈宛葉書」2枚（1944（昭和19）.5.30／6.7）、「夕張鹿の谷 松井愈宛葉書」1枚（1944（昭和19）.6）

○46『遠友』第31号（札幌遠友夜学校報五十周年記念号）1943（昭和18）.6.18 ＊札幌遠友夜学校の回顧（半沢洵）ほか

○47『北海道新聞』いずみ欄（梅野きん子の文章2篇、中村節子文章1篇）コピー2枚／「さっぽろ文庫第18巻「遠友夜学校」にかかわる執筆依頼について」（松井愈

宛桂信雄執筆依頼文書) 1981(昭和56).2.24、『延齡草』04Vol.2 北大生協読書誌編集委員会 1981(昭和56).11.? 遠友夜学校と新渡戸稲造(松井愈)、「書評『遠友夜学校』」美土路達雄著『月刊ダン』1981(昭和56).11.1) コピー(調査の結果、『北海道新聞』いずみ欄の掲載3編の掲載年月日・投稿者氏名・タイトルは、①1982年(昭和57年)3月6日、梅野きん子「遠友夜学校」、②1993年(平成5年)2月27日、中村節子「心に残る遠友塾」、③1993年(平成5年)3月5日、梅野きん子「遠友塾卒業おめでとう」であった)

○48「廃校に立ち合った一人として」自筆メモ2枚、「廃校に立ち合った一人として」自筆草稿6枚、「廃校に立ち合った一人として」自筆原稿コピー4枚、「廃校に立ち合った一人として」(さっぽろ文庫18『遠友夜学校』) 1981(昭和56).9 コピー1枚

○49「遠友夜学校についての話を聞く会への御案内」(1990(平成2).2.25) 書き込みあり、「遠友夜学校とは何であったのか」同会松井レジユメ・資料 書き込みあり、「同会講演記録」7枚、「松井愈宛星野フサ手紙」、「札幌遠友夜学校－戦後教育の原点と源流」自筆原稿? コピー、「札幌遠友夜学校－戦後教育の原点と源流」(『総合教育技術』小学館 1996年(平成8年)4月号) コピー

○50『遠友夜学校に学んで五十年(稿本)』松井愈 1991(平成3).3、69p

◎2005年(平成17年)4月1日、北海道大学同窓会館「遠友学舎」を会場にして行う無料市民講座「平成遠友夜学校」が創設された。

○「平成遠友夜学校」は、1894年(明治27年)6月18日を公式開校日(創立記念日)とする無料私塾「遠友夜学校」を源流とし、その学校が伝統とした「遠友の精神」を現代に継承することを目的に創設された。市民と大学の交流の場と位置づけられた。

○かつての遠友夜学校と同じように、大学で学ぶ学生がボランティア精神で運営と講義の両方に携わる形態を踏襲することから「平成遠友夜学校」と名付けられた

○一言で「札幌農学校・遠友夜学校に通底する精神を実践的に学ぶため、学生と市

民のボランティアを中心に通年毎週火曜日の夜開催の無料市民公開講座」と説明される。特色は「学生などが講師になって、大学で得た知識を市民に発表・紹介することによって社会に貢献する。また、講師の学生なども、他人に語り、論議を交わすことによって学びをいっそう深める」ことにある。

○2005年（平成17年）4月20日発行の『北海道新聞』朝刊掲載記事は「北大『平成遠友夜学校』が開校／火曜夜に学ぶ新渡戸の精神／学生有志がボランティアで講師」の見出しで報道した。

○校長は、創設時からずっと創設者の藤田正一（北海道大学名誉教授・元北海道大学副学長）が務め、教頭（世話人）は運営にあたる北海道大学学生ボランティア全員とした。運営費は、金額自由な無名の寄付でまかなう。

○2010年（平成22年）12月1日発行の『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティアの会発行）No.19p.5～6に、竹内ひかる（平成遠友夜学校教頭・北大理学院修士課程）は、活動報告「遠友夜学校のある日」を寄稿した。

○2012年（平成24年）3月1日発行の『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.24p.4～5に、齋藤亮（平成遠友夜学校教頭・北大法学部4年）は、活動報告「地に足をつけて振り返る／平成遠友夜学校という学びの場」を寄稿した。

○2012年（平成24年）9月1日発行の『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.26p.5に、尾崎由博（平成遠友夜学校初代教頭）は、海外便り「平成遠友夜学校創成期の思い出」を寄稿した。

○2014年（平成26年）8月21日には、同校の一環として、高校生対象に無料学習支援を行う大学生ボランティア団体「ゆうがく班」も結成され、活動は多様化した。

（⇒2014年（平成26年）8月21日）

○2014年（平成26年）11月1日、「平成遠友夜学校創設10周年」を迎え、同校（遠友学舎）で記念式典を挙行し、『燈火—平成遠友夜学校創設10周年記念誌—』を発行した。（⇒2014年（平成26年）11月1日）

○2021年（令和3年）3月1日発行の『北海道大学総合博物館ボランティアニュー

ス』No.59p.8に、岡本敏博（平成遠友夜学校生徒）は、活動報告「平成遠友夜学校の紹介」を寄稿した。

○2022年（令和4年）8月1日発行の『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.63p.4に、吉田康祐（平成遠友夜学校生徒）は、活動報告「コロナ禍での『平成遠友夜学校』」を寄稿した。

○2023年（令和5年）4月時点での講座開設状況＝参加資格：なし、誰でも自由に参加できる。受講料等：無料。日時：毎週1回（火曜日）午後6時15分開始、講義は1時間から2時間、最大延長午後9時。場所：北海道大学遠友学舎。形態：社会人等の志願講師も歓迎されているが、主に北大の学生・大学院生・教員が、北海道大学で研究または学んでいるものを紹介するという形で市民を対象に講演等をし、質問時間の後に自由な雰囲気でお茶の時間を設ける。一部の講義は道民カレッジ連携講座として開講される。

◎2005年（平成17年）6月ごろ、遠友夜学校記念室は、来訪者に配布する三つ折りリーフレットを改訂した。

○前回1994年（平成6年）5月ごろ制作のもの『遠友夜学校記念室—新渡戸稲造の理想を受け継いで明日へ……—』（北海道立図書館所蔵）の改訂版である。（札幌市教育委員会所蔵）

◎2006年（平成18年）3月24日、「札幌遠友夜学校創立百年記念事業会」（会長・石塚喜明）は、単行本『新装普及版／思い出の遠友夜学校』を出版した。

（⇒1995年（平成7年）9月28日、1995年（平成7年）10月16日）

◎2007年（平成19年）2月17日、「北海道に夜間中学を作る会」への参加の呼びかけが設立準備会発起人・工藤慶一（札幌遠友塾自主夜間中学代表）からなされた。

○同会の「設立総会を同年5月19日に開催する」とのお知らせが送られた。

○設立趣意書……誰もが教育を受ける権利があり、学ぶことが生きる喜びになるこ

とを実在のものとするため、札幌遠友塾自主夜間中学の授業が始まってから17年。長年使用してきた札幌市民会館が3月に閉鎖になり、新年度4月から札幌市教育文化会館に学びの場が変わろうとしています。／中国から帰国した人や不登校の子供たちなど、新たな入学希望が増えているなか、必要とされる教室数や教材の保管場所確保のため「学校の教室を使わせてほしい」という私達の願いは未だかなえられていません。こうした現実を打破する全く新たな道が求められています。／昨年8月、日弁連より政府に「学齢期に修学することができなかった人々の教育を受ける権利の保障に関する意見書」が提出されました。これは全国夜間中学校研究会が訴え、日弁連が受け入れたものです。この意見書の内容を基にして、義務教育に関する大切な提案を北海道と札幌市に行い、話し合いを続けることが必要な行動であると決意するに至りました。

○行政への要望（案）……義務教育を受ける機会が実質的に得られなかった人たちの実態の把握を可能な限りすすめながら、①北海道におけるセンター校の役割を担う公立中学校夜間学級を札幌市に開設すること。②道内自主夜間中学校を運営する民間団体に対し、学校の教室使用を主とする施設の提供と財政的支援を行うこと。③教育を受ける機会を保障するため、個人教師の派遣などの施策を進めること。④シニアスクールなど、既存の学校の受け入れ対象者を拡大すること。⑤住所変更届や病院の問診票など、公的書類の漢字に「ひらがな」をふり、苦しみを和らげること。（⑥その他必要な施策を行うこと）

○設立総会に先立ち、同年3月21日、設立準備会は「道内約10万人の義務教育未修了者に読み書きを学ぶ場を！／北海道に夜間中学をつくる講演会／生きることは学ぶこと―夜間中学の可能性を語る」と題する講演会を札幌市の「かでる2・7」で開催した。講演は3題で、①見城慶和（元夜間中学教員）の「夜間中学の歴史と未来」、②関本保孝（全国夜間中学校研究会）の「人権救済意見書を生かす」、③浅野元広（札幌弁護士会所属）の「道民全てに学習権の保障を」であった。また、工藤慶一（札幌遠友塾代表）は挨拶の中で「北海道に夜間中学をつくる会」設立の趣旨を明確に語った。この日の夜には、札幌市民会館では最後となる「札幌遠友塾自主

夜間中学第15回卒業式」が挙行された。その前の時間帯に行われたのである。機運はいやが上にも高まった。

○同年3月14日付け『朝日新聞』は、見出し「公立夜間中学を／札幌の私塾立ち上がる／63歳、街の横文字読め世界が広がった」で経緯を詳しく伝えた。

◎2007年（平成19年）2月17日、「北海道に夜間中学をつくる会」のホームページが、設立準備会発起人・工藤慶一らによって立ち上げられた。

○「プロフィール」によると、「2007年（平成19年）2月17日に出された『設立趣意書』、全てはここから始まりました」という。（⇒2月17日前項目）

○いくつかの項目に分類された内容の「活動報告」は、2007年（平成19年）2月19日の「札幌遠友塾自主夜間中学第15回卒業式」から始まり、2013年（平成25年）12月17日の「第7回事務局会議」までで終わっている。

○「資料室」は、「教育を受ける権利」「就学援助」「報道・雑誌・広報誌」「政府・国会」「地方自治体」の見出しのもと、収録されている。

○「北海道の自主夜間中学」は、札幌遠友塾・旭川遠友塾・函館遠友塾・釧路「くるかい」の様子を主に報道記録面から収録されている。

○「リンク」は、全国の公立夜間中学・自主夜間中学・「夜間中学・不登校・定時制関連民間サイト」を収録している。

○「資料室」以下は、いずれも2007～2010年（平成19～22年）を中心としたもので、一部の収録にとどまっている。2014年（平成26年）1月以降の更新・累積は休止状態のままである。

◎2007年（平成19年）3月21日、「札幌遠友塾自主夜間中学」（代表・工藤慶一）は、「札幌市民会館」での最後となる第15回卒業式を挙行した。

○19人が巣立った。高校（通信制）に進学する卒業生は開校以来最多の6人もいると発表された。（昨年までに総計235人が卒業していた）

○同年3月22日付け『北海道新聞』は見出し「万感の笑顔よく頑張りました[◎]／自

主夜間中学・札幌遠友塾の卒業式」で、同日付け『毎日新聞』は見出し「30～70代の19人『巣立ち』／『札幌遠友塾自主夜間中学』で卒業式」で報道した。

○長年会場として使用してきた市民会館は、1958年（昭和33年）7月に旧「豊平館」跡に建設された建物で、耐震構造や老朽化の問題で、2007年（平成19年）3月末で使用停止となり、のちに建物は取り壊された。

◎2007年（平成19年）3月31日、札幌市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課は解説の冊子『第2次札幌市生涯学習推進構想』を発行した。

○A4判全70ページの冊子の題名には、「一さっぽろで／学ぶ・活かす・つなぐー」の副題が付けられている。

○この冊子の1ページ目の「はじめに」の中で、札幌市長・上田文雄は次のように述べた。「札幌は、遠友夜学校を創設した新渡戸稲造をはじめ、先人の高い理想のもとで学びの礎（いしずえ）が築かれ、そこで培われた市民の活力をまちづくりにつなげることにより、今日まで発展を続けております」

○のちに、2010年（平成22年）5月9日発行の『きぼう』（北海道に夜間中学をつくる会会報、No.6のp.7）は、この市長の言葉にふれ、「これは、遠友塾の活動についてもあてはまる言葉であると、私たちは感じており、このことから札幌市の生涯学習に位置づくのではないだろうか」と問いかけている。（札幌遠友塾自主夜間中学が札幌市立向陵中学校の教室を使用することに関して、あくまでも札幌遠友塾の事業を支援しているとの立場をとる教育委員会に対して、今後は札幌市との共同事業としたいと考える遠友塾は、「遠友塾の活動が」札幌市の生涯学習の実施の中で「どのように位置づけられるのか」の見解を札幌市教育委員会に求めた）

◎2007年（平成19年）4月25日、「札幌遠友塾自主夜間中学」（代表・工藤慶一）は、第18回入学式を新しく会場となった「札幌市教育文化会館」で挙行了した。

○同塾の新生は26人であった。同塾は、毎週水曜日、同会館の会議室4室を教室として使用し、午後6時15分から講座（授業）を実施した。

○同開館は「札幌市民会館」の代替会場である。2003年（平成15年）10月、遠友塾は、「市民会館取り壊しに伴う代替教室場所確保の要望書」を札幌市教育委員会に提出し、2006年（平成18年）5月に「札幌市教育文化会館」の使用を斡旋され、ここに会場を決定した。また、年額110万円の会館使用料は、2007年（平成19年）1月、札幌市長へ半額減免措置適用の要望書を提出し、同年2月には、要望が認められ55万円に減額されていた。

○教育文化会館は、地下鉄東西線「西11丁目駅」駅のエレベーター昇降口がある出口から徒歩5分程度の場所にあり、会館内にもエレベーターが設置されていて、高齢者等に優しい会場として選ばれた。

○ただし、以前から切望していた学校の教室使用がのちに認められ、2年後の2009年（平成21年）4月からは「札幌市立向陵中学校」へ変更となる。

◎2007年（平成19年）5月19日、「北海道に夜間中学をつくる会」の設立総会が設立準備会発起人・工藤慶一によって札幌市中央区「かでの2・7」で開催された。

○設立総会では、7章22条からなる「北海道に夜間中学をつくる会規約」が審議され、同から施行することを決定した。（規約は、2010年（平成22年）6月1日に一部改正され現在に至っている）

○同会の「目的」は「義務教育を受ける機会が実質的に得られなかった人たちの学ぶ権利を保障することを目指す」とし、「目標」は「目的を達成するために行政に対し、以下の要請を行う。①北海道におけるセンター校の役割を担う、公立夜間中学校（公立中学校夜間学級）の札幌市での開設。②道内の自主夜間中学を運営する民間団体に対する、学校の教室を主とする施設の提供と財政的支援。③教育を受ける機会を保障するため、個人教師の派遣などの施策。④シニアスクールなど、既存の学校の受け入れ対象者の拡大。⑤住所変更届や病院の間診票など、公的書類の漢字にひらがなをふり、苦しみを和らげる。⑥その他必要な施策」とした。

○これらの目的・目標を達成するための「事業」は、「①行政に対する要請と交渉。②夜間中学についての情報宣伝（映画「こんばんは」などの上映、署名運動、講演

会など)。③道内各地域の自主夜間中学開設を支援。④道内各地に開設した自主夜間中学と交流・研修を行う。⑤公的書類の漢字に、ふりがなをつける運動の推進。⑥その他必要な事業」とした。

○運営にあたる「役員」は、①共同代表（数名）、②副代表（数名）、③事務局長（1名）、④事務局次長（2名）、⑤事務局員（数名）、⑥会計（2名）、⑦会計監査（2名）をおくとした。最高決定機関である定期期総会は、毎年5月中に開催し、会員の過半数によって成立し、また、総会における議決は出席者の過半数の賛成によるとした。

○2007年（平成19年）度、初代の共同代表に「工藤慶一」を選出し、当面、副代表はおかず、事務局長に「清水芳洞」をあて、同次長に「泉雅人・丸山仁」をあてる体制で、事務所は工藤方（のちに「札幌市エルプラザ事務所」）においた。

○札幌遠友塾自主夜間中学が中心になってつくった会が「なぜ公立夜間中学設置を重視し、要望の第1に掲げるのか」の疑問に対しては、工藤は、論文「札幌市立夜間中学開設の意義と今後の課題」（⇒2022年（令和4年）8月）の中で、次のように述べている。「遠友塾が教室場所確保で困りぬいていた時に、公立夜間中学設置という要求を掲げなければ、行政は真剣に話を聴く構えには無かったから」「本来、義務教育は国と地方自治体が責任を負うべきものだとの思いがあり、電話で学びの場を問い合わせてきた人に教育委員会は『遠友塾を紹介する』だけでいいのか、一緒に担えないのかという素朴な疑問があったから」という。「急がば回れ」の姿勢をとりながら、真正面から正論で臨んだのである。

○2007年（平成19年）2月には「北海道に夜間中学をつくる会」のホームページが立ち上げられ、同年12月には会報『きぼう』が発行された。（⇒2007年（平成19年）2月17日、および同年12月22日）

○2008年（平成20年）12月1日付け『北海道新聞』は、札幌市議会5会派の重点要望の中に、教育関係では市立夜間中学の設置検討が盛り込まれた、と伝えた。

○2009年（平成21年）4月15日付け『北海道新聞』の記事「真相深層」は、見出し「自主夜間中学続々と／生徒200人超／札幌、旭川に続き函館、釧路にも／公立

化、行政の腰重く」で、現状を詳しく伝えた。

○2009年（平成21年）年5月末までに、札幌市に加えて旭川市・函館市・釧路市でも「遠友塾」が開設された。①2008年（平成20年）4月26日開設「自主夜間中学『旭川遠友塾』」（代表・古野博明、会場・旭川医療情報専門学校、1期生25人）、②2009年（平成21年）4月15日開設「自主夜間中学『函館遠友塾』」（代表・今西隆人、会場・函館市総合福祉センター、1期生47人）、③2009年（平成21年）5月9日開設「釧路自主夜間中学『くるかい』」（事務局長・添田祥史、会場・釧路市総合福祉センター、学習者51人）。

○2009年（平成21年）年5月31日開催、第3回定期総会において、2009年（平成21年）度の役員選出が行われ、不登校の若者が自主夜間中で学ぶケースもあることから、フリースクールとの連携を強めるために共同代表に「亀貝一義」（NPO法人フリースクール「札幌自由が丘学園」理事長）を加えた（工藤慶一共同代表は継続）。清水事務局長の退任に伴い、「泉雅人」が事務局長に昇格し、同次長には留任の「丸山仁」と欠員補充で「飯塚英明」を選出した。副代表が置かれたのは2010年（平成22年）度からで、同年6月1日、今西隆人（函館遠友塾）と菅裕子（釧路くるかい）が就任した。

○2009年（平成21年）年6月9日付け『北海道新聞』は社説で「夜間中学／学びの喜びを支えたい」を掲載した。各地に広がってきた自主夜間中学のセンター校の役割を持つ公立夜間中学を札幌に開設する運動の高まりを伝え、北海道や札幌市は、早急に公立夜間中学の設置を検討すべきだろうとし、札幌遠友塾が市立向陵中学の教室を借りて授業ができるようになったのは一歩前進だとした。「札幌以外の市でも地元中学の教室を使えるようにしてほしい。／夜間中学の取り組みは、人間が生涯かけて学ぶことの意義を教えてくれる。地域社会もその活動を温かく見守り、支えたい」と結んだ。

○2021年（令和3年）8月発行の解放出版社編刊雑誌『部落解放』第809号p.36～42に、工藤は、論考「札幌遠友塾自主夜間中学の歩みと札幌市立夜間中学の開校」を寄稿した。

○2022年（令和4年）5月13日、大人に限らない、受講随時（いつきても、いつ帰っても、何年いてもよい学校。週1回、小・中・高校生も大人も午後4～6時）、「不登校生」を主に受け入れる全国初の民間夜間中学「北見夜間中学」（代表・斉藤満幸、会場・北見市総合福祉会館）が開設された。（受講料など無料。北見市立学校や「北海道に夜間中学をつくる会」と連携。自学自習室もある）

○2022年（令和4年）8月発行の学会誌に、工藤は、「北海道に夜間中学をつくる会」に関する2編の報告論文を寄稿した。（⇒2022年（令和4年）8月31日）

○同上学会誌にシンポジウム報告「北海道の夜間中学と基礎教育保障のこれからを考える」が収録された。（⇒2022年（令和4年）8月31日）

○2022年（令和4年）10月28日現在、北海道教育委員会が発表した北海道の自主夜間中学一覧には次の4か所が載っている。①札幌遠友塾自主夜間中学（代表・黒澤晴一、場所・札幌市立向陵中学校）、②自主夜間中学函館遠友塾（代表・菅原智明、場所・函館市総合福祉センター「あいよる21」）、③釧路自主夜間中学「くるかい」（事務局・佐藤康弘、場所・釧路市総合福祉センター、④北見夜間中学（代表・斉藤満幸、場所・北見市総合福祉会館）。ほかに、調査未回答で漏れた⑤自主夜間中学旭川遠友塾（代表・豊島誓子、場所・旭川医療情報専門学校）がある。

○本書には、「札幌遠友塾自主夜間中学」以外の各団体の具体的な諸活動記録・報道記事等は収録・掲載をしていない。

◎2007年（平成19年）10月9日、札幌遠友塾自主夜間中学（代表・工藤慶一）は札幌弁護士会から2007年度の「人権賞表彰」を受けた。

○札幌遠友塾は同日、札幌弁護士会（会長・向井諭）から、人権擁護に取り組む個人や団体を表彰する2007年度の「人権賞」に選ばれ、札幌弁護士会館で表彰された。表彰式には、工藤代表と清水芳洞事務局長が出席し、記念の盾と副賞を受けた。1990年（平成2年）から、家庭の事情などで学校に通えなかった人に学びの場を提供し、ボランティアが授業や運営を受持ち、これまでに多くの卒業生を送り出し、学ぶ権利を具体化するため、地道な活動の努力を重ねたことが評価された。

○2007年（平成19年）10月10日付け『朝日新聞』朝刊は、見出し「札幌遠友塾に
人権賞表彰／札幌弁護士会／道内唯一、夜間中学」のもと、経緯を報道した。

◎2007年（平成19年）12月22日、「北海道に夜間中学をつくる会」（共同代表・工藤慶一）の会報『きぼう』No. 1が発行された。

○同会が同年5月に結成され、会員が広域に存在することから、最近の会活動の動向などの諸情報やニュースを的確に伝えるために会報が発行されることになった。会報は原則年2回発行、A4判全6～8ページとし、事務所から発信される。

○代表の工藤は創刊号の「ごあいさつ」で次のように述べている。「昨年7月、全国夜間中学校研究会から札幌市教育委員会に出された要望書に対する回答は、『公立夜間中学の設置要求はない。北海道の動向等に留意する』というものでした。これを見た時、17年間の遠友塾の授業実践や教室場所確保の交渉経緯に何らふれることなく、道教委の様子を伺う待ちの姿勢に我慢がなりません。このままでは遠友塾は無視されたままになってしまう、それなら、正々堂々と真正面から立ち向かっていこうと思ったのです。こうして、本年5月に『北海道に夜間中学をつくる会』が立ち上がり、5項目にわたる要望書を札幌市と北海道に提出しました。……」（漢字の振り仮名はすべて省略した）

○「No. 2」2008年（平成20年）5月25日発行（全6ページ）～「No. 7」2010年（平成22年）12月1日発行（全8ページ）は半年に1回発行され、「No. 8」は2011年（平成23年）12月22日（全12ページ）に、「No. 9」は2012年（平成24年）12月15日（全4ページ）に発行されたが、その後は発行休止状態となった。

◎2008年（平成20年）2月、井上大樹（勤医協札幌看護専門学校教員、のちに札幌遠友塾自主夜間中学の第3代代表）は、機関誌に論文を寄稿した。

○機関誌は『勤医協札幌看護専門学校紀要』で、第2巻p.35～41に論文「あらゆる『貧困』に立ち向かう札幌遠友塾―夜間中学運動の現代的意義―」を掲載した。

◎2008年(平成20年)7月30日・8月6日、札幌遠友塾自主夜間中学は札幌市立向陵中学校を会場に、学校教室での試行使用による実際の授業をおこなった。

○これは、札幌市教育委員会から提案された企画「夏休期間の学校教室の試行使用」を実践してみたもので、札幌遠友塾が2日間、午後6～9時の時間帯を利用し、授業開始のチャイムを鳴らすことからはじめ、実際の状況を想定し、各日各学年2教科(国語、社会、数学、理科、英語の中から2科目)の試行授業を実施した。

○試行授業は、7月30日では受講生出席53人(1年生11人、2年生18人、3年生16人、じっくりクラス8人)、8月6日では受講生出席49人(1年生16人、2年生15人、3年生11人、じっくりクラス7人)で実施された。

○他日、2008年(平成20年)8月18日、札幌遠友塾は、札幌市立資生館小学校でも実際の試行授業をおこなった。(実施状況は省略)

○これらの学校教室の試行使用は、2008年(平成20年)6月30日付け札教生第351号文書(札幌市教育委員会生涯学習部長発信、札幌遠友塾自主夜間中学代表宛)「平成20年度における学校教室の試行使用について」で提案された夏休み期間中の試行使用候補学校3校の中から2校を選んで実施されたものである。

○札幌遠友塾自主夜間中学発行の新聞『遠友だより』は、第135・136・137号(2008年(平成20年)9月3日・9月24日・10月27日発行)で、同年夏休み中の7・8月に行われた向陵中での2回の「教室の試行使用」結果についての感想文「塾生の『向陵中学校の皆さんへ感謝のことば』と、向陵中学校生徒の『もう一度学びたい』視聴しての感想』を3回にわたって特集で掲載した。感動を覚える言葉が数多く綴られた。(向陵中学校では、遠友塾が教室を使用するのに先立ち、1年生全生徒を対象に、『北海道新聞』の同年7月1日の記事「夏休中、学校を／札幌市教委、自主夜間中学に提案」と、NHKテレビ番組『生活ほっとモーニング』の同年4月8日放送「もう一度学びたい」のVTRを教材に、道徳の授業が行われた。VTRを見た生徒の感想文が遠友塾に届けられた)

○2008年(平成20年)10月23日付けで、「札幌市教育委員会教育長」宛の『要望書』が「札幌遠友塾自主夜間中学代表・北海道に夜間中学をつくる会共同代表・工藤慶

一（兼任）」から提出された。「…… 8月行われた学校教室の試行使用の成果をふまえ、下記の事項を要望いたします。／記／ 1. 授業場所として、毎週水曜日の夜、札幌市立向陵中学校の普通教室4つを使用させていただきたい。2. 「はじめの会」が行える多目的教室1つと、教材置場を兼ねたスタッフルームとして1室を使用させていただきたい。／尚、使用要件に関わる具体的な諸点につきましては、今後学校を含む3者にて、相談検討をさせていただきたくお願い申し上げます。／……」

○2008年（平成20年）11月12日付けの札幌市教育委員会からの「要望書に対する回答について」、2009年（平成21年）3月13日付けの3者（札幌市教育委員会教育長・札幌市立向陵中学校長・札幌遠友塾自主夜間中学代表）の「札幌市立向陵中学校の使用に関する覚書」の交換を経て、改めて同年3月23日、札幌遠友塾自主夜間中学が行政財産の使用について申請をおこなった。これに対する許可が同年4月2日に下りた。

○この間の2009年（平成21年）2月20日、教員やPTA関係者へ挨拶するために向陵中学校を訪問した工藤代表に、教員たちから「私たちの感謝と励ましの気持ちです」と述べて、玄関に掲げる、手作りの木製看板『遠友塾』がプレゼントされた。想像外の行為に驚き、人の世の温かさにふれた工藤代表は、あふれ出る涙で言葉を詰まらせながら「ありがとうございます」と礼を述べたという。横21cm、縦65cmの看板は、同中の教員たちが「歓迎の気持ちを伝えよう」と作成したもので、書家でもある札幌市立栄中学校の競和之校長が文字を書き、向陵中学校の高橋正幸教諭が木彫り作業をした。（翌日の21日付け『北海道新聞』も、見出し「手作り看板で「遠友塾」激励／札幌・向陵中／4月から教室提供」の記事を掲載した）

◎2008年（平成20年）10月20日、梅野きん子（元札幌遠友夜学校生徒、旧姓・吉川）の随筆「私の願い」が文芸誌『さっぽろ市民文芸』に掲載された。

○年1回募集の札幌市民芸術祭文芸賞随筆部門で、2008年（平成20年）年度の佳作賞を受賞した作品が同誌第25号p.44～45に掲載されたのである。梅野は札幌遠友夜学校中等部に、16歳時の1938年（昭和13年）4月入学し、20歳時の1942年（昭

和17年) 3月卒業した。入学者100人のうち卒業したのは女子2人だけだったという。過ごした学校生活などを綴り、「生涯で一番の青春の実りだった」「どんな時も乗り越える力を頂いた」「唯一の宝ものである」といい、最後に「今は時代が変わり志あれば道が開かれている。このよい恵まれたなかに若者は強い信念を持って未来に向かい生きてほしいと思う。一度や二度の挫折にひるむ事なく自分の大きな夢に向かって進んでもらいたい」と結んでいる。

○梅野は、2011年(平成23年)10月21日、同誌の第28号p.170にも、同年度の短歌部門佳作賞受賞作品「遠友夜学校」(10句まとめ、「淡き灯に集ひ来たりて唱和せる夜毎の歌の魂のふれあひ」ほか)が掲載された。

○この2作品は、2014年(平成26年)3月20日発行『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第2号、p.2とp.5に転載された。

○これ以前に梅野は、1995年(平成7年)9月発行の『思い出の遠友夜学校』p.99～102にも「戦時下の遠友夜学校」を寄稿している。さまざまな思い出を綴り、短歌「よみにあり魂鎮まるや夢なかに角帽姿の涼しきひとみ」を添えた。

○このほかに梅野は『北海道新聞』随筆投稿欄「いずみ」に、関連作品①1982年(昭和57年)3月6日「遠友夜学校」、②1993年(平成5年)3月5日「遠友塾卒業おめでとう」、③2015年(平成27年)5月1日「忘れ得ぬ先生」(いずみ拡大版「戦争と学びや①」に掲載)を載せている。

◎2009年(平成21年)1月24日、北海道テレビ放送は、テレビ番組『北海道遺産物語第2章』第88話「北海道文学百景(1)」の中で遠友夜学校についてふれた。

○HTVのこの番組は、2007年(平成19年)4月～2009年(平成21年)3月、毎週土曜日夜10時51分から放送された「北海道遺産物語第2章／ふるさとに出逢う旅」というもので、北海道を旅する1人の女性＝「私」の視点を通して1人称で語られるロードムービーとして構成し、北海道出身の「私」が、「北海道再発見の旅」に出て、そこで出会った北海道の歴史、文化、人々から大切な未来への道を見つけようとした。このコンセプトのもと、ナレーターは女優・中嶋朋子が務めた。

○第88話「北海道文学百景（1）—有島武郎、夜学校に開花したヒューマニズム—」では、次のように語られた。「1896年（明治29年）に札幌農学校に入学した有島武郎が、教授・新渡戸稲造の官舎に住み、自主独立の自由精神を信条とする当時の日本では異質の存在であった農学校で、自由闊達、博愛精神にふれながら札幌で青春時代を送った。開放的な農学校の空気の中で、家庭の事情で学校に行けない青年を無料で教える『遠友夜学校』でボランティア教師を務める。この学校はのちに国際連盟の事務次長となる新渡戸が設立したもので、有島は夜学校の校歌を作詞し、7年間代表を務め、札幌でのボランティア活動の原点とも言える生活を送った。『北海道文学の父』と称される有島、その原点には北海道開拓、国造りに燃える、若き青春の鼓動に満ちあふれていた時代があったのだ」。

◎2009年（平成21年）2月27日付け『北海道新聞』朝刊地方版は、川原田浩康（北海道新聞記者）が書いた記事「<街のうた>しなつた看板」を載せた。

○「札幌市中央区の向陵中で20日に行われた、教職員から自主夜間中学「札幌遠友塾」への看板贈呈式。ケヤキ製の看板が、製作した高橋正幸教諭から渡されると、工藤慶一代表は顔を覆った両手を下ろせなくなった。看板は少しだけしなっていた。／さまざまな事情から学校に通えなかった人々が通う同塾。教室探しには苦勞してきた。／向陵中は“校舎”候補となった昨夏から同塾に教室を貸し、工藤さんの話を生徒に聞かせるなど交流を重ねた。『ぜひわが校を』と機運が高まっていった。『運営に打ち込む工藤さんの姿勢、塾生たちの「学ぶ喜び」が生徒、教職員の心に響いた』（小原善孝教頭）結果だった。／4月からの校舎使用に向け、使っていなかった第2玄関や物品庫を片付け、同塾専用の玄関と控室に変えた。看板も相談を重ねた末の案だ。／材料は製材会社などを回って安く購入した端材。『店に行けば良い板もあるが、製板から始めたかった』と高橋教諭。学校の機械で板にし、かんなをかけ、のみで削り上げた『遠友塾』の浮き彫り。ケヤキの板のわずかなしなりは、教員たちの『お金よりも心を』という歓迎の気持ちの証しだ」

◎2009年（平成21年）3月28日、「れんげ堂」のアメプロに「白鹿バンビ」のブログ記事「新渡戸稲造の夢『遠友夜学校』…卒業旅行札幌編③」が載せられた。

○「海鮮中華・宮の森れんげ堂」の旅行は、「食べて飲んで」だけじゃありません。歴史、文化のなかに隠された人々の想いなども学ぶのです。そこで、新渡戸稲造が理想を描いてつくった、「遠友夜学校」の展示記念室に行ったんだあ。（という記事から抜粋して以下に示した）

○新渡戸稲造の教育の基本となった教え（新渡戸稲造校長が、遠友夜学校生に教えた学問への姿勢は、3つの言葉で表されています）／第1は、夜学校の校名の由来となった『友あり、遠方より来る／また、楽しからずや』と言う論語の言葉で「どんなに生活環境が違おうが、また、言葉が通じない外国の人であろうが、人間というものは、心と心が通じ合いさえすれば、それは、もう友達です。心の通じあえる人と出あうこと、それが人間の一番の楽しみです」と言う教えです。／第2は、この上の額に書かれている『学問より実行』と言う言葉で「一生懸命、書物を読んで、また、講義を聴いて勉強するだけが学問ではありません。本当の学問は、実行してはじめて身につくものです」と言う教えです。／第3は、「生徒たちの姿」コーナーに展示してある額に書かれている『With malice toward none, With charity for all』と言う新渡戸校長が敬愛するリンカーンの言葉で「何人にも悪意をいだかず、すべての人に慈愛の心をもって」と言う教えです。／この3つの教えを心にきざみこんで、生徒たちは遠友を巣立ち、社会の発展に、それぞれの立場から貢献していききました。

○札幌農学校（のちの北海道大学）の第2期生で、武士道の著者として世界的にも知られる新渡戸稲造。流麗な英文で書きつづられた「武士道」は、諸外国に注目される名著となりました。1920年（大正9年）には、国連の事務次長にまでなった稲造ですが、今では、日本銀行券（お札）の五千円札で彼に会うことができますね。彼について、ここでは詳細を省きますが、日本が長い長い鎖国から解き放たれ、世界基準の国へと邁進し始めた明治初頭に青春時代を過ごし、私費や官費で欧米を遊学したのち、1894年（明治27年）に理想を掲げた『遠友夜学校』を札幌に設立しま

す。

○アメリカからメリーという女性を妻に迎えた新渡戸稲造。そのメリーの家族もまた、貧しい孤児を受け入れて我が子同然に育てる、子どもたちへの社会的支援を続けた一家でした。／遠友夜学校は、メリーの家族に救われた孤児が、一生をかけて貯めた遺産で建てられました。慎ましい生活の中で貯めたお金は、当時の金額にして2000円。現在の価値に換算すると、2000～3000万円ほどでしょうか。自分を救ってくれたメリーの父親に対する感謝を、娘であるメリーに託した孤児の想い。託されたメリーも、次なる異国の孤児のために、貴重なお金を費やすことにしたのです。／僅かな借金と引き替えに、幼くして丁稚（でっち）奉公に出された子どもや、家族を失った孤児たち。学校へ行くことのできない彼らの教育の場となったのが、遠友夜学校です。貧しさゆえに学校に行けず、読み書きができぬから、まともな仕事にも就けない…。教育を受けられないことよりも、貧しさに心を蝕まれることが悲しい。／教育でもって、子どもたちの心に希望の光を与え、教育でもって、子どもたちの未来を救済できたなら…。／新渡戸稲造が取り組んだ教育は、決して「勉強」ではありませんでした。人としての生きる道（教え）を説き、文字通り心を育んだ教育者だったのです。有島武郎、宮部金吾、半澤洵といった、そうそうたる顔ぶれが無償で教壇に立ちました。その後、50年に亘って1100人もの子どもが学校を巣立ち、それぞれの「明日への道」を歩いたのです。

○新渡戸稲造の遠友夜学校記念室は、札幌の中央勤労青少年ホーム「Let's中央」にあります。入場無料で常時開放していますので、ご興味のある方はぜひどうぞ。

◎2009年（平成21年）3月、松本郁代（弘前学院大学教授）は機関誌『地域学』第7巻に論文「慈善事業・社会事業からみた札幌遠友夜学校」を載せた。

○機関誌『地域学』は、弘前学院大学地域総合文化研究所の編集・刊行による年刊学術誌で、「地域の理解にむけて」の副題がついている。論文は、第7巻の特集「新渡戸稲造とその水脈」の3論文の1つでp.47～63に掲載された。

◎2009年（平成21年）3月、野田茂徳（淑徳大学客員教授）は同題核の機関誌第13号p.25～38に論文「至高なる愛の実践者―遠友夜学校と有島武郎―」を載せた。

○機関誌『総合福祉研究』は、淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究室の編集・刊行による年刊学術誌である。

◎2009年（平成21年）4月2日、札幌遠友塾自主夜間中学が熱望していた「札幌市立向陵中学校での教室使用」の許可が、ついに札幌市教育委員会から下りた。

○形式的には、同日付け「札幌管許可第09-23号」札幌市教育委員会から札幌遠友塾自主夜間中学代表者・工藤慶一への「行政財産使用許可書」は、同年3月23日に提出した行政財産の使用についての申請の許可であった。長い間、働きかき続けた「本当の教室での授業」の要望がやっと実った。

○改めて2009年（平成21年）6月30日には、追加の行政財産の使用申請が、札幌遠友塾自主夜間中学代表者・工藤慶一から提出され、同年7月15日付け「札幌管許可第09-69号」をもって札幌市教育委員会から「行政財産使用許可書」が下りた。

○許可されたのは合わせて、札幌市立向陵中学校の「普通教室5室、多目的室、資料室」の使用で、目的「授業の実施及び教材の保管場所」として、2009年（平成21年）同年4月からの毎週水曜日（午後6～9時）に限られた。使用料は年間推計約12万円であった。

○使用許可期間は、2009年（平成21年）4月5日～2010年（平成22年）3月31日とされた。しかし、「ただし、使用許可期間の更新を受けようとするときは、使用許可期間満了の日の60日前までに、継続使用許可申請書を提出しなければならない」の規定によって継続使用は認められる。

◎2009年（平成21年）4月22日、「札幌遠友塾自主夜間中学」（代表・工藤慶一）は、第20回入学式を新しく会場となった「札幌市立向陵中学校」で挙行了た。

○前々日の4月20日付け『朝日新聞』北海道版は、見出し「満願の春校舎で授業／在校生ら学ぶ喜び新た／自主夜間中・遠友塾／札幌市が教室提供」の記事で、長年

の希望がやっとかなった曲折の歴史を詳しく伝えた。

○同塾の新生は29人であった。式典では、同中学校の新校長・植村敏視から祝辞が述べられ、定年退職の前に、特段の理解と配慮で受け入れを促進させた功労の前校長・佐藤信からのお祝いの言葉も代読された。

○後日、植村校長への礼状の中で、工藤代表は「校長先生の『遠友塾を迎えて、札幌一のマンモス校である向陵中学の新しい時代が始まる』とのお言葉を聞いたとき、私は人の情にふれる思いがして心の中で泣いていました。……改めて『夜間中学が必要である』との認識を新たにしました。こうした活動を安心して行えるようになったのも、校長先生をはじめ教職員の皆様のおかげであり、厚くお礼申し上げます。今後ともお力をおかしくたく、切にお願い申し上げます」と伝えた。

○遠友塾の受講生の基本的な学習活動（授業）での使用は、毎週水曜日の午後6～9時の3時間で、校舎の使用は、通常の生徒用とは異なる、「遠友塾」の名板が掲げられた新玄関から受講生は出入りをする。

○同中学校は、地下鉄東西線「西28丁目駅」のエレベーター昇降口がある出口から徒歩2分の場所に所在し、交通の便利さから選ばれた。（ただ、校内にはエレベーターが設置されていないので、車椅子利用者等の2階への移動に課題を抱えた）

○2003年（平成15年）8月以降、札幌遠友塾は、講座（授業）の円滑な維持のために、「公立学校の教室利用」を切望し、札幌市長や札幌市教育委員会に何度も「要望書」や「お願い」を提出し、北海道議会や札幌市議会に陳情書を提出し、紆余曲折の長い道程を粘り強く交渉と提案と協議を重ねてきた。新渡戸稲造の教育精神を尊重し温情をもって迎え入れた向陵中学校の慈愛は、塾生（生徒）にとって、やっとたどり着いた「遠友の灯」となった。

○遠友塾での塾生の学びの様子などを地域の方々にも知っていただくための広報紙『こんばんは、遠友塾です！』が2010年（平成22年）6月から発行された。（⇒2010年（平成22年）6月9日）

◎2009年（平成21年）5月19日開催の札幌市議会文教委員会で、旧札幌遠友夜学

校跡地に「若者支援総合センター」の新築を検討する旨の報告がなされた。

○以前から進められていた「札幌市若者支援基本構想及び若者向け施設設置の考え方（案）」について、生涯学習部長から説明がなされた。

○耐震性能が不足する「Let's（レッツ）中央」（編著者注：遠友夜学校記念室が併設されている）については、市有建築物耐震化緊急5カ年計画によって2011年（平成23年）度までの対応が必要とされており、これまでの利用状況、地理的条件等を考慮して、建物を解体し、跡地に「若者支援総合センターの新築」を検討したいと考え、2010年（平成22年）度は若者活動センターとして活用するが、2011年（平成23年）度には建物を解体する、また、レッツ円山も追ってレッツ中央の跡地に新築する施設に機能を移転したい、と説明された。（2010年（平成22年）4月に新設の「若者支援総合センター」をどこに置くかは説明されなかった。また、解体する「レッツ中央」跡に、建物がいつ新築するかも明示されなかった）

○2009年（平成21年）10月6日開催の（常任）文教委員会でも、耐震化の問題もあり、まずレッツ中央から解体を始め、その間はレッツ円山へ機能移転し、そして新築したレッツ中央へ、今度はレッツ円山の機能を移転していくとの確認がなされた。（2010年（平成22年）4月1日から、レッツ円山を「若者活動センター」として活用すると説明されたわけでもなかった）

○質疑応答では「遠友夜学校記念室」の存続に係る論議はまったくなされなかったため、改めて新築されるレッツ中央（つまり「若者支援総合センター」）で「記念室は従来どおり継続される」と判断した人が多かった。

◎2009年（平成21年）年5月31日、「北海道に夜間中学をつくる会」の第3回定期総会において、「夜間中学と一体となった私立中学校の設置」も検討された。

○同年度の役員選出で新しく共同代表になった亀貝一義（NPO法人フリースクール「札幌自由が丘学園」理事長）からの提案で、「私立夜間中学校の設置を札幌遠友塾とフリースクールとが共同で行うことの可能性の検討」が提案された。

○東京都で、奥地圭子が「NPO法人東京シューレ」の活動を始め、その後に特区制

度を活用して、葛飾区に「私立東京シューレ葛飾中学校」を開校した前例がある。

○札幌でも、フリースクールを発展させ、フリースクールと自主夜間中学とが一体となった私立中学校を開校するのはどうか、という構想であった。

○亀貝共同代表は、具体的には、現在の札幌自由が丘学園のフリースクール事業を学校教育法第1条と第2条2項に基づく私立中学校に移し、昼夜の運営や内容においては、これまでどおりそれぞれの独自色を出せるようにしたいと述べた。

○提案の大きな理由には、「全ての人に義務教育を保障すること」があげられるほか、札幌市内の空き教室の利用と私学助成を受けることで、運営経費すなわち経済負担を低減できることにあった。

○この提案に対して、「北海道に夜間中学をつくる会」が行政に要望する「センター校の役割を持つ公立夜間中学校の設置」とは趣旨が異なるとの意見もでて、今後は双方の役割について理解を深め、協力していくこととなった。

○同会が進めている請願・陳情等の中核は「①北海道におけるセンター校の役割を担う公立夜間中学（公立中学校夜間学級）を札幌に開設すること、②道内の自主夜間中学を運営する民間団体に対して、学校の教室利用を主とした施設の提供と財政的支援を行うこと」であった。

◎2010年（平成22年）2月1日、杉岡昭子は、雑誌『しにあらいふ』の連載記事「山陰だより（8）」で「遠友夜学校について思うこと」を書いた。

○雑誌『しにあらいふ』は、札幌市にある「ライフ出版社」が発行するもので「保健・医療・福祉時代の総合誌」を標榜する、比較的地味な内容の地方誌である。

○元札幌国際プラザ専務理事の肩書で、杉岡は連載記事「山陰から（11回までは「山陰だより」）」を書いた。2009年（平成21年）6月1日発行の12巻128号に（1）「日本とは何か」を載せて以来、執筆は新型コロナ禍で中断を余儀なくされる2020年（令和2年）1月1日発行の春季号・23巻248号の（70）まで続いた。国内外の文化・歴史・人物を主題に70回にわたり、自身の人生の小史を織り交ぜながら、自由闊達な発想をとばし絶妙なエッセイふうの論稿を展開した。

○このシリーズの中で、杉岡は、同稿（8）から始まり、ある程度まとまった内容で13回、少しふれたものを含めると20回ほど、遠友夜学校や新渡戸稲造について書き続ける。「札幌市にルーツをもつボランティアの原点は遠友夜学校である」を主張する論稿が、この回から始まった。「山陰から」を読んでいると、鳥取の人・杉岡は「太平洋の架け橋となって、世界のロマンを語り継ぐ札幌の子」だと思えてくる。「山陰だより（8）」には多彩で濃厚な話題が次々と出てくるので、要点をまとめようにも省ける記述がない。本文を読んでもらうしかない。

○1つ紹介すれば、杉岡は強調した。「遠友夜学校の深い意味を考えると、私は勤労青少年ホームではなく、『札幌遠友夜学校』という名前を、堂々と表に出してほしいと思う。事情があるのだろうが、札幌遠友夜学校は、奉仕とは何か、教育力とは何か、について、考えさせる。思い出ではなく、今の時代だからこそ、意味がある。そして何よりも、創世期の札幌の美しさを伝える。誰かが、『魂の灯台』と言った」。

○しかし、灯台の灯は、時代の風にあおられて「風前の灯火」となっていた。鳥取にいた杉岡にも、風の便りは届いたに違いない。少なくとも、灯台の土台がぐらついていると察知したからこそ書き始めたのであろう。

◎2010年（平成22年）3月10日、橋本登代子（アナウンサー）は、単行本『ほっかいどうの宝物』の中で「愛と献身—新渡戸稲造—」を書いた。

○この部分は、佐々木晴美とのインタビューをもとに書かれたものである。

○この図書（柏艚社発行、四六判、全394ページ）には「STVラジオ／TONちゃんのほっかいどう大好き」の副題がついている。「有限会社ボイスオブサッポロ代表取締役」の肩書をもつ著者・橋本は当時、（札幌テレビ放送）STVラジオの日曜午前6時15分～同30分放送、1回1人のインタビュー番組「TONちゃんのほっかいどう大好き」のパーソナリティを務めていた（インタビュー28名分を収録）。

○佐々木は、国際交流・文化団体役員などの多彩な経歴をもち、元新渡戸稲造・メアリー夫妻メモリアルデイ実行委員会委員長の肩書ももつ。「新渡戸……委員会」は、佐々木が独自に札幌で一時期立ち上げていた団体らしく、そのときによって名称は

微妙に異なる。以前にも橋本と佐々木がかかわったインタビュー記事がある。(⇒2003年(平成15年)6月27日の『人間登場』)

○2006年(平成18年)2月の放送で、佐々木が述べた要旨(p.41~51に収録)は次のとおりである。「夏目漱石は書の人、新渡戸稲造は行動の人と言われ、著作が少ないので夏目ほど一般に知られていないが、新渡戸は夏目と比較にならないほど世界的にスケールの大きな仕事をした人である」、「夫妻は、愛と献身の精神をベースに生き、貫き通した人である。まず、ローカルな活動としては、家庭が貧しいがゆえに昼間働かなくてはいけない子供達のために、メアリー夫人の実家から送られてきたお金を資金にボランティアで授業料無料の夜学校を札幌で創設したこと。遠友夜学校は50年間続き、千何百人もの卒業生が社会に出て行った。また、買われていった農家の女の子を買い戻して、自分の官舎にかくまったことも何度かあった」、「ナショナルな活動は、女子教育に力を入れたことと、台湾で製糖業を国際レベルまで立ち上げたこと。日本国のために大いに貢献した」、「インターナショナルな活動は、国際連盟の最初の事務局次長を6年間務め、国際的な問題の解決に大きく寄与したこと、『武士道』を書いて日本の心の国際理解を高めたこと」。

○この記事の見出しには、もう1つ「新渡戸稲造が今、生きていたら」とある。「日本の心ある若い人を中心とした人々は、この国の将来に絶望している。希望を持っていない人達が増えている。国家のリーダーを中心とした各界の指導者がモラルハザード(倫理観の欠如)に陥っている。資質能力がもっともっと向上しなくてはならない。新渡戸稲造が今の時代を見たら、がっかりするというよりも、痛い痛いゲンコツをはるんじゃないか」。

◎2010年(平成22年)3月19日、山本美穂子は、文書館年報でかつて遠友夜学校教師を務めた体験のある学生の当時の様子を述べた論文を発表した。

○山本は北海道大学大学文書館員で、論文は「札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活—学業・遠友夜学校・ロシア文学—」の題名で『北海道大学大学文書館年報』第5号p.1~26に掲載されたものである。

○1900年過ぎ(明治30年代)に札幌農学校に在籍した学生が残した日記等の諸資料を主要な手がかりにして、20世紀初頭の札幌農学校生の学生生活を描出しようとしたユニークな研究である。

○主対象の学生・川嶋は1903年(明治36年)1月から翌年4月ごろまで、遠友夜学校の教師を務めていた。このことから、論文のp.12~16には、「遠友夜学校への参画」として「遠友夜学校教師をつとめた札幌農学校生」、「倫古龍会と董会」の見出しの下、前後の時期を含めた当時の様子がある程度一般化し、また一覧表にしてまとめられており、遠友夜学校の動向を具体的にうかがい知ることができる。

○特に注目してあげておきたい1点は、この当時、川嶋に限らず、遠友夜学校教師には報酬が支払われていたことである。授業の多少により個人差はあるが、1人ほぼ月額2円の報酬が支払われていた。山本は「教師への報酬は遠友夜学校の経済状況によって変動していたと推察できる」と述べている。

◎2010年(平成22年)4月1日、札幌市は、これまでの「勤労青少年ホーム」を廃止し、新しく「若者支援総合センター」と「若者活動センター」を新設した。

○2010年(平成22年)3月1日発行の広報誌『広報さっぽろ』同年3月号(第600号)は、「今月のニュース」欄p.6に記事「若者支援総合センターと若者活動センターが4月にオープン」を載せた。3月末で、5か所の「勤労青少年ホーム」と1か所の「青少年センター」が廃止され、1か所の「若者支援総合センター」と5か所の「若者活動センター」に生まれ変わることを伝えた。

○「遠友夜学校記念室」が併設されていた旧Let's(レッツ)中央(旧中央勤労青少年ホーム=中央区南4条東4丁目)は、予定どおり「中央若者活動センター」とされた。記念室の設置は続けられた。(そして、1年後、すぐに廃止される。⇒2011年(平成23年)3月31日)

○このうちの注目の「若者支援総合センター」は、意表を突くかのように、予定ではやがて廃止するとされていた旧レッツ円山(旧円山勤労青少年ホーム=中央区北8条西24丁目)その跡が転用された。(当然、間もなく移転する。⇒2013年(平成

25年) 4月1日)

○これらは、若者の社会的自立を総合的に支援することにより、活力ある地域社会の実現に寄与するため開設された。根拠法は「子ども・若者育成支援推進法」(2009年(平成21年)7月成立の平成21年法律第71号。2010年(平成22年)4月1日施行)で、2009年(平成21年)10月8日制定条例第52号「札幌市若者支援施設条例」に基づくものであった。これに伴い、「札幌市勤労青少年ホーム条例(昭和39年条例第13号)」と「札幌市青少年センター条例(昭和56年条例第28号)」は廃止された。

◎2010年(平成22年)6月9日、藤島隆(図書館研究者)は単行本『貸本屋独立社とその系譜』を出版した。

○北海道出版企画センター発行、北方新書11、新書判全225ページのこの書については、遠友夜学校に関わりの深い足助素一などの人物が登場する点でも興味深いのが、ここでは既述の内容を裏付けに使うために採り上げた。すなわち、1944年(昭和19年)12月、北海道立図書館にあずけたという札幌遠友夜学校の図書(貴重本)の行方を追うためである。

○引用は少し長くなる。「2007年(平成19年)6月になって、北海道立図書館を訪れたとき、北方資料室長を退いたばかりの樋山氏より、同館所蔵の札幌遠友夜学校の旧蔵書を見てくださいかといわれて書庫に入れていただいた。旧年、夜学校の跡地に建った札幌勤労青少年センターより夜学校の資料とともに道立図書館へ寄贈になった図書で、量としては百冊にも満たないものである。／その中に独立社と創建社の印が押された図書1冊を発見した。それは、姉崎正治評閲、吉澤露門編述『天籟人生の本義』東京、雙輪閣、1904年(明治34年)8月20日発行という図書である。……表紙裏には『昭和参年参月廿六日石狩川治水事務所前田勝三郎寄贈』とある。／……前田勝三郎が独立社の蔵書印をみて、これが足助の貸本屋の蔵書であったことを知って購入し、1928年(昭和3年)3月に夜学校に寄贈したものである。／夜学校の記録には、1928年(昭和3年)2月、中等部第3回卒業生の尽力により図書部が設立されたとあるから、その中の1冊として寄贈されたものではないだろ

うか」とある。

○道立図書館が現に収蔵する図書の内容を確かめてみた。回答は「昭和初期に発行された教養書で、糸かがり本の古典も含まれる。遠友夜学校図書部の押印がある。段ボール20箱に所収し、蔵書としての登録はしていない。寄贈ではなく、青少年センターが資料を廃棄するとのことから、緊急避難的に預かった。時期は道立図書館が江別市に移転してからで、1967年（昭和42年）か1968年（昭和43年）あたりとのことであった。

○ついでに取り上げた単行本の内容についても補足すると、藤島隆には、同名や酷似名の論文等が既にいくつかあるが、照合してみると、引用の個所はこの書の出版の直前になって追加された部分であることが判明した。記述された内容の時期からみて当然であり、当該部分はこの書が初出である。

◎2010年（平成22年）6月9日、「遠友塾自主夜間中学」（代表・工藤慶一）は、広報紙『こんばんは、遠友塾です！』の第1号を発行した。

○夜間中学の会場を「札幌市立向陵中学校」に変更した翌年の4月から、遠友塾での学びの様子を地域の方々にも知っていただくために、遠友塾が「遠友塾と向陵中学校の教職員・生徒・父母・地域の方々とをつなぐ広報紙」として発行してきたものである。遠友塾と向陵中学校との交流、遠友塾の取り組みなどを中心に紹介している。A4判2ページで、以後も、年間2～3回のペースで不定期にずっと発行し続けた。同中学校関係者・生徒への全員配布、近隣町内会の回覧板での閲覧のほか、インターネットでPDF版を公開している。

○2021年（令和3年）3月、30周年記念を機に、2020年（令和2年）3月11日発行第26号までの合本冊子（10年・26回分）を発行した。

○2023年（令和5年）8月末現在、最新号は同年6月5日発行の第31号である。

◎2010年（平成22年）12月吉日、中川厚雄は私版冊子シリーズ『札幌遠友夜学校研究』の1冊目を制作し、関係者に無料配付した。

○1938年（昭和13年）生まれで、北海道大学文学部史学科卒業の元道立高校教師・中川厚雄は、退職後のボランティア活動の中で知った「遠友夜学校」の記録が紛失・欠落して不十分なことを大変残念に思い、労を惜しまず、自ら長い年月をかけて集めた資料（元生徒・教師の直接取材など）を整理し、2019年（令和元年）6月までにシリーズ全5冊（改訂版を加えると全7冊）にまとめた。貴重な研究資料を遺した「遠友夜学校研究者」として知られている。

○5冊とも、出版販売の形態ではなく、自らワープロやパソコンに入力した記録をプリントアウトし、業者に製本を依頼し50部程度発行の非売の分厚い冊子体の本である。奥付には、定価も公的番号（ISBN、ISSN）も記載はない。

○制作年順に文献事項を整理すると、次のようになる。全冊がA4判大で、編・著も発行も中川厚雄となっている。

①中川厚雄著『「遠友夜学校」研究 昭和初期の生徒を中心に [1]』2010年（平成22年）12月吉日発行、全384ページ

②中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 2』2015年（平成27年）6月15日発行、全181ページ

③中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 3』2016年（平成28年）6月9日発行、全134ページ（中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 教師事典 3改訂版』2019年（令和元年）6月1日発行、全147ページ）

④中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 生徒事典 4』2017年（平成29年）4月27日発行、A4判、全376ページ（中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 生徒事典 4改訂版』2019年（令和元年）6月1日発行、全401ページ）

⑤中川厚雄編『札幌遠友夜学校研究 札幌遠友夜学校記録一・二 5』2019年（平成31年）4月15日発行、全198ページ

○公的機関の中で全冊が揃い閲覧可能なのは、札幌市の「中央図書館」だけである。

◎2011年（平成23年）3月31日、年藤香苗（所属等不明）は、研究会誌『道北福祉』に論文「札幌遠友夜学校と新渡戸稲造—新渡戸稲造からの学び—」を発表した。

○「道北福祉研究会」発行の第2号p.24～28に掲載された論文で、今後「社会福祉の従事者」となる筆者自身が、「どのような思いで福祉に携わっていくべきか」という疑問の答えを得たいと取り組んだ結果をまとめたものである。

◎2011年（平成23年）3月31日、札幌市は、予定どおり建物の老朽化と耐震性能不足を理由に「中央若者活動センター」を閉館・廃止し、建物は直ちに解体された。

○建物は「中央若者活動センター」の名称では、わずか1年間存在したに過ぎなかった。しかも、その跡地に新築（再建築）されるはずの「若者支援総合センター」も、実現しないことになってしまう。

○その背景には、既に市電が廃止され、交通の便がよくないなどの立地条件からくる利用者減が加速していたこともあった。（結果的に、Let's・レッツ中央の新築に伴い廃止される予定だったところも含めて、他地域にあった旧勤労青少年ホームは形を変え、名を換え、移転してでも存続し続けることになる）

○物理的には、もともと堤防の傾斜地で地盤がよくない土地であったのに、1974年（昭和49年）11月に3階部分を増築し、しかも3階に体育館を造ったことによって、建物の耐震性能が脆弱になったことが閉館・廃止を早めることにつながった。

○この閉館・廃止の課題・論議が浮上したときには、札幌市と対等に話し合うはずの財団法人札幌遠友夜学校が既に消失し、関係者も死亡していたことが、札幌市側の一方的な判断・対処につながった。1962年（昭和37年）2・3月に取り交わされた「寄付依頼書」と「寄付申立書」にあった約束「新渡戸先生並びに遠友夜学校関係の業績を記念顕彰する施設、設備を、市と財団とで協同して設置する」は、既に50年を経過しており、市の側に立てば、改めて協議したくても相手がもう存在しなかった。

○同センターの閉館に伴い、「遠友夜学校記念室」も一時休止となった。半年後の2011年（平成23年）10月4日から移転先の「札幌市資料館」で再開されることになる。

○結果的に、敷地の跡は、2014年（平成26年）年12月に公園として整備されるま

での3年半の間、新渡戸博士夫妻の顕彰碑だけが見詰める、雑草の更地となった。

◎2011年（平成23年）6月8日、岩手県議会臨時会は知事提出の議案第8号「いわての学び希望基金条例」を原案どおりに出席議員46人全員賛成で可決した。

○「いわての学び希望基金条例」とは、2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災津波により著しい被害を受けた幼児・児童・生徒・学生等に対する修学の支援、教育の充実等のための事業に要する経費の財源に充てるため、岩手県が基金を設置し、内外の全国から善意の寄附を広く募っていこうとするものであった。

○この募金活動の呼びかけの言葉に、岩手県出身の新渡戸稲造が開設した遠友夜学校が一役を買うことになった。その呼びかけの言葉は、次のようなものであった。

「新渡戸稲造の思いを現代に！／岩手の偉人の一人に『武士道』を著した新渡戸稲造がいます。新渡戸稲造は、今から百年以上前、札幌農学校教授時代に家庭の事情などで勉強がしたくても学校に行けなかった子らを集めた無料の夜学校『遠友（えんゆう）夜学校』（論語の一節「朋、遠方より来る有り、亦楽しからずや」にちなんでいます）を設立しました。その設立は、子どもたちに、『学ぶ楽しさを教え、将来、社会に役立つ人物になってほしい』との思いによるものと言われています」。

○寄附金を活用して実施された事業は「いわての学び希望基金未就学児童給付事業」（保健福祉部担当）、「いわての学び希望基金奨学金給付事業」（教育委員会担当）などであった。寄付金の集金状況と活用状況の報告は毎年公表されている。

◎2011年（平成23年）8月1日、北海道科学文化協会（木村俊昭理事長）は、単行本『太平洋のかけ橋に／新渡戸稲造の生涯』（合田一道著）を出版した。

○この書は、財団法人北海道科学文化協会が1983年（昭和58年）3月から発行してきたシリーズ『北海道青少年叢書／北国に光を掲げた人々』の第29集（協会創立60周年記念号）として発行された。B5判、全175ページで、『新渡戸稲造の生涯』は1作目のp.5～87に収録された。

○ノンフィクション作家・合田一道によって著されたもので、過去の文献資料に独

自の取材も加えて書かれており、主な対象を中学生・高校生としていることもあって、新渡戸の生涯を描いた読み物ふうの本文も、末尾の「新渡戸稲造略年表」も明快でわかりやすい。

○新渡戸の代表的著書『武士道』（英文『日本の魂』、1899年（明治32年）12月アメリカで出版）は、世界的なベストセラーになり、1908年（明治41年）に日本語に翻訳されて国内でベストセラーになった珍しい本だが、合田はp.59～63で武士道に込められた意味を簡明に解説している。

◎2011年（平成23年）10月4日、一時休止となっていた「遠友夜学校記念室」は、移設先の「札幌市資料館」で展示を再開した。

○「札幌市中央若者活動センター」の閉館、建物の解体に伴い、遠友夜学校の貴重な資料を展示するには、多くの市民あるいは観光客が訪れる「札幌市資料館」へ移設するのがふさわしいとの判断から、「遠友夜学校記念室」は「札幌市資料館」へ移設された。

○記念室（遠友夜学校記念室）は、47年前の1964年（昭和39年）6月11日、札幌市勤労青少年ホームの創設と同時に、同ホーム建物1階に設置・開設され、以来ずっと存続してきた札幌市中央区南4条東4丁目の旧札幌遠友夜学校校地跡から移設されたのであった。

○2011年（平成23年）3月末から一時休止となっていたが、札幌市中央区大通西13丁目の「札幌市資料館」へ移設され、その2階に設けられた部屋2室で、2011年（平成23年）10月4日から再び展示が開始された。教室の入口を模した「遠友夜学校記念室」の表示板が掲げられた。展示室の展示内容は以前とほぼ同じだとされたが、全体の面積は少し狭くなり、展示物の配置が変わった。

○記念室所在地が変わり、展示室の様子も変わったので、来訪者に配付するリーフレット『遠友夜学校記念室—新渡戸稲造の理想を受け継いで明日へ…—』（札幌市教育委員会所蔵）も改訂版が2012年（平成24年）1月ごろ作成された。

○この記念室も、2年9か月後の2014年（平成26年）7月6日をもって廃止となる。

◎2012年（平成24年）9月1日、柴崎由紀（作家）は、「ジュニア・ノンフィクション」の伝記『新渡戸稲造ものがたり』を銀の鈴社から発行した。

○「ジュニア・ノンフィクション」は小学生中学年以上を対象とする。

○この単行本は、副題「真の国際人／江戸、明治、大正、昭和をかけぬける」が添えられ、「2012年（平成24年）／新渡戸稲造博士生誕150年／国際協同組合年（IYC）記念出版」として、ちょうど生誕150年の記念日に合わせて発行された。多数の取材や、提供情報、参考資料に基づき、敬体文でわかりやすい表現で整理しまとめられている。A5判、全256ページ。

○遠友夜学校については、p.94～99とp.220～221にふれられている。教師を務めた学生と教わったある生徒の思い出の部分（p.98）は、次のように記述されている。

○「教師を引き受けた農学校の学生たちは、稲造を慕い、その精神に共鳴し、夜学校の教育に関われることは、光栄でうれしいことと感じていました。なんの報酬もないのに、忙しい自分の勉強のかたわら、熱心に授業や経営にあたり、自らの人格も形成していったのです。教えることにより、自らも学んだのでした」。「夜学校に入ったぼくの心は、驚きとうれしさでいっぱいだった。あのなごやかな雰囲気は誰をも引きつけないではおかなかった。校門が近くなると歩くのがもどかしくかけ出してしまふ。兄さんのような先生に、お父さんのような下級生、みんなが一緒になって仲良く勉強した」。

○閉校については、次のように説明されている。「第二次世界大戦（太平洋戦争）が始まると、運営が難しくなりました。稲造が教えたリンカーンの精神は、敵国の大統領だった人の思想なので、もはや受け入れられるはずがありませんでした。また、稲造の平和主義を受け継ごうと、遠友夜学校では生徒の軍事教練をおこなわない方針だったため、軍部の怒りを買うことになります。／1944（昭和19）年3月、ついに遠友夜学校は閉校に追い込まれました。……戦争さえなければ、夜学校はきっと続いていたことでしょう。／50年間に、夜学校の卒業生は1000人、学んだ生徒は6000人近くにのぼるといわれています。また教師として教壇に立った学生は、約

600人。これら多くの人々の心の中に、この夜学校はずっと生き続けることになりました」(p.220~221)。

○この本は、新渡戸が残した次のメッセージで結ばれている。「この世に生まれた大きな目的は、人のために尽くすことにある。自分の名誉や利益のためではない。自分が生まれた時からこの世を去るまで、まわりの人々が少しでもよくなれば、それで生まれた甲斐があるというものである」(p.234)。

○柴崎はブログ「新渡戸稲造博士の足跡をたずねて」を書き続けている。

◎2012年(平成24年)12月1日、「札幌青空会・アジア招提」共催の「新渡戸稲造生誕150周年記念講演会」が、旧札幌遠友夜学校跡地近くの山崎宅で開催された。

○主催の「札幌青空会」(会長・山田一男)は、元札幌遠友夜学校生徒の山崎健作が代表を務めていた。会場は山崎の自宅「洋装の山崎」の2階集会室であった。

○共催が「アジア招提」(主宰・杉岡昭子)となっているが、この講演会は、杉岡(元札幌国際プラザで専務理事)の発案で開かれた。当時、家庭の事情で鳥取に居ながら講演会開催を企画した杉岡は、夜学校跡地での遠友夜学校記念室の復活を願って、電話で山崎に「貴方は遠友魂を継承する義務がある。遠友復興の仕事を人生第2章にしなければ」と激励したことから始まったのだそうだ。(2014年(平成26年)11月発行『しにあらいふ』「山陰から(28)」による)

○講演会の準備は時間をかけて進められ、杉岡の依頼を受けて講演会事務局長を務めた元札幌市職員の坂本健一が尽力したことで成功裏に終わったと伝えられている。杉岡と山崎の呼びかけに応えた参加者は、当時の生徒や90歳を超える高齢者、半澤洵元校長の孫、高倉新一郎元副校長の子など、69人であった。司会進行は杉岡の知人・池田光司が務めた。

○構成は3部で、第1部は講演「遠友夜学校と新渡戸稲造」(講師：藤田正一＝北海道大学名誉教授、平成遠友夜学校校長)、第2部は講演「創成川東地区の歴史的環境—豊平川から創成橋—」(講師：田山修三＝札幌市文化財課文化財保護指導員)、第3部は参加者の懇談で、幅広く市民に遠友夜学校の意義と現状を知って、考えても

raitaiという企画だった。要するに、3部一体の「考えてください」という講演会だった。

○会場では、第3部用の資料として「遠隔地からの声『札幌遠友夜学校記念館を造ってください』(杉岡昭子、鳥取県大山町)」が配付された。講演会に出席できなかった主催責任者の1人である杉岡は、その中で次のように自分の心情と考えを述べて呼びかけた。

○「遠友夜学校記念室がもともとの場所から移設されたと聞いたときは、絶句しました。札幌の人は魂を売ったの?と、電話の向こうの親しい友に思わず言いました。そして数日は、重い心から離れることができませんでした。／私は、南4条東4丁目に記念室があったとき、教室の小さな椅子に腰かけることができました。……130年を経て、目の前にありました。／博士の志と若者の情熱、彼らの声、ざわめきが聞こえ、見えるものにしてきた記念室は、もともとの場所にあつてこそ、時代を映し出し、時代を超えて、私達の心に訴えるのだと思います。……／教育の本質と奉仕の原点は、どこかにあるのではない、札幌に、そして『ここ遠友夜学校』にある、と私は思って仕事をしてきました。／昭和に造られた記念室は、新渡戸博士が選んだ土地と一体になって、博士の志と、それを受け継いだ青少年の姿を、明治・大正・昭和の3代にわたって具体的に示すもので、国内に数多い、新渡戸博士を顕彰する記念館とは、性格を異にします。新渡戸記念館というより、『札幌遠友夜学校記念館』です。／遠友夜学校は、北大の先生と学生の奉仕で数多くの人材を育てました。そして1964年(昭和39年)に、青少年の活動センターとして札幌市民に譲渡され、ここに記念室が設置されました。今度は、平成の市民が、遠友夜学校の精神をもともとの場所にどう顕彰するかを、真剣に考える時ではないでしょうか。その核には、遠友夜学校記念室は欠かせません」

○講演会がのちに語られるとき、「講演がきっかけで……」と一般的に語られるのだが、この開催の企図と意義は、遠友夜学校の見方の、他との差異化を図ろうとするところにあり、最重点を置いたのは第3の懇談だった。つまり、創成川東地域の歴史性の中に、精神の柱がある遠友夜学校を置くことで、著名な歴史家の言う遠友夜

学校とは違う方向性を目指したようだ。新渡戸博士の理念というよりも、それを継承した青少年の情熱と歴史、いわゆる遠友夜学校の存在価値に意義を見出そうとした。地域振興を兼ねた再興の目指す視点を、あちこちにある「新渡戸記念館」というよりも、札幌だけが根を持つ「札幌遠友夜学校記念館」とした。札幌が誇り、どこにもないブランドになるのは、遠友夜学校の意義・教育という場での魂のゆさぶりが現代に通じるから、と。

○懇談「札幌遠友夜学校跡地について」が進められる中で、会場から「札幌遠友夜学校跡地に建設されていた勤労青少年のための施設『札幌市中央若者活動センター』（最後の名称）の建物が老朽化に伴い、2011年（平成23年）春に解体された。これによって、札幌市が市民との約束で施設内に設置した遠友夜学校記念室もこの場から撤去され、跡地の利用も荒地のまま、今後の用途が明らかにされていない」との指摘と疑問と不審が提示された。この時、「跡地に市民の力で新渡戸稲造記念館を作ってはどうか、札幌市民ならその力があるだろう」との提案あり、会場は賛成意見で盛り上がったとされる。

○懇談の「意見の総括」として、①取り敢えず、広い緑地公園にし、その後に新渡戸稲造博士の記念館を建設すること、②札幌市資料館にある新渡戸稲造の関係資料を基に戻すこと、③市は、年内に跡地利用を考えているので、早急な対応をすること、④「結論」として、年内にコアメンバーによる会議の場を設け、一定の方向性を出して、市へ提出する（全員一致）。（坂本健一作成の「講演会の実施報告」からの抜粋）

○この時の会場での論議が方向づけとなり、行動に移した市民の中から、遠友夜学校精神の継承・普及活動を具体的に推進する団体が誕生する。講演会后、有志数名によって、直ちに跡地検討委員会が立ち上げられた。

○話は飛躍するが、この講演会をきっかけに、のちに遠友夜学校の再興・継承を目指して活動する団体が大別して2つ誕生することになる。1つは、2013年（平成25年）3月18日に結成する「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」である。もう1つは、「考える会」を脱会して2014年（平成26年）4月29日に仮結成する「遠友

再興塾準備委員会」(「札幌青空会」を発展的に解散し、2015年(平成27年)4月1日に正式発足する「遠友再興塾」)である。ついでに言えば、杉岡・丸山らの元札幌市職員は、講演会開催後結成の、どの団体にも参加していない。(最初、山崎・山田とともに前者の発起人になる池田も、まもなく公的委員会委員に就任して退会している)

○2団体の違いの1つは、前者は広く新渡戸を尊敬する人が会員になるのに対して、後者は限定的に旧遠友夜学校に関わりのある人が主に会員になる点にあった。

○もう1つの違いは、遠友夜学校跡地に建設する記念館について、前者は(結成団体が募金活動等を行い)自らが主体的に資金を集めて記念館を建設し運営しようとするのに対して、後者は(札幌市が土地の無償譲渡を受けた際の約束を守り)札幌市が資金を出して遠友夜学校記念館を建てて札幌市が管理・運営するよう「約束の履行」を主張する点にあった。

◎2013年(平成25年)1月25日、北海道大学国際本部長・本堂武夫は、新構想プログラムによる「新渡戸カレッジ」の設立を発表した。

○理事・副学長でもある本堂は、北海道大学高等教育推進機構発行の『ニュースレター』No.93のp.1～3掲載の巻頭言で『「新渡戸カレッジ」の設立について』を発表した。

○「新渡戸カレッジ」は、国際活動に関わる新渡戸稲造の精神を日本の21世紀的課題と捉えて、その具現化を目指して、まず、2013年(平成25年)4月から新しい教育システムを導入する学士課程の特別教育プログラムとして開校された。北海道大学では、これまでも国際性や教養教育・全人教育を重視してきたが、それをさらに進めて、国際コミュニケーション力の強化を図るとともに、偏狭な排外主義に陥らない国際性とリーダーシップを醸成し得る全人教育を行うとした。

○カレッジでは、新渡戸稲造から学ぶべき3精神として、①深い倫理性に基づいた品位ある「自律的な個人の育成」、②それぞれの文化的・社会的背景に根ざしたアイデンティティを確立し、互いに尊重し合う「国際精神の涵養^{かんよう}」を基本とし、さらに

は③相互に親しく交わる「国際的教育の実現」を掲げ、この3つを教育上の理念とした。

○新渡戸カレッジの特徴は、全12学部二千数百名の新入生から約200名を選抜し、学生はそれぞれの学部・学科のカリキュラムと並行して、共に学ぶ「新渡戸カリキュラム」を履修するところにあつた。学部・学科の垣根を越えた学習環境が提供されるという意味で「カレッジ」と称した。

○以後、年々の新設・改編・統合等を重ね、2023年（令和5年）9月現在、「学部教育コース」と「大学院教育コース」が開設されている。学部教育コースは、4つの基本理念（フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視）の下、新渡戸稲造の精神に基づきながら、各学部の専門教育において高い専門性を修得するとともに、学部横断的な特別教育プログラムを通して、自分に対する力、他人に対する力、社会に対する力を身につけ、それらを発揮できる人材を育成することを目標とする。大学院教育コースは、北海道大学のすべての修士課程及び専門職学位課程に在籍する学生を対象に、創造的・批判的思考能力やリーダーシップ、課題解決・問題発見能力を涵養することを目的にした特別教育プログラムである。

○2017年（平成29年）5月、新渡戸カレッジの取り組みを詳細に紹介し、また、教育現場での実践のための指南書としてまとめられた単行本（玉城英彦ら編著『グローバルリーダーを育てる北海道大学の挑戦』彩流社）が発行された。（⇒2017年（平成29年）5月18日）

◎2013年（平成25年）3月18日、「新渡戸稲造生誕150周年記念講演会」の参加者有志によって任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が設立された。

○2012年（平成24年）12月1日開催の記念講演会后、直ちに跡地検討員会が立ち上げられ、有志数名が山崎健作（札幌青空会代表）宅を拠点に毎週のように話し合いが持たれた結果、3～4回目後の会合で、任意団体を結成することにし、会の名称を「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」と決めた。

○2013年（平成25年）3月18日付けで「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」

の「規約」と「設立趣意書」がつくられた。

○規約によると、会の目的は「札幌市中央区南4条東4丁目の旧『札幌遠友夜学校』跡地が発するメッセージに耳を傾け、年齢・性別・人種・職業等による分け隔てのない交流が、地域と世界に平和と幸福をもたらすとの新渡戸稲造の生涯の信念に倣い、地域住民が集い、語らい、議論し、学び、啓発しあえる『場』を提供する。また、この土地の放つメッセージを国の内外に伝え、歴史的意義にふさわしい国際交流を促す活動を行う」とした。

○行う事業（活動）は、①「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校記念館」（仮称）の跡地一隅への建設、②赤ちゃんからお年寄りまでの地域住民の学びと交流の場の提供、③札幌遠友夜学校記念室と資料・図書の保存・管理、利用者へのサービス、④「市民講座」等、継続的教育プログラムの企画と実施、⑤記念館内に電子資料室を設け、新渡戸稲造と札幌遠友夜学校に関する史料を集約し、国境を越えた情報サービスの提供、⑥以上に付帯するすべての事業、とした。

○設立趣意書には、「このような活動の核を、私たちはここ創成川東の記念すべき跡地に置き、世界に誇る真の国際人・新渡戸稲造と札幌遠友夜学校の歴史的意義をこれからの世代に伝える母体として、『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会』を設立しました」とある。

○役員は、会長（規定は1名）に秋山孝二（公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団理事長、元公立中学校教師）、副会長（同若干名）に高橋大作（日本ファーターイル技術部長）、運営委員（同20名以内、省略）、監事（同2名、省略）を選び、事務所（同札幌市）を山崎方（「洋装の山崎」「山崎洋裁教室」）に置いた（山崎宅の2階を事務所・会議室としたのは、2017年（平成29年）6月まで）。

○設立趣意書には、発起人が50音順に、次の13人が名を連ねた。「秋山孝二、池田光司、越後光雄、北出孝、高橋大作、常田益代、橋本信夫、三上節子、山崎健作、山田一男、山本国男、吉田かよ子、和島朋広」

○11か月後の2014年（平成26年）2月14日、法人化の認可を受け、「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」となる。

○なお、秋山の会長は、跡地検討委員会を進める過程での推薦による就任依頼によつたとと思われる。秋山は、2012年（平成24年）12月1日の講演会に出席しておらず、就任以前はこの活動自体にかかわりをもっていなかったとみられる。

◎2013年（平成25年）3月21日、任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」は、札幌市議会議長宛に陳情書「陳情第50号」を提出した。

○「陳情第50号」は、同会会長・秋山孝二から提出されたもので『遠友夜学校』跡地に記念館（仮称）建設ほかを求める陳情」である。

○要旨「札幌市中央区南4条東4丁目、『遠達友夜学校』跡地を、公園としてだけではなく、地域住民の学びと交流の場、及び新渡戸稲造と遠友夜学校記念館（仮称）の建設ほか、札幌の歴史をたどる場として整備をして下さい」

○理由「①ここは、日本が世界に誇る国際人・新渡戸稲造と遠友夜学校の実践の場であり、札幌市民はその「志」を形として永く受け継いでいく責務があります。②「遠友夜学校」跡地が発するメッセージは、年齢・性別・職業等による分け隔てがなく、地域住民が集い、語らい、議論し、学び合う場の提供です。広場の公園として整備するばかりではなく、多様な「交流の場」としての価値が大切です。③この場は、学生たちが新渡戸稲造の志に共鳴し、夜間でしか学べない子弟に無償で教育の機会を与えたというボランティア精神の原点です。それを「見える形」で末長く市民の心の拠り所とすべきです。④遠友夜学校は北海道庁から1916（大正5）年に「私立学校」の認可を、続いて1923（大正12）年に「財団法人」の認可を受けて運営にあたります。この法人格は閉校後も継続していましたが、1962（昭和37）年に、札幌市が勤労青少年ホームの建設地を探していた折、当時の理事会が次の3つを条件として土地を札幌市に譲渡し、同時にその財団を解散しました。（1981年（昭和56年）9月1日発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.28。注：3条件は編著者・白佐が省略した）／私たちはこれまで、地元連合町内会の皆さんから個別に賛同を得ております。今後、3月28日午後6時から開催される連合町内会役員会でも協議する予定になっています。今、新しくこの場から、当時託された先人たち

の思いを是非受け継いでいく計画にすべく上記の陳情を致します」

○2013年（平成25年）5月20日、札幌市議会総務委員会が開催され、「陳情第50号」が議論された。これに先立って、秋山孝二会長らによる趣旨説明も行われた。この日の議論では採決に至らず、継続審査となった。（⇒2013年（平成25年）5月20日）

◎2013年（平成25年）3月31日発行の機関誌『道北地域研究所年報』で、加藤隆（名寄市立大学教授）は論文「地域に根ざした教育の課題と可能性」を発表した。

○同誌は名寄市立大学道北地域研究所が刊行する年報『地域と住民』で、31号p.93～101収録の同論文には「道内の自主夜間中学を中心として」の副題が付いている。

（本書での引用・紹介は、この論文の本筋からやや離れ、札幌遠友塾自主夜間中学と札幌遠友夜学校の関係部分を抜き出したものである）

○加藤によると、北海道に開設されている4か所の自主夜間中学は、1990年（平成2年）4月に創設した札幌遠友塾自主夜間中学を母体として誕生し発展してきた経緯があり、他府県とはかなり異なった面が見られる。70代以上の高齢者が多くを占め、その中でも女性の割合が高く、戦後の混乱や農業などの労働要員とされた中で義務教育を受ける機会を失った者が少なくない。これが逆に強い学びへの欲求や学友との学びへの憧れの動機となっている。また都市部では、障害を抱えていた人たちが学齢期に学習の機会を逸してしまっていた。一方若年層では、不登校経験者などにも自主夜間中学での学びを選ぶ人たちがいる。同世代との交流にトラウマを抱えながら、何とか社会に出るきっかけをつかみたい思いが強く、高齢者などとの交流に抵抗感を弱める有用性があると指摘する。

○加藤はまた、今日の自主夜間中学の源泉は、120年前の1894年（明治27年）1月、札幌区南4東4の地にキリスト教教育者・新渡戸稲造が設立した北海道初の夜間学校・札幌遠友夜学校だとみなす。この学校は、物事を行うにあたり他人への思いやりをもって実行できる人間の育成を目的としていた。学校運営はボランティア（当時の北海道帝國大學の学生と北大OBで、全員が無給で教育活動に携わっていた）であり、教師をしている中から「代表」を選出する組織となって運営されていた。

経済的にも生活の厳しい子弟が多かったこともあり、授業料を無料とし、運営資金は後援組織「遠友会」の寄付や内務省と道庁からの助成金で賄っていた。この教育姿勢の中に、新渡戸の教育理念である「すべての人に慈愛を持って社会奉仕を行う」や「学問より実行」という精神を見て取れる。この精神がその後も連綿として受け継がれていった。その後も発展を続けたが、新渡戸夫妻の死亡や太平洋戦争など社会環境の変化、札幌での学校教育の充実もあって、1944年（昭和19年）3月に閉校に至った。その後も財団の運営は続いたが、1964年（昭和39年）3月に正式に解散した。実に70年間にわたって夜学校は灯をともし続けてきた。（以上は、編著者・白佐が要約したもので、実際は具体的で詳しい）

○加藤は、このような教育的遺産の経過の中で、1990年（平成2年）に札幌遠友塾自主夜間中学が設立され、遠友夜学校の精神は今も札幌の地で脈々と受け継がれているという。この設立に携わった工藤慶一代表が、その設立趣意書の中で述べた言葉を引用し、札幌遠友夜学校が設立された明治期の小学校就学率50%という社会的状況とは違った意味で、今日でも教育的弱者がかなりの規模で存在し、その一人ひとりが自己実現の機会を切実に待っていることを読み取ることができるとした。（⇒1990年（平成2年）4月29日）

◎2013年（平成25年）4月1日、「札幌市若者支援総合センター」は、交通の便利さが考慮され、中心部の地下鉄駅そばのビル内へと移転された。

○同センターは3年前、施設が老朽化していた「旧Let's（レッツ）円山」跡に新設されたので、当初から予定されていた移転であった。移転場所は、地下鉄駅から徒歩2分の、新改装された「大通バスセンタービル2号館」の1階（札幌市中央区南1条東2丁目）だった。ここは、南4条東4丁目の旧遠友夜学校跡地とは位置的に極めて近い場所だった。

○同時に、同ビルの2階に「公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会」も移転した。（同協会は、この時から名称変更した、札幌市の若者支援・活動センターの指定管理者。前名称は「財団法人札幌市青少年女性活動協会」であった）

○これを機に、ビルの借用スペースを十分に確保し、若者支援総合センターに他の「若者活動センター」の機能以上のものを持たせる場としても拡充された。

○2013年（平成25年）3月29日付『北海道新聞』朝刊「札幌版」の記事は、見出し「札幌市若者支援総合センター／大通バスセンターへ移転／ロビー拡大『高校生も利用を』」で詳しく伝えた。

○これらの対応が実現したことによって、「中央若者活動センター」の建物を2011年（平成23年）春に解体・廃止し、旧遠友夜学校跡地に新しい建物を再建築して2013年（平成25年）ごろに開設すると予定された「若者支援総合センター」の新築は、誰からも「不要」と判断されるプランになった。（この時点で「遠友夜学校記念室」の資料は、資料館から戻る可能性の場所を絶たれてしまうのである）

○2017年（平成29年）10月17日からは、『平成遠友夜学校』の下部組織である学習支援ボランティア団体「ゆうがく」との共同事業も開始される。（⇒2017年（平成29年）10月17日）

◎2013年（平成25年）5月、任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」は「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校記念館」建設資金の募金活動を開始した。

○記念館の建設場所は、札幌市中央区南4条東4丁目の旧札幌遠友夜学校跡地を予定した。建設資金の募金活動は寄付金・協賛金とし、目標額を1億7千万円と定めた。記念館の建設工事の着工は2015年（平成27年）春とし、完成目標を同年12月末とした（2014年（平成26年）3月20日発行の同会『会報第2号』p.9、同会理事・高橋大作「札幌遠友夜学校記念館（仮称）建設担当部からの報告」）。

○記念館の建設時期は、2015年（平成27年）から2019年（平成31年）に変更された。（変更の経緯は公表されていない）

○2019年（平成31年）3月15日発行の季刊紙『太平洋の橋』の寄稿で、代表理事の秋山孝二は、「今年、2019年（平成31年）に、『札幌遠友夜学校記念館（仮称）』建設を目指して活動をしています。この間、多数の応援者から1,600万円のご寄付が集まっていますが、目標金額にはまだまだ遠い金額で……」と述べた。

○2020年（令和2年）5月14日、『北海道新聞』は「記念館建設計画／資金不足で延期」の見出しで、「2020年（令和2年）3月着工予定だった記念館の寄付金が目標額の約1割に留まっていることから、募金期間を3年間延期することを決定した」と報道した。

○2023年（令和5年）5月2日発行の考える会『会報第11号』の「巻頭言」で、松井博和理事長は「当初、記念館建設の目標額を1億7千万円とし、2019年（平成31年）末までを募集期間、2020年（令和2年）建設と設定しました。しかし、関係者の多大な努力にもかかわらず、募金最終年での寄付金は約1/7に留まった次第です」と述べた。そして、自身が代表理事になり、北大とのコラボ（協働）事業として再出発したが、予定の2023年（令和5年）の建設は実現できず、さらに延期して、2026年（令和8年）の北大の慶事に合わせた計画で進めることにしたと報告している。

（慶事とは北海道大学の創基150年事業のことである）

○ホームページには、2013年（平成25年）5月に始めた募金の記念館支援者件数は、直近の2023年（令和5年）8月末までに累計3,138件に達したとある（ただし、寄付金額は公表されていない）。

◎2013年（平成25年）5月20日、宮川潤（北海道議会議員）は、自身のブログに「ラジオ収録裏話（39）遠友夜学校」を書いた。

○宮川は、札幌市東区を中心に放送しているコミュニティFMラジオ番組（さっぽろ村「宮川じゅんの待たせてごめんね」週1回、30分）のパーソナリティを務めていた。この番組の準備のために「札幌市資料館」の「遠友夜学校記念室」に行ってきたことについて、次のようにふれた。

○「札幌遠友夜学校（1894年（明治27年）～1944年（昭和19年））は、授業料無料で、低所得世帯の子どもたちの教育を行いました。教えたのは、札幌農学校（北海道大学）の学生や教授などで、無償ボランティアでした。／現在、遠友夜学校記念室があるのは、大通西13丁目の札幌市資料館の中です。実際に遠友夜学校があったのは、札幌市中央区南4条東4丁目、その近辺は低所得者の住まいが集中してい

たそうです。そういう地域に、授業料無料で子どもたちが通える学校を作ったのです。／その場所に遠友夜学校があったという意味が大事だと思います。遠友夜学校跡地に記念室があれば、札幌市の発展してきた歴史と地理を感じられるのではないのでしょうか」

◎2013年（平成25年）5月20日、札幌市議会総務委員会は「陳情第50号」について第1回目の審査会を開いた。陳情は継続審査となった。

○「陳情第50号」とは「札幌遠友夜学校跡地の一隅を、記念館（仮称）建設ほかの場として使用を求める陳情」で、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」から提出されていたものである。

○初審査日であるため、議題の審議開始に先立ち、提出者側（「考える会」の秋山孝二ほか）から趣旨説明を受ける機会が設けられた。説明では、この跡地から遠友夜学校の歴史を伝えていくことの必要性・重要性が強調された。

○札幌市は、跡地活用の方針について、かつて遠友夜学校の財団から寄付された経緯を踏まえて、周辺には街区公園が少ない地域特性、公園整備を望む地域の意向などを総合的に勘案した庁内議論の結果、遠友夜学校の歴史を伝え、児童の遊び場の機能も有する記念緑地として整備することにし、2013年（平成25年）度予算では環境局みどりの推進部が公園整備のための基本設計費を計上していた。

○政策企画部長から、陳情内容は、考える会が公園整備自体に賛同し、自ら主体となって記念館を建設し、維持管理までしていこうとの行動開始であり、市民主体のまちづくりの具体化とも言え、その方向性は、跡地の歴史的意義を尊重する札幌市の活用方針とも根本的には変わらないものであるとの見解が示された。

○さらに、考える会と地域とが相互に理解し合えるように、今年度、地域と公園整備のワークショップが予定されているので、考える会にも参加を求め、各意向をより具体化し意見交換をし、相互理解に向けて札幌市はマネジメントを行いたい、との考えも示された。

○札幌市所蔵の資料については、教育委員会生涯学習部長から、貴重な資料（新渡

戸稲造直筆の額、関連書籍、学校に関する文献など)は全体で約260点、現在、このうち180点を記念室で実際に展示している、また、2001年(平成13年)から北海道大学総合博物館へ額や文献など約30点を貸し出している、との説明もあった。

○考える会による記念館建設が実現した場合には、資料館の今後のあり方や、地域や考える会の意向に沿った記念館の内容にもよるが、資料の貸し出しのほか、資料館や北海道大学総合博物館や記念館との間で資料の巡回展示、遠友夜学校にちなんだ行事の連携など、教育委員会として生涯学習の観点からどのような連携が可能か、検討したいとの考えも示された。

○みどりの推進部長の見解として、札幌市内の街区公園では、基本的に建物の設置は認めておらず、他に例外もないのであるが、この地の街区公園の場合、遠友夜学校の跡地ということで緑地として整備するので、街区公園という位置づけではなく、緑地の一環としての公園だと考えれば、都市公園法で規定する設置許可、10~12%の建物の設置は可能だとされた。

○結果は「継続審査」となった。(⇒2014年(平成26年)2月25日)

◎2013年(平成25年)6月15日発売の月刊誌『北方ジャーナル』7月号は、記事「**「新渡戸の精神文化」発信拠点『遠友夜学校跡地』の再活用を**」を掲載した。

○「【再考】新渡戸稲造が札幌に残した“ボランティアの心”」として、「今、札幌市民有志の間で新渡戸の残した遠友夜学校のボランティア精神を後世に伝えようとする動きが始まっている。関係者の話を交えながら札幌における新渡戸の足跡、そして遠友夜学校が伝える価値をあらためて探してみたい」とした。

◎2013年(平成25年)6月22日、任意団体「**新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会**」(会長・秋山孝二)は「**設立記念フォーラム**」を開催した。

○フォーラムでは、基調講演とパネルディスカッションが行われた。

○同年6月19日付け『朝日新聞』北海道は、見出し「**新渡戸の遠友夜学校、跡地活用を考えよう**」の記事で、現在更地になっている旧札幌遠友夜学校跡地の利用方法

などをめぐって話し合うフォーラムが開催されると伝えた。

○これを「第1回新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会記念フォーラム」と位置づけ、一般社団法人となった以降も、毎年6月に記念のフォーラムを開催し続けた。

第11回目は2023年（令和5年）6月10日に開催された。途中から（一社）札幌農学同窓会が共催となった。一部は道民カレッジ連携講座となった。

○2014年（平成26年）6月14日、第2回目の開催は「札幌遠友夜学校創立120周年記念フォーラム」とし、2019年（令和元年）6月15日の第7回目は「札幌遠友夜学校創立125周年記念フォーラム」として実施された。

◎2013年（平成25年）8月21日、任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」（会長・秋山孝二）は会報の「創刊号」を発行した。

○『創刊号』は、A4判、全2ページで、会長・秋山孝二の挨拶などを載せた。

○以降、各号ページ数は異なるが、諸活動の内容を記事にする形で、年1回の発行を続けた。2015年（平成27年）6月27日発行の『第3号』は、「札幌遠友夜学校創立120周年記念誌」は全30ページであった。

◎2013年（平成25年）10月16日、佐藤全弘・藤井茂は、新渡戸稲造研究の集大成であるA5判・全771ページの大著『新渡戸稲造事典』を教文館から出版した。

○佐藤は大阪市立大学名誉教授・キリスト教愛真高等学校理事長で、多数の新渡戸稲造に関する著書・論文がある。藤井は財団法人新渡戸基金事務局長兼常務理事で、長年の新渡戸稲造研究歴がある。

○この書は新渡戸没後80年を記念して刊行された。序文で佐藤は、「新渡戸稲造ほど近代日本で多種類の仕事に従事した人は少ない。そしてその多くの仕事のどの1つでも、一生の仕事とする以上の成果をあげた人は稀である」とし、その新渡戸が日本人に十分理解され知られているとはいいがたく、誤解さえされている面もある、と指摘する。そこで、「新渡戸稲造理解の礎石と成らんことを」願って、手間と工夫を加えて『事典』を出版した。「新渡戸の生涯と活動の全般を（まとめた事典は）、

……、おそらく今後当分は世に出ないと思われる、正確、詳密で心のこもった一冊の『事典』にまとめることができたのは、望外の喜びである」としている。

○新渡戸稲造夫妻の生涯の概説をはじめ、年譜、著書・論文・寄稿、関係系図、関係の人物・事項・学校・土地・新聞雑誌報道記事等々を広範囲かつ詳細に収録している。当然、札幌農学校・遠友夜学校時代のことも記述している。とはいえ、「遠友夜学校」について項目をおこしてまとめた形で詳しく記述した部分はない。佐藤が「新渡戸稲造の生涯」を文章でまとめた編は136ページだが、遠友夜学校に割いたのはp.51～52の2ページ弱にすぎない。

○新渡戸の多方面における大活躍の中で、教育に限っても、幼稚園教育から大学教育にいたるまで、およそ教育の全範囲にたずさわり、顕著な影響をその死後にも及ぼした人は他にない、とされるほどである。ところが、新渡戸自身が創立した学校は「遠友夜学校」だけで、この学校も創立50年で廃校となり今はない。このことから、新渡戸は「形ある学校を残したのではなく、心、精神、魂のあり方を示したというほかはない」（p.81）と佐藤はいう。

○人物編では、「遠友夜学校」の運営などに深くかかわりをもった人としては、赤井直吉、有島武郎、大島金太郎、小谷武治、蠣崎知二郎、末光續、半澤洵、三島常盤、宮部金吾、森本厚吉、エルキントン・メリー・パタスン、モリス・ウィスター、リンカーン・エイブラハムの解説がある。

○詳細年表では、「遠友夜学校」の関係事項は、「1894年（明治27年）1月、新渡戸32歳時の夜学校創設から、2013年（平成25年）6月22日、札幌市での遠友夜学校跡地活用フォーラム（設立記念フォーラムのこと）開催まで」を収載している。

◎2013年（平成25年）11月上旬、北海道大学へ遠友夜学校関係の資料を委譲する意向を固めた札幌市教育委員会は、教育長が同大学理事者に協議開始を申し入れた。

○このころ、札幌市（担当＝札幌市教育委員会生涯学習部）は、とりあえずの臨時措置として実施していた「遠友夜学校記念室」資料の資料館での展示を中止し、移転の必要性に迫られていた。2014年（平成26年）7月19日から開催の札幌国際芸

術祭のために早期の立ち退きを求められたのである。

○早期決定を余儀なくされる中、北海道大学へ資料の寄贈による解決案が急浮上した。譲渡できれば、後々資料展示のための建物も不要となるとの思いもよぎった。

○受け入れる側の北海道大学大学文書館は、急な話に一度は難色を示したものの譲渡を受け入れる方向で検討することに傾いた。(⇒2014年(平成26年)10月30日)

○2013年(平成25年)11月21日には、両者の担当者同士の顔合わせが行われ、1回目の協議に入った。この時の話し合いで、基本的な考え方で合意し、貴重な資料を後世にわたって永く残していくためには、北海道大学で収蔵・展示していくことが最も相応しいとの判断に、両者が至ったのである。

○同12月上旬には、文書館職員による記念室の視察が行われ、同12月12日の2回目の協議では、札幌市からすべての資料の寄贈(無償譲渡)が提示され、これにそった具体的な作業の調整に入った。以降、急ピッチで必要な作業が双方で進められることになる。

○のちに札幌市は、北海道大学へ寄贈するとの結論に至った理由を次のように説明した。

①遠友夜学校を開設した新渡戸稲造とゆかりが非常に深いこと。

②資料を後世に永く安定的に維持・管理し、展示ができる公的機関であること。

③受入先となる、同大学大学文書館では、歴史的な資料が散逸しないよう、資料の収集・整理・保存・調査研究を行うとともに、資料の閲覧や展示などを通じて広く、市民や国内外の観光客等へ紹介していること。

④資料の保全は、専門員により適切な補修等が行える体制が整っていること。

⑤資料の学術的な調査研究が行える組織体制であり、かつ研究成果の信頼性が極めて高いこと。

○2013年(平成25年)12月中旬には、譲渡の明細目録を作成するために、遠友夜学校記念室所蔵の資料等についての調査が開始された。

○札幌市教育委員会は、所管部局と協議の上、札幌市財産条例第8条第2項の規定に基づき判断し、所定の手続を経て資料移転の方針を決定した。

◎2013年（平成25年）11月16日付け『北海道新聞』は夕刊のトップ記事で、「77歳の小学1年生／札幌の主婦・浅野さん」の見出しのもと、大きく掲載した。

○別の見出しは「戦中戦後病気で通えなかった心残り今／「読み書き」を／市教委に思いを訴え」とある。記事に取り上げられた浅野京子は、すでに週1回通う札幌遠友塾自主夜間中学をいったん卒業し、また同塾の「じっくりクラス」でも学び、そしてさらに近くの小学校でも1年生から毎日通学することを切望したのであった。札幌遠友塾が浅野の熱意を札幌市教育委員会に伝え、小学校に懇願して実現した超稀なケースであった。

○2013年（平成25年）11月25日、札幌遠友塾自主夜間中学（代表・遠藤千恵子）は、公益財団法人社会貢献支援財団の「平成25年度社会貢献者表彰」を受けた。

○この表彰の対象は「広く社会の各分野において、社会と人々の安寧と幸福のために尽くされ、顕著な功績をあげながら報われる機会の少なかった方々とする」というものであった。

○社会貢献支援財団は、札幌遠友塾の功績を次のように述べている。「1990年に有志により始められた北海道で初めての自主夜間中学校で、今年で24年目を迎え、これまでに420人が学んできた。受講者は戦後の混乱で教育が受けられないまま大人になった人、中国残留孤児やその家族、外国人労働者、不登校や引きこもりなど様々。授業は週1回水曜日の6時から9時まで行われ2教科の授業があり、国語、数学、社会、英語の他、遠足や社会見学、クラス発表会などの行事も行っている。／毎週釧路から何時間もかけて登校していた老夫婦が、1年後には生まれて初めての年賀状を講師宛に送ってきたこともあった。講師はボランティア、授業料と賛助会員200人からの寄付金で運営されている」

○遠藤代表は、受賞の喜びを、次の言葉で結んだ。「(前略) 遠友塾は、生きていく上で不可欠の基礎的学びの機会を得られず苦勞している人々に、是非とも学習機会をとという思いではじめられた活動ですが、最近希望者が次第に減少傾向にあります。

ただ、受講生の口からは、『いろいろ回り道をしてやっと自主夜間中学という場にたどり着いた』、『もっと早く知りたかった』との声が聞かれ、まだまだ多くの希望者がいることが推測されます。また、周りの理解や施設の制約から、あるいは経済的な面から申し込んでもあきらめざるを得ない方もおり、なんとか学びを求める人がひとりでも多くその機会を得、より幸せな生活を手に入れてほしいと願わずにはおられません。／その意味で、私どもの活動に目を留めていただいた今回の受賞は貴重な機会となり、心より感謝しております。また授賞式の際は、私どもの知らないところで、これほど多くの助け手を求める人がおり、これほど多くの支援活動が行われていることに驚き感動する場ともなりました。そのような方々との貴重な交流の場となったことも大きな収穫でした」

◎2013年（平成25年）12月10日、中垣正史は、北海道マサチューセッツ協会の会誌に「新渡戸稲造の生涯と業績…長く受け継がれた『遠友夜学校』」を掲載した。

○掲載誌は、北海道マサチューセッツ協会発行『HOMAS』（日本語版ニューズレター）No.70で、p. 1～6に連載『北海道開拓の基礎を築いた指導者たち（25）』として「新渡戸稲造の生涯と業績…長く受け継がれた『遠友夜学校』 —I wish to be a bridge across the Pacific（私は太平洋の架け橋になりたい）—」を掲載した。

○この連載は、北海道開拓使時代の指導者たちの具体的な人物像とその業績を、各種の資料調査をもとに簡潔にまとめたもので、同協会の事務局長・中垣正史が執筆した。

○新渡戸の生涯と業績、および遠友夜学校の概要が簡潔にまとめられている。

○同記事には、詳しい「新渡戸家系図」が添えられている。関係分を簡略に文章化してみると、次のようになる。

「新渡戸稲造は、盛岡藩士の父・十次郎、母・勢喜の三男（8人きょうだいの末っ子、兄2人、姉5人）であった。稲造・萬里子夫妻には、生後数日で死亡した遠益とよますのあと子宝に恵まれなかった。五姉・喜佐の三男・孝夫よしおを養子に、次姉・峯の孫娘・琴子を養女に迎えた。孝夫と琴子は夫婦になり、孫は長男・誠（彰敏、未婚）と長

女・武子の2人である。武子は結婚し、加藤姓になった」。

○ついでに結婚前の経歴を少し補足すると、「新渡戸稲造」は、陸奥国岩手郡盛岡城下（現・岩手県盛岡市）で生まれた（1862年（文久2年）9月1日）時は「稲之助」と名づけられたが、父生存の幼時に「稲造」と改名させられた。父は1867年（慶応3年）12月14日、稲造5歳の時に亡くなった。太田金五郎の養子になっていた叔父（父の弟）太田時敏のさそいで勉学を志し、祖父・傳のすすめもあり、1871年（明治4年8月（9歳時）に東京に出て叔父の養子になり、「太田稲造」を名乗る。時を経て、ドイツ留学中の1889年（明治22年）4月、26歳時、長兄・七郎が亡くなり、すでに次兄・道郎も亡くなっていて新渡戸家を継ぐ男子がいなくなったので、三男だった稲造が家を継ぐために、旧姓に戻って「新渡戸稲造」と名乗るようになる。母親の戸籍名は「せき」。

○記事の全文は、北海道マサチューセッツ協会のホームページで読むことができる。

◎2014年（平成26年）1月1日、任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」は、「(仮称)札幌遠友夜学校記念館」建築コンセプト設計の公募を開始した。

○2014年（平成26年）2月20日の締切日までに合計50件の応募設計作品が寄せられた。同2月25日～3月7日の選考審査の結果、アメリカからの応募者（Naomi Darling）の作品が第1位となり、これを採用することに決まった。

○2014年（平成26年）3月20日発行の同会『会報第2号』p.8～9には、同会理事・高橋大作が「札幌遠友夜学校記念館（仮称）建設担当部からの報告」を書いている。この中で、高橋は「来年の春から建設工事が始まり、年末にはほぼ終了する予定を考えておりますが、今から建設のための募金活動を始めます」とある。つまり、2015年（平成27年）春から建設工事が始まり、同年末にはほぼ終了する」との予定が発表された。募金活動は2013年（平成25年）5月に始まっていた。

○設計公募の結果については、2014年（平成26年）5月27～29日、公募作品50点のうち、制作者の同意が得られた29点の設計図と理念の展示が札幌駅前通地下歩道空間「チ・カ・ホ」で公開された。

◎2014年（平成26年）2月14日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」は認可を受け、「任意団体」から「一般社団法人」となった。

○法人化後も、規約等は原則的に2013年（平成25年）3月18日に設立した前身の任意団体を引き継ぐ形で運営した。役員は、理事5人、幹事1人を置き、代表理事は、秋山孝二（公益財団法人秋山記念生命科学振興財団理事長）が引き続き務めた。理事は高橋大作（日本ファーターイル技術部長）などが務めた。

○拠点の事務局は引き続き山崎健作方に置いていたが、2015年（平成27年）4月に山崎が別行動の「遠友再興塾」の代表になった関係もあり、2017年（平成29年）6月からは秋山の所有する「愛生館ビル」に移した。以後、同所にずっと置き続けた。

○同会は、2014年（平成26年）12月完成予定の遠友夜学校跡地の「新渡戸稲造記念公園」造成に向け、地元の連合町内会に対して記念館建設の説明会を開き、記念館への要望を聞いた。また、公園銘板とメモリアルウォールの文言作成に、札幌市みどりの推進課とともに考え、協力した。

○秋山代表理事（理事長）は2020年（令和2年）2月13日までその任に就き、その後は副理事長に退いた。

◎2014年（平成26年）2月25日開催の札幌市議会総務委員会は「陳情第50号」の第2回目の質疑応答を実施し、陳情は2月27日の札幌市議会定例会で採択された。

○まず、配付資料に基づいて、政策企画部長から2013年（平成25年）5月20日開催の総務委員会における第1回目審査の論議経過や審査後の住民との意見交換会などの経緯、今後の方向性などについて説明・報告がなされた。

○この過程で、記念館に関して考える会から、トイレなどを公園利用者にも開放すること、建設資金は募金によること、記念館の管理は考える会で行うことなどの説明があった旨の報告もなされた。

○また、跡地の北東角250㎡の敷地に考える会が記念館を建設することについて地域の住民の了承が得られたので、本日の陳情審査を踏まえたうえで、跡地の一部を

記念館用地として市は考える会に貸与したいとの提案もなされた。

○みどりの施設担当部長からは、公園整備の概要について説明がなされた。

○教育委員会生涯学習部長からは、記念館用地の取り扱いについて、教育委員会所管の普通財産とし、新渡戸稲造と遠友夜学校の精神を今に伝える場、地域住民の学びと交流の場として貸与し、基本的な約束事を明記した覚え書等を取り交わし、適宜、協議を行い、記念館の供用開始後も必要に応じて事業内容を確認していきたいとの説明があった。

○質疑の最初に委員から、資料館の遠友夜学校記念室の行政視察をした際、戸棚の中の段ボールの上に裸で山積みになっていた関係資料を目にし、札幌市のこれまでとこれからの歴史的・文化的遺産への姿勢に改めて大きな疑念が生じた、との指摘があった。これを契機に用地貸与の件から観点がずれ、質疑応答は市所管関係資料の取り扱い方が主要な話題となった。

○考える会が市所管の遠友夜学校関係資料の譲渡を要望している件について、教育長は、当初、その場所に複製を展示したい旨の話はあったが、責任を持って実物を展示するという話はなかった。学校の創設から100年以上も経過する中で、資料の散逸や経年劣化などが懸念されており、学術上大変価値の高い貴重な資料を文化資料・文化財として責任を持って後世に受け継いでいくには、博物館の機能を有する北海道大学（大学文書館等）で一元的に管理してもらうのが一番いいとの総合的判断で、同大学に寄贈する形で協議を進めた結果、2013年（平成25年）秋に双方が合意に達し、同大学への寄贈を決定した、考える会にもそう説明している、との方向性を示した。

○委員からは、同大学への贈与については、本来、札幌市が建設すべきものであって、市が責任放棄をしたと思われるもいたし方ないこと、広く市民への閲覧及び民間研究者等への協力などの配慮を何らかの形で書面により同大学へ申し入れること、時期は芸術祭が終了した後にすること、移転後は時期を置かずに同大学で展示されるよう要望をすること、考える会と丁寧に話し合っていくこと、などの意見が述べられた。

○教育委員会生涯学習部長からは、考える会がボランティア精神やその歴史を踏まえて、民間の発想から事業を計画されていることに敬意を表し、陳情の趣旨の実現に向けて可能な支援を行っていく必要があると考え、跡地の一部を記念館用地として貸与する方向で考えている、との見解が示された。貸与後も、事業計画の進捗も注視しつつ、新渡戸稲造と遠友夜学校の精神を伝える場として、地域住民の学びと交流の場として、生涯学習の観点からかかわっていききたい。

○質疑終了後、結論を出すことに異議がなく、また、討論もなく、陳情第50号の採択に異議もなく、結論として採択すべきものと決定した。

○これを受けて、2014年（平成26年）2月27日、平成26年札幌市議会第1回定例会が開催され、「陳情第50号」は全会一致で採択された。これをもって、「新渡戸稲造と遠友夜学校を考える会」へ公園用地の一部貸与（記念館建設用地として北東角地250㎡）は承認された。

○2014年（平成26年）2月26日、『朝日新聞』北海道版は、前日の札幌市議会総務委員会の第2回目の質疑応答と採択を受けて、「新渡戸稲造の精神継承を／市民有志、寄附で記念館建設へ／遠友夜学校跡地、札幌市が土地貸与」の見出しのもと、紙面4分の1ページを割いて、夜学校とその跡地の歴史を紹介した。

◎2014年（平成26年）4月29日、「遠友再興塾準備委員会」が結成された。

○「一般社団法人新渡戸稲造と遠友夜学校を考える会」の記念館建設活動の推進に伴い、考え方の不一致で、山崎健作らが退会し結成したものであった。

○同会は、新渡戸稲造博士の精神を継承し、遠友夜学校の再興を目指し、まちづくりに貢献したいと、元遠友夜学校生徒・山崎健作が提唱する「真実一路」をモットーに結成された。（「遠友再興塾」の正式結成は2015年（平成27年）4月1日である）

○代表に山崎健作（元遠友夜学校生徒）、事務局長に佐藤邦明（エイジス北海道社長、父・三男が元遠友夜学校生徒）が就いた。

○佐藤邦明の父・三男の人生については、2014年（平成26年）11月の杉岡昭子の記事にも、2022年（令和4年）8月の山崎健作の著書にも、この翌年の創作紙芝居

作品でも詳しく述べられている。

◎2014年（平成26年6月20日、「新渡戸稲造と遠友夜学校を考える会」主催の「札幌遠友夜学校創立120周年記念フォーラム」が開催された。

○を会場に札幌市・札幌市教育委員会の後援で開催された。

○基調講演は演題「記念するには所をえらぶ」で、講師は佐藤全弘（大阪市立大学名誉教授・新渡戸稲造研究者）であった。佐藤は、特に、遠友夜学校が50年目に“閉校した”ことの積極的意味と記念館建設の必要性を解説した。アメリカ人の篤志の資金で開校した学校であり、アメリカ人を敵とした「軍事教練」を強制されることに対する理事会の強い反対の意思表示であった、つまり軍事教練を拒み、閉校を決めた、と。／そのうえで、遠友夜学校の意味を今考える場には、それがもとあった地に、銅像と石柱と掲示を建てるだけでは不十分で、やはり然るべき記念館を設け、その場で記念して学ぶのが本当である。北大の博物館では、遠友学校にそう多くの空間と力は割けない。遠友魂は今回の記念館建設計画に大喜びをしていると信じる。遠友夜学校の記念品もこの計画の実現を待っている。この計画はぜひまっとうさせなければならない。

○この要旨は、2014年（平成26年）3月20日発行の同会『会報第2号』p.1～2で、巻頭言として「創立120年によみがえる—札幌遠友夜学校—」と題し、佐藤が寄稿していた。

○この基調講演のまとまった概要は、2015年（平成27年）6月27日発行の同会『会報第3号』（札幌遠友夜学校創立120周年記念誌）p.5～6で、「記念するには所をえらぶ」と題して、佐藤の名で掲載された。

◎2014年（平成26年）6月22日、札幌市資料館主催、新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会協賛の「札幌遠友夜学校創立120周年記念講演会」が開催された。

○同資料館研修室を会場に、「遠友夜学校あれこれ」と題して、講師の中川厚雄（札幌遠友夜学校研究家）が講演した。

○講演内容は、2015年（平成27年）6月27日発行の同会『会報第3号』（『札幌遠友夜学校創立120周年記念誌』）p. 7～8でその一部が公表された。「遠友夜学校あれこれ（その1）札幌遠友夜学校の人々」と題した記事である。この記事で紹介された2人の教師のうち1人目は、本職は現役教師として北海中学校で歴史地理を昼間教え、夜間は札幌遠友夜学校本科で講師として歴史を教えた「富宅益吉」のこと。以前から慈愛をもって遠友夜学校行事にかかわり、1916年（大正5年）4月～1918年（大正7年）3月には教壇にも立ち、生徒ばかりでなく他の学生教師にも多大な影響を与えたという。もう1人は、1923年（大正12年）前後に遠友夜学校にかかわっていた愛称「ナイヤ先生」と呼ばれていたインド人留学生「アラムダ・ナラヤナン・ナイヤー」のこと。ナイヤーは、北海道帝国大学附属水産専門部製造科2年目に1921年（大正10年）年4月に編入学、翌年には同大学の農学部応用菌講座の聴講生となり、1923年（大正12年）3月に卒業した。同講座の主任教授は半澤洵だった。札幌遠友夜学校校長でもあった半澤の懐の深さで、また国際交流にもなるので、特認の学生教師として受け入れていたのではないかという話であった。

○「遠友夜学校あれこれ（その2）」以降の記事については未確認である。

◎2014年（平成26年）6月23日、札幌市教育委員会生涯学習部は「遠友夜学校記念室所蔵資料の調査、分析結果について」を札幌市のホームページで発表した。

○遠友夜学校記念室所蔵の資料等についての調査は、1964年（昭和39年）6月に設置以来はじめて行われたものであり、2013年（平成25年）12月～2014年（平成26年）4月、北海道大学大学文書館職員の協力のもとに（実質彼らによって）行われた。

○所蔵資料等は合計575件（このうち29件は北海道大学総合博物館へ貸与し常設展示中）であった。内訳は、文書資料118件（教務日誌、庶務日誌、会計関係書類綴、学籍簿、役員決議録、事業報告など）、写真資料14件（新渡戸稲造肖像写真、卒業記念写真帖など）、物品資料19件（墨蹟、校印、植物標本など）、生徒文集綴り139件（「文の園」「遠友魂」「小羊」など）、刊行物183件（学期報『遠友』、「有島武郎全

集」など)、展示備品102件(壁面展示パネル、展示ケースなど)であった(北海道大学総合博物館へ貸与中の内訳は、文書資料13件、生徒文集13件、刊行物3件であった)。

○資料等の個別の詳細一覧は、北海道大学大学文書館において作成された。当初は「《仮目録》遠友夜学校関係資料」としていたが、のちに正式な「遠友夜学校関係資料」が作成され、いずれも札幌市のホームページでも確認できる。後者では、展示されていた配置場所(第1展示室、第2展示室、総合博物館の別)もわかる。

◎2014年(平成26年)7月4日、札幌市長は、北海道大学総長宛に物品寄附申込書(所蔵資料575件)を提出した。寄附先は「北海道大学大学文書館」とした。

○物品寄附申込書記載の遠友夜学校記念室所蔵資料575件には、北海道大学総合博物館に貸与中の29件を含み、その内訳は添付の「遠友夜学校記念室(資料、展示備品)カテゴリ別リスト」で示された。

○価額(評価額)は「なし」とした。

○物品等の寄附は、同年7月7・15日、10月中旬の3回に分けて行う予定とした。

○寄附の目的等については、次のような経緯と理由を述べ、申し入れをした。

札幌市所有の「遠友夜学校記念室」の所蔵資料は、新渡戸稲造直筆の書(額)や当時の学校に関する写真・書類・簿冊等であり、いずれも貴重なものであるが、1894年(明治27年)の学校創設後100年以上を経過し、資料の経年劣化等が懸念される。市では、将来的な所蔵品の展示、保管等のあり方などについて、再移転も含め総合的に検討を進めてきた結果、遠友夜学校の歴史的意義やその功績を永く後世に残していくためには、遠友夜学校を開設した新渡戸稲造とゆかりが深く、また、下記の理由から、貴大学への寄贈・移転が最も相応しいとの結論に至った。

○寄贈理由…①永く将来にわたって安定的に資料の収蔵・保管が可能な公的機関であること。②学術的な調査研究機関であり、かつ研究成果の信頼性が高いこと。③受入先である「北海道大学大学文書館」は歴史的資料を収集し、整理・保存・調査研究を行い、閲覧や展示などを通じて広く、市民等へ資料を紹介しており、資料の

保全について専門員等による適切な補修等が行える体制にあること。

◎2014年（平成26年）7月6日、札幌市が運営してきた「遠友夜学校記念室」は完全に閉設・廃止となった。

○記念室（遠友夜学校記念室）は、50年前1964年（昭和39年）6月11日、札幌市勤労青少年ホーム内に開設され、2011年（平成23年）10月4日には「札幌市資料館」（札幌市中央区大通西13丁目）へ移設され、規模をやや縮小されて、その2階に設けられた部屋で展示を続けていた。

○その記念室も、2014年（平成26年）7月6日、完全に閉設・廃止された。資料の経年劣化や散逸等が懸念されるとの理由で、札幌市と北大との間で寄贈（無償譲渡）の同意書が正式に交わされたのは、2日前の7月4日付けだった。

○閉設後、ただちに資料の移転が開始され、7月15日までにすべての資料が「北海道大学大学文書館」へ移された。その中には、この50年間に実施された記念室での伝承活動において、実績として後世に残されるべき具体的な記録や資料は何も含まれていなかった。50年間の展示活動について、何も記録されていなかったのだろうか。

5. 新渡戸稲造記念公園・北海道大学内展示時代（2014～ ）

◎2014年（平成26年）7月25日から、北海道大学大学文書館は、寄贈された「遠友夜学校関係資料」の歴史展を次々と開催した。

○同大学文書館は、2005年（平成17年）5月に設置され、北海道大学に関する歴史的な公文書および各種資料を収集・整理・保存し、調査研究等を行い、展示・公開等の利用に供していた。（文書館は2017年（平成29年）4月に「公文書室」と「沿革資料室」を設置している）

○2014年（平成26年）7月、札幌市から寄贈を受け、北海道大学が大学文書館において整理・保管し、利用に供することになった「遠友夜学校関係資料」は、2009年（平成21年）法律第66号で制定され、2011年（平成23年）4月1日に全面施行された『公文書管理法』が準用され、以降、適正かつ円滑な運用が推進されることになった。

○特定歴史公文書等の扱いを受ける「新渡戸稲造と遠友夜学校」の歴史展示は、『公文書管理法』に基づいて行われるようになった。資料の利用（閲覧、撮影利用）は大学文書館内の閲覧室で実施し、遠友夜学校の歴史にまつわる展示は、2014年（平成26年）7月25日から企画展示を3回開催した。2016年（平成28年）度からは、大学文書館1階展示ホールでの常設展示として実施されている。（展示では、資料保護のため、写真パネルと資料レプリカを作成し、掲示・陳列している）

○第1回目の実施（第Ⅰ期企画展示）……展示名：「《企画展示》遠友夜学校を支えた人々」、会期：2014年（平成26年）7月25日～2014年（平成26年）9月4日、会場：北海道大学百年記念会館2階展示ホール、構成：①歴代の校長（新渡戸稲造、新渡戸メアリー、半澤洵）、②歴代の代表理事（宮部金吾、大島金太郎、有島武郎、蠣崎知二郎、野中時雄、小谷武治、半澤洵）の紹介。

○第2回目の歴史展（第Ⅱ期企画展示）…… 展示名：「《企画展示》遠友夜学校略史—50年の変遷—」、会期：2014年（平成26年）9月6日～2017年（平成29年）11月20日、会場：北海道大学百年記念会館2階展示ホール、構成：①「前期（1894年～1920年（明治27年～大正9年））小学校の授業を行なっていた時代」、②「後期（1921年～1944年（大正10年～昭和19年））中等学校の授業が中心となった時代」。

○第3回目の歴史展（第Ⅲ期企画展示）…… 展示名：「《企画展示》“With malice toward none, with charity for all”—遠友夜学校の歴史—」、会期：2015年（平成27年）1月9日～2015年（平成27年）3月31日、会場：北海道大学附属図書館2階正面玄関ロビー、構成：①「遠友夜学校の創立～すべての人に慈愛を」、②「初等部の活動～是こそ楽しき極みなれ」、③「中等部の新設～夜学校はいつも君達の友です」、④「戦争の影と閉校～「学問より実行」」。

○第4回目の歴史展（常設展示）…… 展示名：「《常設展示》遠友夜学校の歴史」、会期：2016年（平成28年）6月4日～現在（2020年（令和2年）4月17日～2022年（令和4年）4月3日、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、館内展示を休止）、会場：北海道大学大学文書館1階展示ホール、構成：「新渡戸稲造」の紹介コーナーを付設した常設展示（3回の企画展示を再編するとともに、後藤忠（夜学校中等部卒業生）の写真帖（後藤捷裕旧蔵、2015年（平成27年）3月に中川厚雄寄贈）から写真パネルを新たに作成・掲示）。

○詳細は、『北海道大学大学文書館年報』第16号（2021年（令和3年）3月31日発行）、p.72～136に資料解説「＜展示＞遠友夜学校の歴史」（北海道大学大学文書館編）で示されている。（展示の風景・解説のほか、多数の各種資料・写真を収録しており、「北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)」においてweb公開もされている）

◎2014年（平成26年）7月25日、「遠友再興塾準備委員会」は、札幌市議会議長宛に陳情書（陳情第137号）を提出した。

○「陳情第137号」とは「札幌市民の郷土の誇り、『遠友夜学校』の貴重な財産であ

る史料を護り、市民による市民のための活用を図ることを求める陳情」であった。
同年8月12日、市の指導により陳情書を再提出した。(指導内容は不明である)

○2014年(平成26年)9月24日、札幌市議会文教委員会が開催され、陳情第137号が議論された。この日の議論では採決に至らず、「継続審査」となった。(⇒2014年(平成26年)9月24日)

○2014年(平成26年)10月30日開催の札幌市議会第2部決算特別委員会でも、遠友夜学校と札幌市の文化行政について論議がなされた。

◎2014年(平成26年)7月26日、中川厚雄(元道立高校教師)は随想「遠友夜学校/120周年に」を新聞に寄稿した。

○随想が掲載されたのは『朝日新聞』朝刊道内版「ほっかいどう/土曜考える/北の文化」欄で、見出し「崇高な精神、歴史伝えたい」のもと、中川は2010年(平成22年)12月にまとめた『「遠友夜学校」研究—昭和初期の生徒を中心に』に取り組んだ経緯などを綴った。「遠友夜学校記念室」のボランティアガイドをしながら集めた焼失した在籍者名簿の復活をとおして、崇高な精神を貫いたこの学校の歴史を少しでも後世に伝えたい、との思いを述べた。

○2014年(平成26年)7月27日、北海道大学関連の「一般社団法人恵迪寮同窓会」は、ホームページで「中川氏の遠友夜学校の精神や歴史の発掘及び整理に取り組む真摯な姿勢には、頭が下がる思いがします」と、この記事「事務局からのお知らせ」として配信した。

○翌日の7月28日、「平成遠友夜学校校長」として知られる藤田正一(同同窓会副会長、北海道大学名誉教授)は「遠友夜学校の今」と題する長文のメッセージを寄せた。同同窓会はこの全文もホームページに掲載した。藤田は、遠友夜学校遺産の取り扱い方の変容の様子を伝え、将来に危機感を抱き、遠友夜学校記念施設を設立するとした跡地利用の約束を守るよう、札幌市に対して北大関係者も声を上げるよう促した。

◎2014年（平成26年）8月21日、高校生を対象に無料学習支援を行う大学生ボランティア団体「ゆうがく班」が「平成遠友夜学校」内に結成された。

○結成の時は、母体となる「平成遠友夜学校（2005年（平成17年）4月1日開設）」の開設10周年記念式典（2014年（平成26年）11月1日挙行）の直前であり、源流の夜学校（遠友夜学校）の創立120年の節目の年でもあった。平成遠友夜学校の運営スタッフを務める学生メンバーの中から「遠友夜学校の奉仕の精神を現代で実践したい」との意向が高まった。

○名称の「ゆうがく」は、「遠友夜学校」の「友」と「学」をとって「ゆうがく」とした。別名を北海道大学学習支援ボランティア「ゆうがく」ともいい、学生有志が活動するもので、初代代表は発案者の小山田伸明（北海道大学2年生）が務めた。

（学生による学習支援活動は以前から行われていたが、位置づけを明確にし、名称を付けた）

○指導料は無料で、遠友夜学校の奉仕の精神を現代において実践することを目的とした。つまり設立意図を「遠友夜学校の精神を引き継ぎ、経済的理由など様々な事情により十分な教育の機会を享受することができていない若者に対して学習の場を提供する」とした。

○関係者や市民などからは、未永く、遠友夜学校の本来の意味に立ち、社会的な弱者に寄り添う存在であり続けてほしい、新渡戸稲造の唱えた「学問より実行」を地でいく活動であってほしいとの願いが込められた。

○運営を寄付でまかなう「北海道大学遠友学舎」（北海道大学構内）を会場とした。

○「ゆうがく」に「班」を付け、「平成遠友夜学校」の事業の1つに位置づけた。平成遠友夜学校が主催となり、週1回（後に週2回、曜日は固定）午後6～9時、学生が参加高校生の希望や学力に応じて全教科の個別自習支援を行うほか、進路相談にも応じた。

○2014年（平成26年）8月24日の『北海道新聞』朝刊は、「北大生『遠友夜学校』の精神継承／塾に通えぬ高校生支援／学力に応じ無料指導」の見出しで報道した。

○2015年（平成27年）3月1日発行の季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティア

ニュース』(同博物館ボランティアの会発行) No.36号p.6に、太田晶(平成遠友夜学校教頭)は、グループ紹介「平成遠友夜学校の紹介」を寄稿した。

○2015年(平成27年)6月1日発行の季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.37号p.8に、小山田伸明(北海道大学理学部3年)は、活動報告「平成遠友夜学校という主体」を寄稿し、新しく始めた学習支援についてもふれた。

○2015年(平成27年)9月1日発行の季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.38号p.9に、佐藤悠(酪農学園大学1年)は、活動報告「平成遠友夜学校／活動支援／卒業生徒の声」を寄稿した。

○2015年(平成27年)9月1日発行の季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』No.38号p.10に、小山田伸明(北海道大学理学部3年)は、活動報告「出前『平成遠友夜学校』／苫前町での『寺子屋』」を寄稿し、町から依頼に応える形で、夏休み中の同年8月、4日間6人の北大生が北海道留萌管内の小さな町・苫前町へ出向きおこなった中学生・高校生の出前学習支援の様子についてふれた。

○2017年(平成29年)10月17日からは、活動を前進的に拡充し、名称から「班」をとり、「ゆうがく」と変更し、また、活動の場(会場)を「札幌市若者支援総合センター」にも置き、毎週火曜日・木曜日に実施することになる。(⇒2017年(平成29年)10月17日)

◎2014年(平成26年)9月5日、北海道大学大学文書館は、リーフレット『展示「遠友夜学校略史—50年の変遷—」(北海道大学百年記念館)』を発行した。

○来館者向けリーフレットは、A4判大を二つ折りにした4ページものでカラー印刷された。1ページ目は展示名と2枚の集合写真、2ページ目は「展示のご挨拶」と「遠友夜学校とは」の文章、2つの校舎側面図、3ページ目は「遠友夜学校沿革略年表」、4ページ目は各種案内説明、の構成となっている。インターネット上で公開されているので、容易に見ることができる。若干の差し替えで構成内容を変えた第2版(2015年(平成27年)7月28日発行)・第3版(2017年(平成29年)11月20日発行)も作成された。

○2014年（平成26年）9月6日～2017年（平成29年）11月20日、北海道大学百年記念会館2階展示ホールで開催の「《企画展示》遠友夜学校略史—50年の変遷—」の来館者配布用に作成されたものであるが、その他でも活用された。（⇒2014年（平成26年）7月25日、北海道大学大学文書館）

◎2014年（平成26年）9月24日、札幌市議会平成26年（常任）文教委員会が開催され、遠友再興塾準備会提出の「陳情第137号」についての質疑応答がなされた。

○「陳情第137号」とは、2014年（平成26年）7月25日提出の「札幌市民の郷土の誇り、『遠友夜学校』の貴重な財産である史料等を護り、市民による市民のための活用を図ることを求める陳情」である。質疑に先立って、提出者による趣旨説明も行われ、遠友再興塾準備委員会から佐藤事務局長と菅原委員が出席し、陳情内容を説明した。

○質疑応答の経過は長文に及ぶので、以下に簡略化して収録する。（発言者の個人名は省略し、発言内容の文体は敬体を常体に統一した）

（A委員）陳情提出者の話を伺い、新渡戸稲造夫妻が崇高な精神と志を持って創設された遠友夜学校、また、それに関係する資料は、私ども札幌市民が誇りとするべきもので、歴史的、文化的にも非常に価値が高く、というより、その価値ははかり知れないものであり、大変貴重な市民財産であったということを改めて認識させられた。／市は、財団法人遠友夜学校からその跡地と関係資料を無償で譲り受けた際の同意条件についてどれほどの思いを持って履行されてきたのか、疑問に思う。／北海道大学へ譲渡する以前のことになるが、当時の寄附条件である札幌市勤労青少年の健全育成を履行し、さらには、新渡戸稲造の偉業、功績に鑑み、これら資料の歴史的、文化的な価値を札幌市民の方々に対して広く公開し、十分な情報提供、あるいは広報し、有効活用されてきたと考えるのか、また、そのことにかかわって本市が十分に尽力してきたのか、そしてまた、これら関連資料は札幌市民にとってかけがえのない財産であったと認識されているか、聞きたい。

（生涯学習部長）まず、土地の寄附された経過について説明いたしたい。1962年（昭

和37年) 2月に、札幌市が財団法人遠友夜学校宛てに提出した土地の利用計画がこの土地の寄附の同意条件となっている。この計画には、青少年の情操教育及び生活指導、または青少年のグループ活動の育成を目的とした施設を設置する、2番目は、保護に欠ける児童の保育所を設置する、3番目は、前2項の施設後の空き地に児童の遊び場を設置する、4番目として、新渡戸先生並びに遠友夜学校関係の業績を記念、顕彰する施設・設備を市と財団で協同して設置する、この4項目である。／その後、北海道による財団の解散承認がずれ込んだので、最終的な土地寄附に関して札幌市と財団が同意を交わしたのは1967年(昭和42年)になってからである。そこには、「札幌遠友夜学校は、故新渡戸稲造が札幌市における勤労青少年の健全育成を目的として創立し、経営を行った歴史的経緯を尊重し、その敷地は札幌市勤労青少年の健全育成を目的とした施設の用地に限り使用すること」ということになっていた。私どもは、そういった経過を踏まえて、あるいは、その土地の由来、あるいは資料等についても十分勘案した上で、Let's (レッツ) 中央、いわゆる中央勤労青少年ホームを建てて、その中の一部に記念室という形で資料を展示し、顕彰してきたという経過である。／その後、レッツ中央については、新しい若者支援施設をつくらなければいけない、整備をしていかなければならないということで、それをレッツ中央の跡地に建築するのかどうかということがあって、最終的にはそうはならなかったが、その経過においても、資料についてはたくさんの方が見られるようにと、資料館の一部に記念室を設けて展示をし、私どもとしては今までどおりその功績を十分理解しながら進めてきたという認識である。(結果的にレッツ中央の跡地に再建築をしなかった理由と経緯と決定を示す記録は残っていない。関連記事⇒2009年(平成21年)5月19日、2010年(平成22年)4月1日)

(A委員) 今回、資料寄贈の撤回を求めている陳情ということで、陳情の提出者は、当然、1つのところにあるべきだということと、跡地についてももちろん求めていると思うが、私は、関係資料について、大変貴重な財産であるということ札幌市民に対して広く情報提供し、広報し、十分有効に活用されてきたかということ聞いた。

(生涯学習部長) 札幌市民に対する広報については、当時、レッツ中央時代は、レッツ中央が遠友夜学校のあった地ということで、そこに記念室を設けて展示してきたので、ここにこういうものがあるという一定の広報を行ってきた。それから、レッツ中央がそこに建て直すことなく別のところになったときには、札幌市資料館に設置した。資料館は、ある意味で場所的にもより多くの人々が訪れて資料を鑑賞してもらえるという判断もあって移転した。その経過についても場面、場面で広報してきたと考えている。

(A委員) 現在は、資料館から北大へ移管されているが、このことについては、私はそのように理解していない。本年の総務委員会の市内視察のときに、その保存状況、保管状況は決して誇れるようなものではなかったと聞いている。もし、この関係資料が市民にとって大変貴重な財産であることを市民自身が深く理解しているのであれば、このように北大に無償で譲渡されることがこんなに短期間で行われることはなかったのではないかと私は考える。／陳情提出者は、市が保有してきた関係資料が、市民への情報提供がないまま、いつの間にか北大へ寄贈されたと言っている。本年の第1回定例市議会予算特別委員会で、我が会派の議員は、北海道大学への関係資料の無償譲渡について、初めから移管ありきではなく、まず資料の価値をしっかりと調査すること、その上で市民や議会に対して十分で丁寧な説明を尽くすこと、また、この貴重な文化遺産は札幌市の財産であることから、本来は札幌市が主体となって守っていくべきものと主張した。それに対して、教育長は、改めて市民、議会へ十分な説明をする必要があると強く感じていると答弁し、さらには、今後、市民、議会へ丁寧な情報提供し、その上で判断いただく、と答えた。／委員会開催が3月13日、北大へ寄贈されたのが7月15日、その間、わずか4カ月のことである。移管に向けたこの間の対応は、私の手元にもあるが、果たして十分な調査をし、市民、議会に対して丁寧な情報提供をしたかについても、大変疑問に思う。／北海道大学への移管について、教育委員会はどうのように市民へ説明し、情報提供したのか。

(生涯学習部長) 本年3月の予算特別委員会での議論などを踏まえて、改めて市民

へ情報提供をする必要があると考え、まず、学術的な見地から資料の調査、分類を北海道大学の協力を得て行った。その結果、資料が473件、展示備品が102件の合計575件だった。5月には、この調査結果及びこれまでの跡地利用の経過並びに北大への資料寄贈について、議会の文教委員へ説明を行った。また、教育委員会のホームページで6月下旬からこの調査結果を公開し、同様に、関連資料の北大への寄贈及びその理由、さらに、7月6日で資料館における資料の展示を終了することを告知した。／教育委員会は、このように、ホームページを活用し、随時、市民等へ情報提供を行ったほか、議会においても関係議員へ説明した上で資料の北大移転までの手続を進めた。／新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会の提出による陳情第50号が本年2月25日の総務委員会で採択されたが、その翌日、本件とともに、北海道大学への資料寄贈の方向性について新聞に報道された。また、資料館での遠友夜学校記念室の展示終了についても、7月5日に新聞報道され、5日と6日の2日間で800人ぐらいの方が見学に訪れ、北大での展示再開を期待する声もあった。

（A委員）今の説明を聞いて、この陳情の提出は当然のことだったと考える。なぜなら、今回の、関係資料が北海道大学へ寄贈されるまでの経緯は、市民を置き去りにし、さらには、市民の代表である議会をも軽んじた行為の上に成り立ったものであり、市民への情報提供は、量的にも質的にも、そして、それに要した時間についても不十分なものであったと言わざるを得ない。／市民への情報提供について、考える会へ情報提供し、説明したとのことだが、何人に説明したのか。その人が市民の代表という捉え方でいいのか。そして、ホームページで公開が開始されたのが本年の6月23日、そのわずか3週間後に、もう北大のほうへ譲渡してしまっている。その上、全ての人にインターネットの環境が整っているわけではないと思うので、それに要した時間は非常に短いものという認識があるが、いかがか。

（生涯学習部長）考える会へはいろいろな場面で話をしているので、その経過の中で北大への寄贈についていろいろ説明し、理解を得てきたと認識している。また、札幌市民全体については、媒体としてホームページを活用しながら進めてきた。ホームページでの公開が3週間の短い期間で手続を進めたのはいかがかとの話があっ

たが、私どもとしては、一定の議論を踏まえ、手続を踏まえた上で行ってきたと認識している。

(A委員) 今、問われていることは、札幌市として、文化財を保護する行政のこれからの考え方、あり方というものが厳しく問われているのだと思う。今回のことは、土地の寄附条件を履行して崇高な精神を引き継いでいく責務があると言いながらも、その点に関して市民が十分に納得できるようなことになっていないこと、そして、取り扱いの判断や事務手続が余りにも性急過ぎたなど、所々に問題点があると考えられ、北海道大学へ移譲が将来に禍根を残すことになるのではと強く危惧している。事務手続にも問題があると考えるので、札幌市の文化財保護行政に関して、これからも厳しく注視していきたい。

(B委員) 本年の第1回定例会で採択された陳情第50号と、このたびの陳情第137号との整合性について、確認の意味も込めて質問したい。／このたびの陳情書を見ると、北大への資料の贈与が意思決定された経緯について、いまだに具体的説明がなく、市民に対して情報を遮断し、不明確、不透明になっていると主張している。記載にあるとおり、資料贈与の経緯を説明できていないのであれば、市民への情報提供は不十分であり、疑念を持たれてもしょうがないと思う。／遠友夜学校資料の北大への移転の意思決定までの過程はどうだったのか、具体的に説明してほしい。その際、移転にかかわる事務手続は規則にのっとって行われたのかどうか、この辺は大事な点である。

(生涯学習部長) まず、遠友夜学校の創設からことして120年が経過しており、それに伴って関連資料も相当な年数がたっているもので、私どもは、従来から資料の散逸や経年劣化が懸念されていたのであり、将来的な資料の展示や保管のあり方について、移転も含めて総合的に検討を進めていた。その結果、新渡戸稲造と遠友夜学校にゆかりが深く、資料の展示や閲覧はもとより、整理、保存、さらには学術的な調査研究などを行える体制が整っている北海道大学への移転が最善であると考え、平成25年11月、昨年11月に同大学へ相談したところ、最終的に資料の移転を双方が合意した。移転の手続は、ことし3月の予算特別委員会でも取り上げられたが、教

育委員会は、所管部局と協議の上、札幌市財産条例第8条第2項の規定に基づき判断し、所定の手続を経て資料移転の方針を決定した。その後、議会での議論なども踏まえ、文教委員を初め、関係議員の方々への説明や、ホームページによる市民への情報提供を行い、7月には北海道大学へ具体的に移転した。移転に係る手続についても規則等にのっとって行ったものと認識している。

(B委員) さきの陳情第50号の審査において、我が会派の議員から、遠友夜学校の資料の市民への展示の継続性や機会の確保などについて意見を述べた。そして、その後、7月に北大へ資料を移転した。移転された資料が市民への展示に供されていなければ資料が有効に活用されているとは言えず、市民の利益が損なわれていると判断せざるを得ないと思う。／先週、会派の仲間の議員と北大の記念館に行って展示の状況を見てきたが、私の率直な感想では、以前の展示よりもかなり規模が小さいとの印象を持った。／北大に移転した後、関連資料はどのように活用される予定なのか、また、市民への公開が十分に行われているのか。

(生涯学習部長) 北海道大学においても、議会議論、教育委員会からの要請などを真摯に受けとめて、資料の移転後、速やかな展示や資料閲覧のために尽力されている。差し当たって、資料移転直後の7月下旬から、北海道大学の構内の百年記念会館において、資料のミニ展示、暫定的な臨時の展示があった。それから、委員が鑑賞されたのは9月から始まっている「遠友夜学校略史－50年の変遷－」と題した展示だと思うが、これは、臨時ではなくて、常設の展示として位置づけられている。北大では市民等への展示の継続性には十分配慮して、まだ2カ月程度であるか、短期間でそこまで実現したと理解している。また、事前の申し込みで、大学図書館の閲覧室において、週に1回、資料の閲覧や複写も可能となっており、市民への資料公開については、これまでよりも充実した利活用サービスが行われている。

(B委員) 今の答弁で資料の移転後、展示が始まり、今までになかった閲覧とか複写といった市民へのサービスもしており、以前より充実したことについては一定の理解をした。しかし、記念館の展示状況への感想は、大きい記念館の中で1ケースぐらいしかスペースをもらっていない。その場所も、館の専門員に尋ねなければ確

認できない場所であり、率直に言って、展示の規模と方法は記念館で十分とは言えないし、以前に比べると物足りない思いをした。一方、近くにある博物館も見えたが、こちらにも新渡戸稲造先生の展示コーナーがあり、こちらのほうは展示の方法を含めて充実しているとの感想を持った。今後、資料の展示規模について、北大に働きかけてぜひとも拡充してもらいたい。それから、北大との覚書に基づく資料の利活用についてであるが、陳情を見ると、関連資料の北大寄贈によって市民の貴重な財産を失ってしまい、市民が関係資料に触れたり活用したりすることができなくなると感じているのではないか。そのために、陳情者は、北大から資料を取り戻す必要があると考え、今回、議会に陳情を提出されたと思う。資料寄贈に関して札幌市が北海道大学と取り交わした覚書を見ると、寄贈者札幌市が寄贈資料を市民に展示する等の特段の必要が生じた場合は、寄贈者及び受贈者北大はその方法について協議するとの1項目が設けられており、覚書のこの部分は議会議論が反映されたと理解している。質問だが、例えば遠友夜学校の周年行事のときなど、覚書にある特段の必要が生じた場合には北大と協議の上で資料の展示等が行われるものと解釈していいのか。

(生涯学習部長) 北大の展示の拡充の計画については、来年は常設展示とは別に企画展示を予定していること、関連資料の研究報告書発行に向けた学術調査も始まることなど、さまざまな形で新渡戸稲造、遠友夜学校に関する事業等を企画している。また、北大で所有しているものも含め、新渡戸稲造と遠友夜学校の資料全体の展示についてこれからどういう形で拡大しながら行っていくか、検討を始めている。北海道大学との覚書には、資料を市民に展示する等の特段の必要が生じた場合と、特に1項目を設けてある。これは、後世にわたって長く貴重な資料を保存していくためには、劣化防止などの観点からいわゆる原本、原資料はなかなか展示できないが、特段の必要が生じた場合には、協議をして例えばレプリカみたいなものであるとか、そういった資料の展示の機会を持つといった考え方に基づいて1項目を加えたのであって、このことは北海道大学とも理解を共有していると思う。資料の寄贈により、保管、展示はもとより、閲覧サービス、資料の学術調査あるい

は研究が進むことなどによって、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の資料の利活用が充実するというので、今後、より多くの市民の方々にその功績が広く周知され、認知されていくものというふうに期待している。

(B委員) 北大の博物館にある新渡戸稲造、遠友夜学校の資料は、従前は札幌市が保管、保存していたものを、展示のために北大に貸しているとは私は認識している。今後、札幌市の事業として展示したい、また、一定期間、記念館の中に展示したいという要望を北大にした場合には、レプリカというような表現を使っていたが、実物を含めてそういうことが可能だというふうにこの覚書からとれるのか確認したい。

(教育長) 今、部長がレプリカと言ったのは、札幌市が何か施設をつくって、そこで新渡戸稲造の書いたものを展示するとか、恒常的に展示するような場合にはレプリカを提供するのが普通であろう、と。ただ将来、例えば、札幌市が博物館か何かをつくって、そこで新渡戸稲造や遠友夜学校についての企画展をやるなどの場合に札幌市が持っていた本物の資料を展示することは、そういうことだと思う。そのようなことで、いろいろな形で市民に対して本物を示すか、あるいは、恒常的にレプリカを飾るか、さまざまな場合においてどういう形でやるのがいいのか、北海道大学と札幌市が協議をするという1項を特に設けたものである。

(B委員) 最初の段階で、遠友夜学校の資料について、経年劣化だとか、これらの保存について非常に心配をしている札幌市としては、今後の保管場所として北大がベストだろうということで協議を進めてきた事実がある。陳情者には、北大に行ってしまったら保管されたままで札幌市民がなかなか触れることができなくなる、活用することができなくなるという心配で陳情されたと思う。しかし、今の話で、札幌市として、市民が見たい、展示をしたいということがあって協議すれば資料を出してくれる、さらに、保存状態もよくなって、加えて、閲覧とか複写もできるので利便性も上がるという答弁だった。北大と言っても札幌市内であり、札幌市民にとってはいつでも行ける場所なので、今の答弁で私どもは移管された後も少し安心していただけるとの気持ちを抱いた。そこで、さきに採択された陳情第50号を踏まえ、本陳情の要望どう捉まえているかを伺いたい。本陳情の趣旨は、北大への資料寄贈

の撤回を求めるものと認識しているが、一方で、資料と跡地を含めた全てのものは一体としてあるべきと、1962年（昭和37年）の同意条件の内容の遵守を強調している。加えて、陳情者の陳情要旨を見ると、札幌市は約束を守り、遠友夜学校関連資料無償譲渡の白紙撤回と、記念し顕彰する施設を求める陳情となっている。懸念されるのは、さきの総務委員会及び2014年（平成26年）第1回定例市議会で採択した新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会から提出された陳情第50号「札幌遠友夜学校跡地の一隅を、記念館（仮称）建設ほかの場として使用を求める陳情」との整合性である。陳情第50号では、レッツ中央跡地を公園として整備する際、その一隅に記念館を建設し、新渡戸稲造夫婦の功績を顕彰するとともに、遠友夜学校の歴史をたどる場として土地の貸与を求めるものであった。この陳情第50号と本日審査をしている陳情は、直接的には求める内容は異なるとしても、その目的は相入れないものを感じてならない。本陳情の取り扱いを判断する上で、全会一致で採決したさきの陳情第50号にもし何らかの影響が出る状況が生ずれば、議会として、問題があるのではないかと懸念する。そこで、採択した陳情第50号の趣旨を踏まえ、本陳情の要望事項の内容をどのように捉えているのか、伺いたい。また、陳情第50号の採択後の進捗状況はどうなっているのかあわせて伺いたい。

（生涯学習部長）まず、第50号の内容を踏まえて今回の陳情の要望をどのように捉えているのかということであるが、このたびの陳情の直接の要望は、遠友夜学校関連資料等の北海道大学への寄贈の白紙撤回を求めるものであるが、陳情全体からは、1962年（昭和37年）の土地寄附条件に基づいて、資料と施設を含めて全てのものは札幌市が一体管理すべきである、そういった主張であるのかと思われる。教育委員会としては、文教委員会における陳情の取り扱いの判断を尊重していくものではあるが、さきの陳情第50号に影響が出ることは避けたいと考えている。それから、陳情第50号の採択後の進捗状況は、現在、レッツ中央の跡地では、記念館建設予定地を除き、公園の造成がもう始まっており、年内には竣工して来年春からの供用開始と聞いている。新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会とは、陳情の採択後、継続的に協議を行っており、今年度中には記念館の建設計画や完成後の事業などについて

て覚書を取り交わし、各種計画の推進を支援していきたいと考えている。／現在、考える会では、記念館の建設に向けて、広く市民や企業、団体へ建設基金を精力的に募っていると聞いており、本市としても順調に進むことを期待している。

（B委員）そこで、本日審査している陳情の取り扱いについては、どのような結果が出ようとも、全会一致で採択した意義を踏まえ、決して陳情第50号に影響することがないことを求めたいと考えているが、実務を担当の教育委員会の見解を聞きたい。

（生涯学習部長）私どもとしては、レッツ中央の跡地を含めた利活用にもつながりかねず、今回の陳情の取り扱いいかんによっては、さきに採択された陳情第50号との整合性を慎重に整理する必要が出てくるのではないかと認識している。

（B委員）教育委員会から、資料の利活用の充実や今後の展示拡大を北大に働きかけるとの答弁があったが、これはぜひ実現させるよう要望する。この陳情と陳情第50号との整合性を慎重に整理することを求める。

（C委員）この問題の淵源を私なりにいろいろ聞いたり、調べたりしたが、やはり、本市の持つ歴史的な価値のある文化財の管理のあり方、継承の仕方、生かし方というのが一番大事なところだったのだろうと思う。1962年（昭和37年）に札幌市が財団法人遠友夜学校から譲り受けたわけだが、新渡戸稲造先生の教育的な精神、あるいはまた、遠友夜学校を運営していた人たちの心、そうしたものを札幌市教育委員会が本当にしっかり受けとめて、その価値もしっかり整理した上で、どのように位置づけ、後世に残し、そして生かしていくかということについて、最初の部分でどうだったのだろうかとどうしても疑問符がつく。今まで熱心に一生懸命活動を進めてこられた新渡戸稲造先生、あるいはまた遠友夜学校の方たちの思いを本当に酌んで取り組んできたのか、と。今までのあり方については、もっときちんとした考え方を整理しておくべきだと思う。今ごろになって、どのような価値があるのかと聞かれて、では調べますと言って500何点ありましたとか、こんなことは、見ている情けない限りだと思う。だから、指摘もされ、本当に何をやっているのだとお叱りもあるのだと思う。／まさに遠友夜学校の資料の管理、保全の状況はどのよ

うなものであったのか、適切に管理していたのかどうか、してきたのかしてこなかったのか、ということをまず率直にお伺いしたい。さらに、遠友夜学校の資料の価値について、さまざまな分類は確かにされたけれども、人物あるいは学術的な価値は、どんな認識をされ、考えを持っているのか伺いたい。

（生涯学習部長）遠友夜学校の記念室については、レッツ中央ができた1964年（昭和39年）に設置して、1994年（平成6年）の遠友夜学校の創設100周年のときに大幅な改装を行って展示内容もリニューアルした。そういった意味で、その意義や歴史を後世に伝えるということで資料の管理、保全に努めてきた。ただ、資料を展示しているコーナーに専門の職員を配置することはしていない。また、専門的な見地からすると、通常はレプリカを展示したりするのが適当と聞くが、いわゆる原本そのものを展示するなどしていた。そういう意味では維持管理の面で課題があったと認識している。しかし、これらの資料の歴史や意義を踏まえて展示事業を行ってきたので、これまで、資料の汚損あるいは紛失といった例はなかったと考えている。

（⇒2010年（平成22年）6月9日。「青少年センターが資料を廃棄するとのことから、緊急避難的に預かった」とある）／歴史的あるいは文化的な価値、財産、資産上の価値等であるが、関連資料については、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の歴史や功績を後世に広めて記念、顕彰していくことを第1に考えて展示をしてきた。資料群については、主に文書資料、物品資料、生徒の文集、刊行物に大きく分類されるが、北海道大学による資料の本格的な学術調査により当時の生活の様子あるいは学校の様子がさらに明らかになり、歴史的あるいは文化的価値も高まってくるのではないと思う。また、財産上あるいは資産上の価値については、教育委員会としては、そもそも関連資料の売却あるいは処分等を前提としたものではないので、その財産的価値あるいは市場価値などの調査は行っていない。ちなみに、北海道大学にこういった類の資料の財産的価値について照会しているが、売却前提で鑑定業者に鑑定をお願いすればいわゆる価格はつくとは思われるが、その額の妥当性についての評価はなかなか難しい。それから、現に北海道大学が所有しているほかの歴史的資料についても、北海道大学としては同様に財産的価値の客観的な評価は難しいと

の見解を得ている。

(C委員) 価値については、お金の問題ではなくて、大事なことは、新渡戸稲造先生の教育理念なり考え方なり、あるいはまた、生徒あるいは先生たちがその当時やっていた思い、その精神であって、それをどのように継承し、受け継いでいくかである。そのためにも、常日ごろから新渡戸稲造先生を顕彰するためのセミナーとか講座だとか、市民レベルで研究するとか、そういうことに対して札幌市が積極的にかかわって市民の意識を高めていく、そしてまた、貨幣になる人(⇒1984年(昭和59年)11月1日)なんてめったにいないから、こういう偉人が札幌にも住んでいて、国際人として札幌市にこういう足跡を残したのだなということのを再発見し、後世に伝えていくことが札幌市として大事なことだと思っている。その意味で、文化財として登録すべき価値のある資料について、いわゆる公文書とまた違って、かなりレベルの高い部分になってくるが、札幌市として、今後、文化財の登録ということについてどのように考えているのか。／それから、陳情に無償貸与についてということだが、今回、北大へは無償貸与ではなく寄贈となっているので、いま一度、無償譲渡にした理由について明らかにしてほしい。

(生涯学習部長) まず、この資料の文化財の登録の考え方については、遠友夜学校の関連資料は市民の貴重な財産であり、後世にわたって長く残すべく永続的な保存と有効活用を図っていくことが市民に対する重要な責務というふうに認識している。これまで、関連資料は新渡戸稲造や遠友夜学校の歴史や功績を後世に広める、記念、顕彰することを主眼に置いて展示してきたので、いわゆる学術的評価というものは行っておらず、文化財の登録等の具体的検討はしていない。このたび、関連資料を北海道大学へ寄贈したことで資料の学術的調査研究がさらに進むものと期待しているところで、今後、資料群が歴史的または学術的に高い評価を得るなど、そういった状況によって、文化財登録の取り扱いについても北大と協議していきたい。／北大への寄贈について、貸与ではなくて譲与とした理由については、遠友夜学校は、新渡戸稲造がメリー夫人の実家からの遺産を原資に創設された私塾であるが、その精神に共感した札幌農学校の多くの学生たちが教師として担ってきたということで、

北大はゆかりが大変深く、新渡戸稲造に係る資料は北海道大学でも別な形で既に保管、管理されているところである。そこで、資料について2013年（平成25年）11月に北海道大学へ相談したところ、北海道大学としても、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の足跡は札幌農学校の建学の精神に沿ったものでもあるということで、このたびの札幌市からの話は重く受けとめ、責任を持って資料を一元的に管理し、展示、閲覧を含めて、後世にわたって顕彰していきたいといった意向が示された。教育委員会としても、関連資料の後世にわたる適切な保存と、市民への展示、閲覧の機会が保障されて、さらに学術調査や研究が進むことなど、これまでよりも資料の有効活用が図られるものと判断したことから、北海道大学の意向を尊重し、資料の保存、展示等の責任を一元化するという意味からも寄贈によることが最もふさわしいのではないかと判断した。／最近、北海道大学の大学文書館から聞いた話によると、札幌市在住の秋田県出身者のための学生寮、秋田北盟寮の同窓会の方が、本年4月に、その同窓会で所有していた資料を秋田県の県立博物館に寄贈している。ただ、その際、新渡戸稲造の直筆の額だけは北海道大学へ寄贈したと聞いている。その理由としては、札幌市が遠友夜学校資料を北海道大学へ寄贈したのと同じような理由で、新渡戸稲造は北海道大学とゆかりが深く、歴史的資料として展示、活用するのにふさわしいところだと判断したためと伺っている。このように、新渡戸稲造及び遠友夜学校に関する資料が北海道大学に集まってきて、さまざまな形で利活用され、学術的な調査や体系的な研究が進むことで、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の意義や功績もさらに深まるのではないかと期待している。

（C委員）札幌市には、これだけではなくて、こうした学術的、あるいはまた後世に残すべき大事なもの、文化財と称されるさまざまな文物が恐らく相当数あるというふうにいるので、今回の件を通して、学術的な側面からも価値というものをもう一度洗い直すべきだと思う。これは、恐らく教育委員会がしなければならないだろうと思うので、ぜひとも、教育長を中心に、文化財の維持管理、また整理といったことにしっかりと取り組み、子どもたちのためにも将来にわたってしっかり保全してほしい。

(D委員) 陳情者が言っているように、遠友夜学校の資料については、本来的には札幌市が保有すべきものだと考える。そして、そのような道筋もぜひつけていただきたい。しかし、先ほど来の議論の中でも、答弁の中でも、また、いみじくも陳情者自身も冒頭で言っていたが、保存ということで現瞬間を考えると、現時点での保存は北大が妥当なのかもしれない。南4東4の施設の取り壊しにより資料が移転し、資料館へ、北大へという流れになっているが、その中でも、市民はだれでも見に行くことができる、文献に親しむことができる状況をつくっていくというのは、次善の策としてでも非常に大事なことだ。／委員会でのやりとり、理事者の答弁を聞いていても、資料は北大で十分に利活用が進んでいるのだ、そういう形でやっていきたいのだという話があったが、私は、この間の答弁を聞いて、札幌市としても、積極的に北大とかかわり、協力体制をつくる必要があると思う。先ほど来、聞いていると、北大ではこうやるようですとか、北大としては将来的にはこういう方向性を考えているようですという答弁が続いているが、本市として積極的に関与すべきではないのか、市民にとっては本市の貴重な財産である、後世にわたって引き継いでいくべきものであるという話が再三あったわけだから、遠友夜学校の関連資料について、将来的に北海道大学とどのような協力・連携体制をとっていくのか、やはり、本市がイニシアチブをとってやっていくべきだというふうに思うのだが、その点をどう考えているか。

(生涯学習部長) 北海道大学では、このたびの資料の寄贈を受けて、北海道大学としても大変重く受けとめてもらい、まずは展示の継続性に配慮し、構内の百年記念会館で7月下旬からミニ展示をしている。さらに、9月からは今回寄贈した資料を中心に常設展示も始まった。このほか、事前の申し込みにより、資料の閲覧あるいは複製といったことも可能になっている。また、来年度からは資料の本格的な学術研究・調査も予定され、さらには、資料の積極的な利活用についても検討を進めると聞いている。／札幌市としても、積極的に北海道大学と協議あるいは連携していく必要があると認識している。今後どのようなことが可能なのか、共同企画で行事を考えるなど、方策としてはいろいろあると思うので、北海道大学と十分に協

議しながら進めていきたい。

(D委員) 今、方策としてはいろいろあるという答弁があったが、まさにそこが肝心だと思う。札幌市が無償譲渡してしまった中で、そこがはっきりしないから、一体管理ができるように市民の財産として取り戻せということが今回の陳情の趣旨になってきたと思う。地理的な条件から言うと、北大というのはまさに札幌の中にあって、車の往来ができないといった多少の問題はあるが、利便性も高いから、北大という敷地の中でなお市民が利用できるという思いはある。しかし、陳情を出した方は、やはり、発祥の地であり、記念碑も建っている南4東4という地域を本当に大切にしたい、郷土の誇り、歴史がそこにあるのだという強くて深い思いがあると思う。だから、何ができるのか、方策としてはいろいろあると思うということではなくて、そこはしっかりと受けとめてきちんと対応していかなければならない。／新渡戸稲造先生の関連書類というのは、先ほど秋田県の学生寮の話もあったが、新たに発掘される、これからまたどんどん出てくる。散逸、消失という話もあったが、今回、こういう形でまた改めて札幌市議会に取り上げられ、マスコミ報道などもされる中で、逆に資料が集まってくることもあると思う。遠友夜学校関係者というのは、在生学生も含めると5,000人を超える規模になっているわけだから、今後も新渡戸稲造先生や遠友夜学校の新たな資料が出てくる可能性があると思う。／そこで、札幌市としてはどういう対応をしていくのか、このことも北大に任せてしまう、丸投げしてしまうということを考えているのか、その点の考えを聞きたい。

(生涯学習部長) 新たな資料の話であるが、ただいまの委員の質問あるいは陳情者の話にもあったとおり、遠友夜学校の関係者というのは、いろいろな事情で卒業できなかった方も含めると5,000人以上いると言われており、今後も学校あるいは新渡戸稲造に関する資料がさまざまな形で新たに発掘されることも予想される。基本的には、資料を保有している方、所有している方の判断となるが、その利活用についてそういった方々から相談があれば、情報提供、取り扱いも含めて十分にサポートを行っていきたいと考えている。

(D委員) ぜひ、収集、保存ということにも積極的に取り組んでほしい。文化財あ

るいは博物館などといった構想についても、前向きに考えてほしい。しかし、その話に行く前に、南4東4の地域に遠友夜学校があったのだ、地域の歴史を後世に伝えたいのだと、陳情者のそういう気持ちは非常によくわかる。そのことによって、札幌青空会が1948年（昭和23年）に創設され、今ではボランティアとか留学生交流などに積極的に取り組んでおられる山崎さんのお話を佐藤さんが代表してされていたけれども、本当にこうした青少年育成のための大事なものがあると思う。／今、レッツ中央の跡地には、新渡戸稲造先生の名前を冠する記念公園の整備工事が開始されており、新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会がその一角に記念館を建設することにもなっていて、本市としては、遠友夜学校の精神を後の若者支援事業という形で継続して引き継ぐということで、全国的に言えば、例えば公立夜間中学校とか、そういうものになっていくわけである。本当に勉強したくても学ぶことができなかった、義務教育を受けることができなかった、そういう方たちが、今、札幌の遠友夜学校において、新渡戸稲造先生の中で、勉強していくという喜びを享受しながら生活を送っている。しかし、今、札幌市では、遠友夜学校についての資料は北大での利活用を大いに期待するということに終始している。やはり、何もしないということではいけないと思うし、今、この委員会の中でも、新渡戸稲造先生の功績についてさまざまに語られてきたが、この偉業、功績、遠友夜学校の歴史、あるいは発祥がどうだったのか、そこの地でどういう継承がされてきたのか、こういうことについて一人でも多くの市民に伝えていかなければならないと思う。現瞬間は北大との連携が欠かせないと思うので、その点についてはどのように考えているのか見解を聞きたい。

（生涯学習部長）議論の中で、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の歴史や功績について、市民の中には知らない方もまだまだ多いという状況があることについては、そういうこともあろうかというふうに考えている。私どもは、今後ともこうしたことを多くの市民に周知していくために、ホームページあるいは広報誌などを通じて積極的に情報を発信していきたいと考えていて、今、具体的な内容を検討している。／また、遠友夜学校は、慈愛の心を持って進んで社会奉仕を行った新渡戸稲造の崇

高な精神に共鳴して教師を買って出た札幌農学校の学生、あるいは、温かな援助を惜しまなかった当時の市民の方々、こうした人々に支えられて青少年の希望の明かりをともし続けた、そういった歴史なのかなと思っている。札幌におけるボランティアの原点であるというような話も出ているところであり、私どももそういうふうを考えている。今後、北海道大学と連携しながら、そういった面や、さらにどうしたらいいかということを含めて、その歴史あるいは功績といったものを市民へ伝えていくことが大変重要であると考えているところであり、そういう方向で進めていきたい。

(D委員) 私どもは、博物館設置の大切さを主張してきたところだが、これだけの歴史的な遺産を持っている札幌として、博物館がないことが今回の問題の一番最初のところにあるのだと思う。北大に置かれるほうが有効ではないのかというのは、今の段階での判断であるがこれは、最終的に、札幌市が文化財のあり方というのをどういうふうにするのか、学術的な価値をどのように評価していくのか、評価する人間をどのように配置していくのか、こういうことが非常に大事だ。資料館、博物館を早急に建てていく、つくっていくことを現実的に着手してほしいと思う。貴重な財産がある。後世に引き継ぐべきものがある、有効活用していくものがある。そう言いながら、今回は北大のほうが有効活用できるからという話である。生涯学習も持っている教育委員会であるから、教育委員会がしっかりとイニシアチブをとって博物館構想を進めていかなければならないと思うので、今後、教育委員会はこれをどう展望していくのか、この点の見解を伺いたい。

(教育長) 今、教育委員会が主体的にきちんと検討しなさいという話であったが、生涯学習を進める中で、非常に大きな責務を持っていると思う。もう1つ、文化行政、これは観光文化局の文化部が所管しており、博物館構想自体はそこでいろいろな形で検討しているところである。縦割りというお叱りを受けることなく、観光文化局と教育委員会が連携しながら、札幌市の財産、市民の財産を後世にどう伝えていくのか、学術研究の仕組みをどうするかということについても研究していきたい。

(E委員) ここ数年、市民の方々の本当に力強いこうした活動の中で、およそ150

年前にお生まれになった新渡戸稲造さんのことがまたクローズアップされ、私たちもまたさらにわかることができるようになることは本当に大事だなと思う。また、皆さんの口から遠友夜学校の取り組みのすばらしさが話されているが、これまでも、長い期間にわたり、たくさんの関係者の方の努力だとか、その実践によって、遠友夜学校には本当にすばらしい学びがあったのだということがよくわかるようになった。そして、そうした活動がまさにこの札幌の地で行われていたこと、その史実、その偉業というのを、これからの子どもたち、そして市民の皆さんにわかりやすく、そしてもっともっと身近に感じていただく、そうした機会が提供されることが本当に必要だと思う。札幌市は、現在の学校教育の中で、新渡戸稲造さんの歴史についてどういうふうに取り上げられているのか、伺いたい。生涯学習の視点からこれまでどんなことに取り組みられてきているのか、今後、ぜひこんなことをしたいということがあれば、伺いたい。

（生涯学習部長）教育委員会において学校教育の場面では、小学校4年生において札幌らしい教育ということを推進している中で指導するために、遠友夜学校を開設した新渡戸稲造の営みから、北海道の発展に尽くした先人たちの苦労を考える授業の展開例を各小学校に示して実践しているところである。6年生でも、社会科の教科書に新渡戸稲造と遠友夜学校の歴史を紹介する内容が記載されていて学習している。／生涯学習の視点からは、特にことしは学校創立120周年ということもあり、さまざまな場面、さまざまな団体によって、新渡戸稲造の功績とともに遠友夜学校をテーマにした多くの記念事業が行われている。北海道大学では、昨年来、国際的に活躍できる人材の育成を目指す新渡戸カレッジという名前を冠した事業もスタートしたと聞いている。節目にふさわしい動きとして大変喜ばしいなと感じている。また、新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会の主催で札幌遠友夜学校創立120周年記念作文・論文コンクールを実施することになっているが、これに対しても一定の支援を行った。今後とも、子どもたちを含めた市民に対してこういったものを広く伝えていき、新渡戸稲造、遠友夜学校にちなんだ事業や講演会の企画などについても、生涯学習の視点から北海道大学と協力しながら積極的に支援していき、私ど

もの自前の企画としても十分検討していきたい。

(D委員) 市としても、ホームページという話があったが、私は、広く皆さんに知っていただくためにも、広報誌に積極的に載せるなど、さまざまな媒体を使った情報発信の必要があると思うが、その点についてはいかがか。

(生涯学習部長) 今後とも、北海道大学と連携しながら、新渡戸稲造あるいは遠友夜学校の歴史、功績について、例えば、資料はこういったところにこういうふうに保管されて展示されている等も含めて、多くの市民に周知していくことが大変重要だと考えている。情報発信をこれからも積極的に行いたいと考えており、今後の具体的な内容について検討を始めたところである。

(以下、省略)

○この後、堂々巡りの質疑は終了し、取り扱いは「継続審査」と決定した。しかし、札幌市議会文教委員会での「陳情第137号」の審査は、再び正式な議題として取り上げられ審査されることはなかった。

◎2014年(平成26年)10月24日、加藤武子(元翻訳家)・寺田正義(元大学教授)は単行本『マイグランバ新渡戸稲造』の中で「遠友夜学校」にふれた。

○朝日出版社発行のこの書の副題に「ただ一人の生き証人の孫が語る」とあるように、著者の1人、加藤武子は、新渡戸稲造・萬里子夫妻の養子となった新渡戸孝夫・琴子との間に生まれた、いわば稲造の孫娘にあたる。2人きょうだいの兄・誠はすでに死亡している。出版時、加藤は94歳であった。

○B5判全206ページのこの書の扉裏には「逆境は順境なり」の新渡戸稲造の言葉が添えられている。対談等の記述、加藤が語った「家族から見た新渡戸稲造」の部分は口述筆記によっている。1年ほど前に偶然に加藤の存在を知った寺田(元高校教諭、元大学教授、75歳?)は、加藤に提案し、同意を得た。早速、貴重な生き証人が健在のうちにと、寺田は、聞き取りを行い、多くの文献で照合・確認もし、新渡戸夫妻の生涯を概観する形でまとめたものである。

○p.94~98に記された「札幌遠友夜学校」の説明は、要領よく簡潔にまとめられて

いる。○稲造が残した日記・手帳は、祖母・萬里子が目を通し、検討し熟慮を重ねたうえ、母・琴子には「公開しないこと」と言い渡し、中型のトランクふうの箱に入れられて引き継がれた。武子17歳の時だった。それは銀行地下の貸金庫に納められた。祖母の没後3年目に嫁ぎ、38歳になったある日、武子の元に母からその箱が届けられた。それからまた約10年を経た10月のある早暁、突然、武子は祖父の幻を見た。そして、促されたかのように祖父の日記を見る決心をした。

○加藤武子はすでに、読んだ祖父の日記の内容についていくつかを公表していたのであるが、この書に書かれた、目新しいと思われる事柄については、本書の関係する部分に差し込む形で引用した。

◎2014年（平成26年）10月30日、札幌市議会平成26年第2部決算特別委員会が開催され、遠友夜学校と札幌市の文化行政について論議がなされた（記録・第8号）。

○他と重複する内容が多いので省略する。一部の事柄については他で引用した。（⇒1967年（昭和42年）8月30日）

○2013年（平成25年）11月上旬の記述で、受け入れる側が寄贈の話に一度は難色を示したと書いた。これを裏づける質疑がこの日行われている。市議会の委員と教育委員会の部長との応答の要点を次に示す。「無償譲渡という市側の考えを打診したところ、北大側が一度断ってきた。これは報道もされているが」「この資料については課題としていろいろ考えていたので、私どもから、北大にこの資料の取り扱いについて相談して、段々の経過で北大も受け入れについて前向きになって、最終的には11月に譲渡でお願いし、双方が合意した」「北大が一度断ってきたということは事実誤認ということか」「正式に断ったという当時のことはよくわからないが、いずれにしても、こういった資料を受け入れることになると、人的、物的なことも含めていろいろな環境整備も必要だと思われるので、当時はそういった環境が整っていなかったのではないかと考える。これは推測だが」「しんしゃくすると、積極的か消極的かわからないが、一度、延期というか、断られたのであろうと思う。事実誤認となると、大変なことになるので、一応、私としてはそういうふうにしんしゃくし

た、と」。

◎2014年（平成26年）11月1日、平成遠友夜学校（校長・藤田正一）は「平成遠友夜学校創設10周年」を迎え、記念式典を挙行し、同校編刊の記念誌を発行した。

○北海道大学同窓会館「遠友学舎」を会場に2014年（平成26年）11月1日挙行の記念式典では、4つの記念講演が行われた。演者・演題は次のとおりである。①藤田校長「遠友魂の系譜」、②NPO法人フリースクール札幌自由が丘学園理事長・亀貝一義「『遠友夜学校』から学ぶことなど一学校に行けない子どもたちをサポートするフリースクールの実践一」、③JICA職員（平成遠友夜学校初代教頭）尾崎由博「人生の自己ベストを更新する一『経年優化』時代の平成遠友学校一」、④同校教頭・小山田申明「平成の遠友夜学校」。（同校の運営にあたる世話人、北海道大学学生ボランティアは全員、「教頭」と称している）

○2014年（平成26年）11月1日、平成遠友夜学校は『燈火一平成遠友夜学校創設10周年記念誌一』（同校編集・発行、A4判、全58ページ）を発行した。（同校に保存誌がないため、掲載記事内容は不詳である）

○2014年（平成26年）12月1日発行の季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティアの会発行）No.35のp.8～11には、記念式典の様子などを伝える記事を載せている。①p.8には同校藤田正一校長の記事「10周年を迎える平成遠友夜学校」、②p.9には同校教頭の江川美奈子の記事「平成遠友夜学校10周年記念式典」、③p.10には北海道大学総長・山口佳三の記事「遠友夜学校の教育精神を未来へ」、④p.11には同校教頭・小山田申明の記事「町はずれの学舎で脈打つ熱い血潮」が掲載された。（③と④は平成遠友夜学校創設10周年記念誌『燈火』から転載された。（同季刊誌はインターネット上で読める）

◎2014年（平成26年）11月1日と2015年（平成27年）1月1日の2回、杉岡昭子は、雑誌『しにあらいふ』で「新渡戸先生の学校です！」を書いた。

○これは同誌17巻192号と18巻194号に載った連載記事「山陰から（28・29）」の

2回分の記事である。

○「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」と「遠友再興塾」のそれぞれが別に札幌市議会に提出した陳情書について、市議会の審査の議事録を丹念により精査した結果を述べている。(市議会の議事録⇒2014年(平成26年)2月25日および2014年(平成26年)9月24日)

○この論稿では、遺された旧札幌遠友夜学校の史料等の保存・展示のあり方をテーマに、かなりの分量に及ぶ濃厚な考究を展開した。杉岡の主張は次のように要約できる。

「貴重な史料(文化的遺産)を展示する記念室は夜学校跡地と一体であることは当然であり、史料が記念室という建物と一体であることはそれ以上に当然である。当たり前のこととして誰もが考える」「寄付は条件付きであった。永遠に札幌市が約束を守る義務がある」「大都市の札幌が保存・管理できないはずがない」

○「山陰から(28)」は、2022年(令和4年)8月発行の山崎健著作『遠友夜学校の学びで築いた奉仕の人生』p.193~203に転載された。

◎2015年(平成27年)1月、「新渡戸稲造博士顕彰碑」は、名称を「新渡戸稲造萬里子両先生顕彰碑」に改め、公園内の南東端の入口付近に北向きで移設された。

○札幌市による「新渡戸稲造記念公園」の整備に伴うもので、雑草の更地に置かれたままになっていたブロンズ製青年立像(1979年(昭和54年)建立)と石杭状銘板「札幌遠友夜学校跡地」(1964年(昭和39年)建立)が移設された。

○石杭状銘板のほうは解体され、新しく作られた説明板の一部へ銘板だけがはめ込む形で残された。

○青年立像の名称変更は、この像を清掃し見守ってきた札幌彫刻美術館友の会が「ブロンズ像に鑄込されている名称どおりに改めてほしい」と札幌市教育委員会に要請し、実現したものとされる。

○整備に伴い、説明板(公園と立像についての説明)と2つの格言板(メモリアルウォール)が追加・設置された。格言は「願わくは、われ太平洋の橋とならん(新

渡戸稲造)」(東側入口)と「誰に対しても悪意を抱かず、すべての人に慈愛の心を持って(Abraham Lincoln)」(西側入口)である。

◎2015年(平成27年)2月18日開催の札幌市議会平成27年第1回定例会の「札幌市議会会議録(第4号)」には、次のような質疑応答の記録が残っている。

○文化行政についての質疑応答の中においてであった。質疑応答の経過は長文に及ぶので、以下に簡略化して収録する。(発言者の個人名は省略し、発言内容の文体は敬体を常体に統一した)

(議員)新渡戸稲造博士が、勉強したくても、日中、学校に行けないような勤労青少年などに門戸を開いた遠友夜学校に関連する資料が、昨年7月に北海道大学に無償譲渡された。教育委員会が所管していた新渡戸博士直筆の揮毫を含む遠友夜学校関連資料は、1962年(昭和37年)に、市側の要請により、遠友夜学校管理者側から、南4条東4丁目の土地も一緒に寄贈されたものである。その後、札幌市勤労青少年ホーム、後のレッツ中央施設内に遠友夜学校記念室があったが、レッツ中央が解体されると、記念室は市資料館へ一時的に移設され、その後、レッツ中央は新築されることなく、札幌市資料館が芸術祭で使用開始される直前に北大に貸与していた資料も全て北大に譲与した。／こうして、遠友夜学校という私たちの市民固有の財産は、市の手によって市民から引き剥がされてしまった。その間、私は教育委員会と何度も折衝したが、教育長は、本件資料について、詳細に調査し、その内容を丁寧に議会、市民に対して説明し、理解を得た上で結論を出す時まで答弁したにもかかわらず、その後は、限られた情報しか市民やマスコミに提供せず、しかも、短時間かつ形式的に議会関係者に説明を済ませ、証拠づけと結論を急いだ。／経緯は、昨年の文教委員会で遠友夜学校に関する陳情第137号審査でも厳しく指摘され、その陳情も継続審査となった。／私は、昨年の決算委員会でもこの問題を取り上げ、文化部に相談されるべき貴重な文化財にもかかわらず、教育委員会は、貴重な文化財と認識しながら、担当部局に適切な相談もせず財産処分した教育委員会担当者らの不誠実さが他部局答弁によって露呈された。／北大出身の教育長は、一体、誰とど

のような相談をして遠友夜学校の資料を北大に無償譲渡することにしたのか。／遠友夜学校関連資料は貴重な市民の財産であるという認識を、教育長は果たして持っていたのか、持っていたとするのであれば、いつの時点から持っていたのか。／また、教育長は、丁寧に説明し、理解を得ると議会答弁していたにもかかわらず、その後もなぜ譲渡しようと手を急いでいたのか。／そして、本市が資料を守り、市民の手元に置くことがこれ以上はできないと判断したのはどのような根拠からか。／また、そもそも、なぜ、市ではそれらを守れなくなってしまったと考えるか、それぞれ、教育長に、順次、伺いたい。

（教育長）一連の経過に沿って答えたい。／まず、遠友夜学校は、慈愛の心を持って進んで社会奉仕を行った新渡戸稲造の崇高な精神に共鳴し、教師を買って出た札幌農学校の学生や、温かな援助を惜しまなかった当時の市民らにも支えられ、青少年に希望の明かりをともし続けた歴史がある。そうした歴史的経過を踏まえ、当該資料は、新渡戸稲造と遠友夜学校の歴史や功績を後世に広め、記念、顕彰することを目的に展示してきたものであるが、学校創設から120年が経過する中で、資料の経年劣化等が懸念されていた。／教育委員会としては、これらの資料は市民にとって貴重なものであり、それゆえ、後世にわたって永続的な保存と有効活用を図ることが市民に対する重要な責務と認識している。／一方で、新渡戸稲造と遠友夜学校の歴史は、北海道大学にとっても深いゆかりを有し、関連する歴史的な資料の収集、整理、保存、研究調査とともに、閲覧や展示などを通じて広く一般市民に公開してきている。／こうしたことを踏まえ、北海道大学の副学長である大学文書館の館長へ当該資料の移転を打診したところ、同大学からは、新渡戸稲造と遠友夜学校の足跡は同大学の建学の精神そのものであり、これを重く受けとめたいとの意向が示されたことから、当該資料を寄贈する方向で基本的な合意に至った。／このことにより、当該資料は、札幌の地で後世にわたって適切に管理、保存されることはもとより、学術調査、研究が進み、さらに、北海道大学と札幌市が覚書を取り交わすに当たっては、市民への展示や閲覧の機会が保障されることや、札幌市が既存資料を市民に展示する等の特段の必要が生じた場合は、札幌市と同大学はその方法等につい

て協議をするとの確約も得たことにより、今まで以上に資料の有効活用も図られると認識している。／本件合意に前後して、私は、教育委員会、教育委員長、教育委員並びに市長、副市長へ報告し、また、北海道大学の協力のもと、昨年3月から5月にかけては当該資料の詳細な調査、分類を行った。／これらの経過等について、市議会文教委員等への説明を経て、教育委員会のホームページで調査結果などを公開し、さらに、関係団体、議員等への経過説明や教育委員会会議に報告を行うなど、必要な手続を行った後、昨年7月、具体的に資料を北海道大学へ移転した。北海道大学では、移転後、9月から学内の百年記念会館で、寄贈した資料の展示を開始するとともに、閲覧サービスなどで市民の用に供されている。

（議員）文化行政としての遠友夜学校の問題である。1点目は教育長に、2点目は市長に伺いたい。／教育長には、この遠友夜学校についてであるが、実は答弁の中に触れられていないと私は思うが、なぜ札幌市の管理、保全を諦めたのか、市が管理、保全できないというそもそもの根拠は何なのか、きちんと答えていただきたい。引き続き、遠友夜学校の教育的な価値、これは、教育の行政をつかさどるトップとして、教育的な価値は、この遠友夜学校にはどのようなものがあるのか、どんな考えか、教育長の認識を伺いたい。／市長に伺いたい。本市はユネスコ創造都市である。ユネスコの前身をつくったのは新渡戸博士である。文化を誇るまちを標榜する札幌のリーダーの市長が、なぜこのような大切な遠友夜学校の資料の1つも札幌市がみずから守ることができないのか。どうしてこんな札幌になってしまったのか。

（市長）新渡戸稲造先生が提唱されてユネスコがつけられた、そして、国連で、事務次長で活躍をされた。我々にとって誇りに思っている先生の一人である新渡戸先生の記録、残されたものを札幌市がどうして守れないのか、と。／それは、さまざまな理由が述べられているが、私は、北海道大学で統一的に資料を保管し、そして、資料を生かす、あわせて研究もするというようなことが行われるとすれば、それはすばらしい話ではないかと思う。そのことによって資料が生きる、さらには、その研究成果を市民に還元することができる、そして、札幌という地において、札幌市が独自に展開しようとする展示にはご協力いただけるということが覚書の中で記さ

れているとなれば、これは、何も所有がどこになるかということにこだわる必要はない。むしろ、その研究成果なり、保存の状態をよくする、さらには、北海道大学に残されているたくさんの資料とともに一体として研究活動を深めていただける、そういうことに資するものであれば、私どもは所有にこだわるべきではない、そういう判断もあると理解している。

（教育長）遠友夜学校の資料について、札幌市がこの資料を諦めたのかというような質問であるが、これについては、札幌市として諦めたというよりは、遠友夜学校の資料、新渡戸稲造の資料という性格から見れば、北海道大学が、後世にわたって責任を持ち、札幌の地でこれを収集、整理、保存し、調査研究し、その成果を市民に展示していくというようなことを担うのが適当ではないのかと思い、北海道大学に話をしたところ、北海道大学としてはまさに責任を持ってそれをやるということで、今回の話が進んだ。／新渡戸稲造、遠友夜学校の教育的価値をどう考えるかという問題であるが、遠友夜学校というのは、まさに、本当に札幌が誇るべきものだと思う。今、文部科学省は、都道府県に夜間中学を1つ設けることに向けて調査をしている話を聞いており、北海道はどこに公立の夜間中学を設けられるのかということはこれからの問題であろうが、夜間中学を設けるということになれば、札幌としては、まさに遠友夜学校の歴史を踏まえた上で、夜間中学——特に、現代では不登校の問題があるので、夜間中学については新渡戸の時代とはまた違った意味合いがあるとは思いますが、遠友夜学校の歴史は、札幌の教育の中でもきちっと位置づけ、それを継承していかなければいけないと強く思う。

（議員）この遠友夜学校の話を知っていると、どうも納得してしまいそうになる。北大に譲ったほうがいいではないか、と。ところが、実はこれは違う。何で札幌市が守れなくなった、札幌が何でそんなまちになったかと私は言っている。／ここで、札幌市は意思決定の流れで実は幾つかミスを犯しているということを私は申し上げておく。まず、札幌では守れないという前提でスタートしている。北大に譲与するか否かは、まず、札幌ができないのはなぜかということを決してから出てくる次の選択肢なのである。／次に、遠友夜学校の財産は、札幌に、子どもたちの教育を

つかさどる地元自治体だからと契約して寄贈されたものである。自分たちでは管理できないから右から左に他人に渡すのではなくて、本来の契約を履行できないのなら、もとの持ち主に返すのが筋である。／さらに、遠友夜学校は、貧富の差もなく、性別の差もなく、年の差もなく教育を授けるといふ日本が世界に誇る教育の原点であって、教育魂の灯台ということである。ノーベル平和賞のマララさんが、遠友夜学校のとんまつと教育の責任者たる方の判断を知ったら、ひどく悲しむことだろう。／そして、問題はここからであるが、教育長も恐らくは善意でよかれと思って譲与を進めてきただろう。そこは理解しているが、実は、一番大きい問題は、市長を含め、誰もそれに対して疑問を持たず、とめることもしなかった、譲与というものが、まあ、いいではないかということで進めてきた、札幌市全体の問題を浮き彫りにした姿勢であった、私はこのように総括をする。／本来は、市民が協力しながら、市が遠友夜学校を再興すべきものである。建物も資料も市がしっかりと責任を持ち、教育の原点として検証し、守り、新渡戸博士や教師や卒業生たち、そして札幌市民の誇りとして市民の手に戻されるべきものとして、私は、今後も市民運動と協力しながら、来年度はもっと精力的に追及していく。

◎2015年（平成27年）3月以降、札幌遠友夜学校の廃校（閉校）に関する見解をめぐって、藤田正一らの、学術的に論議を深める論文が相次いで発表された。

○論議のきっかけとなったのは、2003年（平成15年）2月発表の三上敦史論文「札幌遠友夜学校の終焉」である。（⇒2003年（平成15年）2月21日）

○三上論文に反論した藤田正一論文「北海道大学百二十五年史掲載論文『札幌遠友夜学校の終焉』に反論す」は、2015年（平成27年）3月発行の学術誌『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』22号、p.21～31に収録された。

○さらに、三上・藤田両論文を検証する須田力（北海道大学大学院教育学研究科教授）の論文「戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察」も、2016年（平成28年）3月発行の学術誌『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』第23号、p.9～22に収録された。

○2019年（平成31年）4月発行の谷口稔著『新渡戸稲造一人格論と社会観一』は、この論議についてふれ、札幌遠友夜学校閉校をめぐって2説に大別されるとした。1つは、生徒数の激減、教師の確保の難しさから、閉校を自ら決断したとする説（暗に三上の見解を指す）で、もう1つは、遠友夜学校が「軍事教練」を拒否したことで、存続が許されなくなったという説（三上論文に克明に反証している藤田と須田の見解がこれに相当する）である。谷口は、後者の説を支持し、戦況が傾く中、軍事教練を拒否する夜学校の存続は認められないとする札幌市等の公的圧力があつたのは事実で、遠友夜学校が財団法人になっていたことから、公的援助金を受けており、このことが軍事教練を拒否することを一層難しくさせていたとしている。

○いずれにせよ、1991年（平成3年）10月19日発行の『新札幌市史／第2巻・通史2』に述べられているように、結局は「1943年（昭和18年）に、官の戦争遂行に直接必要な以外の各種学校整理の方針により廃止された」となる。

◎2015年（平成27年）3月31日（告示日）、札幌市によって造成が進められていた「新渡戸稲造記念公園」が正式に開園した。

○同公園用地は、1968年（昭和43年）6月11日、南4東4に開館した「札幌市勤労青少年ホーム」の後身である「札幌市中央若者活動センター」の跡地（1,688㎡）のうち、仮称「遠友夜学校記念館」建設予定地（250㎡）を除いた1,438㎡であった。

○同公園は、2011年（平成23年）3月31日に同センターが閉館され、その後に建物が解体され、以来、雑草の更地となっていた旧札幌遠友夜学校跡地を札幌市が整地し、2014年（平成26年）12月には造成が完了していた。

○1962年（昭和37年）10月6日に開園の「新渡戸児童遊園」も既に合体されており、大型遊具やベンチなども整備された。

○2017年（平成29年）5月18日、新案内板「札幌遠友夜学校跡地」が「新渡戸稲造記念公園」内の東側入口に追加設置された。

◎2015年（平成27年）4月1日、山崎健作らによって、遠友夜学校の再興を目指

す「遠友再興塾」が結成された。

○これを機に、67年にわたり青少年育成に尽力した青年会「札幌青空会」（会長・山田一男、代表・山崎健作）は発展的に解散した。

○「遠友再興塾規約」によると、目的は「新渡戸稲造先生の創設した遠友夜学校が札幌東地区にあった事に大きな誇りを持って、その精神を受け継ぎつつ、まちづくり運動を進める。そしてその歴史的意義を国内外に発信していく」とした。

○事業は、「①遠友夜学校の顕彰とその実践としての講演会・読書会等を開催する、②「学問より実行」で地域社会に貢献する、③歴史おこしからまちおこしの地域活性化へつなげる、④郷土の誇りの文化財保護活動を次世代へ継承する、⑤教育の原点であるこの地を、将来を担う子どもたちが見聞して遠友夜学校の精神を学習する」とした。

○役員は任期2年の代表・副代表・幹事長・事務局長の4名を置くとし、総会において代表には山崎健作（元札幌青空会代表、元遠友夜学校生徒）、（副代表は欠員）、幹事長には佐藤邦明（エイジス北海道株式会社社長）、事務局長には木村良三（株式会社イナゾーアーキテクト）が選任された。

○2015年（平成27年）2月1日に「遠友再興塾準備委員会」の段階で、事務局長の木村を担当者としてインターネットにブログ「『遠友夜学校』に学ぶ“遠友再興塾”―新渡戸稲造夫妻が創設した遠友夜学校に学ぶ」が立ち上げられた。プロフィールには「札幌の誇り、教育の基、文化の香り、遠友夜学校の再興を目指す“遠友再興塾”」とある。さまざまな詳しい記事が載せられた。（なぜか、2年2か月後の2017年（平成29年）4月19日の記事をもって突然中断したままになっている）

○2015年（平成27年）4月6日、『北海道新聞』朝刊掲載の記事「遠友夜学校の志伝えたい」で、山崎は「80歳をすぎてから、夜学校の経験が人生の針路を示してくれたと実感。近所の企業経営者らに遠友再興塾の構想を話し、昨年春から準備を進めてきた。今後は夜学校の歴史を学ぶセミナーを開き、跡地に記念館建設を目指す運動に取り組む」と述べた。

○2015年（平成27年）5月7日、遠友再興塾は、準備委員会時代に提出していた陳

情第137号「札幌市民の郷土の誇り、『遠友夜学校』の貴重な財産である史料を護り、市民による市民のための活用を図ることを求める陳情」について、市議会事務局より前市議会議員任期満了につき「審議未了・廃案」の通知を受けた。

◎2015年（平成27年）5月16日、札幌市がスポンサーの市政広報テレビ放送番組『札幌ふるさと再発見』で「平成遠友夜学校」の活動が紹介された。

○この番組は、STVテレビ（札幌テレビ放送、本社札幌市所在）が制作するもので、新渡戸稲造の精神を引き継ぐ平成遠友夜学校として、「すべての人に学びの場を—平成遠友夜学校の取り組み—」の題名で放送された。

○札幌市では、新聞等の報道発表資料や月刊誌『広報さっぽろ』によるほか、広報番組・広報素材を活用し、旬な市政情報や地域の魅力などを、テレビやラジオ、動画などを通じても伝えている。地域を元気にする取り組みを届け、札幌の魅力を再発見する目的で2007年（平成19年）4月7日から毎週土曜日11時54分～11時59分に放送され、2023年（令和5年）5月末現在も続いている長寿番組である。

○札幌市民生局広報部広報課およびSTVテレビは既放送番組のリストを把握していないため、過去16年の間に、遠友夜学校関連（新渡戸稲造の遺産を伝承する）内容の放送が他にあったかどうか分からないという。（埋もれたままの映像資料が他にもあると思われる）

◎2015年（平成27年）6月1日～9月1日発行の月刊誌『しにあらいふ』の連載「山陰から」の記事で、杉岡昭子は4回連続して遠友夜学校問題にふれた。

○記事は「山陰から（34）～（37）」に該当するが、『しにあらいふ』の発行でいえば、2015年（平成27年）6月～9月号（18巻199号～202号）に相当し、各2ページでp.6～7またはp.8～9に掲載された。

○各号の主題は、順に「この場所へのこだわり」「青春そして教育の原点」「有島武郎の札幌」「歴史を伝えつづけることは、私たちの大切な仕事です」となっている。

○内容は省略するが、「新渡戸先生の志をもつ人を『遠友』とよぶ」とし、「道産子

も北海道で生まれた人だけでなく、私のようなヨソ者であっても、札幌を愛する人は含めてほしい」と願う鳥取県在住の杉岡にとって、時の流れに位置づけてみると、この時期は気になって仕方がない、居たたまれない心境にあったものと想像される。

◎2015年（平成27年）6月25日、「遠友再興塾」は、札幌市議会議長宛に陳情書「陳情第9号」を提出した。ただし、のちに自らこの陳情を取り下げるに至る。

○「陳情第9号」は、前陳情が2015年（平成27年）5月7日に廃案になったばかりではあったが、これに挫けることなく、「遠友再興塾」（代表・山崎健作）が再度の陳情をおこなったもので、「札幌市民の誇りである『遠友夜学校』を札幌市とともに次世代に継承・顕彰を進める陳情」である。次に要旨・理由を示すように、抽象的な精神を市に要請する陳情のため、具体性に欠け、つかみどころのない論議に終わる結果を招くことになる。

○「（要旨）『遠友夜学校』の意義を明らかにし、新渡戸稲造・萬里子夫妻の意思の教育的価値を、広く市民に知らせ顕彰していただきたい。／財団法人『遠友夜学校』と札幌市が1962年（昭和37年）に交わした同意書に基づき、札幌市が主体となって、施設の建設の在り方と史料の取扱いの在り方を検討し、合わせて市民やさまざまな団体がそうした活動への協力を進められるようにしていただきたい」。

○「（理由）私達はこれまで開発発展と云う名の下に、数多くの先人達が血の滲むような汗の結晶の足跡を示す建造物・史料等を観る、触る事が出来なくしてしまっている事が多々あります。歴史にははじまりがあり、そのはじまりを大切にしたいものです。その場所にこそ先人達の汗が染み入り、歴史はその場所でのみ息づかいが感じられるはずではないでしょうか。歴史はあるべきところにあるべきです。／121年前、新渡戸稲造は札幌に自分の理想とする学校を設立しよう、とかねてからの夢を具体化させました。当時、人口二万五千人の札幌の子供達で、学校に通えるのはせいぜい半分程度でした。そこで新渡戸稲造が考えていたのは、公立小学校に通えない子供達、そして働いている青少年達のための夜間学校でした。／そしてこれは、世界的偉人である新渡戸稲造と萬里子夫人、そしてこの学校に関わった多くの先人

達が札幌に遺した史跡と史料の顕彰施設は、札幌市民の誇りとするものとして世界に発信し得る文化遺産です。しかしながら、この事実を多くの札幌市民はほとんど知らないと言っても過言ではありません。連綿と引き継がれた『遠友夜学校』の精神を次世代へ引き継ぐのが私達市民の誇るべき責務であります。教育の原点である『遠友夜学校』をここで振り返ると教育の未来への光明が差し込み、混迷する教育への指針となり得るものです。／そして今日まで月日を重ね開校68年後に、新渡戸稲造・萬里子夫妻が創設したこの『遠友夜学校』の土地・史料等は、『札幌市の寄附依頼をもとに1962年（昭和37年）に財団法人「遠友夜学校」から、札幌市に`札幌市勤労青少年の健全育成'と`四項目'を同意条件に市側に寄附されたもの』であります。／最後に、さっぽろ文庫『遠友夜学校』発刊時の板垣市長の『高い理想と努力、それを大きく支えている相互信頼こそ、現代にも通じる貴重な財産です。わが街・札幌がその歴史の中に、こういう「遠友夜学校」を持ち得たということに、私は喜びと誇りを感じるのです。』の序文をかみしめたい。また、札幌市・札幌教育委員会の「さっぽろ文庫」の刊行にあたり”で記述されている『……先人の文化遺産を受け継いで郷土への認識を深め、且つ展望を伐り拓くことの大切さを思い、……』此の想いを市民とともに共有具現化する事ではないでしょうか。／議会の皆様におかれましては、どうかご理解ご高配の上“文化都市札幌“を市民とともに党派を超えて世界に発信して頂きたく陳情申し上げます。

○2015年（平成27年）9月17日、札幌市議会文教委員会が開催され、「陳情第9号」が議論された。（⇒2015年（平成27年）9月17日）議論内容は以前の陳情時の繰り返し感が強く、結局「継続審査」となった。その後は何の審議もなく、陳情はいわゆる「塩漬け」となった。

○2015年（平成27年）12月3日、遠友再興塾は、陳情内容の理解を深めてもらうため、札幌市議会内で「遠友夜学校を学ぶ勉強会」を開催した。参加した市会議員は17名であった。山崎健作代表は、挨拶で「明治、大正、昭和と、遠友夜学校をしっかり守ってきた札幌市が、この魂の灯台を打ち消して仕舞ってよいとは、どうしても思えないのです」と訴えた。

○2016年（平成28年）12月7日、遠友再興塾の代表・山崎健作は市会議員宛に「陳情の継続審議のお願いについて」を配って、「審議継続となった時から環境や状況の変化があったからです」と、3点の変化をあげて再開を促した。

○2017年（平成29年）2月6日の札幌市議会文教委員会において、委員から委員長に強い要望が出された。それは「本委員会継続審査中の陳情『札幌市民の誇りである遠友夜学校を札幌市とともに次世代に継承・顕彰を進める陳情』が、今年度の委員会でもまだ一度も審議されておらず、本日審議の遠友塾によるこの陳情の取り扱いや採決結果と整合性を持たせるためにも、時間を置かず、年度内に再審議してしかるべき取り扱いをしていただきたい」であった。しかし、取り上げられることなく、未審査の状態は続いた。（「本日審議の遠友塾によるこの陳情」とは、『札幌遠友塾（自主夜間中学）』が提出した「陳情第240号—公立夜間中学校のすみやかな設置を求める陳情」を指している）

○こうした扱いを受けて遠友再興塾は、先の陳情と同様に「審議未了、廃案」の可能性大と判断し、2017年（平成29年）3月に自らこの陳情を取り下げた。

○これらのことを含めて、札幌市民への情報発信が不十分との情勢判断から、遠友再興塾は活動を陳情から市民への草の根運動へと変更し、イベント「遠友ウォーク」や紙芝居の公演会（年2回）、演劇公演、札幌大学で特別講義の実施（年1回）などを実施した。

○会員への情報提供や会員間のコミュニケーションツールとして、会報『遠友来楽通信』^{きらく}が発行された。年2回の発行とし、創刊号は2015年（平成27年）10月号であった。会報名は、「遠友夜学校」の命名が論語の「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」によったとも言われているのにあやかって付けられた。（通信の第2号は2016年（平成28年）4月19日に発行されたが、それ以降の発行は判明していない）

○札幌大学での特別講義は、2016年（平成28年）11月18日の実施を第1回目として、2020年（令和2年）11月30日（この回はオンライン講義）まで毎年1回続けられた。題名は「え、こんな学校が札幌にあったとは！」、講師は佐藤邦明（遠友再興塾幹事長）、小山茂教授担当の「札幌学入門」（地域共創学群地域創生学部地域創

生専攻向け講義に90分2コマが組み込まれた)。

○会の諸活動・行事は、2020年(令和2年)11月ごろまでは断続にいくつか実施されたようであるが、その後は新型コロナ禍のもと、代表が高齢であることや会員が少数などのため、新聞や雑誌のインタビューに登場するなどにとどまっていた。

◎2015年(平成27年)6月27日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」は『札幌遠友夜学校創立120周年記念誌』を発行し、記念館建設計画を発表した。

○全30ページの記念誌の冊子は同会の『会報第3号』として発行された。

○「はじめに」p.3~4では、代表理事・秋山孝二が「創立120周年を記念して—21世紀に夜学校理念の実現を一」と題して記念館建設の計画を述べた。会の設立を「『札幌遠友夜学校』の教育理念を、多くの方々とともに幅広く顕彰し、この跡地の放つメッセージを国内外に発信し、札幌市民として一条の光を灯す責務を感じたから」とし、「メッセージの主なものは、地域や国内外に、第1に無償のボランティア精神による若い世代の育成、第2に国際平和の実現、第3に『BUSHIDO』に基づく国際人の育成とアントレプレナーシップ(起業家精神)の涵養」をあげ、「このような活動の場・拠点として、私たちはこの歴史の原点に、『札幌遠友夜学校記念館』(仮称)も建設したい」との考えを説明した。

○p.5~6では、2014年(平成26年)開催の「創立120周年フォーラム基調講演(演題「記念するには所をえらぶ」演者・佐藤全弘)」の概要を掲載した(⇒2014年(平成26年)6月14日)。p.7~8では、2014年(平成26年)開催の「札幌遠友夜学校創立120周年記念講演会(演題「遠友夜学校あれこれ」演者・中川厚雄)の概要(その1)を掲載した(⇒2014年(平成26年)6月22日)。

○p.9~27では、同会が主催した「創立120周年記念作文・論文コンクール(一般からの応募)」で優秀賞を得た須田洵と谷口稔の2論文の全文を掲載した。①p.9~19に掲載の須田洵(すこやか食生活協会参与)の論文テーマは「新渡戸稲造の思想と札幌遠友夜学校精神の今日的意義」であった。②p.19~27に掲載の谷口稔(元中学・高校教諭)の論文テーマは「新渡戸稲造の『武士道』と札幌遠友夜学校に学

ぶ」であった。(インターネット上で全文が読めるので、ここでは省略した)(なお、作文・論文コンクールは継続実施を検討したようであるが、これ1回しか実施していない)

○この記念誌において、同会が建設を目指している記念館の計画内容を発表した。計画は次のとおりとした。①札幌市中央区南4条東4丁目の「札幌遠友夜学校」跡地「新渡戸稲造記念公園」内の北東部(更地)に新築する。②建物は地上2階、地下1階で、設計図(設計者:アメリカ人のナオミ・ダーリング)によるものとする。③記念館の名称は仮称「札幌遠友夜学校記念館」とした。④建設資金は、総工費1億7千万円を予定し、募金でまかなう。

○記念館の着工予定と募金開始については、すでに、2014年(平成26年)3月20日発行の同会『会報第2号』p.8~9で、同会理事・高橋大作が「札幌遠友夜学校記念館(仮称)建設担当部からの報告」で発表していた。それによると、2015年(平成27年)春から建設工事が始まるとの予定だったが、この『会報第3号』発行の時点では着工されていなかった。募金活動は、すでに2013年(平成25年)5月に始められていた。

◎2015年(平成27年)9月16日、藤田正一(北海道大学名誉教授)は私版冊子『札幌遠友夜学校』を刊行し、関係者に無料配付した。

○平成遠友夜学校校長を務める藤田による、この冊子はA4判全24ページからなり、遠友夜学校を「新渡戸稲造夫妻が残した美しい高貴な遺産」と形容し、末尾に著者意見広告「札幌遠友夜学校跡地と遠友夜学校関連史料を国の文化遺産に！」を添えている。格調高く、内容の濃い簡明な解説書と高く評価されている。

○この冊子に先立って、2013年(平成25年)12月25日に出版された藤田による著書『日本のオールターナティブークラーク博士が種を蒔き、北大の前身・札幌農学校で育まれた清き精神―』(銀の鈴社発行)は、遠友夜学校精神の源流・背景・人脈等を解き明かしている。p.191~199には「遠友夜学校」について、p.267には「平成遠友夜学校」についての解説がある。

○この冊子の刊行時期、藤田（獣医学研究科名誉教授）は、季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティアの会発行）に、特別寄稿「新渡戸稲造と遠友夜学校」を5回に分けて載せた（第1回：No.37・2015年（平成27年）6月～第5回：No.41・2016年（平成28年）6月）。この冊子と同様の内容となっている。

○この冊子は、刊行と同時に記念館建設の募金活動にも活用され、2016年（平成28年）2月15日以降は、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が発行元となって増刷・販売され、広報での活用と同時に、記念館建設資金の一助とされた。

◎2015年（平成27年）9月12日、札幌遠友塾自主夜間中学（代表・遠藤千恵子）は、札幌市教育文化会館で「札幌遠友塾25年の集い」を開催した。

○札幌遠友塾が設立（開講）25年を記念し、『北海道自主夜間中学校交流会・札幌遠友塾25年の集い』として開催したものである。

○設立者の1人・工藤慶一の講演「遠友塾の歴史と今後の課題—札幌遠友塾の歴史を中心に—」は、参加者を紹介しながら感動的に語られた。のちにまとめられた冊子『同集い記録集』（翌年3月発行？）のp.4.～20に各種資料・報道記事などとともに収録し、公開された（インターネット記事でも読める）。

◎2015年（平成27年）9月17日開催の札幌市議会文教委員会において、遠友再興塾から提出されていた「陳情第9号」が議題とされ、質疑応答がなされた。

○「陳情第9号」とは「札幌市民の誇りである『遠友夜学校』を札幌市とともに次世代に継承・顕彰を進める陳情」というものであった。質疑応答に先立って、提出者による趣旨説明も行われた。質疑応答の実際はどのようなものであったかを、会議記録の流れを抜粋する形で確認してみたい。質疑応答の経過は長文に及ぶので、以下に簡略化して収録する。（発言者の個人名は省略し、発言内容の文体は敬体を常体に統一した）

○（A委員）陳情書では、施設の建設のあり方や史料の取り扱い方を検討し、どち

らかという抽象的な言い回しで書いてある中で、先ほどの説明では、市が建設、運営し、さらに市民みなでこの建物を守っていくというような話もあった。それも踏まえて、幾つか質問したい。遠友夜学校は本市市民の大切な文化遺産であるが、改めて、確認の意味で伺いたい。本市教育委員会は、遠友夜学校の価値をどのように認識しているのか、また、教育的な価値をどう評価し、この学校が本市にあったという歴史的な価値をどのように評価しているのか。

（生涯学習部長）遠友夜学校は、新渡戸稲造の崇高な精神に共鳴した札幌農学校の学生らがボランティアで教壇に立ち、当時の市民にも支えられながら、その歴史は約50年にも及んだ。ここで学んだ生徒の数は5,000人以上とも言われ、当時不十分だった教育制度のすき間を埋めながら、青少年に希望の明かりをともし続けたことで、非常に重要なものであった。遠友夜学校の活動や新渡戸稲造の功績については、例えば小学校や中学校の社会科、歴史の教科書にも取り上げられていることから、その教育的価値、歴史的価値についても非常に大きいものとする。

（A委員）私も、これだけ偉大な新渡戸稲造先生が、札幌の地で貧しい子どもたちや、あるいは、男女の隔てなく勉強する機会を与えていたというのは本当にすごいことだと思う。自分なりに、新渡戸稲造先生のゆかりの地、南4東4の新渡戸稲造記念公園がある場所に足を運んだり勉強したりしていく中でいろいろと学んだ。／本市は、当初から近年までは、遠友夜学校の誇りを大切にしてきた経緯があるにもかかわらず、昨年度の文教委員会でも各会派から苦言を呈されたように、最近の本市の取り組み姿勢がなぜこうも希薄化してしまったのか。

（生涯学習部長）札幌市では、1962年（昭和37年）に財団法人遠友夜学校から学校の跡地の寄贈を受け、新渡戸稲造の思いや財団の考えを踏まえて、若者を支援するための勤労青少年ホームを建設し、以来50年、新渡戸稲造と遠友夜学校の功績を顕彰してきた。また、新渡戸稲造及び遠友夜学校の功績については、大学等の学術研究機関を初め、民間の研究者や市民団体など、国内外を含めて多くの人々によって研究活動が進められている。札幌市は、こうした市民や民間団体への支援も行ってきた。／新渡戸稲造の思い、そして遠友夜学校の功績に対する顕彰の姿勢は、変わ

ることなく、このような支援も含めて、引き続き取り組んでいく。

(A委員)本市の取り組み姿勢が希薄化してしまった部分は触れていないが、私が言いたかったのは、市民が知る間もなく、新渡戸稲造先生の資料がほぼ北大に寄贈されてしまったことである。市民と札幌市が話し合いをしていく中で決めていくべきものであるにもかかわらず、札幌市があらかじめ想定していたシナリオどおりに進めていったことに対して、まだまだ市民の声を反映しているとは言えないのではないかと考える。これからも、市民としっかり議論していく余地があると思う。／次の質問は、市側がお願いして遠友夜学校財団と交わした各種財産、建物や資料を含む土地の寄附同意書に基づくと、遠友夜学校の顕彰、つまり遠友夜学校を大切にしていくことは本市と市民の大切な責務だと考えるが、当時から最近まで所管していた教育委員会の見解を伺いたい。

(生涯学習部長)札幌市でのこれまでの取り組みは、50年にわたって顕彰を行ってきたし、また、資料を受贈した北海道大学でも各種の展示が行われている。市民レベルということであれば、昨年、陳情が採択されたが、南4東4の学校跡地にみずから記念館を建設し、顕彰していこうという団体もあり、いろいろなレベルで顕彰活動が進められている。／新渡戸稲造や遠友夜学校がもたらした崇高な精神、功績の顕彰を続けることは非常に重要であり、市民、行政などいろいろなレベルでやっていかなければいけない。今後、重要なことと考える。

(A委員)遠友夜学校における教育的価値や教育的価値から派生する歴史的価値は、札幌や日本だけではなく、まさに世界の教育理念や実践で生かされているものであり、さらには、新渡戸稲造の国際的知名度から、日本はもとより、世界に発信する価値があると思うが、教育分野だけでなく、文化財保護、周辺地域のまちづくりや観光の観点からも、本市の他部局との連携をいかに図るべきものと考えているか、現時点での見解を伺いたい。

(生涯学習部長)遠友夜学校の功績、新渡戸稲造の功績は、札幌市民として非常に誇るべきだと認識している。新渡戸稲造に対する国際的知名度も、当然、日本だけではなく海外でも知られているので、世界にも発信する価値があると思う。今後、

顕彰等の事業を進めるに当たって、必要に応じて他部局との連携を検討していきたい。／また、新渡戸稲造記念公園についても、環境局で新渡戸稲造、遠友夜学校の功績について考えてもらった結果、新渡戸稲造の語録も板によってきちんと表示して、記念公園といった形で市民がくつろぐ場にもなっている。

（A委員）ほかの部局との連携をしっかりと保ってこれからも努めていただきたい。／一般論的に聞くと、広く市民が議論していく機会を本市がつくっていくことについて、どのような意義があると考えているのか。

（生涯学習部長）まちづくりに必要な情報を提供して、市民がまちづくりに参加できる機会を広げていくことは、市民が主役のまちづくりを進める上で、札幌の市民自治の目的にかない、十分に意義があると認識している。例えば、南4東4の公園の整備に当たっても、地域で意見交換を実施し、参加者の意見をいろいろ聞いた上で整備を進めてきた。こういった機会は非常に大切であり、市民の意見を聞くことは今後とも重要なことと考えるので、そういった方法でいろいろ進めていきたい。

（B委員）歴史の顕彰について、2点ほど質問したい。さっぽろ文庫を読むと、新渡戸稲造が創設した遠友夜学校には、現代の教育現場にはまれで大切なものが数多くあると思う。例えば、大学生が教師として無償で授業を行い、時間を惜しまずに熱心に生徒と接していたことや、男女別学が普通であった当時、遠友夜学校は、男女共学であり、年齢や職業の違う生徒が交流し、学び合える環境であった。野外活動にも力を入れ、積極的に生徒たちを自然の中へ連れていき、遠足や海水浴に出かけていた。人とのつながりや自然体験を大切にする教育を学び、私たちもこの功績を残していかななくてはならない。／50年間しっかりと顕彰を行ってきて、この功績は大変重要であるとの話を聞いた。こういった功績を教育の現場、教育行政に生かしていく考えがあるか。

（生涯学習部長）教育の現場、札幌の子どもたちには、小学校、中学校の社会、歴史等々の教科を通じて遠友夜学校や新渡戸稲造の功績についてきちんと教えている。また、教育行政ということでは、今、北大に寄贈した資料をデジタル化等々を図っており、いろいろと調査、分析をした上で、デジタル化したものを市民に広く伝え

る仕組み、工夫についても考えている。

（B委員）新渡戸稲造の功績を顕彰する数々の記念館、記念室が青森や岩手、東京など全国にあり、例えば、高校生のための新渡戸教室ということで、地元住民と協力して高校生を対象としたお茶会を開催するなどの取り組みを行っている。ぜひ、これらを参考にして、広く市民に伝えてほしい。／今後、札幌市民の意見もよく聞いてほしいが、市民やこうした団体の方たちと今後どのように連携していくのか。

（生涯学習部長）市民との連携であるが、遠友夜学校、新渡戸稲造の歴史的功績の偉大さは誰しもが理解していると思う。また、顕彰活動についても、個人や団体がそれぞれの思い、立場から、自由に話し合われ、研究されている。こういった団体の活動に対しては、情報提供、広報、後援も含めて、いろいろな支援を行っていききたい。また、そういった団体からはいろいろな意見があると思うので、きちんと聞いていきたい。

（B委員）先日の北海道新聞に、生活保護世帯などの中学生を対象とした学習サポート事業の利用者がふえているという記事が掲載された。主に児童会館を利用して、週1回、平日の夜に大学生が指導を行っている。学びたくてもさまざまな事情があって十分に学べない子どもたちを支援する事業である。こういった教育的な事業にも遠友夜学校の教育理念を生かしてもらいたい。

（C委員）書物を初め、遠友夜学校の貴重な文献など、いろいろなものを北大に寄贈したが、なぜ北大に寄贈したのか。

（生涯学習部長）北大への寄贈の経緯であるが、遠友夜学校の関連資料は、後世にわたって適切に管理、保存していかなければいけないと考えて、同学校が創設されてから120年という歴史がたっており、資料の経年劣化も懸念されていた状況であった。私どもが持っている遠友夜学校、新渡戸稲造の資料を、北大において管理、保存してもらえないかと持ちかけたところ、快く引き受けてくれ、北大と札幌市の間で資料移管の理解が得られたことから、2013年（平成25年）11月21日にお互いに納得して了承した。

（C委員）札幌市が、これら貴重な文献を長く保存するために、北大で管理してく

れないかをお願いしたということか。

(生涯学習部長) そのとおりでございます。

(C委員) 僕も、前に文教委員会でこのことを話したときに、今どうすべきかについては、北大に預けるほうが長く保存できるだろう、維持していけるだろうと話をしたけれども、つまり、194万人都市の札幌にそういう技術がなかったということなのだね。これは、極めて残念だ。／今考えても、札幌市にとって極めて貴重な財産であることは間違いないわけですよ。それを北大に預けなければならなかった、寄贈しなければならなかった、これは、ある意味ではその大事なものをどう維持していくかという考えが札幌市になかったということだ。何か出てきたから北大に預けて管理してもらおうというだけで、その財産にどういう価値があったのかどうか、これを見きわめる力が札幌市になかったということなんだね。／今、再興塾が、どちらかといえば、精神面でもって、それをどう札幌市民に理解してもらうのか、新渡戸稲造先生の思いはどうだったのか、もう一回、札幌市民として考えて、その偉大さをはっきり認識し、そうであるならば、きちんとした形にあらわして長く後世に伝えられるようにということなのだね。札幌市はそれをできなかったということについて、今、どう考えるのか。あのときは正しかったのか、それとも、今考えたらそうじゃなかったのか、今はどうすればよかったと考えているのか。

(生涯学習部長) 従来から資料の散逸、経年劣化が懸念されており、将来的な資料の展示、保管等のあり方を総合的に考えて移転がいいだろうということで、今もその考えに変更はない。あのときに移転してよかったと考えている。

(C委員) そのことについて言うならば、僕は全く反対です。これは、ある部分では、いつか、こういうふうに入手を入れて残さざるを得ない、その技術がない、だから北大にお願いすると。ただ、長い目で見たら、札幌市で長く保存する技術を身につけながら、北大にも理解いただいて、もう一度、譲ってもらおうと。そうして残してもいい、それぐらいの価値があると僕は思う。だから、あのときは正しかったかもわからないけれども、どうすればいいのかも含めて、最終的には札幌市が取り戻していくというか、そういう形まで含めて、市民でもってしっかりと考えること

が極めて大事だと思う。／僕は、1年に1度、ニセコ町の有島記念館に行くと、遠友夜学校の資料が展示されている。その時代はそうだったのだが、本当に貧しい姿をしている。教師がいて、また、学生が周りにいるが、そういう人が写っている写真などが飾られている。僕は自分の命の洗濯に行くのである。こういう純粋な人方が北海道にいたんだ、北大にいたんだということを確認するのに僕は毎年行く。本当にすばらしい貴重なもので、札幌で失ってはならぬものだった。その部分がちょっと足りなかった。保存が悪くて散逸するかもわからぬ、だから北大にと、それならば、途中でいろいろなことを考えなければならぬ行動だったのではないかと思っている。それは、全く思いませんか。

(生涯学習部長) 2013年(平成25年)11月に北大との了解に基づいて資料を移転したことは、私どもはその方向で考えたほうがよかったと考えている。

(C委員) 教育長や前教育委員長であられるE教育委員は、このことについてどう考えるのか、聞いておきたい。

(教育長) まず、申し上げておきたいのは、遠友夜学校、新渡戸稲造先生の崇高な理念、ご功績については、これまでする話があったとおり、全く異論はない。まさに札幌の誇りであり、広く市民の方々とともに今後も顕彰していくべきものだと考える。歴史的にも、それ相応の貴重な財産であるものとする。／結論ということではないにしても、今、こういう状況になっていて、今後のことについても、さまざまな方々から意見をいただきながらまた考えていかなければならないと考える。ただ、北大に寄贈したから市民の財産ではないということではない。市民の手に届かないところに行ったのだということではなく、北大においても収蔵、所蔵、閲覧、展示ができる。北大も札幌市域内にあって、そこと連携をとりながら、貴重で散逸してはいけない、また経年劣化させてはいけない資料を分散管理するのではなく、責任を持って一元管理できるということで、とりあえず北大という選択肢があった。／今後、北大とも協議しながら、役割分担と言ってはニュアンスが若干違うかもしれないが、札幌市において、遠友夜学校のこれまでの資料、新渡戸稲造先生のご功績を市民の方々にどう知っていただいて将来につなげていくかは、まさに、今後、

市民とも議論しながら決めていくことだと思う。

(E 教育委員) 認識は教育長と同じである。一言だけつけ加えると、確かに、新渡戸稲造のご功績を顕彰していくことは、札幌市民にとっても大変大事なことであり、同時に、新渡戸稲造先生は北大にも大変深いかわりがあるわけである。遠友夜学校を手伝ってくれた札幌農学校の学生たち、これはまさに今の北大であるが、そういう意味でどちらも非常に深いかわりがある。そういう中で、一体どちらがふさわしいのだという議論をするよりも、どこで一元管理をしていくことがこの方を顕彰していくのにふさわしいのかということについて今後いろいろ議論していくのがよいのではないかと。さらに発展させれば、岩手県にも資料を持っている人がいるような話もある。そういった意味でも、こちらだ、あちらだと言うのではなく、どうすれば一番よく管理でき、かつ、新渡戸先生の功績を将来に残し、また資料などを利用していけるのかという観点で議論するほうがよいのではないかと。

(C 委員) 言っておられることもわからないわけではないが、陳情提出者からあったように、あるべきところにあるというのは、市民も理解しやすいし、大いに誇りを持ってるのである。北大とも縁があったのは事実である。今、札幌市の所有でなくなって北大の所有になった、それでも誇りと思ってやっていこうではないかと僕は思える。しかし、本来は、あるべきところであって、札幌市民が身近に感じて、それを誇りにできるということが極めて大事であると思う。／教育長が言っていた、とりあえずという中で、僕も賛成した。札幌市には全く保存技術がないという中で、とりあえずということで賛成した。これ以上、傷んでしまってはならぬ、と。でも、あるべきところにあったほうが、よりよいと言うならば、逆に、北大にもお願いして、将来、自分たちが長期保存できるような技術を身につけたときに、できれば譲ってもらおうということも視野の中に入れておくべきだと思う。

(D 委員) 先ほど部長は、札幌市の子どもたちには教科書等を通じて新渡戸稲造の功績を学ぶ機会があると発言されたが、札幌の小学生が使う教科書全てに新渡戸稲造が載っているのかどうか。／もう1点、昨年に資料館にあった資料が全て北大に移管された。その後、移管されて百年記念会館にあるということだったので、私は

見に行った。しかし、大変寂しい展示の仕方、それまでの札幌市の資料館にあったあの部屋の雰囲気は全くなく、ガラスケースの中にただ平置きされているだけの資料で、私はとても恥ずかしい思いをしたが、それ以降、北大の展示の方法などは変わったのか。

（生涯学習部長）まず、教科書の関係であるが、小学校6年生の社会では東京書籍の「新しい社会」が札幌市の教科書で、ボリューム的には若干寂しい感じだが、きちんと載っている。また、小学校3年生、4年生では、「わたしたちの北海道を開いた人々」という地元向けの手引の中で、新渡戸稲造と遠友夜学校について取り上げていて、小学校、中学校の生徒に対していずれも教科書を使って教えている。／北大の百年記念会館の関係であるが、私も何度か行っているが、今の状況は非常に寂しい。一旦、企画等の展示もしたが、今は改修等もあって北海道博物館では企画展示できない状況にある。今後、北大では企画展等々も含めて検討していると聞いておるので、我々も、もう少し市民の方々に見ていただけるように、見やすい形で作ってもらえるように働きかけたい。

○ほかに質疑がなく、結局、「陳情第9号」の取り扱いは「継続審査」とすることに決定した。

◎2015年（平成27年）10月20日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」（代表理事・秋山孝二）は「新渡戸稲造記念・遠友みらい塾」を設立した。

○塾長を寺島実郎（日本総合研究所会長）、代表を秋山孝二とし、同日、設立発足会議「第1回遠友みらい塾」が札幌市の「愛生館サロン」で開催された。

○発足にあたって、「新渡戸稲造」をキーワードにした「遠友みらい塾」の設立を企画した秋山は、『札幌遠友夜学校』創設120年となる2015年（平成27年）に、『新渡戸』に繋がる新たな事業がスタートできる幸運な巡り合わせを多くの方々と喜びたい」と語った。

○塾生には各界のリーダー格の人が呼びかけられたようであるが、同塾は、参画する方々の自らが得意とする領域をフルに生かしながら、「遠友夜学校記念館記念館」

の建設に先駆けて事業を展開することで、21世紀にふさわしい人材育成プログラムへの一助となることを願って設けられた。未来の世界を切り拓く活動として、多くの方々と共に歩むこと、参加される方々が互いに創発しあう場になることが期待された。

○現時点で想定される具体的活動は「①市民向け教養講座、②音楽、③町内会・地域のプログラム、④国際交流・世界を学ぶ事業、⑤大学などのアウトリーチを行うこと、⑥その他」とした。(実際の活動をみても、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」主催、「遠友みらい塾」共催という形の開催が多い)

○遠友みらい塾の会合は、主な会場を愛生館サロンとして開かれ、「第〇回遠友みらい塾記録」という形で会合の様子が報告された。2015年(平成27年)11月19日開催の第2回から2019年(令和元年)5月31日開催の第17回までの記録は公表されているが、第18回以降は公表されていない。記録上、塾生同士の会合の開催は、突然に中断した形になっている。

○寺島自身は、『北海道新聞』のインタビュー記事「北海道を変えるパワーワード」で2020年(令和2年)3月17日、持論を述べている。その1つは「遠友夜学校の現代版を」というもので、要旨は「札幌市内の有志たちがかつての夜間学校『遠友夜学校』を再興するために記念館を建てる取り組みをしている。例えば、そうした施設にカフェがあって、そこで子供たちがご飯を食べられて、参加している高齢者ら大人が教育に携わるというような構想はどうだろうか。大人側はそこで人工知能(AI)や生命科学の進化など新しい時代の息吹を吸収しつつ、一緒に勉強する。こうした取り組みを支えるため、北海道ゆかりの人たちが道外でいろいろな動きをしていることに目を向けるべきである。例えば、北海道の発展のために現代版の遠友夜学校をふるさと納税で賄うという制度はどうだろうか。そこで育つ子供たちのために食べ物や教育を施せるなら何も返礼品などいらない、という北海道ゆかりの人たちを引きつけるエネルギーのあるプロジェクトを打ち出せるかがポイントである」としている。

◎2015年（平成27年）12月、札幌司法書士会（会長・猿田史典）は、会報で特集「札幌遠友塾自主夜間中学に行って来ました!!」を組んで現状を伝えた。

○当時、超党派の国会議員による「多様な教育機会確保法（仮称）案」が出され、法成立に向けた動きがある中で、同会会報の特集が企画された。同夜間中学の授業を見学し、関連の諸情報を伝えたのは、同会の隔月発行会報『きりばたけ通信』34号で、編集担当責任者は番井菊世であった。

○自主夜間中学を見学しての感想は、次のように記されている。（要旨）

「2010年（平成22年）の国勢調査によると、北海道の15歳以上で小学校を卒業できなかった人の数は、7,374人。全国では、大阪に次ぎ2番目の多さ。しかし、国勢調査の質問の意味が理解できなかったり、調査員が近所の人であったりすると、未就学をはずかしく思い、別の項目を選ぶなど、実際には未就学者数はそれ以上と考えられる。／日本人の識字率は、100%に近いと考えていたが、現実には、字を読めない書けない人が少なからず存在することを知った。／また、驚くべきは、若い世代の女性の未就学者数が増加傾向にあること。女性が教育を受ける必要などないと考えられた時代とは異なり、現代は少なくとも教育については男女平等であると思っていた。しかし、格差社会において、貧困等の原因で女性の教育を受ける権利がしいたげられつつあることは、あってはならないと思う。／義務教育を受けていないと、社会に出て働こうとしても、履歴書が書けない。仕事に就くことができない。実際に仕事に就いても、様々な苦勞が生じてくる。字が読める。字が書ける。計算ができる。教育は社会生活を送るうえで、必要不可欠であると改めて実感した。／憲法26条には、教育を受けることは国民の権利とされている。戦争、病気、無戸籍等、様々な事情で教育の機会を得ず、義務教育の期間を過ぎてしまったとしても、誰もが学ぶ機会を等しく得る環境が整えられることが大切だと思う」

◎2016年（平成28年）1月21日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」（会長・秋山孝二）は、読書会を開始し、以降も長く定期的に続けた。

○「考える会」の一事業としての読書会は、原則月1回1時間半～2時間程度、考

える会の顧問・三島徳三（北大名誉教授）を中心に新渡戸稲造の著作『農業本論』を読むことから始められた。のちに、「読書会（2）入門的読書会」の発足を機に、「読書会（1）」と名づけられた。会場は愛生館ビル会議室を使用した。

○2016年（平成28年）7月8日から、別に「読書会（2）入門的読書会」が立ち上げられた。原則月1回1時間半～2時間程度、新渡戸稲造について書かれた図書を読み進めることから始められた。使用の図書は、柴崎由紀著『新渡戸稲造ものがたり』（銀の鈴社発行）などである。新渡戸稲造の生い立ちから順に一生を追って少しずつ学び進め、質問し合い、感想を分かち合い、楽しく学び会うこととした。このころはまだ「考える会」の事務所が山崎健作宅にあった時代で、2階の洋裁教室に事務所を置いていた。読書会もここを会場としていたが、2017年（平成29年）9月からは、会の事務所を愛生館ビルに移したことから、会場もここに移した。

○参加者に関する情報は公表されていない。

◎2016年（平成28年）4月28日、札幌市中央図書館はデジタルライブラリーの資料区分「古書」に「遠友夜学校関係資料」66件を収録し、閲覧公開を開始した。

○このライブラリーは、主に江戸後期から明治期までの、札幌市中央図書館所蔵の貴重書をデジタル化して公開しているもので、古書・古地図・絵はがきの3区分がある。2023年（令和5年）4月29日現在、古書1321件、古地図81件、絵はがき3998件を公開している。

○ちなみに検索語「札幌農学校」では絵はがき5件、「新渡戸稲造」では古書（すべて遠友夜学校と重複する扁額）4件、「札幌村」では絵はがき10件、「開拓使」では全区分で68件などとなっており、収録自体が狭き門である。

○「遠友夜学校関係資料」のデジタル化作業は、すべて2015年（平成27年）11月～2016年（平成28年）3月に札幌市教育委員会生涯学習部よって行われた（札幌市教育委員会生涯学習推進課推進担当係調査）。66件の内訳は、明治期の資料は3件にすぎず、中には1964年（昭和39年）6月の日付のものも含まれていた。他と比較すると、片寄った不可解な収録になっている。

○デジタル対象資料の選定は、札幌市教育委員会からの依頼によって、資料収蔵先の北海道大学大学文書館が、「遠友夜学校関係資料」の中から、重要と考えられる内容の資料（①学校の運営を具体的に示す資料、②生徒の諸活動を示す資料、③新渡戸稲造校長にゆかりの資料）を選定した。

○札幌市は、資料の経年劣化や散逸等について懸念されるため、札幌市資料館の「遠友夜学校記念室」の展示を2014年（平成26年）7月6日に終了し、すべての資料等（関連史料575点）を、既に2014年（平成26年）7月15日までに同文書館へ寄贈（無償譲渡）していた。

○2014年（平成26年）7月25日から同文書館は「遠友夜学校関係」の歴史展を次々と開催しており、これらの詳細も示されている。（⇒2014年（平成26年）7月25日）

◎2016年（平成28年）11月1日、杉岡昭子は、雑誌『しにあらいふ』19巻216号の連載記事「山陰から（50）」に「遠友夜学校、戸惑いは今も」を書いた。

○ここでいう「戸惑い」とは、2年前に書いた、同誌17巻192号（2014年（平成26年）11月）と18巻194号（2015年（平成27年）1月）の記事「山陰から（28・29）」を指す。今回は遠吠えを抑えて先人が記した「遠友夜学校」を紹介したいと、杉岡は、いくつもの文献の記述を（他の例の場合もあげながら）示した。（ここでは、要点または短い引用だけを示す）

○市民運動としては、山崎健作の『遠友学校再興塾』が、遠友夜学校記念室の再興と史料の北大からの返還を願って、議会に陳情を続けている。

○この現実を『『確かにおかしい、しかし北大と札幌市のトップが納得しての譲与だから今さら』という声も多い。しかし『確かにおかしい』なら、何がおかしいのだろうか。／まず基本的に、多くの人が『遠友夜学校』を知らない。また『遠友夜学校記念室』を訪れた人も少ない。／知らない、ということが前提にある。その上、今は記念室だけでなく史料も目の前にない。更に遠友夜学校で教えた人はもちろん、学んだ生徒たちも指で数えるしかいない。伝える人も、物も、ないから、かけがえない教育の宝を失ったとは気づかない』と指摘した。

○今一度読んでみてほしいとの願いか、杉岡は、1981年（昭和56年）9月1日発行『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』掲載の3人の言葉を引用した。①札幌市長・板垣武四の「遠友夜学校と私一序にかえて一」の末尾の文「高い理想と努力、それを大きく支えている相互信頼こそ、現代にも通じる貴重な財産です。……」、②高倉新一郎の序章「新渡戸稲造と札幌—その接点としての札幌遠友夜学校—」の末尾p.30の文「これからは、新渡戸博士が札幌の地に残された偉大な精神を永遠に忘れずに育てていくことになるだろう。……」、③夜学校で教えた予科学生・近藤治義の回想「夜学校の思い出」の前半p.210の、新渡戸校長を北極星にたとえた文「……変ることのない1点……を見出して自分の位置づけをすることの出来る—そうした悟りと判断力と実行力を習得させる不思議な教育を施すことができればいい。……」。（注：編著者・白佐が引用文をさらに削って短くした）

○「この地で何をしたかが大事である」との論議の例をあげて、杉岡も、新渡戸博士が創った遠友夜学校が札幌に何をしたのか、と考えたいとしている。そして、「故和田謹吾北大名誉教授は、遠友夜学校を『ここにのみ真実の教育があったのではないか—中略—まさに札幌が日本の教育史上に誇る1つの歴史』と、新札幌市史に書いている」と紹介した。（引用元は『新札幌市史』でなく機関誌『札幌の歴史』であった。⇒1981年（昭和56年）12月1日）

○「遠友夜学校（文化遺産）が伝えるもの」として、杉岡は3つあげる。第1は、創始者・新渡戸稲造という人格。人格そのものが校訓になり、閉校までの半世紀守りぬかれた。第2は、先生と生徒、生徒と生徒との相互信頼。これがあって教育がある。教育の基本である。第3は、大学人と市民との直接のつながり。教師も学生も、象牙の塔から自主的に出て、子どもたちと向き合い学び合う姿勢の教育を貫いた。他の大学にない特徴は、「学問より実行」の文字どおりの実践であった。

○「閉校後、札幌市へ土地と史料を譲与するまでの20年の間、財団は史料を道立図書館や母子施設に預け、新渡戸博士の扁額は半澤代表が表装して守った。大学には預けていない。ここで教えた人たちには、夜学校はそれほど市民に近かったに違いない」と杉岡はみなす。

○戦後の大変な時期に守り抜いた跡地と史料を札幌市に譲与したのだが、杉岡は「半澤先生は、学んだ子どもたちの汗と熱い心がこもる史料は、市民に返すことが一番と考えたのだろう」とみる。

○さらに、1985年（昭和60年）5月発行の単行本『茨戸河畔』を紹介している。著者・小塩進作は、遠友夜学校は「教育の文化遺産であり、ここからさらに高い教育文化が生まれる」『札幌の精神的風土の礎石』であるから動かすことはできない」とし、「夜学校はその精神と目的とを勤労青少年ホームにおいて再生させた。このようにして遠友夜学校は蘇生し、その精神と目的とを再生し、再現していることに、その意義の力強さを知る」と書いている。

○杉岡は「遠友夜学校は研究材料ではない。現代に活きなければならないのである」と結んでいる。

◎2017年（平成29年）2月6日開催の札幌市議会文教委員会で、継続審査中の陳情「陳情第9号」を再開するよう要望が出たが、論議はうやむやに終わった。

○札幌市議会での「遠友夜学校資料保存問題」の、この前後の経緯については、本書の2015年（平成27年）6月25日の記述でまとめて述べた。

○1992年（平成4年）10月20日、遠友夜学校資料の展示室「遠友夜学校記念室」を併設していた「札幌市中央勤労青少年ホーム（Let's中央）」の老朽化等の問題が、札幌市議会で初めて取り上げられて以来、しばしば市議会の論議の対象とされてきた。約25年を費やしての対処と論議は、札幌市における文化財保存・維持のあり方・考え方に一石を投じた。

◎2017年（平成29年）2月28日、葛井義憲（名古屋学院大学教授）は、同大学の機関誌の第1号p.3～9に論文「光の子、新渡戸稲造」を載せた。

○機関誌は「名古屋学院大学」付属の「同教職センター」の編集・刊行の年刊学術誌『名古屋学院大学教職センター年報』である。

○執筆者・葛井による要旨は次のとおりである。「『輝かしい経歴』を有す新渡戸稲

造が社会の片隅、暗闇に眼をそそぎ、そこでキリストの愛の働きをすすめる姿は奇妙、不釣り合いなもののようにも思われた。明治は『立身出世』をスローガンとし、『栄達』することを人間の幸福だと強く教えてきた。この時流のもとで、日本国家が奨励する『立身出世』を見事に果たし、多くの人々から尊敬され、『世界で輝く』人材として高く評価された稲造は『文明国家』日本の寵児、国民が範とすべきモデルになっていった。しかし、そうした『憧れの存在』の視点と関心は悲哀と苦悩の渦巻く処が『癒され』、そこで生きる人々が希望をもち、勇気をもって歩みだすことを支援するものであった。こうした地味な活動へと積極的に関わらせる視点・エネルギー、信仰・思想などを『悲哀のキリスト』『クエーカー』『遠友夜学校開設』、また『聖書に綴られたユダヤの民のあり方、イエスの言行』などを用いて分析・考察・執筆した。

◎2017年（平成29年）4月19日、インターネット上で活発に発信していたブログ『遠友夜学校』に学ぶ“遠友再興塾”が中止し、その後は休止状態になった。

○2年2か月前の2015年（平成27年）2月1日、同塾事務局長の木村良三（株式会社イナゾーアーキテクト）が担当し、立ち上げられたものであった。（⇒2015年（平成27年）2月1日）

◎2017年（平成29年）5月18日、玉城英彦・帰山雅秀・弐和順は、単行本『グローバルリーダーを育てる北海道大学の挑戦』を出版した。

○この書は、北海道大学において2013年（平成25年）4月から新たに立ち上げられた特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」の取り組みを詳細に紹介し、また、より多くの教育現場での実践のための指南書としてまとめられたものである。（彩流社、A5判、全274ページ）

○この書の編著者の刊行時の肩書は玉城英彦（北海道大学名誉教授）・帰山雅秀（北海道大学国際連携機構特任教授）・弐和順（北海道大学大学院文学研究科教授）であるが、特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」の構築と実践に深いかかわりをもつ

た。(⇒2013年(平成25年)1月25日)

○この書の中で、体験と実践の場として創設された、貧しい人びとの子弟の教育にも生涯をささげた「遠友夜学校」にもかかわりの深い「新渡戸稲造の精神」(特にp.36～55)とはどんなものであるかが解説されている。端的に言えば、それは「①深い倫理性に基づいた品位ある「自律的な個人の育成」、②日本人としての自覚をもちつつ、偏狭な排外主義に陥らない「国際精神の涵養」、③互いに国籍の区別を設けなくて親しく交わる「国際的教育の実践」である。

○玉城らは、2018年(平成30年)5月14日にも単行本『同Ⅱ』(同社、全198ページ)も出版した。

◎2017年(平成29年)5月25日、北海道教育庁学校局義務教育課は北海道版道徳教材の冊子『きた／ものがたりー北海道の先人の生き方に学ぶー』を作成した。

○A4判全34ページのこの児童用(小学校高学年用)冊子は、2017年(平成29年)3月31日に公布された「北海道みんなの日条例」の趣旨を踏まえ、北海道道徳教育推進会議(道徳教材作成会議)が北海道みんなの日(7月17日)を含む7月には積極的に活用されるようお願い、同義務教育課(北海道教育委員会)の編刊によって発行された。

○2段組み教材には、先人として選ばれた16名が採用されたが、松浦武四郎に次いで2番目に新渡戸稲造が題名「平和の扉を開いた使者」で収録された(p.5～6)。

○遠友夜学校については、本文に「……／稲造は、札幌農学校を卒業した後、『太平洋のかけ橋になりたい。』という思いをいだいて、アメリカへ留学し、さらに勉学に励みました。／日本に戻ると、札幌農学校の教授として熱心に指導にあたりました。

また、昼間に働いている人が夜間に無料で学ぶことができるよう、札幌に遠友夜学校を創立し、校長となりました。／……」とあり、別表の5項目には「1894、遠友夜学校の校長になる(32歳)」と載せられた。

○別に教師用に指導資料・実践事例集があり、新渡戸稲造の場合、指導事例2例(各1ページ)と実践事例(小学校第5学年の実践、1例4ページ)が用意され、国際

理解や国際親善に主眼が置かれた。

○作成関係者は、北海道教育庁学校教育局義務教育課、2016年（平成28年）度北海道道徳教育推進会議（教材作成会議）作成委員（新渡戸稲造の作成は根岸良久ら5名の委員）、監修・関口明（元札幌国際大学教授）、顧問・村山紀昭（北海道教育大学教授）、関口明ら北海道版道徳教材作成に係る有識者会議である。

○同名の教材は、別に「中学校用」（2018年（平成30年）5月作成）もあり、小学校高学年用では採用されていない加賀伝蔵など18名が掲載された。小学校高学年用・中学校用ともに、北海道教育委員会のウェブページに掲載されており、読むことができる。

◎2017年（平成29年）7月7日、三上節子（新渡戸研究者）は論文「札幌遠友夜学校の誕生と発展—それを支えたものは何か—」を学会誌上で発表した。

○この論文は北海道基督教学会誌『基督教學』第52号、p.1～28に掲載された。

○三上は、新渡戸稲造研究家の肩書で知られるフリーの研究者であるが、2012年（平成24年）12月以降、任意団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の結成準備の段階から参加し、法人化してからの同会でも中心メンバーの1人としてずっと献身的に活躍している。以降も、同会の事務局の運営を支え続けている。

○この論文は、多くの著書・論文・資料を駆使し、同校誕生の時期・場所などについての通説を再検証・再吟味し、総括的な展望を行い、定説を導き出そうとした。内容の詳細は、デジタル化され、広く公表の論文そのもので知ることができる。

○三上は既に年刊誌『新渡戸稲造の世界』（新渡戸基金発行）で、資料論文「札幌遠友夜学校跡地の放つメッセージ」（第22号、p.193～210、2013年（平成25年））、「札幌遠友夜学校の誕生と貢献」（第23号、p.55～97、2014年（平成26年））を発表するなど、新渡戸稲造が強調した「学問も実行も」の実践家である。

◎2017年（平成29年）10月17日、学習支援ボランティア団体「ゆうがく」は、「札幌市若者支援総合センター」を会場に加え、活動内容等を前進的に充実させた。

○「ゆうがく」は、2014年（平成26年）8月21日に「平成遠友夜学校」内に結成された「ゆうがく班」を前身とする団体で、その活動の精神・内容等を継承するものである。

○学習支援等にあたるボランティアには、北海道大学の学生に限らず、「学習支援等のボランティアに興味のある大学生、子どもたちの力になりたい大学生で、生徒さんを大切にできる方」を入会の条件としたが、大学院生・短大生・専門学校生は無条件の該当者であり、社会人も可能とした。

○学習支援等の主な対象を、高校生に限らず、「小学生・中学生・高校生及びその他の若者」と拡大した。利用者の参加は登録や強制や制限はなく、任意とした。

○新增設に際し選んだ会場は、交通の便利さも考慮し、公共施設である「札幌市若者支援総合センター」とした。無料で会場を利用することから「共同事業」として実施することになった。センター側からの位置づけは「自習生のサポート」とされた。参加者は同センターの規則を守ることが求められた。

○学習支援等は、2022年（令和4年）4月から毎週2回（木曜日は対面形式、金曜日はオンライン形式）午後7～9時とし、新型コロナ流行もあって、方法は対象の生徒の要望に合わせて臨機応変に対応するよう多様化した。

○会場では、途中からの入場、途中での退場も可能で、教える側も教わる側も、両者にとって負担や義務が伴わない、共に友人として成長する場と考えられた。

○2022年（令和4年）4月1日現在、代表は角広陸（北海道大学2年生）が務めている。

◎2017年（平成29年）11月20日、北海道大学大学文書館は、来館者向けリーフレット『(大学文書館1階・展示ホール) 遠友夜学校の歴史』を発行した。

○リーフレットは、A4判大を二つ折りにした4ページものでカラー印刷された。1ページ目は展示名と2枚の集合写真、2ページ目は「展示のご挨拶」と「遠友夜学校とは」の扁額1枚・人物2枚の写真、3ページ目は「遠友夜学校沿革略年表」、4ページ目は展示案内説明と「表紙写真解説」、の構成となっている。インターネット

上で公開されているので、容易に見ることができる。2014年（平成26年）9月5日に最初に作成されたものを、若干の差し替えて構成内容を変えた第2版（2015年（平成27年）7月28日）に次いで、さらに手を加えた第3版に相当する。

○遠友夜学校関係展示の常設展の来館者配布用に作成されたものである。（⇒2014年（平成26年）7月25日、北海道大学大学文書館）

◎2017年（平成29年）11月25日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」と「遠友みらい塾」は「第1回INAZOサミットin札幌」を開催した。

○「INAZOサミット」は、新渡戸稲造夫妻および新渡戸家の業績を再確認して顕彰し、縁（ゆかり）の地のネットワーク形成を促し、個々の活動の相乗効果を発信しようとするものであり、未来の地域・世界を切り拓く活動と位置づけられた。

○「第1回INAZOサミットin札幌」は、実行委員会委員長・宮澤洋子（新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会運営委員、遠友みらい塾生）のもと、札幌市で実施された。

○その後年1回、花巻市・十和田市・盛岡市開催され、2022年（令和4年）11月3日には、再び札幌市で「第5回稲造サミット・札幌」が開催された。

◎2018年（平成30年）2月26日、工藤慶一（札幌遠友塾自主夜間中学代表）は、ロング・インタビューに応じて多方面のさまざまなことを語った。

○同年7月8日、応答の内容は「インタビューサイト・ユーフォニウム」で公開された。題は「工藤慶一さん（札幌遠友塾自主夜間中学代表、北海道に夜間中学を作る会代表）学びの機会を失った人たちとの出会いが自分の道となった」であった。

○ここでは、本書の他にふれていない、遠友塾との出会いなどについて、一つだけ紹介する。「1948年（昭和23年）旭川生まれ、北大の理学部を3年で中退して印刷会社で働き、それからガソリンスタンド、いわゆる石油を販売する会社で定年まで働きました。最後は本社で経理とかをやりましたけど、仕事はまったく同じ。／だから仕事やりながらずっとこの活動です。読書会が始まった37歳のときからで、今

年70歳で、30年経ちます。／何を軸にして生きるのかということが、夜間中学と出会ったことではっきりしましたので、助かりました。／私自身、大学を辞めること一つとっても、何をどうしたらいいのかわからなくて、いろいろあったものですから。その時、それまでやってきたことを踏まえ、何をやったらいいのかという道筋が、ようやく見つかって、あとは今までまっしぐらです。／あとを継いでくれる人とかは、ちょっと分かりませんが、遠友夜学校は50年続いたので、それくらいまでは何とか代替わりしてでも続けたいですね」(抜粋・要旨)

○関連する話題を他で探すと、次のようなものもあった。「中学3年の卒業間近の時、クラスメートが、彼の亡くなったお兄さんが使っていた高校の数学の参考書を私に手渡ししてこう言いました。『これを使って世の中を良くしてくれ』と。その時彼は、すでに両親も亡くしており、親戚の家から中学校に通っていたのです。彼自身は上の学校に行くこともかなわず、私に何かを託したのです。それは、とてつもない人生の宿題でした。／このため、学びたくても学べないことがあり、だからこそ本当に学びたいという人の願いに応え、共に歩むことのできる道とは何かを、この間、私はずっと考えてきたように思います。／新聞に掲載された「遠友塾読書会」の記事を目にし、この動きは私の探し求めてきた道だと直感し、すぐに参加しました。／私は、クラスメートに今も心の中で『これでいいのか?』とつぶやくことがありますが、これからも、「学ぶことが生きることの証と喜びになる」というスローガンをかけ、不思議な力をもつ夜間中学の素晴らしさを多くの人たちに知っていただきたいと思っています」(抜粋・要旨。2010年(平成22年)5月「おひとり様会」ホームページ記事から引用)

○子ども時代の環境なども加え、ほぼ同一内容の詳しい記述が、「札幌遠友塾自主夜間中学」のホームページ(「遠友塾のあゆみ」→「札幌遠友塾の設立について」→「札幌遠友塾の設立と自主夜間中学の20年」→「札幌遠友塾の設立と私」)に載せられている。ちなみに、「私」とは「工藤慶一」である。

◎2018年(平成30年)3月18日、テレビ東京は、ザ・ドキュメンタリー「学ぶこ

と／生きること／遠友塾の人々」(30分番組)を放送した。

○内容概要「戦中戦後の混乱期に十分な義務教育を受けられなかった人々が通う札幌遠友塾（自主夜間中学）を舞台に、学びを取り戻そうと努力するお年寄りと、それを支えるボランティア・スタッフの絆を描く。人生の大半を活動に捧げてきた工藤慶一さんの生きざまにも迫る。遠友の名は戦前、新渡戸稲造が札幌に設立した遠友夜学校から取った。新渡戸はクラーク博士の弟子に当たり、『青年よ大志を抱け』の名言には、現代にも息づく人間愛の精神が込められていた」

○2018年（平成30年）5月4日、テレビ北海道で再放送された。

◎2018年（平成30年）4月1日、市民団体「札幌遠友会再興塾」が設立された。

（設立総会は5月26日に開催。4月1日は会則上の発足日）

○本会は、1954年（昭和29年）4月27日、札幌遠友夜学校の元生徒・元教師等を会員として結成された「札幌遠友会」を源流とする。同会会員の高齢化・死亡に伴い、自然消滅状態になっていたものを再興する形で、元生徒・元教師・元篤志家等の子孫が主になって結成した。

○端的に言えば、会員資格を遠友夜学校関係者に限定した「札幌遠友会の現代版同窓会」であり、遠友夜学校の精神的支柱（遠友魂）を引き継ぐ人々の会といえよう。

○本会の会員は「新渡戸稲造の遠友夜学校の教師と設立の精神に共感して、教鞭を執った、多くの札幌農学校（北大）の学生たちとその縁者、勉学の志を持ちながら機会を与えられなかった老若男女の向学の徒たちが遠友夜学校に勉学への希望の光を見出して通った夜学校の生徒たちとその縁者、そしてその精神に賛同して協賛し遠友夜学校を物心両面で支えようとした札幌の多くの篤志家たちの縁者」とした。

○主要役員は「会長1名、副会長1名、幹事長1名、幹事若干名をおく」とした。事務局は「遠友再興塾」が担当し、「札幌遠友会」後継にふさわしい陣容を整えた。

○会長には、半澤久（北海道科学大学名誉教授）が就任した。半澤久は、祖父・半澤洵が「札幌遠友会」の初代会長（札幌遠友夜学校第3代校長・北海道大学名誉教授）であった縁で会長を務めることになった。副会長には、「札幌遠友会」の初代副

会長・高倉新一郎（元札幌遠友夜学校副校長・北海道大学名誉教授）の長男である高倉嗣昌（公益財団法人ふきのとう文庫代表理事、北海学園大学名誉教授）が、幹事長には、遠友夜学校元生徒・佐藤三男（元(株)マルキンサトー社長）の次男である佐藤邦明（エイジス北海道株式会社社長）が就いた。元生徒の山崎健作（遠友再興塾代表）は顧問となった。

○本会の目的は「新渡戸稲造がこの札幌の地に創設した、遠友夜学校の『市民の、市民による、市民の為の学校』の精神を、広く札幌市民と共有し伝承していくこと」とした。

○本会の会則には、次のように具体的かつ詳細に活動が定められた。

①市民と共にあった遠友夜学校の歴史的意義や価値を、「札幌遺産」として、広く札幌市民に広め、分かち合う。

②札幌市の学校において、郷土史の学習の教材に取り上げてもらう活動を通して、広く子どもたちに学んでもらう。

③この広がりの中から、歴史の中に埋もれかけている貴重な史料を会員のネットワークを通じて発掘し、保存し、札幌市の歴史文化基本構想に基づく歴史的資産保存活用推進方針との連携を図り、広く市民に公開していく。

④1954年（昭和29年）4月27日に設立の「札幌遠友会」の精神と歴史を継承しつつ、遠友夜学校に関係する方々の繋がりを広めて遠友夜学校を記念顕彰していく。

⑤遠友夜学校の発祥の地に、1967年（昭和42年）の、当時の市長、原田与作市長と、財団法人札幌遠友夜学校の清算人代表の高倉新一郎との合意書「札幌遠友夜学校は、故新渡戸稲造氏が札幌市における勤労青少年の健全育成を目的として創立し、経営を行った歴史的経緯を尊重し、その敷地は札幌市勤労青少年の健全育成を目的とした施設の用地に限り使用すること」の履行を札幌市民と共に、札幌市に求めていく。

○2018年（平成30年）5月16日、『北海道新聞』夕刊記事は「新渡戸『遠友夜学校』後世に／生徒親族らが札幌再興塾／資料集め展示や冊子」の見出しで掲載し、また、同年5月27日発行の『北海道新聞』朝刊（札幌圏）記事は「『遠友会再興塾』旗揚げ／夜学校の精神を伝える」の見出しで掲載した。

◎2018年（平成30年）6月1日、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」会員の原田昭子は資料『札幌遠友夜学校のあゆみ』をホームページで公開した。

○原田（義父が元遠友夜学校教師）は、新渡戸稲造出生時の1862年（文久2年）9月から札幌遠友夜学校記念館竣工予定（当時）の2018年（平成30年）3月までの155年間について、「新渡戸稲造」「遠友夜学校」「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の主要出来事・行事を時系列に概観する一覧を作成した。

○簡潔な年表を基本にしながらも、新渡戸の年齢との対比や実録の抜粋挿入など、他の年表にはない独創的工夫を随所に加えたユニークな構成になっている。

○この年表的資料は、2017年（平成29年）9月23日開催の「北海道久成会」例会講話の配付資料として作成の原田昭子編冊子『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校』（校閲：新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会・新渡戸稲造読書会、A4判10ページ）を基に作成された。この冊子に、冒頭文の変更、目次の作成、写真の挿入、末尾の人物記録一覧の削除など若干の修正を加えたものである。ホームページで13ページとなっているのはこのためである。

◎2018年（平成30年）6月24日、亀貝一義は、「札幌自由が丘学園スタッフブログ」にエッセイ「「遠友夜学校」って知ってますか？」を寄稿した。

○亀貝は、同学園の理事長であった。エッセイの副題には「新渡戸稲造が札幌で開いたフリースクールの原型」とあり、スタッフが今でいうボランティアで働く学生たち（主として北大の学生）であったことから、遠友夜学校はフリースクールの原型とみなせるとした。（以前から亀貝は、「新渡戸稲造によって日本最初のフリースクールともいふべき『遠友夜学校』が札幌の地につくられた」と述べていた）

○エッセイは、新渡戸稲造の人物、遠友夜学校の設立経緯・目的・スタッフ・歴史、校名の由来を簡明に説明したあと、次のように述べている。「私はこの学校こそ、今でいうフリースクールであったと思います。学びの場としてのフリースクールの原型が札幌で誕生したということは、非常に教訓的であると思いませんか。北海道で

最も古い歴史をもつフリースクール札幌自由が丘学園は、今年25周年を迎えます。遠友夜学校の経た歴史の、まだ半分の期間ですが、役割やスタッフの意味からほとんど共通の教訓をもっていると思います。意義を歴史的に確かめながらさらに貴重な教訓を創っていききたいものです」（同一文章は、同学園の通信『希望の樹』の当時の最新号にも掲載された）

○2018年（平成30年）11月10日、札幌自由が丘学園創立25周年記念講演で、秋山幸二（新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会代表理事）は、演題「遠友夜学校に学ぶフリースクールの原点」を語った。

◎2018年（平成30年）7月10日、「考える会」主催の「札幌遠友夜学校記念館（仮称）建設支援『連続講座』」が開始され、以降、毎年実施された。

○主催は「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」であった。共催は2018年（平成30年）度だけは「新渡戸稲造記念遠友みらい塾」であったが、2019年（令和元年）度からは北海道大学農学部同窓会が加わり、「（一社）札幌農学同窓会」・「新渡戸稲造記念遠友みらい塾」となった。毎年、全6～8回実施された。各回の実施は午後2時間程度で、テーマは新渡戸稲造や遠友夜学校関連に限定されず、広範な各種多様な話題が取り上げられた。

○2021年（令和3年）度からは、講座名は「新渡戸遠友館（仮称）建設支援『連続講座』」と改称された。共催は（一社）札幌農学同窓会だけになった。

○2019年（令和元年）度は「札幌遠友夜学校創立125年記念」として、2019年（令和元年）7月9日～2020年（令和2年）1月14日（全7回）の開催であった。

○2018年（平成30年）度は単独実施であったが、2019年（令和元年）度からは「道民カレッジ」と連携して行われるようになり、「道民カレッジ連携講座」の「教養・ほっかいどう学、一般2単位」も認定されるようになった。

◎2019年（平成31年）2月22日、札幌遠友会再興塾は、半澤久会長自らが講師を務め、講演会「祖父半澤洵を語る」を札幌市白石区民センターで開催した。

◎2019年（平成31年）3月15日発行の季刊紙『太平洋の橋』の寄稿で、「新渡戸稲造……を考える会」代表理事の秋山孝二は、記念館建設の熱い思いを語った。

○「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」代表理事の秋山は「財団法人新渡戸基金」の発行する季刊紙『太平洋の橋』第60号のp. 8で、「建築寄付金のファンドレイジング／新しい取り組みで目標達成へ」と題し、次のように述べた。

○「私どもの会は、新渡戸稲造博士生誕150年を記念して、2012年（平成24年）12月に札幌遠友夜学校跡地近くで行われた講演会を契機に設立されました。市民を中心とした幅広い方々が集い、この跡地の北東部（現在は新渡戸稲造記念公園内）に、今年、2019年（平成31年）に、『札幌遠友夜学校記念館（仮称）』建設を目指して活動をしています。この間、多数の応援者から1,600万円のご寄付が集まっていますが、目標金額にはまだまだ遠い金額で、今年は開校125周年の節目の年なので、正念場と意を決めて、更なる募金と建設に向けて活動している昨今です。／……／今後はこの土地に刻む歴史的意義として、(1) 地域住民が集い、語らい、議論し、学び、啓発し合える『場』、(2) 国際交流を促す活動の『場』、(3) liberal arts (リベラルアーツ) の『原点』として、今ふうには、『プラットフォーム』を創り上げたいと思っています。／今年の課題は、何といたっても建設寄付金のファンドレイジングに尽きるので、札幌市・市教委への提案、大口先の団体・企業への依頼、幅広い市民と新しい取り組みとしてINAZO・SDGsプロジェクト等で、目標達成を目指します」

◎2019年（平成31年）4月13日、谷口稔（恵泉女学園大学特任教授）は、鳥影社発行の自著『新渡戸稲造一人格論と社会観一』で「札幌遠友夜学校」を取り上げた。

○2015年（平成27年）6月27日、谷口は「札幌遠友夜学校創立120周年年記念作文・論文コンクール」で優秀賞を得ており、2018年（平成30年）9月、新渡戸稲造研究で博士の学位を取得している。

○この単行本は、多岐にわたる活動を続けた新渡戸稲造の「人格論」をベースに「教

育思想」などを論じ、その思想の解明と真の人物像に迫ろうとした労作である。(A5判、全262ページ)

○「小さき者・弱き者」を慈しむ教育思想」の観点から「札幌遠友夜学校」と「女子教育」を取り上げた。

○谷口は、日本の教育における遠友夜学校的スタイルの類型的意味について3点をあげている。第1は、上から威圧的に教えるのではなく、生徒と同じ目線で教師が学び合ったという点である。第2は、不十分な設備の中、また、教師として未熟な教師という欠けの多い中であって、生徒たちが自分たちの努力でそれを補おうとしたことで学習の効果が得られたという点である。第3は、人格という点に留意して教育を行ったという点である。そして、本書の最初に「あとがきに代えて」としてあげた蝦名賢造の言葉「新渡戸稲造夫妻の札幌に遺した最も美しい、高貴な遺産の一粒は、このささやかな札幌遠友夜学校であった。……」を引用した。この書の遠友夜学校関係分の最後に、谷口は「明治期に開設された遠友夜学校は、50年にわたって、日本の教育の不十分な制度の隙間を埋め、希望の灯をともし続けた」とした。

◎2019年（令和元年）5月14日、『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会』研究者中川厚雄先生のブログ』が、同運営事務局によって立ち上げられた。

○運営事務局（株式会社FF）によると、「私たちは、一般社団法人『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会』研究者の中川厚雄先生より貴重な資料をお預かりし、先生ご指導の下保管及び公開いたしております」とある。

○記事内容は、中川厚雄が2010年（平成22年）12月に発行した私版冊子『「遠友夜学校」の研究』の1冊目（副題：昭和初期の生徒を中心に）の全文記述を分割し、2019年（令和元年）5月14・15日に公開したものである。（⇒2010年（平成22年）12月吉日）

○以降、2～5冊目の公開も予定されていたと想像されるが、何かの事情で公開はされないままになったと思われる。ブログは2019年（令和元年）5月30日、同年6月18日開催の『遠友夜学校創立125周年記念講演会』のお知らせポスター掲載をも

って終了した。

○1冊目の全文は、インターネット上のブログで引き続き公開されている。

◎2019年（令和元年）6月18日、札幌遠友会再興塾（会長・半澤久）は『遠友夜学校創立125周年記念講演会』を札幌市白石区民センターで開催した。

○共催は遠友再興塾（代表・山崎健作）、後援は札幌市教育委員会で、講演講師は中川厚雄（札幌遠友夜学校に関する調査研究の第一人者）が務めた。テーマは「今から125年前にあった札幌遠友夜学校に元号令和の願いを見る」とし、「遠友夜学校の先生名簿710名、生徒名簿3800名が現代に蘇る」と案内ポスターは呼びかけた。

○中川は、膨大な資料をシリーズで私版冊子『札幌遠友夜学校研究』全5冊にまとめた遠友夜学校研究者として知られる。講演会案内ポスターには経歴として、その経過が示された。（⇒2010年（平成22年）12月吉日）

○このときの報告は公表されていない。

◎2019年（令和元年）7月には「高倉新一郎先生小伝抜粋特別号」を、2020年（令和2年）12月には「半澤洵先生小伝抜粋特別号」を、季刊誌が発行した。

○季刊誌は、A4判大の『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』で、同博物館の「ボランティアの会」が年4回発行している。

○「高倉新一郎先生小伝抜粋特別号」（14ページ）は、高倉嗣昌（公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授）によって同誌のNo.49（2018年（平成30年）6月1日発行）～No.52（2019年（平成31年）3月1日発行）に4回にわたって著された記事（副題：息子が語る高倉新一郎）が合体され、再発行されたものである。

○「半澤洵先生小伝抜粋特別号」（19ページ）は、半澤久（北海道科学大学名誉教授）によって同誌のNo.53（2019年（令和元年）6月1日発行）～No.56（2020年（令和2年）3月1日発行）に4回にわたって著された記事が合体され、再発行されたものである。

○2021年（令和3年）1月、「札幌遠友会再興塾」は2つの掲載文を転載・合冊したA4判の小冊子を刊行した。

◎2019年（令和元年）7月発行の会誌『恵迪』第19号は、特別企画として「札幌遠友夜学校創設125周年記念」を組み、4編の寄稿を載せた。

○会誌『恵迪』は、北海道大学の学生寮「恵迪寮」の同窓会「一般社団法人恵迪寮同窓会」が発行する年刊誌である。

○「恵迪寮」は、1876年（明治9年）札幌農学校の開校と同時に設置された札幌農学校寄宿舎を前身とする。同寄宿舎は1907年（明治40年）4月、東北帝國大學農科大學に昇格したのを機に「恵迪寮」と命名された。1918年（大正7年）に「北海道帝國大學」と改称し、1922年（大正11年）4月から入寮者を予科生だけに限るようになった。こうした経緯から、50年間（1894年～1944年（明治27年～昭和19年））存在した遠友夜学校の学生先生は、恵迪寮生であった割合が極めて高かった。例えば、有名な寮歌の作詞者である横山芳介、木原均、須田政美、穴戸昌夫らも熱心な学生先生であった。

○遠友夜学校と親密な関係にあった「恵迪寮同窓生」にとって、忘れられない教師体験であり、同校精神の伝承に無関心ではいられないのである。

○『恵迪』第19号は、p.8～29を「札幌遠友夜学校創設125周年記念特別企画」に充てた。収録された寄稿は次の4編である。①元北海道大学副学長・名誉教授の藤田正一「札幌遠友夜学校と恵迪寮」p.8～15、②北海道大学名誉教授の須田力「父が書き送った、ある遠友夜学校教師への手紙」p.16～25、③北海道久成会副会長の原田照子「義父・原田英一の遠友夜学校での青春」p.26～27、④北海道大学学生・恵迪寮生の永野慈「平成遠友夜学校学生ボランティアとして」p.28～29。

◎2019年（令和元年）9月1日、藤田正一（元北海道大学総合博物館長）は、総合講演「遠友夜学校創設125周年に寄せて」で語ったことを季刊誌に載せた。

○季刊誌は『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティア

の会発行)で、同日発行のNo.54p.6～7に掲載された。

○最初に、閉校寸前となってしまった1943年(昭和18年)年、同校の開校50周年記念の際、札幌遠友夜学校の卒業生が突如立ち上がって語ったエピソードの言葉を引用した(⇒1943年(昭和18年)6月18日)。そして、生活は荒みモラルが低下しがちなスラム街の一角にあった小さな夜学校が、いじめや校内暴力とは無縁に、これほど純な、正義感に満ちた生徒を育て得たのはなぜか、それを可能にした理由をあらためて問いただしてみた。

○藤田は次のことをあげた。①「遠友夜学校」の校名は「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」から取ったと言われるが、すべての子供たちが等しく共に友として学べる学校、遠友を歓迎する場所であり、「遠友」は博愛を意味したこと、②教師たちの行動が「教育とは人間を作ること、人格の完成を目的とすること」という精神に貫かれていたこと、③その精神は「学問より実行」に象徴される新渡戸の教育精神(「いと小さきもの」・弱き者に対する愛情と人格主義教育の精神)であり、また、クラーク博士の教育精神(民主主義と自由の精神、弱者の側に立つ教育精神)でもあったこと、④有島武郎が作詞し、親しまれた遠友夜学校校歌にも、同一精神がうたいこまれていたこと、⑤札幌農学校にも貫かれていたこの教育精神が、遠友夜学校で50年間一貫して守られてきたこと、⑥ここで学んだ生徒たちが、学問のみならず、こうした精神に触れ、清く、正しく、力強く人生を生きること、⑦教育面から見れば、ズブの素人の学生たちが、いまの教育が望んでも望み得ないような教育効果を上げつつ半世紀の長きにわたってこの学校を存続させたこと。

◎2019年(令和元年)9月25日、札幌市教育委員会教育長は、札幌市議会で「札幌市立夜間中学校を設置し、2022年(令和4年)4月開校を目指す」と表明した。

○一気に進んだ設置決定までの経緯を略記すると、次のようになる。

○2016年(平成28年)12月14日、国会で成立していた「教育機会確保法(義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律)」が、法律第105号として公布された。

○2017年（平成29年）2月6日、「陳情第240号」（以前から「北海道に夜間中学をつくる会」と「札幌遠友塾自主夜間中学」から提出されていた「公立夜間中学校のすみやかな設置を求める陳情」が、付託された札幌市議会文教委員会において審査された結果、この日に全会一致で採択された。（この陳情第240号は、同年2月27日の札幌市議会第1回定例会で可決された）

○2017年（平成29年）11月、北海道教育委員会が、法定協議会（「教育機会確保法」第15条）に準じた協議会として、「夜間中学等に関する協議会」を設置し、これに札幌市や札幌遠友塾自主夜間中学なども参加した。（会議開催全6回）

○2019年（平成31年）1月、上記協議会第4回において、設置主体の議論とは別に、設置場所として「札幌市内に設置することが適当」との意見が集約された。

○2019年（令和元年）9月25日、札幌市教育委員会の教育長・長谷川雅英が札幌市議会第3回定例会で「2022年（令和4年）4月の開校を目指す」と表明した。

○2020年（令和2年）12月3日、札幌市教育委員会の教育長は札幌市議会第2回定例会において、新設の公立夜間中学校は、全国初の専属の校長を置く単独校とし、「教職員が一体となって生徒1人1人の状況を適切に把握するとともに、そのニーズに応じた学びを充実させるなど、札幌市にふさわしい公立夜間中学の実現を目指す」と表明した。

○2021年（令和3年）1月26日、札幌市議会文教委員会において、学校教育部長から「札幌市公立夜間中学設置基本計画（案）」の説明があり、質疑応答が行われた。設置場所は「札幌市立資生館小学校内に置く」とされた。交通の利便性が高いことや、エレベーターがありバリアフリーであることなど等々を総合的に勘案し選定された。

○2019年（令和元年）11月6日（贈呈式）、札幌遠友塾自主夜間中学（代表・遠藤千恵子）は、「第73回北海道新聞文化賞（社会部門）」を贈呈された。

○2019年（令和元年）10月3日、『北海道新聞』朝刊は、北海道の発展に大きな役割を果たした個人や団体に贈る文化賞の受賞者を発表した。受賞の理由を「社会的

弱者に寄り添い、学ぶ楽しさを伝えている」とし、記事は「輝く功績次世代へ／学び直す喜びを支え30年／戦争や不登校で学べなかった人が通う札幌遠友塾自主夜間中学」の見出しのもと、これまでの同塾の歩み（沿革）と活動内容を紹介した。

○贈呈式の翌日・7日、式典の様様を伝えた『北海道新聞』は、遠藤が「今回の受賞は学びの機会が得られなかった人々が広く知られる機会となった」と喜びを語った、と報じている。

◎2019年（令和元年）11月30日、STVラジオ編の単行本『北海道命名150年記念／ほっかいどう百年物語／下巻』に短編「遠友夜学校物語」が掲載された。

○中西出版発行のこの書は、2010年～2017年（平成22年～29年）に「STVラジオ」（札幌テレビ放送、本社札幌市所在）で放送された番組「ほっかいどう百年物語」の中から「北海道命名150年」を記念した特別編に選ばれた20作品を収録したものである。ドラマ形式の30分のラジオ番組「ほっかいどう百年物語」（制作スタッフは構成：作家・佐々木信恵ほか）の放送原稿に加筆し出版された（四六判、357ページ）。他に『同名／上巻（20作品）』がある。（北海道命名150年は2018年（平成30年）8月15日である）

○この書のp.6～19に掲載の「遠友夜学校物語」は、新渡戸夫妻と遠友夜学校の歩みの様子が簡明に語られ、「新渡戸が校長として教鞭を振るったのはわずか3年間に過ぎませんでした。その後、半世紀の長きにわたって、札幌農学校の教授や学生たちが無報酬で教壇に立ち、新渡戸の気高い志を継いでいったのです」とある。

○この作品の内容は、全体が歴史的实际にとらわれず、物語性に富む感動的な構成や進行に再編成されているので、事実誤認をしてしまうおそれの部分が随所に含まれる。この点の注意が必要であろう。

○そして、p.19の末尾で次のように述べ、現在の「札幌遠友塾自主夜間中学」がかつての札幌遠友夜学校の精神を継承するものだとする。「新渡戸稲造夫妻が慈善の心で創立し、札幌におけるボランティア活動の原点ともなった、遠友夜学校。学校の存在が消え去っても、その精神は、長く、大勢の人々の胸に輝き続けました。そし

て現在は、『札幌遠友塾』という自主夜間中学校として新たに生まれ変わり、延べ400人以上の老若男女が、互いに励まし合いながら勉強しています」。(⇒1990年(平成2年)4月29日)

○このラジオ番組の歴史は長く、2000年(平成12年)10月8日～2019年(令和元年)9月29日に放送された。毎週日曜日、午後5時から30分間、三上勝由(俳優)らのナレーターが、ある1人の人物の「一生を語る」朗読のスタイルで放送された。朗読原稿は、北海道にゆかりのある人物にスポットライトを当て、その人生ドラマを約6千字にまとめられたものである。2002年(平成14年)2月からは書籍化もされ、「北海道の歴史を刻んだ人々」のシリーズ『ほっかいどう百年物語』は既に全10集が発行されていた。その第1集にあたる2002年(平成14年)2月20日、中西出版発行の『ほっかいどう百年物語』(全343ページ)のp.89～96には、「新渡戸稲造」が掲載されている。

○新渡戸稲造は「現在5千円札の顔として有名ですが、何をした人物かは、意外と知られていません。農学者であり、教育者であった彼は国際親善にも力を尽くしました」と紹介されたあと、祖父の業績から始まり、遠友夜学校開設の経緯にもふれ、稲造がカナダで病死するまでが語られた。最後は、死亡を報じた欧米の新聞が「日本の自由主義の父死す」と書き、カナダのバンクーバーに造られた新渡戸記念日本庭園の石灯籠には「全ての国々をつなぐ善意の使徒」と刻まれている、と結んだ。

○ただし、これらの2書には、放送された年月日についての記載がなく、また、編著者・白佐からの照会に対しても放送局からの回答はなかった。

◎2020年(令和2年)2月13日、「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の理事長(会長)が約7年ぶりに交代し、松井博和が就任した。

○初代理事長(会長)の秋山孝二は副理事長に退き、第2代理事長に松井博和(北海道大学名誉教授、一般社団法人札幌農学同窓会理事長)が就任した。

○遠友夜学校に関わりの深かった札幌農学校の後身である北海道大学および同大同窓会などは、この会の動きには距離を置き、応援も微力で、同大学の出身者や現

役職者がこの会の要職に就くことも少なかった。これを機に、多数の歴代の北海道大学関係者が役員等に名を連ねた。また、松井理事長の知人が顧問等として加わった。役員は理事8人、幹事2人、運営委員21人、顧問21人の体制になった。

○理事長の交代は、2020年（令和2年）5月1日、ホームページや直後発行の『会報第8号』で発表された。松井は、理事長からの挨拶「未来を創ろう、あなたも一人の“新渡戸の子”として」の中で、交代に至る具体的な理由と経緯について言及しなかったが、示された活動の目的や内容には変化が見られた。

○活動目的：①新渡戸稲造の教育者、国際平和主義者、札幌遠友夜学校創始者としての人類愛に満ちた高い見識と実践を、市民とともに学び、実践、継承・伝達し、よりよい社会作りのために活動すること。②新渡戸稲造記念公園に「新渡戸遠友館」（仮称）を建設し、夫妻による創設時の札幌遠友夜学校の博愛精神と人格陶冶を重視した寛容な教育活動を顕彰すると共に、記念館を拠点に現代のニーズに応じた教育活動を通じて新渡戸夫妻の志を実践、継承・伝達すること。

○活動内容：①「新渡戸遠友館」（仮称）の建設に向け、建設費募金活動を含めた準備活動、②「新渡戸遠友館」（仮称）を拠点に、夢と希望で地域・国・世界の未来を創る担い手を“新渡戸の子”として育成する様々な機会（講演、シンポジウム、読書会など）の提供とし、次の7点をあげた。

- ・年齢、性別、国籍、宗教・主義を超えて広く人々の学びに役立つ「場」を提供する。／
- ・児童から研究者まで多層な人に資するさまざまなプログラムを広い視野をもって企画する。／
- ・国際平和、世界情勢、地球環境を学ぶ機会を提供する。／
- ・地球規模でのSDGs（持続可能な開発目標）の必要性に関する情報を提供し、その重要性を理解し実践へと導くリーダーを育成する。／
- ・市民と産・学の“知”が交わり、情報共有・意見交換を通して共通認識を見出す機会を提供する。／
- ・新渡戸夫妻の業績、札幌遠友夜学校に関する史料・資料を展示し、新渡戸イズムを発信する。／
- ・この地に、新渡戸稲造夫妻の博愛と利他の精神に基づいた教育実践の場があったことを、札幌の歴史の尊い1ページとして人々が広く学ぶ場とする。

◎2020年（令和2年）4月24日、三島徳三（北海道大学名誉教授）は単行本『新渡戸稲造のまなざし』を出版した。

○単行本は、四六判・全216ページで、北海道大学出版会から出版された。

○この書の「まえがき」には、この書の特徴は「五千円札から新渡戸稲造の肖像が消えて四半世紀が経過し、世間からは『忘れられた偉人』になりつつありますが、どっこい、彼の業績は今でも光彩を放っています。旧五千円札の新渡戸のまなざしは、愁いを含んでいますが、優しく温かく、見方によっては厳しいものがあります。新渡戸のまなざしから見れば、現代の日本と世界はどう映るのか、これが本書全体を貫く問題意識です。書名には、そうした著者の秘めた狙いが込められています」とある。

○この書のp.115～130、第4章「新渡戸稲造と遠友夜学校—現代の教育課題とのかかわりで—」は、2010年（平成22年）8月23日発行の北海道基督学会誌『基督教學』45号p.40～50掲載の同題論文の転載である。ここで三島は、新渡戸の揮毫した有名な扁額の「学問余里実行」と「“With malice toward none, With charity for all.”」は、「新渡戸稲造が遠友夜学校に込めた思いの吐露、いわば建学の精神であった」と述べている。

○また、p.131～144、第5章「『遠友夜学校』校名の由来と『独立教会』」は、2006年（平成18年）9月1日発行の新渡戸基金発行誌『新渡戸稲造研究』15号p.95～106掲載の同題論文の転載である。

○三島は「あとがき」で、財団法人札幌遠友夜学校の初代理事の1人であった三島常盤が祖父である事を明かし、祖父の経歴と夜学校創設時から尽力した多大な実績を詳しく述べている。

◎2020年（令和2年）5月14日付け『北海道新聞』朝刊は、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が計画している記念館建設が延期になったと報道した。

○「遠友夜学校の志消さぬ／記念館建設計画／資金不足で延期」の見出しで、2020年（令和2年）3月着工予定だった記念館の寄付金が目標額の約1割に留まってい

ることから、①募金期間を3年間延期することを決定した、②秋山前会長は札幌市の連携・協力を強調した、③松井理事長は「皆さんと連携し、運動を仕切り直したい」と話した、と報じた。

◎2020年（令和2年）9月12日、札幌遠友塾自主夜間中学（代表・遠藤千恵子）は「札幌遠友塾自主夜間中学『30年の集い記念講演会』」を開催した。

（⇒2021年（令和3年）3月）

◎2020年（令和2年）10月ごろから、「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が行う記念館建設の募金活動が多様化し、活発化した。

○2020年（令和2年）12月1日、北海道白糠町によるふるさと納税型「札幌遠友夜学校記念館建設募金代理寄附」がクラウドファンディング（CF）で開始され、「～甦れ！学びの拠点～新渡戸稲造『札幌遠友夜学校記念館建設募金』」として行われた。松井博和理事長と親交の深かった白糠町長の棚野孝夫（北海道町村会長でもある）が「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の顧問に加わっての特段の協力であった。2021年（令和3年）3月末までに集まった第1回目の金額は2,285,000円であった。以後も継続された。

○2021年（令和3年）4月7日、『札幌遠友夜学校記念館募金自動販売機』1号機が「新渡戸稲造記念公園」内の東側入口・新案内板横に設置された。「北海道コカ・コーラ株式会社」が「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」を支援することを目的として設置・展開するもので、自動販売機（飲料）の売り上げの一部が同会へ随時寄付し、記念館建設資金と維持・管理費に活用される。同社の取締役役員の山田雄亮が同会の運営委員に加わった。自販機の側面には、新渡戸稲造の肖像写真や「武士道」などの文字をあしらったデザインが施されている。北海道内各地に2号機以降の設置も計画された。

○2021年（令和3年）6月9日の『読賣新聞』朝刊は、「新渡戸記念館建設構想／市民団体／札幌に23年完成目指す」の見出しで、新渡戸稲造の記念館を建設する構

想が進んでいることを報じた。市民の生涯学習と憩いの場の提供などの目的をあげた後、松井理事長が「新渡戸の志を踏まえ、SDGs（持続可能な開発目標）の実現にリーダーシップを発揮できる人材を育てたい」と支援を呼びかけている、と結んだ。

○2021年（令和3年）8月、北海道大学の「記念館建設を応援する農業経済学科教員一同（18名連名）」から「農業経済学科卒業・修了の皆さま」への文書「新渡戸稲造『遠友夜学校』記念館（仮称）募金のお願い」が発信された。この中で「札幌農学同窓会松井博和理事長がこの会の理事長も務めておりますが、新渡戸の直系後輩にあたる私たちが積極的に協力し、大先輩を尊敬する姿勢を示すべしとの考えで、皆さまに特段のお願いをすることと致しました」とあり、「（記念館の活動は）北大が日本の大学で2年連続1位のSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みを後押しするほか、北大と市民の交わる場、関連の記念物展示の場などになる予定です」と関係の深さを強調した。（「札幌農学」とは「北海道大学農学部・農学研究科・農学院」を指す）

○2021年（令和3年）8月24日、『札幌農学同窓会2021年（令和3年）度会報』第58号が発行され、この中に4ページにわたり「新渡戸特集」が組まれた。新渡戸稲造の記念館建設へ向けたさまざまな動きが紹介され、約1万人の同窓生に募金を呼びかけた。

○2022年（令和4年）3月8日、『日本農業新聞』は、見出し「『新渡戸稲造の志』担い手へ／札幌の市民団体、記念館建設で寄付募る」のもと、市民団体「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が取り組んでいる「新渡戸遠友館」（仮称）の建設経過と松井博和理事長の呼びかけを載せた。この中で、建設費の目標額5,000万円は、寄付金などで、これまで約3,500万円が集まり、北海道大学は記念館を議論や実践の場とすることを目指し、建設では同大の研究林木材の提供でも協力する、と。

○その後の報告と呼びかけ「新渡戸遠友館（仮称）建設募金のお願い」には、次のようにあった。「“知のゆりかご”「新渡戸遠友館」（仮称）建設募金4,000万円を突破しました！／新渡戸の志を引き継ぐ活動拠点「新渡戸遠友館」（仮称）の設立に向けて、既に多くの方にご賛同いただき、これまでに4,050万円を超える寄付が寄せら

れています。建設開始に必要な目標金額まで、あと一歩。さらなるご協力ご支援をぜひお願いいたします」「創成川イースト地区に未来を見つめる学びの「場」を／「札幌遠友夜学校」が実際にあった創成川イーストの中央区南4条東4丁目は、現在、新渡戸稲造記念公園となっています。ここに『新渡戸遠友館』（仮称）を建設し、「札幌遠友夜学校」の志を引き継ぎ、未来へ繋げたいのです」「本会は、新渡戸稲造の教育者、国際平和主義者、札幌遠友夜学校創始者としての人間愛に満ちた高い見識と実践を、市民とともに学び、実践、継承、伝達し、よりよい社会作りに貢献しようとする有志が集まり、設立されました。新渡戸稲造・万里子夫妻が1894年（明治27年）に、子どもから大人まで誰でも差別なく無償で学べる場所をと創立した札幌遠友夜学校跡地に『新渡戸遠友館』（仮称）を設立し、創設時札幌遠友夜学校における夫妻の博愛精神と人格陶冶を重視した寛容な教育活動を顕彰すると共に、新渡戸夫妻の志を受け継いで、記念館を拠点に現代のニーズに応じた教育活動を展開しているとしています。2023年（令和5年）の記念館設立に向け、下記のように募金活動を行っています。ぜひご協力ください」

◎2020年（令和2年）10月15日、青山淳平（作家）は、小説「札幌遠友夜学校」を単行本『それぞれの新渡戸稲造』に掲載し、本の泉社から出版した。

○実話に迫るノンフィクション小説3作品を掲載のこの書は、p.7～82の「札幌遠友夜学校」、p.83～211の「鞍出山の桜」、p.213～289の「新渡戸博士の扁額」からなり、いずれも書下ろしで新渡戸稲造に関連したテーマを取り上げている。本の帯には、「『BUSHIDO』は正義、高潔、真理の道を説き、高貴なる義務（ノブレス・オブリージュ）を求める。世界を見つめ、日本を思う新渡戸稲造をえがく小説三選」とある。（本名は河野健。元高校社会科教員）

○作品「札幌遠友夜学校」は、帯には「新渡戸が創設した札幌の夜学校。教えを心底ふかく宿す老女がつぶやく気象通報には……」とある。実際には「1994年（平成6年）6月21日、北海道大学学術交流会館を会場に開催された札幌遠友夜学校創立百年記念事業会主催の『札幌遠友夜学校創立百年記念講演会』へ主人公らが出席す

るかどうかをめぐって展開する。

○作者は「あとがき」で「小説『札幌遠友夜学校』では、新渡戸精神を宿した老女を登場させ、詩集『熱風』で感じ取った問題意識を自然信仰と結び付けようと試みた」と述べている。実際の学校生活の一端やある生徒の人生の実例をリアルに描いて、読者に問いかける作品でもある。3作品とも読み応えがある。

○2021年（令和3年）2月21日の『北海道新聞』書評（編集者・中舘寛隆）では、この書は「新渡戸の功績や精神性が人びとにどう受け継がれているか、小説として描く興味深い作品集」とし、「『札幌遠友夜学校』は戦前、そこで学んだ女性を主人公に描いたもの。教育に心血を注いだ新渡戸の精神が、主人公の生き方と重ね描き出される」と紹介した。

◎2020年（令和2年）11月、北海道教育委員会は、参考資料冊子『公立夜間中学設置等による教育機会の確保に向けて』を発行した。

○A4判全29ページの、全国の各種関係資料を収録した参考資料集は、北海道の市町村教育委員会向けに発行され、無料配付されたもので、この資料の活用によって公立夜間中学に対する潜在的ニーズの把握や、地域の実情と住民のニーズに応じた教育機会の提供に向け、積極的な取り組みを進めるようながした。

○公立夜間中学設置等による教育機会の確保などについて、市町村における理解が一層促進されるよう、教育機会確保法等の趣旨や、教育機会の確保のための文部科学省等の資料や道内外の実践事例などを取りまとめている。

◎2021年（令和3年）2月、札幌市教育委員会は、「札幌市公立夜間中学設置基本計画（案）」を公表し、意見・提案や名称を同年2月4日～3月5日に公募した。

○札幌市は初の公立夜間中学校を2022年（令和4年）4月に開校することにした。
（公立夜間中学校の開校は北海道でもはじめてであった）

○教育委員会は2021年（令和3年）3月中旬、募集の締め切り後、公募に寄せられた232件、177案の校名案を一覧に整理して公表した。これらの資料は、有識者等か

らなる「札幌市公立夜間中学に係る校名検討委員会」の論議に付託された。

○これら中には、「札幌市立札幌遠友中学校」「遠友夜間中学校」など、かつての「遠友夜学校」の精神を継承することを願い、また、活動中の「札幌遠友塾自主夜間中学」の活動の継承も願い、「遠友」の語を含む名称の提唱がかなり多くみられた。

○関連の意見としても種々寄せられた。①「新渡戸稲造ゆかりの遠友夜学校に因んで。また、札幌遠友塾自主夜間中学との今後の連携も願って」、②「今回の札幌市立夜間中学校の開校は、札幌市の尊い教育文化遺産である新渡戸稲造博士が設立した『札幌遠友夜学校』の教育理念を現代の必要性和社会的状況に即して継承しようとするものであると理解します。したがって、学校名には『札幌遠友』を冠し、その教育理念のもとで『学びの場』が提供されるのが良いと思います」、③「長年、遠友塾に携わってこられたスタッフの皆様の努力が実ったあかしを残すため。ここで学んだ塾生の皆も『遠友』の字は残してほしいと願っています」、④「人が辛い時に生きていくには、人間としての誇りと矜持を持つことを根拠とする。このために、母校の存在を前提とする伝統の中に身を置くことが必要となる。札幌遠友夜学校50年、札幌遠友塾自主夜間中学30年の歴史が、札幌市立夜間中学につながり、市民一人一人の生きる誇り（誰もが胸を張って生きていいんだという）となることを願っている」、⑤「在学中も、卒業後も永『遠』に学『友』でいられる関係を作る学校」。などが寄せられた。

○異色の提案には、①「『遠益夜学校』：新渡戸稲造の長男で、遠友夜学校の名前の由来とも言われている『遠益（とおます）』から。2代目遠友夜学校の意味も込めてつけました」、②「『北虹中学校』：“北にかける虹”のつもりで。外交官としても、日本と海外とのかけ橋となった、元祖・遠友夜学校の創始者、新渡戸稲造にならい、北海道の公立夜間中学第1号となる、この学校も、全国の学びのかけ橋となるようお願いを込めました」、③「『新渡戸中学校』：学ぶことの原点な人物」、④「『札幌市立メアリー中学校』：遠友夜学校の理念や歴史も紡ぐということで、新渡戸稲造の妻であり、2代目校長であるメアリー氏の名前から。また、誰でも読みやすく、書きやすい標記が良いと考えます」などというものもあった。

○一方、あえて「遠友」使うことに反対の意見も寄せられたことをあげておきたい。

「遠友夜学校の精神を大切にしていこうとする当会にとって、『遠友夜学校』の教育理念また精神が、この度の夜間中学で継承できるとは思えません。ただ単に、明治の時代に授業料無料の夜間学校があったからというだけの理由で、その名前の一部を学校名に入れるというのは、どうかと思われます」などというものである。

○校名検討委員会は、校名案を「札幌市立星友館中学校」とし、2021年（令和3年）3月24日付けで教育長宛に意見書を提出した。（選考理由⇨2022年（令和4年）4月19日）

◎2021年（令和3年）3月9日、「第2回札幌市公立夜間中学に係る校名検討委員会」が開催され、校名の補足説明に「遠友夜学校」の資料が参考として紹介された。

○この委員会は、札幌市附属機関設置条例第2条第1項の規定に基づく附属機関で、2020年（令和2年）12月21日教育長決裁による「札幌市公立夜間中学に係る校名検討委員会設置要綱」に基づいて設置されたものである。引地秀美（北海道教育大学札幌校特任教授）委員長以下8名で構成する同委員会は、2021年（令和3年）1月7日～同3月18日に3回開催され、3月24日付けで教育長宛に意見書を提出した。

○第2回目の委員会では、校名に係る補足説明に資料「遠友夜学校について」（「さっぽろ文庫18『遠友夜学校』より」と出典が明記されている）が配付された。この資料は、札幌市教育委員会がこの会議用に作成したものであり、札幌市が最近、遠友夜学校の精神的遺産をどのようにとらえ伝えているかを知るうえで貴重なものである。（資料の実物はインターネット上で公開されている）

○以下、資料順によるが、見出し番号等に若干の修正を加えて収録した。（注：[]で示した事項は、編著者・白佐が誤記等と判断した下線部分の修正および欠落内容の追加をしたものである）

1. 新渡戸稲造博士の年表（時期／内容）

1862年(文久2年) 盛岡市に生まれる

1876年(明治9年) 東京英語学校入学（14歳）

1877年(明治10年) 札幌農学校入学 (15歳)

1881年(明治14年) 札幌農学校卒業 (20歳) [19歳]

1884年(明治17年) 渡米し、ジョンズ・ホプキンス大学入学 [・を追加、22歳]

※ この頃に妻の萬里子(メリー)と結婚 [1891年、28歳時]

1887年(明治20年) 札幌農学校助教授となり、農政学研究のため渡独 [助教]

1891年(明治24年) 帰札し、札幌農学校教授に就任 (30歳) [28歳]

1893年(明治26年) 妻の萬里子に1,000ドルの遺産が届く [30歳]

※ 家族同様だった使用人の遺言による遺産

1894年(明治27年) 南4西4の敷地500坪と古い2階建ての1軒家を買取り、夜学校開校 [31歳] [東4]

1897年(明治30年) 体調を崩し、伊香保やアメリカで転地療養 [35歳]

※ この頃「農業本論」や「武士道」を著す [1898年(明治31年)] [36歳]

(年号記載なし) 台湾で総督府殖産局長となり、農事試験場を設立するなど産業発展に寄与 [1901年(明治34年)] [38歳]

1903年(明治36年) 日本に戻り京都大学教授就任 [41歳]

1906年(明治39年) 文部科学大臣の依頼により東京の第一高等学校校長就任 [44歳]

1911年(明治44年) 日本人初の日米交換教授として渡米 [48歳]

1918年(大正7年) 東京女子大学学長に就任 [55歳]

1920年(大正9年) 国際連盟事務次長に就任 (58歳)

【1919年(大正8年)に第一次世界大戦終戦】

1925年(大正14年) 国際連盟を辞任 [1926年(大正15年)] [64歳] (昭和2年帰国)

1933年(昭和8年) 日本が国際連盟から脱退、同年の第5回太平洋会議に参加する中で逝去 [71歳]

2. 遠友夜学校設置の経緯

(1) 新渡戸稲造博士の考え……新渡戸稲造博士は貧困問題の解決が非常に重要であるとの認識をもっており、以下のような「札幌市民学園」を作りたいという構想

を若いころから持っていた。

①老人あるいは成人を対象とし、講義は日本語をもって歴史・経済学・農学及び自然科学を学校／②専門学校や大学の入学準備を希望するが予備校に正規の出席ができない青少年に対する学校 ⇒ 北鳴学校（北海道初の中学校）の教頭となり実現／③貧しい両親を持った、粗野な子どもたちや日雇い労働者など出面の子弟に対する夜学校で、これらには日本語の初歩と英語少々、そして算数を教える ⇒ 遠友夜学校として実現／※これらに女子部を併設する場合は、刺繍・裁縫・編物・英語及び国文学の勉強ができるようにする。

（2）設置の経緯……妻の下に1,000ドル（2,000円）の遺産が入る。この遺産を基に、南4東4にあった民家を土地ごと買い取り、遠友夜学校を開設。

・遠友の由来……原典は孔子の論語の最初の学問の勧めの句「子曰く、学んで時にこれを習う、また喜ばしからずや、友有遠方より来る、また楽しからずや、人知らずしてうらみず、また君子ならずや」。

・新渡戸稲造博士の講演から「国も名も言葉もわからぬ人、何処の人とも言われぬ人がやってきて、会って話してみるとなんとなくわかる。このような人は名を知らず、国を知らずとも心と心が合えば即ち友達である。友人とは名を知るのが条件ではなく、心が合えば良いのである。年齢が違って、地位が違って、1人はくらの高い役人でも1人は偉い学者でもそれは大したことはない。相会って金持ちだと威張らぬ、学者だと役人だと下を見下げぬ、なんとなく気持ちが良い、こういう人と会うと嬉しい、これこそ人間の楽しみである」

（3）遠友夜学校の概要……設立当初は週2回程度希望する科目を教えていたが、徐々に拡大し、年中無休に近い教育活動となる（日曜日は生徒の自主的な修養会など）。教育内容も徐々に整い、最終的には文部科学省の教科に準拠したが、教員は大学生有志（無資格者）であったこともあり、正式な教育機関とは認められなかった。授業料は無料であり、当時珍しい男女共学。（1899年（明治32年）の時の在校生等の内訳は、生徒数102人。うち尋常科67人・高等科35人、男40人・女62人。16歳以上が28人〈20歳以上が5人〉）

(4) 遠友夜学校の閉校(累計の卒業生数は1,100人以上)……以下の要素などが
なり、1944年(昭和19年)1月に閉校。[3月]①国の教育機関の統一方針による
生徒の減少(義務教育就学率の向上)、②戦時下による施設の引き渡し(逓信局の倉
庫として引き渡し命令)、など。

○校名検討委員会は、校名案を「札幌市立星友館中学校」とし、2021年(令和3年)
3月24日付けで教育長宛に意見書を提出した。(選考理由⇒2022年(令和4年)4
月19日)

◎2021年(令和3年)3月31日、北海道大学大学文書館は『北海道大学大学文書
館年報』第16号p.72～136に、資料解説「<展示> 遠友夜学校の歴史」を掲載した。

○この内容は別途紹介した。(⇒2014年(平成26年)7月25日)

◎2021年(令和3年)3月、「札幌遠友塾自主夜間中学」(代表・遠藤千恵子)は、
開設30周年を記念して、私版冊子3冊を発行した。

○2020年(令和2年)9月12日、札幌遠友塾自主夜間中学は、札幌市の「かでる2・
7」を会場に、「札幌遠友塾自主夜間中学『30年の集い記念講演会』」を開催した。
講演は3題で、演題と演者は、①「公立夜間中学、それとも自主夜間中学」深澤吉
隆(奈良県立同和問題関係史料センター所長、2020年(令和2年)3月まで奈良市
立春日中学校夜間学級教頭、55歳)、②「70代の高校生/米田豊満」米田豊満(奈
良県立大和中央高校1年生、2020年(令和2年)3月に同春日中学校夜間学級卒業、
71歳)、③「妻への手紙」西畑保(無職、退職を機に2000年(平成12年)4月に同
春日中学校夜間学級入学し2020年(令和2年)に同学級卒業、この間に妻へのラブ
レター等の作文で公賞2回受賞、84歳)であった。このときの『講演録』は2021年
(令和3年)3月に発行された。

○2021年(令和3年)3月、「北海道自主夜間中学交流会ならびに札幌遠友塾30周
年記念実行委員会」(委員長・遠藤千恵子)は、合本冊子『2020年度/北海道自主
夜間中学誌上交流会ならびに札幌遠友塾自主夜間中学30周年事業/記録集』(A4

判全140ページ)を発行した。この中のp.5～20が「北海道夜間中学交流会2020(誌上交流)」、p.21～94が「札幌遠友塾自主夜間中学の30周年記念」、p.95～140が「30年の集い記念講演会／講演録」となっている。

○2021年(令和3年)3月、札幌遠友塾は、30周年記念を機に新聞『遠友だより』の30年間分を合本し、冊子(第1号・1990年(平成2年)12月12日～第209号・2020年(令和2年)2月12日、縮小A4判全422ページ)を発行した。

○2021年(令和3年)3月、札幌遠友塾は、30周年記念を機に広報紙『こんばんは遠友塾です』を合本化し、冊子(第1号・2010年(平成22年)6月9日～第26号・2020年(令和2年)3月11日、10年・26回分、A4判全56ページ)を発行した。

○これらの以前に、2016年(平成28年)5月、工藤慶一は「月刊社会教育」編集委員会編『月刊社会教育』(旬報社発行)60巻2号(通巻720号)p.60～63で「夜間中学のいま(2)札幌遠友塾自主夜間中学の26年と未来」を寄稿した。

◎**2021年(令和3年)5月5日、『朝日新聞』は、記事「憲法の現在地／北海道」で憲法との関係で札幌遠友塾自主夜間中学の果たす役割を採り上げた。**

○朝刊北海道面は「制度のはざま／教育の場確保／自主夜間中学の役割・札幌遠友塾／多様な年齢・国籍／公立とも連携へ」の見出しのもと、また、『朝日新聞デジタル』は『「学ぶことは生きる権利」自主夜間中学校が実践する憲法』の見出しのもと、札幌遠友塾自主夜間中学3年生の社会科の授業(「憲法」)の様などを報じた。この記事で、同代表の遠藤千恵子は、「学ぶことは生きる権利。(来年4月開校の)公立夜間中学校の設置は大きな前進だが、制度から漏れる人が必ず出てくる。『遠友塾』はそうした人たちにも学びの場を確保する役割を担っている。公立と民間がこれからも互いに交流し、補完し合いながら続けていきたい」と語った。

◎**2021年(令和3年)6月25日、北大生応援メディア「JagaJaga」は、無償学習支援活動取材した記事「寺子屋恵迪—無償の学習支援のその先に—」を発信した。**

○「JagaJaga」とは「北大生の大学生活を応援する北大初の総合メディア」で、「人

と人をつなぎ、北大をもっとおもしろくする」を理念に活動している。代表の伊藤（名前不記載）から取材した内容を詳しく伝えた。

○北海道大学の学生寮「^{けいてき}恵迪寮」の寮生全員が参加して運営・活動する「寺子屋恵迪」は、2019年（令和元年）の夏ごろから有志が始めていたが、2020年（令和2年）に入って委員会を正式に発足させた。（「寺子屋恵迪」は、2019年（令和元年）8月13日の「北大恵迪寮自治会ブログ」に「札幌市の小中学生を対象にした学習サポートのこと」と紹介され、また「市民活動サポートセンター登録団体」ともされていた。「恵迪寮」の前身は、1876年（明治9年）開校の「札幌農学校」の寄宿舍である）

○現代の「遠友夜学校」ともよべるプロジェクトで、恵迪寮で暮らす北大生が地域の子供たちに無償で学習支援を行い、地域への恩返しをしたいと始めた。学習ボランティアが自分たちのアイデンティティを最も発揮できる場だと考えたという。

○コロナ禍のため、おもな対象であった小学生の対面活動ができず、現状はオンラインでの実施に限られ、子どもたちのオンラインでの学習環境を整えることが課題だという。

○年齢制限を設けていないので、大人の方にも利用されている。将来は、遠友夜学校の再興を目指し、学習支援ばかりでなく、遊び相手や話し相手としての活動にも広げていきたい。寺子屋恵迪が段々と浸透して、地域の人々に愛され、「貧困がなくなること」や「恵迪寮が社会から必要とされること」を活動のゴールとしたい、との思いが代表から語られた。

○当時は、コロナ禍で思うように活動できていないため、「寺子屋恵迪」のポスターをつくり、広報活動も全て自分たちで行っているとのことであった。

○2023年（令和5年）4月末、公式ホームページを開いてみると、「寺子屋恵迪は2022年（令和4年）3月をもって活動を終了しました」とあった。

◎2021年（令和3年）12月4日、「一般社団法人新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の新しいリーフレットが作成された。

○北海道大学とのコラボレーションが大きく前進したのを機に作り換えられた。

○新リーフレットは、カラー印刷、A4判大で三つ折り形式のものである。

○同会の紹介や記念館建設募金の声かけに活用される。

○2023年（令和5年）に建設予定の記念館の仮称名が変わり、「新渡戸遠友記念館」となった。2013年（平成25年）3月18日に建設募金を開始して以来、ずっと「札幌遠友夜学校記念館」を使用してきた。会員からもっと短い略称的なものとの声があり、新しい略称になったとされる。

○2026年（令和8年）に創基150年を迎える北海道大学が、SDGs（持続可能な開発目標）の取組で、日本では1位、世界全体でも10位の大学と格付けされたことを、暗に強調・宣伝するものになった。

○北海道大学の理事・副学長である横田篤は、リーフレットで次のように述べている。「『新渡戸』と『遠友』を、北海道、札幌、そして北大の魅力あるブランドとして、新渡戸遠友記念館（仮称）から発信できるよう、設計、建築、研究林木材提供等、北大も全面的な協力を惜しみません」

○2021年（令和3年）12月開催の「一般社団法人札幌農学同窓会」の理事会は「2022年（令和4年）度（2022年（令和4年）1月1日～同12月31日）事業計画」の中で次のように述べている。「新渡戸稲造先輩（1881＝明治14＝年卒業）が遠友夜学校を開いた土地（現在の新渡戸稲造記念公園＝中央区南4東4）に、「新渡戸稲造遠友館」（仮称）を建設する運動が一般社団法人「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」中心に進められており、母校北海道大学も、同館を大学サテライトとして、またSDGsを目指す北海道大学のシンボルとして位置づけている。建築設計や建材への研究林木材の提供などの構想づくりも大学が着手している。この運動はまた、JA北海道グループや北海道商工会議所連合会など経済界と行政機関の参画と強い関心のもとに広がりを見せており、同窓会としては、建設及び施設運営、事業展開を含む運動全体を支えるべく、全面的に連携、協力していく」

○2022年（令和4年）5月19日発行の『新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会会報』第10号の理事長巻頭言で松井博和は、次のように述べた。「……SDGsの一語に

より、新渡戸先生と北大があらためて強く結ばれたのです。新渡戸精神の継承を図り、21世紀の社会教育を進める“場”を作ることが本会の大命題です。これまでは私たちのような市民だけの片肺飛行でありましたが、北大の応援を受け、やっと本来の“あるべき姿”となりました……」

◎2022年（令和4年）1月14日、北海道教育委員会は、夜間中学等に関する協議について実務的な検討等を行うため、ワーキンググループ会議を設置した。

○名称は「夜間中学等に関する協議会ワーキンググループ会議（略称・夜間中学WG会議）」とし、座長には行徳義朗義務教育課長が就き、構成員は13人で、札幌・函館・旭川・釧路の市教委や、道中学校長会、道高校長協会、道PTA連合会の代表者、北海道に夜間中学をつくる会の共同代表（工藤慶一）、北海道大学教授などとした。

○同年2月2日、オンラインで第1回の会議を開き、広域な本道において夜間中学のニーズに迅速に応えるため、遠隔教育の活用など、実現性の高い方策についての意見が交わされた。（詳細省略）

○同年11月15日、第2回目の会議が集合とZoomの併用で開催された。新構成員として札幌遠友塾自主夜間中学代表・黒澤晴一が加わった。最初に、同年4月に開校した「札幌市立星友館中学校の現状等について」、オブザーバー出席の同校・工藤真嗣校長から情報提供があり、その関連と他の情報・意見交換がなされた。札幌遠友塾関連をいくつかあげると、以下の発言があった（要旨）。

○星友館へは、札幌遠友塾から過去の遠友塾卒業生も含めて、初年度入学生は16人、スタッフも何人かボランティア（学習サポーター）で参加している。遠友塾からの見解として「札幌遠友塾から入学した生徒は、遠友塾にいたときよりも皆が元気になったと、はっきり言える。驚くぐらい、明るく元気になった。これは、皆が感じている。非常にありがたいと思っている。そして、彼らを通じて、今まで遠友塾とは無縁であった人々（星友館中学入学の生徒）が、札幌遠友塾の塾生とも仲良くなる者も出てきている。また、星友館ができたので、この4月に遠友塾に入ってくる方は減ると思っていたが、減るところか相乗効果があり、逆に入学生は増えた」と

いう関係になった。

○学ぶ機会がいつそう充実して、夜間中学に学ぶ人が増えた。「遠友塾は週5日間通うことがつらい人はうちに来て」、「星友館は5日間来られる人はうちに来て」と、両者が連携することによって、その人の学びの都合・姿勢に一番合う方法を選んで学べる機会が増えたことが大きい。

○札幌市の見解として「遠友塾との繋がりについて。星友館は夜間中学としての知見がなかったが、夜間中学を一番よく知っている方にいろいろと教えてもらい、それを踏まえて作っていくということが大事だろうと考える。それがまさに札幌遠友塾の皆さんだったと思う。また、率直に本音の意見交換を繰り返し重ねて、こんな運営ができるようになったのではないかと考えている」との発言があった。

○新聞記事に「色も成り立ちも異なる『星（生徒）』が互いを尊重し助け合う『友』として『館』で集い学ぶ『星友館中学校』。生徒たちが校名を体現し始めた」と書かれていた。これは友として助け合うということを考えてみると、いじめなんかありっこない世界、多様な人たちがいる、多様な人たちがいるからこそ、みんなが優しくなり、みんなが生き返る、これが夜間中学だ、というふうに思えてくる。

◎2022年（令和4年）2月24日、札幌遠友夜学校の精神を継承する目的の3団体は「札幌遠友夜学校・新渡戸稲造顕彰推進協議会」を正式に結成した。

○参加団体は「平成遠友夜学校」（校長・藤田正一、2005年（平成17年）4月1日開設）、「遠友再興塾」（代表・山崎健作、2015年（平成27年）4月発足）、「札幌遠友会再興塾」（会長・半澤久、2018年（平成30年）4月結成）であり、同協議会の代表には山崎健作が選任された。

○2022年（令和4年）2月28日、以前から準備を進めていた同協議会は、「第4回北海道遺産」の選定候補に「札幌農学校・札幌遠友夜学校に通底する清き精神」を申請した。（結果は選定されなかった）

○北海道にとっての遺産価値について、申請書は次のように述べた。

「かつて札幌市の細民街の一角（南4条東4丁目）に、当時札幌農学校教授だった

新渡戸稲造夫妻が貧しい子ども達のために設立した無料の学校・札幌遠友夜学校があった。札幌農学校・北海道大学の学生たちが無償で先生役を勤めた。ここには資格は得られなくとも、昼間の労働で疲れていても、学びたいという子どもたちの熱意と、無償の奉仕という形で、札幌農学校に育まれた新渡戸の精神（自由・自主・独立、利他博愛の精神、犠牲と奉仕、思いやり、弱者の側に立つ精神）を実践した札幌農学校・北海道大学の教師と学生たちの献身、善意を寄せた札幌市民があった。明治から昭和にかけて50年（1894～1944年（明治27年～昭和19年））もの間、人々の善意に支えられて存続した『札幌遠友夜学校』はそこに存在した清き精神とともに、北海道が誇るべき、教育史上およびボランティア史上不朽の遺産であり、それを支えた札幌農学校精神とともに後世に語り継ぐべき遺産である。蛭名賢造はその著『札幌農学校クラークとその弟子たち』の中で、『新渡戸稲造夫妻の札幌に残した最も美しい高貴な遺産の一粒はこのささやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸をふくむ札幌農学校全体の教育精神そのものの体現というべきものであり、云々』と述べている」

◎2022年（令和4年）3月25日、樋野興夫（新渡戸稲造記念センター長）は、ブログ『言葉の院外処方箋』で新渡戸稲造生誕160年記念映画製作の企画を紹介した。

○同センター長で医師の樋野は、東京都中野区にある『一般社団法人がん哲学外来』の理事長であり、『学校法人恵泉女学園』の理事長でもある。

○樋野は自身のブログ『言葉の院外処方箋』の第102回「『現代に生きる新渡戸稲造の教育の魂』—人格形成—」で、この企画を次のように紹介した。（要旨）

○「この度、『新渡戸稲造生誕160年記念映画製作委員会』が立ち上げられ、記念作品『現代に生きる新渡戸稲造の教育の魂』が企画されるようである」、「武士道で知られる新渡戸稲造は、教育者としても後世に多くのものを残した。札幌農学校教授時代には、萬里子夫人と共に私費を投じて、様々な事情で学校へ行けない青少年のために遠友夜学校を設立した。『見も知らない者たちが、ここで出会って友達になり、共に手を携えて勉強する—それがこの学校だ』。新渡戸の教育精神は、人格形成にあ

る」、「この企画では、この新渡戸の教育精神を現代に受け継ぐ人々とその活動を紹介し、新渡戸の現代的な意義を顕彰する。企画の2本柱は、学校での授業とドキュメンタリー映画制作。実現すれば歴史的大事業となろう！」

○同年11月28日、「新渡戸の夢製作委員会」が立ち上げられ、野澤和之監督によるドキュメンタリー映画『新渡戸の夢—現代に生きる新渡戸稲造の教育の魂—』（仮題、90分、2023年（令和5年）1月撮影開始、同年9月1日作品完成・公開予定）の製作計画が発表された。プロジェクト実行責任者に並木秀夫（プロデューサー代表・ドキュメンタリー映画配信サイト運営）が就き、取り組みに賛同した人々が無償ボランティアで「新渡戸の夢映画製作委員会」に参加している。人と人がつながるきっかけとしたいと、製作費の一部300万円はクラウドファンディングで募集される。新渡戸稲造が夢みた教育の魂を未来に届ける映画を、ともに創りたいとの願いを込める詳細内容はホームページで公表された。

○同年11月29日、『北海道新聞』は、見出し「新渡戸の『夢』を映画に／私費投じた夜学校追う／埼玉の監督ら来秋公開へ」で、新渡戸がつくった「遠友夜学校」や、その精神を継ぐ札幌の自主夜間中学「札幌遠友塾」を追う内容であると、大きく報道した。同年12月21日には『Web東奥』も、見出し「教育者・新渡戸稲造の『夢』は時空を超えて／不安定な今を生きる人々をつなぐ映画製作始まる」で、詳しく伝えた。

○同年12月23日、製作費のクラウドファンディングは、目標額300万円に対して、439万7000円が集まり、1か月で募集を終了した。

◎2022年（令和4年）3月31日、遠藤千恵子（札幌遠友塾自主夜間中学代表）は、学会誌に論文「コロナ禍のもとでの札幌遠友塾自主夜間中学」を寄稿した。

○掲載誌は『教育学の研究と実践』（北海道教育学会学会誌編集委員会編）で、17号p. 52～57の掲載論文には副題「人と人とのつながりを求めて」が付いている。

○2020年（令和2年）2月から1年半余、感染症新型コロナウイルスの流行で、「札幌遠友塾」（略称。多くが60～70歳代の受講生64人、スタッフ73人）が、学習場所の確保

など実際に被った活動・運営上の影響・困難と、この災禍に立ち向かった対応・工夫・対策について、その実践経緯を具体的に綴った貴重な体験的記録である。将来、この種の問題が発生したときに大いに参考にされる文献といえよう。

○反省に立って、遠藤が指摘する再確認事項は、①自主夜間中学の居場所としての役割の大きさ、②生活の困難に立ち向かう受講生と、それに寄り添い支援するスタッフが共に生き共に学ぶことの実感、③制度化された学校とは異なる自主夜間中学の存在意義、④人間にとっての基礎的な学びに対する公的支援の必要性である。

○「学びたい人が生きることの証と喜びを見出せる場、仲間とともに楽しく学べる場」を目指す札幌遠友塾の人々にとって、コロナ禍は「人と人とのつながりを求めて」を何度も確認し深める機会となった。

◎2022年（令和4年）4月19日、北海道初の公立夜間中学校「札幌市立星友館中学校」（校長・工藤真嗣）が札幌市中央区に開校し、開校式・入学式が行われた。

○同校は、学習と仕事や家事とを両立できるように、午後5時30分に始まる「夜の中学校」である。

○公立夜間中学は、教育機会確保法に基づき設置が求められている、さまざまな理由で学齢期に義務教育を受けられなかった人へ学ぶ機会を提供する場であり、道民の長年の要望を受けてやっと1校目の開校が実現した。

○定員は120人であるが、当初の入学生は、家庭の事情や不登校などさまざまな理由で、学齢期に十分学べなかった人や外国出身者など10代～80代の男女66人であった。（4月以降も入学を認め、同年10月末現在の在籍数は91人に増加した）

○校名「星友館」の決定にあたっては、既存の民間開設の「札幌遠友塾自主夜間中学」の理念「助け合いと支え合い」の精神が盛り込まれ、新渡戸稲造の遠友夜学校精神がとり入れられた。札幌市は「校名の選考理由」を次のように説明している。

①『星』は、それぞれ大きさも生い立ちも異なるが、どの星もそれぞれの輝きを放ちながら、美しい夜空を形づくっている。多様性を尊重し、一人一人が自らの夢や願いに向かって、学びの主役として自分らしく学んでいくことを目指している札幌

市が設置する公立夜間中学の校名としてふさわしいものである。

②『友』は、互いを尊重し、助け合い、支え合いながら学ぶ仲間を意味している。併せて、札幌市が設置する公立夜間中学には、論語の「朋（友）あり、遠方より来たる。また、楽しからずや」にちなんで名付けられた新渡戸稲造博士の「札幌遠友夜学校」の「様々な事情のため十分学ぶことができなかつた方々が集い、共に学ぶことができる場である」という理念にも通じるものがあり、これらの理由から『友』は今回の校名として大切にしたい言葉である。

③『館』は、札幌市立学校の起源である「資生館」のように集い学ぶ場を表す言葉として用いられてきた。校名を『星友館』とすることで、生徒一人一人が安心して自分らしさを発揮し、輝き続けることと、教職員も含め、学校に集う人たちみんなが互いに支え合い、高め合いながら共に学ぶことに、喜びと誇りをいつまでももてるような学校になってほしいという願いを込めている。

○『北海道新聞〈デジタル発〉』は、2022年（令和4年）3月18日には、見出し「待ちに待った『夜の中学校』開校です／北海道初／札幌・星友館」のもと、同年5月18日には、見出し「待ちに待った『夜の中学校』（続編）／緊張と笑顔の初授業／無理をしなくていい配慮随所に」のもと、詳細を報道した。

○2022年（令和4年）7月2日、札幌市広報テレビ番組『札幌ふるさと再発見』（STV）で「誰もが学びの主役―市立星友館中学校―」の題名で放送された。

○『北海道新聞〈デジタル発〉』は、2022年（令和4年）11月1～3日には、見出し「札幌／星空の下の学びや／公立夜間中開校半年」のもと、上・中・下の3回シリーズで報道した。上は「10代～80代／『友』が集う」、中は「経歴や思い／先生も多彩」、下は「誰も取り残さぬ教育を」とされた。

○2023年（令和5年）4月5日、『北海道新聞』朝刊は、「道内唯一の公立夜間中『札幌・星友館中100人超に』20人入学／高校進学支援コースも」と報じた。

○『北海道新聞〈デジタル発〉』は、2023年（令和5年）4月11日に、見出し「北海道初／夜の中学校1年／『学ぶ喜び』開校求めた市民団体共同代表工藤慶一さんに聞く」を報道した。（同年4月12日、『北海道新聞』朝刊6面「聞く語る」にも掲

載した)

◎2022年(令和4年)8月8日、山崎健作(遠友再興塾代表)は単行本『遠友夜学校の学びで築いた奉仕の人生』を出版した後、同年10月31日に死亡した。

○著者・山崎健作の『遠友夜学校の学びで築いた奉仕の人生』(本文237ページ、印刷・製本は(株)アイワード)の奥付には、編者・佐藤邦明も記され、非売品であった。(発行者・山崎本人の自費出版)

○1927年(昭和2年)10月9日出生～2022年(令和4年)8月8日の94年10か月の生涯を綴った自叙伝であった。(死亡は2022年(令和4年)10月31日)

○遠友夜学校出身の母に勧められて、山崎が尋常小学校卒業後、昼間は父の鋸目立て業の見習いをし、夜間は札幌遠友夜学校中等部に通ったのは1939年(昭和14年)4月～9月の間で、同年10月からは市立の国民学校(高等小学校)へ編入した。

○山崎にとって、直接の在学は半年に過ぎなかったが、自宅から100mほどしか離れていない近い所に遠友夜学校が存在した関係で、年少期から生徒や教師役の学生との接触は多かった。青空子供会リーダーなどとしての長い間ボランティア活動に携わった人生の奉仕の精神は、遠友夜学校の学びによって培われたものとされる。

○「札幌遠友夜学校を直接知る恐らく最後の一人」と言われ、尊敬されていた山崎は、自叙伝出版の2か月後、2022年(令和4年)10月31日に死亡した。満95歳に達したところだった。葬儀の祭壇の前面中央には、故人の遺言に基づいて、大きな毛筆の額「学問より実行」(新渡戸稲造書の扁額の複製)が掲げられた。

○2022年(令和4年)12月1日、『北海道新聞〈デジタル発〉』は、タイトル「遠友夜学校『最後の証人』山崎健作さん逝く／札幌で教えを体現した奉仕の人生とは…」を組み、山崎の人生を詳しく伝えた。

○2023年(令和5年)1月26・27日付け『北海道新聞』地域の話(札幌)版は、タイトル「遠友夜学校／「最後の証人」逝く」のもと、2回の⑤では、少年期に遠友夜学校で育んだ奉仕の心で「世のため人のため」に注いだ情熱の山崎の人生を、⑥では、新渡戸の精神を時代に継ぎ「記念館建立」の顕彰活動に身をささげた山崎

の晩年を連載した。

○2022年（令和4年）8月31日、学会誌（「基礎教育保障学会」の機関誌『基礎教育保障学研究』第6号）に、工藤慶一は2編の報告論文を寄稿した。

○札幌遠友塾自主夜間中学の生みの親で、「北海道に夜間中学をつくる会」の共同代表である工藤は、「北海道に夜間中学をつくる会」の肩書で報告「自主夜間中学の実践からみた日本語リテラシーの課題について」をp.70～78に載せた。

○また、同誌に工藤は、「札幌遠友塾自主夜間中学」の肩書で報告「札幌市立夜間中学開設の意義と今後の課題」をp.195～201に載せた。この中で①「札幌遠友塾自主夜間中学31年のあゆみ」、②「札幌遠友塾自主夜間中学と札幌市立星友館中学校との共存」にふれた。

○②の両者の共存については、「新たな時代に入ること間違いはない。当事者に届くアンケート調査（2018年（平成30年）、下記文献）の結果は、公立夜間中学入学希望者と入学しない人が拮抗していた。入学しない人の理由は、高齢と仕事の忙しさのために毎晩は通えないからである。更に、やっと家から出ることができるようになった若い人が、毎晩の通学が可能になるためには、まずは自主夜間中学で週に1度か2度足慣らしをし、年配の受講生から受ける暖かく優しい雰囲気の中で経験を積み、その上で公立夜間中学に入学するという、ゆったりした考えがいいと思う。少なくとも、学齢期の若い人が遠友塾に来て元気になる姿を見る経験からはそう言える。既に遠友塾から星友館へ入学する人、逆に星友館に入ろうと思った人が遠友塾へ入学するというケースが複数出てきている。この意味で学びの場の、車の両輪として『札幌遠友塾』は『星友館中学』と共に歩む存在でありたい」

○2018年（平成30年）8月22日発行、学会誌『基礎教育保障学研究』第2号、p.64～81、実践論文（遠藤千恵子・横関理恵・工藤慶一「北海道教育委員会による『公立夜間中学に関するアンケート等調査』への参加・協働の経緯と、その結果の意味するもの」）なお、この論文は、2017年（平成29年）9月3日開催の「基礎教育保障学会第2回研究大会」で、特別報告として発表したものを再構成した。

◎2022年（令和4年）8月31日、学会誌にシンポジウム報告「北海道の夜間中学と基礎教育保障のこれからを考える」が収録された。

○学会誌は「基礎教育保障学会」発行の機関誌『基礎教育保障学研究』第6号で、p.195～233に関係資料論文が5編掲載された。①<報告>工藤慶一（札幌遠友塾自主夜間中学）「札幌市立夜間中学開設の意義と今後の課題」（前項目で紹介した）、②<報告>工藤真嗣（札幌市教育委員会）「札幌市立夜間中学の構想」、③<報告>行徳義朗（北海道教育庁学校教育局義務教育課）「北海道における夜間中学校等の在り方についての検討状況と課題」、④<報告>横関理恵（拓殖大学北海道短期大学）「北海道各地方の義務教育未修了者等と基礎教育保障の展望」、⑤<報告>横井敏郎（北海道大学）・遠藤知恵子（札幌遠友塾自主夜間中学）「北海道の夜間中学と基礎教育保障のこれからを考える—シンポジウムの質疑とまとめ—」

◎2022年（令和4年）9月1日、堀田国元は、年刊誌『新渡戸稲造の世界』第31号p.36～55に論文「札幌遠友夜学校第三代校長半澤洵先生」を寄稿した。

○堀田は、一般社団法人機能水研究振興財団理事長で、かつて北海道大学農学部農芸化学科応用菌学講座（初代教授・半澤洵、第2代教授・佐々木西二）の第3代教授であった。

○半澤に関して書かれたこれまでの資料は断片的なものが多く、研究畑の側の人を書いたものは見当たらないことに気づき、堀田が、研究者としての足跡と遠友夜学校代表・校長としての足跡の両面から半澤を取り上げて考究し紹介した。

○堀田は、遠友夜学校運営においても、研究展開においても「半澤先生のノブレス・オブリージュ（ひけらかさない慈悲深さ、誠実さ、責任感）を如実に感ずることができた」としている。

○半澤も佐々木も新渡戸稲造に心酔し、長く遠友夜学校の学生教師として奉仕したが、堀田は、遠友夜学校の校章・校旗を制作した佐々木についても、2020年（令和2年）9月発行の同誌第29号p.51～63に寄稿している。（⇨1928年（昭和3年）6

月18日)

◎2023年(令和5年)3月、岩手県復興防災部復興推進課は小冊子『いわての学び希望基金[活用状況のご報告]』を発行した。

○「いわての学び希望基金」とは、2011年(平成23年)3月11日に発生した東日本大震災津波により被害を受けた子どもたちを復興支援するために、岩手県が2011年(平成23年)6月8日に開設したものである。報告は、毎年なされてきたが、最近の報告は2023年(令和5年)3月発行の小冊子(全14ページ)である。

○「新渡戸稲造の思いを胸に設立した基金は皆様の温かい心によって子どもたちの支えに」とうたい、「岩手の偉人の一人に『武士道』を著した新渡戸稲造がいます。新渡戸稲造は、今から百年以上前、札幌農学校教授時代に、家庭の事情で学校に行けなかった子らを集めた無料の夜学校『遠友(えんゆう)夜学校』を設立しました。その設立は、子どもたちに、『学ぶ楽しさを教え、将来、社会に役立つ人物になってほしい』との思いによるものと言われています。『いわての学び希望基金』は、新渡戸稲造の精神を受け継ぎ、子どもたちが社会に出るまでに必要な『暮らし』と『学び』に役立てられ、皆様からのご支援が、子どもたちの希望と未来を創っています」と説明している。

○2022年(令和4年)12月31日現在、外国からの支援を含めて、寄附金は総件数27,242件、総金額約105億7,106万円と発表し、子どもたちをめぐるこれまでの復興状況と基金の活用状況を詳しく報告している。

◎2023年(令和5年)4月12日、札幌遠友塾自主夜間中学は、第34回入学式を教室提供の向陵中学校の多目的室で挙行了た。

○ホームページには、「3年ぶりで向陵中学校での入学式です。今年は19名の新生を迎えました。最初に遠友塾・黒澤代表より新生を歓迎する挨拶。そして教室を提供して頂く向陵中学校長の原田之彦氏、札幌市立夜間中学・星友館中学校長の工藤正嗣氏より祝辞がありました。この後は『楽しく学ぶために』スタッフと新入

生の交流です。クラスのスタッフ紹介や、各教科についての説明が終った後、新入生の自己紹介がありました。『悩んだけど思い切って来ました』など、短い言葉の中に一人一人の学びに対する熱い思いが伝わりました」とあった（漢字の振り仮名はすべて省略した）。「札幌市立向陵中学校」での入学式が3年ぶりになったのはコロナ禍の影響で中学校の校舎が使えなかったためである。

○2023年（令和5年）6月5日発行の広報誌『こんばんは遠友塾です！』第31号には、代表・黒澤晴一の言葉『とっとうれしい！一向陵中での授業再開』が載った。『やっぱり、教室はいいねえ～！』『戻ってこられて嬉しい！』、3年ぶりに向陵中学校に戻って授業が再開されました。思わず目頭が熱くなりました。／コロナ禍の感染予防のために、幾度もの休塾を余儀なくされ、学校や公共施設も使用できなかったり、使用制限されたりの日々でしたが、向陵中学校、札幌市教育委員会のご支援ご配慮により、この4月から授業が再開されました。感謝の気持ちで一杯です。毎週水曜日の夜間に歌声から始まり、国語、数学、英語、社会の授業が展開されています。／今年度は、受講生65名（10代から90代）、ボランティアスタッフ69名でスタートしました。新スタッフの1人に3年前に向陵中学を卒業し、今年大学生になったHさんがおります。きっと中学校在学中に遠友塾の活動を見てくれたのだと思います。スタッフ一同大歓迎でした。／コロナ禍の中でも引き続き、札幌遠友塾を支えて下さっている多くの方々がございます。運営費を寄付して下さっている『賛助会員（約180名）の皆様』や資料作成のために無償で印刷用のコピー機を提供して下さっている『富士フイルムB I ジャパン様』を初めとします多くの方々に、改めて深く感謝し、『学ぶことが生きることの証と喜びになる』を念頭に歩んでいきたいと思えます。／今年もどうぞよろしくお願い致します

◎2023年（令和5年）5月2日、松井博和（新渡戸稲造……を考える会理事長）は同会『会報第11号』の巻頭言で『「考える会」の創立10年を迎えて』を述べた。

○この巻頭言の中で松井は、これまでに記念館の建設が実現に至らなかった原因の分析と自らの見解を述べ、代表理事（理事長）交代の経緯を説明した。

○再出発時の建設予定（2023年（令和5年）よりも少々ずれるが、北大の2026年（令和8年）の慶事に合わせた実現に向けて計画は順調に進んでいるとした。そして、「北大はもとより多くの自治体や企業・団体との協働は、市民を中心とする考える会の発展形というよりも、新渡戸がスタートさせて札幌農学校の同僚や生徒たちがそれを引き継いだ社会教育活動の場所を生かしながら、これからの社会を生きる人々の生活向上に多方面から貢献できる、まさに現代の札幌遠友夜学校再生の正しい役者がやっと揃ったと状態と言えます。……近いうちに複数の関与者からなる建設・運営のための新たな組織づくりがなされる予定です」と述べた。

◎2023年（令和5年）7月18日、日刊紙『世界日報』は、「遠友再興塾」主催の紙芝居公演などの継承活動の紹介記事「新渡戸稲造の教育精神を広める」を掲載した。

○紙芝居公演は、同年6月18日札幌市内で開催され、参加者は30人ほどだった。公演作品「ミツオたちが遠友夜学校で学んだ日々」は、遠友夜学校をテーマにしたもの（制作者および演者は東京在住の三橋とら）だった。物語に出てくるミツオとは、実在の人物（札幌遠友夜学校で学んだ生徒の1人）で、遠友再興塾の現会長・佐藤邦明の父親・三男である。

○三橋によると、「札幌遠友夜学校そのものに焦点を当てると、とても堅いイメージになってしまうので、現在の高校生の男の子が、宇宙人と出会い、そこでタイムスリップしながら、遠友夜学校に通っていた人たちと会話しながら、当時のこと、自分の将来のことを考えていくという設定にしました。あくまで今の子供たちや若い人たちも聞いて楽しんでもらえるような紙芝居にしたかった」とあり、観客の感想には、「遠友夜学校がどんな学校だったのかよく知ることができた」「ストーリーに出てくる主人公の男の子が、遠友夜学校を知ること生き方を少しずつ前向きに捉えていく姿が良かった」という声が上がったという。

○同紙には他の同会の活動も紹介された。①『資料展示室』の設置（2023年（令和5年）春、遠友夜学校跡地近くにある前会長・故山崎健作宅を改装し、遠友夜学校の歴史が分かるように当時の写真や資料を展示している。希望者は自由に見学でき

る)、②投稿小冊子『遠友カフェルーム』の発行(会員同士のコミュニケーションを図ることを目的とし、年2回程度発行の予定)。

○この記事をもとめた世界日報札幌支局の記者・湯朝肇は「まさに札幌遠友夜学校を創設した新渡戸稲造の精神が今も市民に息づいている」と結んでいる。

◎2023年(令和5年)8月20日、並木秀夫の寄稿「現代に生きる新渡戸稲造の教育の魂：映画『新渡戸の夢』の製作」が同窓会会報『FRONTIER』に掲載された。

○並木は「新渡戸の夢映画製作委員会会長兼プロデューサー」で、1982年(昭和57年)3月北海道大学を卒業した。その縁で、北海道大学東京同窓会会報『フロンティア』No.63のp.36~37に寄稿したものである。

○1931年(昭和6年)5月18日、新渡戸校長が札幌遠友夜学校で生徒たちに語りかけた講話の一節、至言「世の中は美しい。自分一個のためだけ考えたのでは世の中は存在しない。人のために思えばこそ楽しい。だから……遠友の意味を考え……人格を養い、明るい気分で、世の中にためになるよう心がけることも大切な教育なのです」(引用：『思い出の遠友夜学校』p.55)を、並木は丁寧に紹介している。

○並木は、新渡戸の業績や「遠友夜学校」の歴史的経緯を説明したあと、この作品の大きな柱を、1990年(平成2年)誕生の「札幌遠友塾自主夜間中学」の生徒と教師の記録に置いて、現代版の新渡戸の教育精神をあぶり出そうとしていることを明かした。(戦後、新渡戸の教育精神を伝え継ごうとした実践活動がいくつもある中で、札幌遠友塾の実践こそが旧遠友夜学校の姿を継承しているとみなした)

○各種の不安が増す時代において、新渡戸の教育精神を顕彰していく映画の公開は、いま『ここだな』と、並木は感じているという。(『ここだな』は、新渡戸が物事を実行に移すとき、自身に言い聞かせた言葉とされる)

[今回の増改版は2023年（令和5年）8月末を区切りとした]

付録 社会事業活動を主にした半澤洵概略年譜

(すでに遠友夜学校の歴史の中で紹介したもの、半澤久や堀田国元によって半澤洵の生涯が詳しく語られている事柄については、重複を避ける意味で省略したものが多。また、肩書の北海道大学教授・名誉教授等も省略した。年齢は満年齢)

◎1879年(明治12年)1月9日、半澤洵は、北海道札幌郡白石村(現・札幌市白石区)31番地で出生した。

○半澤姓の父・時中^{これなか}、母・佳代の第2子(長男)として生まれた。姉1人、妹3人の5人きょうだいで、男は1人であった。

○父・時中は、仙台藩支藩の白石藩から片倉小十郎の家来として、祖父の時雍^{ときやす}(当時66歳)とともに北海道開拓使貫属となり、1871年(明治4年)に出身地の名を付けた開拓地・白石村に入植した。

○半澤家は、父・時中が29歳のとき開拓使工業局営繕課に勤め、その後開拓使属官になったため、1882年(明治15年)12月に札幌區南2條東4丁目の官舎に転居した。洵が3歳11か月の時であった。

○転居後の幼少期に、すぐ近くにあった札幌基督教会付属の「豊平日曜學校」に出席していたことの思い出を、後年開催された座談会の席上で半澤が自ら語っている。

◎1884年(明治17年)3月(5歳時)、半澤洵は、創成高等小学校に入学し、1892年(明治25年)8月26日(13歳時)、高等科4年を卒業した。

○同年、半澤は北海中学・北海学園の前身である夜間部の「北海英語學校」も卒業した。

◎1892年（明治25年）年9月1日（13歳時）、半澤洵は、札幌農学校予科に19期生として入学した。

○1894年（明治27年）1月、半澤は、新渡戸稲造夫妻が私財で創立し運営する夜学校の学生教師として、当初から有島武郎ら同期生たち（34人中の11人）と共に無償の奉仕を始めた。この奉仕活動は、以後もずっと続けられた。後に、社会事業に力を注ぐようになるのは新渡戸稲造の感化だとされる。

○半澤が新渡戸から得た教訓（実践した生活信条）は、次の3つだったとされる。（⇒1970年（昭和45年）3月25日発行の記録書、p.302）

①何事にも全力を尽くせ。しかし、全力を尽くしたならば、1分でも5分でも、その自分がなしたことを反省せよ。その反省することはまことに忘れがちである。

②何事も、つかまえたら離すな。そのためには、研究心や忍耐力を日ごろから養わなければならない。（半澤の「不屈不撓（^{ふくつふとう}強い意志をもって、どんな苦労や困難にあってもくじけないこと）」の信念となる）

③学問をすることは大切であるが、その学問は社会の進歩のため、人類の平和のためあるのであって、実行が伴わぬ学問は進歩もありえないのである。きびしい意味をもっている。（「学問より実行」という教え）

○予科5年、本科4年の課程を終え、1901年（明治34年）7月に札幌農学校（第11期生）を卒業した。学校では、宮部金吾教授の下で農業生物学科の植物病理学を専攻した。

◎1901年（明治34年）8月（22歳時）、半澤洵は、札幌農学校卒業後、北海道農事試験場の農芸科主任になり、応用菌の研究を始め、研究者の道を歩み始めた。

○半澤の進路は、札幌農学校の恩師・宮部金吾の計らいによって決まった。

◎1902年（明治35年）年3月（23歳時）、半澤洵は、札幌農学校助教に任命された。

○半澤は、1904年（明治37年、25歳時）には、東京都港区白金に北里柴三郎が創

立した伝染病研究所（当時国立）で学ぶ機会を得た。（同所が独立して私立「北里研究所」となったのは1914年（大正3年）11月である）

◎1907年（明治40年）9月1日（28歳時）、札幌農学校は東北帝國大學農科大學に昇格・改称され、半澤洵は助教授に任官し、「応用菌学」の講義を開始した。

○1911年（明治44年）12月（32歳時）、半澤は、新たな研究分野「応用菌学」の講座開設のため、ドイツ、フランスなどヨーロッパ各国へ応用菌学研究のため留学した。留学期間は、1914年（大正3年）6月18日までおよそ2年半であった。

○1915年（大正4年、36歳時）には、『「クモノスカビ」属菌の研究』で農学博士の学位を取得した。

◎1916年（大正5年）6月（37歳時）、半澤洵は、東北帝國大學農科大學教授に任官し、「応用菌学」を開講した。

○半澤は「土壌と肥料の微生物に関する研究」などの研究論文を次々と発表した。なかでも半澤を有名にしたのは、近代的納豆製造法の確立だった。

○1918年（大正7年）、東北帝國大學農科大學が廃止され、北海道帝國大學農科大學が設置されたため、半澤は同大學教授となり、さらに1919年（大正8年）には、北海道帝國大學農科大學が北海道帝國大學農學部と改められた。半澤は、北海道帝國大學農學部に「応用菌学講座」を創設し、初代教授となった。

◎1921年（大正10年）6月（42歳時）、半澤洵は、宮部金吾から数えて7代目の「遠友夜学校代表」（経営責任者）となった。

○1923年（大正12年）8月から法人化による校名変更に伴い、「財団法人札幌遠友夜学校代表」となる。（代表理事＝理事長は新渡戸稲造）

○半澤は、札幌遠友夜学校の閉校に伴い、1944年（昭和19年）8月の理事会解散でいったん23年間の任務を終わったが、土地の処分ができなかったために継続を余儀なくされ、結局、1967年（昭和42年）8月30日に「財団法人札幌遠友夜学校」が

解散するまで46年間にわたって代表（代表理事）を務めた。

◎1925年（大正14年）11月29日（46歳時）、学生寮「仙台學寮」が完成し、半澤洵が学寮長を務めた。

○学生寮は、1923年（大正12年）5月、貞山公（伊達正宗公）祭典において、半澤らによって発議され、旧仙台藩や宮城県関係者有志の大変な努力によって、広く関係者から募った寄付金により建設された。

○學生寮は、主に北海道帝國大學に学ぶ宮城県出身学生に宿舎を提供し、修学上の便をはかる目的で札幌市北7条西12丁目の借地に建設され、仙台藩ゆかりの高橋是清によって「仙台學寮」と命名された。運営は、学生による委員会で行なわれた。

○寄付金募集、學寮事業の母体となる「財団法人仙台學寮」が1926年（大正15年）8月に文部大臣から認可され、半澤（47歳時）が理事長に就任した。（1972年（昭和47年）9月、97歳で死亡するまで理事長の任を務めた）

○老朽した學寮は新築され、1965年（昭和40年）12月20日に鉄筋コンクリート3階建の新寮が完成し、翌年1月23日に落成式を執り行った。

○その後、時代の変遷を経て、社会情勢の変化により場所を変え、学生アパート形式の新々寮「青葉学生ハイツ」が新築され、運営は続けられたが、仙台学寮は2004年（平成16年）3月31日、80年にわたる役割を終え閉鎖、財団は解散に至った。

◎1928年（昭和3年）以前から、学問上の功績が認められ、半澤洵は位階を授与されていた。

○位階とは、國家の制度に基づく個人の序列の標示で、基本的には地位・身分の序列・等級であり、特に功績のあった者などに与えられる栄典の1つである。

○1928年（昭和3年）7月発行の『人事興信録』の「位階・勲等・功級」には、半澤洵は「従四位、勲三等」とあった。

○1941年（昭和16年）3月8日に授与された「卒業證書」には、「従三位勲二等」の肩書を付けた「財団法人札幌遠友夜學校校長従三位勲二等半澤洵」としたものが

残っている。

◎1938年（昭和13年）4月1日（59歳時）、半澤洵は北海道帝國大學農學部長に就任した。

◎1939年（昭和14年）1月17日（60歳時）、半澤洵は札幌遠友夜學校第3代校長に就任した。

○1944年（昭和19年）3月6日には、札幌遠友夜學校が閉校となり、校長職を解かれる。

◎1940年（昭和15年）9月10日（61歳時）、^{へきれき}青天の霹靂で、半澤洵が「札幌市社会事業協會」理事長に就任することになった。

○以後の社会事業分野での大活躍の契機となったが、半澤は、財団法人札幌遠友夜學校の代表として、すでに札幌市社会事業協會の一員になっていた。

○事の発生は、同年6月16日に創立し発足したばかりの「札幌市社会事業協會」の理事長・有田正雄（札幌育児園常務理事）が同年9月2日、死亡したことであった。

○5人の理事の1人でもなかった半澤が、大学教授の経歴と長年の活躍を買われ、また、翌年定年退官することを見込まれ、白羽の矢を立てられたのである。理事に、そして理事長に就任の要請があり、懇願されたのであった。

○これを契機に、半澤は、頼まれて札幌市内はもとより、全道的な社会事業団体の活動に参画していくことになる。どの役職でも、持ち前の律義な気性もあって、先頭に立って行動した。

○札幌市社会事業協會では、1期4年の任期の再選が繰り返され、実に8期32年にわたり理事長を務めた。

◎1941年（昭和16年）3月31日（62歳時）、半澤洵は北海道帝國大學を停年で退官し、同大學名誉教授となった。

○退職後は、各種の社会事業、福祉団体での奉仕活動を本格させた。半澤の経歴と行動力と人望を見込まれて就いた長期にわたる役職は、以後の生涯に20前後に及ぶ。

◎1943年（昭和18年）年11月23日（64歳時）、寮長を務めていた学生寮「仙台學寮」の開寮20周年記念祭で、半澤洵は、ブロンズの「半澤洵胸像」を贈られた。

○彫刻家・加藤顕清の文展出品作品で、理事長室に永く置かれた。このブロンズ像は戦争末期、杉野目晴貞教授の骨折りでいわゆる「供出」を免れ、戦後の1953年（昭和28年）台座が完成、同年11月2日の「仙台學寮」開寮30周年記念祭で胸像台完成記念式が行われた。

○その後ブロンズ像は新寮を経て新々寮「青葉学生ハイツ」の理事室に置かれていたが、2004年（平成16年）3月閉寮に伴い半澤家に渡された。2007年（平成19年）5月30日、この胸像は台座とともに、半澤家から北海道大学に寄贈され、2023年（令和5年）9月現在、胸像は「北海道大学遠友学舎」に飾られている。

◎1946年（昭和21年）2月11日（67歳時）、3度目の「北海道社会事業聯盟」が結成され、半澤洵が初代理事長に就任した。

○同名の団体の結成は、最初は1924年（大正13年）2月（1925年（大正14年）2月に解散）で、2度目は1928年（昭和3年）11月（1942年（昭和17年）に解散）であった。

○「北海道社会事業聯盟」は、北海道内の主として私立の社会事業団体が戦後の社会事業の推進と発展を期して再結成されたものである。

○半澤は、雑誌『北海道社会事業』144号（1946年（昭和21年）3月号、戦後の復刊第1号）に「北海道社会事業聯盟の誕生」の一文を理事長名で寄せている。

○同聯盟は、1951年（昭和26年）3月25日、「北海道社会福祉協議会」の設立に伴い、発展的に解散した。

◎1946年（昭和21年）4月1日（67歳時）、「恩賜財團同胞援護會北海道」が発足

し、半澤洵が初代支部長に就任した。

○「恩賜財団同胞援護會」は、戦災者や引揚者、戦没軍人の遺族や傷病軍人などの援護事業を行った。

○同援護會の業務は、1951年（昭和26年）3月25日、「北海道社会福祉協議会」の設立に伴い、同協議会へ継承された。半澤は『北海道社会事業』153号に「北海道社会事業協会に望む」の一文を寄せている。

◎1947年（昭和22年）6月（68歳時）、「北海道恩給増額促進會」が結成され、半澤洵が初代会長に就任し、1972年（昭和47年）9月に死亡するまで務めた。

○同会は、1948年（昭和23年）7月に「北海道恩給受給者連盟」と改称し、1951年（昭和26年）2月に「北海道退職公務員連盟（略称：退公連）」と改称した。

◎1951年（昭和26年）2月27日（72歳時）、半澤洵は、恩賜財団同胞援護会北海道支部長として北海道社会福祉協議会設立準備委員会に参加した。

○半澤は、同小委員会副委員長を務め、諸事項の具体案をまとめ、同3月25日開催の同設立総会を成立させ、北海道社会福祉協議会（略称・道社協）を発足させた。

◎1951年（昭和26年）4月1日（72歳時）、半澤洵は天使女子短期大学栄養学科の教授に就任した。

○北海学園大学の創設に協力し、同大学の教授に就任するため、天使女子短期大学を1年の勤務で退職した。

◎1951年（昭和26年）10月（72歳時）、半澤洵は「財団法人北海道共同募金委員会」の第2代委員長に就任した。

○既に1947年（昭和22年）10月20日に「北海道共同募金委員会」が結成され共同募金を実施され、1949年（昭和24年）9月22日には財団法人となっていた。

○1952年（昭和27年）4月9日、社会福祉事業法に基づき「財団法人北海道共同募

金委員会」は改組されて、「社会福祉法人北海道共同募金会」の初代の会長理事に就任した。

○1959年（昭和34年）まで務めた。（月日は現在の「北海道共同募金会」でも把握していない）

◎1952年（昭和27年）4月1日（73歳時）、半澤洵は、北海学園大学が創立され、経済学部経済学科を創設するにあたり、教授に就任し、商品学を開講した。

○天使女子短期大学教授に就任したばかりであったが、勤労学生のために北海学園大学が1953年（昭和28年）4月から二部（夜間部）を創設すると聞き、札幌遠友夜学校と同じような志を持つ大学と考え、また、母校・北海英語学校の流れを継ぐ大学でもあるので、少しでも力を貸したいという思いから、北海学園大学教授の就任を快諾したと伝えられている。

○1960年（昭和35年）3月31日（81歳時）、同大学を定年退職した。

◎1954年（昭和29年）4月27日（75歳時）、半澤洵は「札幌遠友会」の会長に選出され、就任した。

○同日、札幌遠友夜学校の卒業生・教職者等を会員とする「札幌遠友会」が結成され、第1回総会が開催され、会長に半澤洵（同校前校長）、副会長に高倉新一郎（同校前副校長）・安藤勇逸（元遠友夜学校生徒）、幹事長に鈴木良雄（元遠友夜学校生徒）が選出された。

○1972年（昭和47年）9月25日、満93歳で死亡するまで同会の会長を務めた。

◎1958年（昭和33年）8月（79歳時）、半澤洵は、児童養護アフターケア施設設立のための「北海道青少年育成施設設立準備会」の理事長に就任した。

○児童養護アフターケア施設は、「青少年育成施設」のことである。

○1958年（昭和33年）12月15日、児童養護施設「柏葉荘」を設立した。

○同会の理事長を1960年（昭和35年）12月31日まで務めた。

◎1958年（昭和33年）（79歳時）、半澤洵は、藍綬褒章・第10回北海道文化賞を受賞した。

◎1960年（昭和35年）4月1日（81歳時）、半澤洵は、特に頼まれて市立名寄短期大学初代学長に1年だけ就任した。

○1961年（昭和36年）3月31日、同学長を退任し、引き続き同家政科の教授を1963年（昭和38年）3月31日まで務めた。

◎1963年（昭和38年）4月1日（84歳時）、半澤洵は、北海道栄養短期大学の食物栄養学科の教授に就任した。

○1967年（昭和42年）3月31日（88歳時）まで勤め、以降は、非常勤講師として勤めた。

◎1964年（昭和39年）4月1日（85歳時）、半澤洵は、札幌市長から札幌市勤労青少年ホーム運営審議会委員に任命された。

○同会は委員30人以内で構成されたが、半澤は学識経験者枠の1人として、遠友会会長の肩書で任命された。

○1971年（昭和46年）3月末日（92歳）まで、4期8年にわたり旧遠友夜学校跡地運用の推移を見守った。

◎1969年（昭和44年）9月2日（90歳時）、半澤洵は、第1回北海道開発功労賞（学術・科学部門）を受賞した。

○「応用菌学の創始と社会福祉事業の推進」の功績による。（受賞の理由：1901年（明治34年）札幌農学校を卒業し、のちに北海道帝国大学教授となった。土壌微生物や食品工業微生物の研究を行い、アルコール製造に使用されるアミロ法の改良、雑草学の確立、納豆製造法の改良に寄与し、さらに育英・社会福祉事業にも貢献し

た)

◎1970年（昭和45年）3月25日発行の記録書『札幌市社会事業のおいたち』に、半澤洵を顕彰する特別記事「23万枚の古印紙で施設職員研修費」が掲載された。

○この書は、札幌市創建百年記念の一環として札幌市社会事業協会が編集・発行した、A5判、全339ページの詳細な各種記録書である。収録記事の緻密さは学術書に迫るものであった。発行時には、91歳でまだ同協会の会長をしていた半澤は、「序」の冒頭で「歴史を調べる上に、文献は非常に大切なものであり、また残さねばならぬものである。しかるに案外この記録が無くなっていることが多く、ために昔のことが誤り伝えられることが往々にしてあるのは残念なことである。……」と述べ、文献的記録の重要性を強調した。（⇒本文、1970年（昭和45年）3月25日）

○「札幌市社会事業と先駆者」として組まれた特別記事の1つとして、見出し「社会事業60年の半澤洵」のもと、エピソード「23万枚の古印紙で施設職員研修費」を中心に紹介されたものである。この驚くべき信念の遂行は、この書にしか記録として残されていない。（同書p.299～302収録）

◎1970年（昭和45年）11月12日（91歳時）、半澤洵は、日本学士院会員（農学分野、定員12人）の1人に選定された。（かつて新渡戸稲造も宮部金吾も選定された）

○日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を顕彰するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発達に寄与するための必要な事業を行うことを目的としている。総定員150人。任期は終身で、年金が支給される。推薦された候補者は、選考委員会によって資格を審査される。

○半澤の選定は91歳の時であり、当時、史上最高齢で日本学士院会員となった。退任は死亡時の1972年（昭和47年）9月25日（93歳）で、1年10か月間務めた。

◎1972年（昭和47年）9月25日、半澤洵は死亡した。満93歳であった。

○半澤は、1894年（明治27年）1月に学生教師として奉仕を始めてから1972年（昭

和47年) 9月死亡時の札幌遠友会会長職まで、実に78年間、何らかの形で遠友夜学校関連にかかわり続けたことになる。

○半澤は生涯、育英事業や社会福祉などの面でも、判明しているもので19の重要な役職に就いた。すでに示した分も合わせて、判明分を順不同で次に列記してみる。

○札幌遠友夜学校の代表・校長・代表理事／仙台學寮長及び財団法人仙台學寮理事長／札幌市社会事業協會理事長／北海道社会事業聯盟理事長／恩賜財團同胞援護會北海道支部長／北海道恩給増額促進會（北海道恩給受給者連盟、北海道退職公務員連盟）會長／北海道社会福祉協議会設立準備委員会委員（同小委員会副委員長）／財団法人北海道共同募金会（社会福祉法人北海道共同募金会）會長／北海道民生委員審査委員長／北海道社会事業団体連合会理事／札幌遠友会会長／財団法人北海道青少年育成施設設立準備會（児童養護施設「柏葉荘」）理事長／社会福祉法人柏葉荘「柏葉保育園」理事／社会福祉法人「札幌愛隣館母子寮」理事／札幌市勤労青少年ホーム運営審議会委員／失業統計調査委員／国勢調査委員／司法保護司詮衡会委員／札幌市更生保護協會委員

◎1981年（昭和56年）9月1日（没後約9年）発行の単行本『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』の中で、長男・半澤道郎は、父・半澤洵についての思い出を語った。

○「父が社会事業に尽くした半生は、新渡戸先生の遠友夜学校精神の実践であったとつくづく思われます」（札幌市教育委員会編刊、p.248～250、半澤道郎著「遠友夜学校との繋がり」p.249から引用）

◎1992年（平成4年）6月24日（没後19年後）発行の単行本『農学校物語』の「黎明を告げた人々」の中で、星野達三は、次のように半澤洵の人物像を語った。

○『農学校物語』は札幌市教育委員会編「さっぽろ文庫61」として札幌市と北海道新聞社から発行された。

○「実に温和な方であり、どんな仕事でも頼まれ与えられたものならば屈託なく柔順に引き受け、しかし、引きつけたからには責任をもってやりとげられた。遠友夜

学校の経営然りである。20年余長きにわたり、代表あるいは校長として、恩師新渡戸稲造の人道的精神の実現に努めた。停年退官後は草創期に社会福祉事業の多くの公職につき、今日の同事業の進展に寄与した。先生は何時も温顔をもって人に接し、無言のうちに人を導き、またきさくであり、とつとつとした語りの中に滋味があり、洒脱なヒューマニストとも言うべき方であった」(p.239から引用)

◎2019年(令和元年)6月～2020年(令和2年)3月(没後46～47年後)、半澤久(半澤洵の孫)は特別寄稿「半澤洵先生小伝(1～4)」を書いた。

○半澤久は、北海道科学大学名誉教授であり、祖父が札幌遠友夜学校第3代校長であった縁で、2018年(平成30年)4月1日設立の「札幌遠友会再興塾会長」も務め、活躍している。

○記事は、季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』(同ボランティアの会発行)に5回にわたって、次のように掲載された。

(1) No.53p.4～7掲載、副題「『納豆博士』と呼ばれた農学者の青年時代」、2019年(令和元年)6月1日発行。

(2) No.54p.1～5掲載、副題「応用菌学講座の創設と納豆菌純粋培養法の確立」、2019年(令和元年)9月1日発行。

(3) No.55p.1～5掲載、副題「社会事業への情熱」、2019年(令和元年)12月1日発行。新渡戸の教え「世のため、人のため」に生きた祖父の生涯を紹介した。

(4) No.56p.1～5掲載、副題「妻美加そして家族・親族への思い」、2020年(令和2年)3月1日発行。(No.53～56の合冊19ページの「抜粋特別号」も、2020年(令和2年)12月に発行された)

付記 編集著者からの追記—本書誕生の契機と経緯—

◎付記1 2023年（令和5年）4月30日

編集著者・白佐俊憲

本書をつくる気持ちになったのは偶然の出会いがきっかけだった。不確かだが、「新渡戸稲造記念公園」が造成されたというニュースに接したときだったかと思う。ある日、ふと思い立ち、何とはなしにパソコンに向かい、「遠友夜学校」の検索を始めた。

「札幌市公式ホームページ」の「遠友夜学校記念室」が最初に出てきた。これを読み進めると、小項目「遠友夜学校のあゆみ」があって、ここには、年月日順に主要事項を並べた一覧表が載せられている。明治27年から平成26年までの約120年間の出来事が十数行に凝縮されて並んでいた。

眺めていた私の目は後半の行で止まった。「昭和19年3月、閉校」とあって、次行は「昭和39年6月、遠友夜学校跡に札幌市中央勤労青少年ホーム建設。施設内に遠友夜学校記念室開室」とあった。20年間の空白（省略）史があることにすぐ気づき、目が止まったのである。

ふと、また思いが及んだ。そこに（現所在地表示名・札幌市中央区南4条東4丁目）に土地があり、それを敷地とする建物があり、そこを拠点として昔から何らかの事業所や人の生活が営まれてきたのであるから、空白扱い、つまり省略・削除されているということは、1つの観点として、単なる荒地であったか、遠友夜学校とは無関係の営業や居住がなされている建物が並んでいるに過ぎないか、の期間とみることができる。常識的には、そうみえて当たり前のことだったのだろう。

このことに私が敏感に反応したのには、個人的な思いがからんでいる。同一敷地に、この期間のかなりの間、私が勤めていた職場が存在し、事実としての状況を知っていたからである。それは児童福祉施設の1つ「北海道中央児童相談所」であり、

戦前、社会事業の創始施設として存在した「札幌遠友夜学校」とは同類のものである。確か、土地を取り返すのに一役買った、保持する役も引き受けて借り続けている、とも聞いたような気がする。勤労青少年ホームと同様に、明記されても、省略扱いされるようなものでは決してなかった、との思いが強く込み上げた。

「ここに札幌遠友夜学校があった」と聞かされた話が頭の隅に残っていたのである。決して無縁ではないことを、当時の長野襄所長や、その後の大学教師時代にご縁ができた半澤洵氏や小塩進作氏から雑談の中で聞かされていた。

そんなふとした疑念から、空白の20年間でどんな扱いになっているかについて調べてみる気が起こった。そこで、いくつかの遠友夜学校関連の図書・論文に当たってみた。すると、記述の中で空白の20年（1944～1964年（昭和19～39年））について、ほとんどが、触れていないか、触れていても数行にとどまっていて、それも首をかしげるような事実とずれた内容の記述であることがわかった。

この事実から、略年表「遠友夜学校のあゆみ」が空白扱いにした期間に対しては、たぶん、おおかたの人も疑問や不審をいただくことはないであろう。いや、冷静に考えれば、気負ってこの道に飛び込んだ青春のこだわりが残っていなければ、私自身だって何とも思わないようなささやかな事柄にすぎないとはわかる。

だが私には、こだわるほどの思いとして浮かびあがってきたのである。果たして、そんな扱いのままでいいのだろうか、と。そのうえ、大げさに言えば、私の人生の一部が打ち消されてしまった気もした。そんな、空しいような、残念なような悔しい気持ちも残った。

時はずいぶん流れた。残念に思う気持ちは、何年経っても、頭の隅にくっついたままで消え去らない。それなら得心がいくように自分で調べ、ついでに関連事項もまとめ、書き残してあの世に行くしかない。たまたまご縁があった資料の、たまたま目にとまった記事を年月日順に並べてみる。それでもいいのではないかと、それなりに意味があるのではないかと、独りよがりになんげもした。ぼちぼち資料を集め、慣れないパソコンに向かってひたすら加えていく作業を始めた。そして80歳を超えた。もたもたしていると時の経るのも速くなった。

気持ちとは裏腹に身体が怪しくなってきた。癌に侵されていることがわかって入院だ手術だとなった、難聴が進行した、視力が落ちてきた、白内障・緑内障の点眼も家族に頼まなければうまくできなくなった、新型コロナがはやって家族同伴の外出さえもままならなくなった、……、体力がどんどん落ちていく。正直、焦った。開き直って、あとは祈る気持ちで、他人の情けにすがってみるしかない。そう思って試しにご活躍中の関係者にメールを送ってみた。すると、慈愛に満ちた親切な人に恵まれて、資料・情報が集まり、奉仕の精神で手助けしてくれる人もでてきた。気づいてみれば、あちこちに「遠友」がいた、新渡戸稲造の精神、遠友魂の持ち主である人々がまだいた。主な資料・情報の提供者は最初にあげたが、ほかにもたくさんの人にお助けをいただいた。

やってみると、腑に落ちない、わからないことが多い。だが、投げ出すわけにはいかない。ご好意を無駄にしないよう、この段階で一度立ち止まって、感謝の意を込め、御礼の気持ちで、あるいはお詫びの気持ちで、世に出すことにした。ただただ感謝して甘えるだけだったが、何とかいびつながらもこうして形になり、1つのまとまりに仕上げることができた。

末尾の部分は超特急でまとめてしまい、肝心のことが抜けているような気もするが、以上が本書誕生の契機であり経緯である。

提供いただいた豊富な資料・情報も十分に生かしきれていない、理解が不十分なまま記述している、不本意な書き方をされたと不快に思われている方もいるかもしれない、……、との懸念も残っている。そんな方には深くお詫びを申しあげなければならない。今後の見直しの中で必要な加筆修正を加え、もう少し充実させたいとの願いもある。

最後に、お願いを加えさせていただく。この風変りな資料集は「未定稿」のまま存在し続けている。どなたかのお力添えで、もっと丸く大きなものに仕上げてください。できれば、この上ない幸せである。

ただただ、いろいろと快く応援してくださった方々に心より感謝を申しあげたい。

(付記の付記)

付記を書いていたところに、思わぬ貴重な宝物の贈呈が届いた。あわてて「付録2」に挿入して収め、本文も急いで少し手直しをした。(ただし、この増改版では「付録2」は省略した)

◎付記2 2023年(令和5年)10月吉日

編集著作者・白佐俊憲

「増改版」の名で第2版をまとめた。初版に対するご指摘やご助言に応え、新たに提供いただいた資料を生かす増補・修正、初版の誤記訂正もおこなった。組版・文字サイズも少し小型化した。

遠友夜学校の教育精神とこれを述べ伝え、あるいは継承続ける諸活動について、ハンドブックやガイドブック的な利用にも応え得るように、具体的な収録内容の充実化をいっそう図った。文献・資料の収集範囲を少し広げ、網羅的に収録し、初版で見合わせた関連資料も加え、大幅に増ページを図った。内容面では、未整理で収録できなかったものがあるが、「札幌遠友塾自主夜間中学」関連の資料を意識的に増やした。一方、バランス調整も試み、初版の記述内容で、詳しすぎて横道に逸れた感のある事項等は削除したり簡略化したりした。また、インターネット検索で容易に閲覧できる議会議事録等の公的記録類の資料については、追加収録分ではほとんど割愛した。ただし、重要な検証となる初版の札幌市議会記録の質疑応答は例外としてそのまま残した。

今回の紹介資料でもまだ記述には、実証的な説明の不足・不明確さ・混乱・矛盾を随所に含んだままである。未調査・調査途中・未整理のため、収載に至っていない事項も少なくない。提出された要望書・陳情書・請願書等の公的交渉過程の推移は公表された資料が不ぞろいである。また、遠友夜学校の生徒の文芸作品や弁論大会発表の主張内容や、札幌遠友塾自主夜間中学の生徒の作文・卒業文集、受講生(生徒)とスタッフ(教師役)との心の触れ合いの記録などの類は収集作業自体が手付かずのままである。(そして、100年前の純真な学生教師と思春期生徒との愛の青春

秘話などは、まだ埋もれたままである)。遺産としては、これらの方が貴重なのではないかと思いつつも、貸し出し不可の資料を探りに図書館へ行けないでいるもどかしさがある。恥ずかしながら、老体の不自由さを嘆くばかりである。

玉石混交であることは十分に承知しながらも、初版の2倍近い分量に達したので、過去の資料の掘り起こした分を追加してまとめ、また、事実によく改訂に努めたことで、第2次まとめとしたい。いっそうの充実と精査を加えて、第3版の発行を実現したいものとせつに願っている。

諸活動の今後の動向に注視するとともに、関係者の皆さんには、今後とも変わらぬ形で資料のご提供やご助言やご支援をお願いしたい。

2023年(令和5年)10月15日は、新渡戸稲造の没後90回目の召天記念日である。野澤和之監督のドキュメンタリー映画『新渡戸の夢』は、この日に焦点を合わせて鋭意制作されている。ただ、実際の公開日となると、現実との擦り合わせも必要であろう。小生の86歳の誕生日もあやかって、監修・発行・広報等いっさいを引き受けてくださっている“遠友”の正倉一文氏のご支援を得て、ここに増改版(第2版)を世に送り出す幸せを味わっている。

最後に、広い心で資料・情報の利用を容認していただいたり、さまざまな形で親切にご協力をいただいたり、慈愛のご助言・激励をいただいたりしている皆様に、重ねて心より感謝と御礼を申し上げます。